

# TS少女のラブライブ！

水羊羹

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、唐突に前世の記憶を思い出してしまった雨宮 朝陽（あまみや あさひ）は、ここがラブライブの世界だという事に気が付く。

そして、高坂 穂乃果達と幼馴染みである自分がイレギュラーだという事にも。

朝陽は自分という不確定要素を不安に思っていたが、ある出来事をきっかけに自分から物語へと積極的に関わりはじめていく。

全ては未来をより良くするために……。

これは、μ'sと一緒に輝きたいと願う元男だった少女の青春物語である。

※12月21日

第一話から第四話までを改訂しました。

また、第一話と第二話の間に、新たな話を追加しました。

それに伴い、第二話からの話数が一話分増えますが、あらかじめご了承ください。  
なお、物語の本筋に大きな影響はありません。

# 目次

## 序章 邂逅

第一話 状況把握 | 1

第二話 決別 | 12

第三話 ファーストコンタクト

26

第四話 突きつけられた選択 | 45

第五話 決意を新たに | 58

第六話 王者と挑戦者 | 75

第七話 不審者アイドル | 88

## 第一章 三人の女神達

第八話 物語の始まり | 100

第九話 スクールアイドル | 112

第十話 結成、音ノ木坂スクールアイ

ドル! | 127

第十一話 衣装デザイン | 142

第十二話 早朝練習と祈禱 | 155

第十三話 ファーストライブへの根回

し | 169

第十四話 夕焼けでの小さな伴奏会

182

第十五話 *μ's* | 194

第十六話 絵里の気持ち | 206

第十七話 S T A R T : D A S H !!

222

第十八話 脱・海未の人見知り克服計

	第十九話	ファーストライブ	—	251	237
	第二章	μ, s 始動に新たなメンバー	—		
	第二十話	新たな原石	—	266	
	第二十一話	医者のお卵、アイドルのお卵	—	278	
	第二十二話	小泉と星空	—	297	
	第二十三話	新たな仲間達	—	309	
	第二十四話	μ, s の親睦会	—	328	
	第二十五話	不審者アイドル、再誕	—	342	
	第二十六話	にこのアイドル認定試験	—	357	
	第二十七話	盗賊にこに	—		372
	第二十八話	アイドル研究部	—		388
	第二十九話	アイドルとは	—		403
	第三十話	蒼天に輝くは七つの笑顔	—		
	第三十一話	束の間の休息	—		437
	第三章	九人の女神が揃うまで	—		
	第三十二話	μ, s のPR撮影	—		
	第三十三話	中庭の木の下で	—		465
	第三十四話	リーダー議論	—		487
	第三十五話	新たなリーダーの座は誰	—		
	が手に?		—		503

643	第四十四話	感謝の想いを込めて	630
	第四十三話	希の秘策	609
	第四十二話	和解	
594	第四十一話	絵里と水族館デート	
579	第四十話	小さな勇氣は一步から	
	第三十九話	挫折と勇氣	565
	第三十八話	広がる心の距離	551
537	第三十七話	目指せ、赤点回避！	
	第三十六話	小さな亀裂	520

	第四十五話	小さな兆し	660
	第四十六話	廃校へのカウントダウン	
	第四十七話	絵里の実力	688
	第四十八話	下手の考え休むに似たり	672
716	第四十九話	集いし九人の少女達	702

## 序章 邂逅

### 第一話 状況把握

「あれ、ここはどこだ？」

ふと気が付けば、俺は見知らぬ部屋にいた。

部屋はピンク色の壁紙で覆われており、ぬいぐるみ等の可愛らしい小物が目に入る。

「女の子の部屋、だよな？　なんで俺がこんな所に——」

「朝陽——<sup>あさひ</sup>　お友達が遊びに来たわよ——」

「——は、はい——」

不可解な現象に思わず困惑していると、俺の耳に女性の声が入ってきた。

咄嗟に叫び返してしまっただが、朝陽とは一体誰の事だろうか？

「意味がわからない……」

眩きを零しつつ、この部屋を出ようと扉に近寄り、ドアノブを回す。

すると、鍵がかかっていたのかわからなかったのか、扉は簡単に開く。

「やっぱり知らない廊下だ」

案の定と言うべきか、扉を開いた先も見覚えがなかった。

つまり、ここは俺が全く知らない場所だという事だ。

もしかしたら、俺は誰かに誘拐されたのかもしれない。

そう思い、辺りを警戒しながら少しずつ足を進めていくのだが、やけに歩幅が小さいような……

「つて、なんか小さくなってないか!？」

思わず手に目を向けると、確かにいつもより手が小さかった。

改めて身体に手を這わしてみれば、手だけではなく、どうやら足等身体が全体的に小さくなっているらしい。

何故俺はこんな事にも今まで気が付かなかつたのだろうか。思ったよりも混乱していたのか？

「なんで俺の身体が小さくなってるんだよ」

得体の知れない恐怖に身震いした俺は、更に警戒を募って階段を降りていく。

すると、そこには椅子に座って新聞を読んでいる女性がいた。

「おはよう朝陽。早く友達の所に行きなさい」

「だ、誰？」

「誰って……朝陽はまだ寝ぼけているのね」

困ったように微笑み、女性は再び新聞に目を戻した。



寝ぼけている？ 朝陽？

この人は何を言っているんだ……俺の身に何が起こっているんだ。

「一体何がどうなってるんだよ」

確かに昨日、俺は自分の部屋で眠ったはず。

なのに、いきなり知らない場所で知らない人に知らない名前で呼ばれて……

「朝陽って、もしかして俺の事か？」

玄関に向かう途中で、ふと思いつく。

先ほどの女性は、俺の目を見て朝陽と言った。

つまり、俺は朝陽という存在なのか？

「そんなはずはない。俺の名前は……俺の名前ってなんだ？」

家族の顔は覚えている。今までの記憶だとしてしっかりとある。でも、俺を含めた家族

や友人達の名前が出てこない。

思わず背筋が凍り、座り込んでしまう。

「嘘だよな？ 名前を思い出せないってそんなわけないよな？」

震える脚でなんとか立ち上がり、俺は壁に寄りかかりながら玄関へと足を進めていく。

その先に、今の俺が求めている答えがあるような気がして、ただただ無心で玄関に向

かう。

「おはよう、朝陽ちゃん！」

「お、おはよう……」

「朝陽ちゃん!？」

「顔が真つ青ですよ!？」

なんとか玄関を開ける事に成功した俺だったが、そのまま目の前にいたサイドテールが特徴の少女に寄りかかってしまった。

すると、側にいた生真面目そうな少女に、ふわふわとした雰囲気を感じた少女が、心配そうに俺の方へと駆け寄る。

「海未ちゃんのことりちゃんは叔母さんを呼んできて!」

「わ、わかりました。ここは頼みましたよ穂乃果!」

「待ってて朝陽ちゃん!」

そう告げると、二人の少女は家に入っていった。

対して、少女は俺を抱えたまま、ゆっくりと玄関の方に歩いていく。

「直ぐに叔母さんが来るから頑張って!」

「穂乃果……海未……ことり……?」

「穂乃果達がどうしたの?」

不思議そうに問いかける少女を尻目に、俺は聞き覚えのあるその言葉を聞いて、思考を巡らせていた。

確かに、彼女は自分の事を穂乃果と言った。そして、残りの二人も自分達を海未とことりだと言っていた。

……ま、まさか。彼女達はラブライブの——

「ぐうつ!?!」

「朝陽ちゃん!?!」

突如として脳内に鋭い痛みが走り、思わず呻いてしまう。

そして、混乱が境地に至ったのか、急速に意識が霞かすんでいく。

悲痛な声を上げる少女を視界の端に入れつつ、俺は一つの思いで心中を埋め尽くされるのだった。

——ここって、ラブライブの世界かよ。

「はっ、はっはっ!」

弾けるように飛び起きた俺は、ここが最初にいた部屋だと理解した。

同時に、急に起きた事で眩暈めまいを感じてしまい、再び柔らかいベッドに身を沈めていく。

「なんなんだよ全く……?」

ある程度時間が経ったからか、冷静になった思考で状況を整理してみようとする。

その時、自分の中に覚えがない記憶がある事に気が付く。

「なんだこれは……」

初めて感じる感覚に思わず眉を歪めつつ、俺は脳内から記憶を掘り返していく。

俺の名前は、あまみや雨宮 あさひ朝陽。

今年で小学生四年生になり、先ほどの少女——穂乃果達とは幼馴染みだ。

家族構成は両親と俺の三人家族。兄弟姉妹はいない。

得意科目は理系で、文系は苦手な方。

身体を動かすのは得意だからか、家にいるより外で遊ぶ事が好き。

「とりあえず、自分の事はこんなもんか」

ため息を漏らし、ぼんやりと天井を仰ぐ。

俺が眠っている間に何かがあったのか、俺という人格に、朝陽の人格が混じりあっているのを感じる。

一体どうしてこんな事になったのか……神様がいるなら随分と酷い神様だな。

「これって、やはり転生なんだろうか？」

もしもこの現象が転生ならば、俺は前世で既に死んでいるという事になる。

そして、なんの因果か朝陽として再び産まれたという事にも。

色々と考えても答えが出ないので、ひとまず転生の事は置いておこう。

問題は俺が意識を失う直前、あの場にいた少女達……穂乃果達の事だ。

「仮に転生なら、ここはラブライブの世界？」

——ラブライブ。

この物語は、主人公である高坂 穂乃果が高校二年生の時に始まる。

突然告げられた、自分達の高校が廃校するという知らせ。

その事を耳にした穂乃果は、幼馴染みの南 ことりや園田 海未と共に、スクールアイドルとして廃校を阻止しようと思いつく。

その際、三人には数々の出会いや苦難が待ち受けるのだが、そこは重要ではないので置いておく。

「問題は、そこに俺という人物が出てこないという点だな」

雨宮 朝陽という人物は、作中でも語られた事がない。

朝陽らしき人物が現れた事もないし、誰かの話に挙がった場面もない。

となると、つまり俺はこの世界でのイレギュラーという事だろう。

「はあ……どうなってんだか」

ここまで不可解な出来事がいきなり押し寄せていなかっただら、俺はもつと純粹に喜んでいたかもしれない。

本来会えるはずのないラブライブのキャラクターが、手の届く距離にいる。

会話もできるし、なんなら一緒に遊ぶ事もできるだろう。

一度は夢見た光景……しかし、実際に自分の身に起きてみればどうだ。

自分の事で精一杯で、現状を楽しむ余裕はない。

今だって、ラブライブの世界に転生した事を疑っている。

ただ、目の前の現実にも目を背けても意味がないから、辛うじて自分の気持ちに区切りをつけているだけ。

「母さん達は大丈夫かな……」

不意に、前世——仮にそうしておく——の家族を思い出す。

母さんは無理をしていないだろうか。父さんはまた無駄遣いをしてないだろうか。

もしかしたら、友人達は学校で馬鹿騒ぎをしているかもしれない。

「くそっ……なんなんだよ」

目元に腕を押しつけ、涙を堪える。

泣きたいし、恥も外聞もなく盛大に喚きたいけど、そんな事をしたら、今の家族に勘づかれてしまう。

今の俺は朝陽、ただの『雨宮 朝陽』なのだ。

前世の記憶が不鮮明な俺を示す物は、もうこの『雨宮 朝陽』という肩書きしかない。だからもし、不気味がられて家族に『雨宮 朝陽』を否定されたら、きっと俺の心は折れて壊れてしまうだろう。

そうならないためにこの感情には蓋をして、今まで通り『雨宮 朝陽』として過ごす。大丈夫、上手くいくはずだ。今までの記憶のように暮らせば、誰にもわからないんだから。

暫くそうやって自分を戒めた後、袖で目元を拭う。

「ふう……」

ため息を零して起き上がり、改めて周囲を見回していく。

そして最後に目に入った姿見に、俺は思わず遠い目をしてしまった。

意識を取り戻してからずっと現実逃避をしていたが、そろそろ腹を括らなければいけないだろう。

ノロノロとした動きでベッドを降り、重い足取りで姿見の方へと向かう。そして、姿見に映った俺の姿は――

「やっぱり……」

――女の子だった。

歳は十歳ほどだろうか。

艶のある黒髪に、翡翠色のやや吊り上がった瞳。

将来クラスでチャホヤされそうな顔立ち。

そんなどこか気の強そうな美少女が、こちらを見つめていた。

試しに右手を上げれば、姿見の美少女も右手を上げる。

舌を出してみれば、美少女もアツカンペーしてくる。

ついでに笑みを浮かべると、美少女はにつこり微笑んだ、可愛い。

「なるほどなるほど」

美少女と同時に腕を組み、何度も頷く。



とまあ、意味のない行動を繰り返していたが。

とどのつまり、この姿見に映る美少女は俺なのだろう。

「生まれ変わったら美少女ってか？ 笑えないわ！」

——どうやら俺は、転生は転生でも女の子として転生してしまったらしい。

## 第二話 決別

俺がラブライブの世界に転生したと理解してから、数日後。

現在、俺は教室の扉の前にいた。

俺は小学四年生なので、通っているのはもちろん小学校。

まさか、もう一度小学生をやり直すとは思わなかったけど。

「ここに、あの穂乃果達が」

穂乃果達の前で気を失った後、あれから彼女達とはまだ会っていない。

だから、俺と朝陽が混ざってから初めての出会いになるわけだ。

「緊張するな……」

今の俺の心境を表すと、複雑という一言に尽きるだろう。

幼馴染みと会える喜び、俺に違和感を覚えなにかという恐怖、憧れのラブライブキャラに会えるという高揚……その他諸々を含めた感情が、心中を渦巻いている。

「落ち着け、家族にもバレなかったんだ。今まで通りの雨宮 朝陽を演じろ」

震える手を抑え、小さく眩きを漏らす。

ゆっくりと深呼吸をして、思考をクリアにする。

そして頬を叩き、俺は教室の扉を開く。

「おはよー」

「おはよう、朝陽ちゃん。体はもう大丈夫？」

「あの時は顔色が凄く悪かったんですよ」

「ん、もう平気さ。だからこうして学校に来たわけだし」

「本当？」

「うん、心配してくれてありがとう」

心配そうな面立ちで駆け寄ってきた穂乃果達に、そう返して笑みを浮かべる。

実際に元氣そうな俺の姿を見て、穂乃果達は各々がほつと安堵の息をついていた。

どうやら、穂乃果達は俺の言葉に納得してくれたらしい。

あの後、俺の身体にそれらしい異変はなかった事から、恐らく記憶が混ざりあった時に脳がオーバーヒートしたのだろう。

まあ、実際の真偽はわからないが。

「そういえば、朝陽。前と話し方が変わりましたか？」

「まあ、心機一転だと思ってるね。変かな？」

「穂乃果は普通だと思っようよ！」

「ことりはちよつと変だと思っったかなあ」

「私も少し違和感を覚えました」

笑顔で告げた穂乃果に対して、ことり達は困惑気味に眉を寄せていた。

まあ、普通は変だと思ふよな。実際に家族達も不思議そうにしていたし。

これは、俺の意識が女口調をしたくないと訴えていたので、妥協した結果この話し方になったのだ。

男口調は流石にまぜいし、かといつて海未のような敬語も俺には難しい。

だから、このようなくわからない口調になってしまった。

もちろん家族を説得するには難航したが、暫くするとこれが少し早い俺の厨二病だと思つたのか、段々と生暖かい眼差しを送りつつも理解してくれた。

その代わり、何か大切な物を失ってしまったような……

「朝陽ちゃん？」

「いや、なんでもない。ことり達が変わだと思ふのは、まだこの言葉遣いに慣れてないからだ。その内気にならなくなるさ」

「そういうものでしょうか？」

「そういうものさ」

「朝陽がそこまで言うなら、とりあえず気にしない事にします」

完全に納得したとは言いがたいが、ひとまず海未はこれで納得してくれたらしい。

対して、先ほどからことりは頻りに首を傾げている。

「どうしたの、ことりちゃん？」

「……ううん、なんでもない」

「そう？ あ、もう直ぐでチャイムが鳴っちゃおう！」

「授業中に寝ては駄目ですよ？」

「昨日沢山寝たから大丈夫だよ海未ちゃん！」

「大丈夫かなあ？」

「そこは穂乃果を信じよう」

「よし、今日も頑張ろー！」

不意に教室にある時計を見て、そう告げた穂乃果。

その言葉を皮切りに、俺達は各々が自分の席へと向かう。

そして自分の席に着いた俺は、内心で安堵の息を漏らす。

とりあえず、なんとか穂乃果達に説明する事ができた。

後は、俺の意識をバレないように朝陽として過ごすだけだ。

ただ、あの時のことりの様子が少し不安だが……

「念のため、意識しておくか」

小さく眩きを漏らしつつ、改めて俺は気合いを入れ直すのだった。

「——だから、この問題はこうなって」

黒板に書いてある問題の解説をする先生を尻目に、俺は机の上に開いたノートへと視線を落とす。

左手で頬杖をつきながら、右手に握った鉛筆でノートに現状の考察を記載していく。

穂乃果達がいいた事から、この世界がラブライブだというのに疑いはない。

また、穂乃果達の年齢から、物語の開始まで時間があるという事も理解している。

そして俺に示された選択肢は、大まかに二通りある。

一つ目、穂乃果達と積極的に関わっていく。

これは言うまでもないだろう。

憧れの穂乃果達と一緒に日々を過ごす。これほど心が踊る事もない。

正直、俺としてはこちらの選択肢の方が非常に魅力的だ。

しかし、それをすると一つの問題が起きてしまうわけで……

「物語が歪むんだよな」

今はまだ影響が少ないだろう。

小学生の幼馴染みなんて、少し疎遠になれば直ぐに忘れ去られる。

だから、今ここで穂乃果達と距離を置けば、物語の歪みを最小限にする事ができるはず。

そう。二つ目は言うまでもなく、穂乃果達と関わらない事。

このメリットは、後にできるスクールアイドルグループ——『μs』が殆どの確率で結成される事だろう。

俺が関わったばかりに、もしかしたらバタフライエフェクトでμsが結成されないかもしれない。

そう考えれば、俺が関わらない方が良い。

だから、二つ目の選択肢が良い事だとわかっているのだが……

「諦めきれない」

思わず眩きを漏らし、ため息をつく。

頭では理解しているのだ。穂乃果達にとっての最善は、静かに俺がフェードアウトするべきなのが。

でも、俺の理性に反して、本能が叫んでいるのだ。

——穂乃果達と一緒にいたい。ずっと友達でいたい、と。確かに、俺はバターライエフエクトを気にしすぎだろう。

しかし、穂乃果達には大事な使命がある。約束された輝きがある。

その輝きを、未来を、万が一で俺が奪つていいのだろうか。いや、奪つていいはずがない。

「はあ……」

無意識に書いていた、二つの選択肢。

理性という文字と、本能という文字。

二つの間で鉛筆を歩き来させていき、暫くしてから丸で一つの文字を囲む。

これで良いのだろうか。この選択肢が正しかったのだろうか。

神様でない俺には未来等わからないが、きつとこれで良いのだろうか。

「——はい、じゃあ兩宮さん。前に来てこの問題を解いてください」

「わかりました」

先生に呼ばれたので、返事をして立ち上がる。

そして、視界に入った丸で囲まれた理性の文字を一瞥してから、俺はノートを閉じて黒板へと向かうのだった。



無事に授業が終わり、その日の放課後。

帰り支度をしていると、ランドセルを背負った穂乃果達が近づいてきた。

「朝陽ちゃん帰ろ！」

「穂乃果、また授業中に寝てましたね」

「いやー、なんだか今日は天気が良くて眠かったんだ！」

「今日は曇りだよ？ ……どうしたの、朝陽ちゃん？」

不思議そうに尋ねてきたことに、俺は申し訳ない表情を浮かべて首を横に振る。

「すまない。今日は用事があるから穂乃果達だけで帰ってほしい」

「え、先生に呼ばれたの？」

「そんな所かな。じゃあ、私は急いでいるのでこれで」

「それならしょうがないっか。またね、朝陽ちゃん！」

「またね穂乃果、海未、ことり」

笑顔で手を振る穂乃果達に手を振り返しつつ、俺は教室を後にした。

暫くしてから足に力を入れ、駆け足でこの場を離れていく。

そして、周囲に誰もいない事を確認した俺は、思わず歯噛みしてしまう。

「これでいい。この調子で穂乃果達と少しづつ疎遠になっていけば」

そう自分に言い聞かせ、胸に手を置く。

穂乃果達にとって自分は邪魔だ。イレギュラーなのだから、イレギュラーらしく脇役に徹しなければいけない。

「だから、この痛みは俺が我慢すればいい」

もつと穂乃果達と色々な事をしたかったけど、俺個人の感情で動いては駄目だ。

そう、これでいいのだ。俺は脇役として、sの輝きを遠くから見ただけで……

「だから、この痛みは俺が我慢すればいい」

胸に痛みが走り、思わず顔を歪めてしまう。

わかってる。俺の本能が叫んでいる事ぐらい。

でも、仕方がないんだよ！俺一人のイレギュラーで、穂乃果達の輝きを曇らせるか

もしれないんだから！全ては俺が我慢すれば何もかも上手くいくんだよ！

内心で本心へと叫び返しつつ、俺はひたすら駆ける。

暫くすると、自分がいつの間にか公園へと赴いている事に気が付く。

「この場所は……」

ここは、自分が初めて穂乃果達と出会った場所だ。

当時、やたら相手に突っかかっていた俺は、子供達からはぶられていた。表面上は平気な顔をしていたが、心の中ではいつも泣いていた。そんな時、穂乃果が笑みを浮かべて俺に手を差し伸べてくれたのだ。

『——穂乃果と一緒に遊ぼう！』

あの時の事は、いまでも鮮明に覚えている。

穢れを知らない太陽のような笑顔に、聞いた者を惹きつける純粋な言葉。

穂乃果のお蔭で、俺は反省して素直になることができたのだ。

あれからことり達とも仲良くなり、俺達はいつも遊んでいた。

だけど、それは今までの話。

これからは、物語を知ってしまったからには、穂乃果達の邪魔をせず大人しくするべきだ。

「あそこでは缶けりをしたな。あつちではかくれんぼ。あの滑り台では穂乃果が落ちそうになっていたな」

無意識に公園に足を踏み入れていた俺は、様々な遊具を見て頬を綻ばせた。

遊具を一つ見る度に思い出が蘇り、懐かしい気持ちにさせる。

ゆつくりと公園を廻りながら、俺は様々な思い出に浸っていく。

「そして、ここが俺と穂乃果が出会ったベンチ」

最後に、寂しく置いてあるベンチへと寄る。

所々塗装が剥げ、金属色が剥きだしになっている。

いつも通りなその姿に苦笑いしつつ、俺はベンチに座って天を仰ぐ。

「曇りか……夜だとここから星がよく見えるんだよな」

あの時は、夏休みの半ばだっただろうか。

突然穂乃果に呼ばれた俺達は、ここまで連れてこられたのだ。

夜に呼びだされて海未達は怒っていたが、それもここから星を見るまでだった。

『凄い……』

『ここからだ、星がいつもより綺麗に見えるんだ！ それを皆に教えたかったの。ご

めんね、急に連れてきて』

『ううん、連れてきてくれてありがとう穂乃果ちゃん！』

『全く、穂乃果は仕方ありませんね。ですが、良い景色です』

『えへへー』

写真のような星々の群生とはいかず、星は数えるほどしか見えなかった。

しかし、それでも俺達はこの輝きに心から魅入られていたのだ。

それは、ただ単に星が綺麗だったからか、はたまた穂乃果達と一緒に見たからか。

「あれ？」

ふと頬に手を触れてみれば、俺は涙を流していた。

涙は頬を伝い、ズボンに染みを作っていく。

「ははは、どうして泣いているんだよ……」

何度目を擦っても、涙が止まる気配はない。

すると、改めて泣いている事を自覚したからか、ゴチャゴチャとした感情が心の底か

ら湧き上がってくる。

「う、うう……」

——どれぐらい涙を流しただろうか。

やがて涙は止まり、感情が落ち着いてきた。

そして、暫く自分の身体を抱きしめて震えを抑えた後、俺はゆっくりと深呼吸しながら立ち上がる。

「なんで弱気になつてゐるんだよ」

たかが穂乃果達と疎遠になるだけじゃないか。

しつかりしろ、俺。精神年齢は穂乃果達より高いのだから、もつと本心に蓋をしろ、押し込めろ、押し殺せ。

「大丈夫。これがあれば俺は大丈夫だ」

胸に手を置き、瞳を閉じる。

何度もある時の出来事を反芻して、気持ちをはれ落ち着かせていく。

やがて、ある程度思考が冷静になった事を確認した俺は、瞳を開いてランドセルを背負いなおす。

「よし、帰るか」

眩きを漏らし、公園内を見渡しつつ出口に足を進めていく。

ここに来てよかった。改めて、自分の気持ちに整理をつける事ができたから。

『ねえ、どうして一人で座つてゐるの?』

『……あなたには関係ない』

『だって、一人だと寂しいよ? だからさ、穂乃果と一緒に遊ぼう!』

『……………うん』

「——っ！」

頬を叩いて頭かぶりを振り、腹に力を込める。

そして、最後にベンチをもう一度だけ一瞥してから踵を返し、俺は公園を後にするのだった。

### 第三話 ファーストコンタクト

——俺がラブライブの世界に転生してから三年が経った。

その三年間も、あつという間に過ぎた気がする。

これは、自分の状況把握に精一杯だったからだろう。

学校では当然、家でも家族がいる前では『雨宮 朝陽』として演じる……いや、朝陽としての意識を全面に出す。

まあ、それも三年も経てば慣れてしまうもので、怪しい場面もあつたが今の所は違和感を持たれていない。

ただ、女の子らしい口調だけはできなかつたので、意味深なよくわからない話し方になつてしまった。

ともかく、なんとか無難に小学校を卒業した俺は、無事に中学生となつたのだ。

そして現在、俺が何をしているかと言えば——

「ねえ、お兄さん達と遊びに行こうよー」

——二人の男性にナンパをされていた。

せつかくラブライブの世界に転生したので、アイドルシヨップを見てみたいと思ひ、



俺は秋葉原へと赴いていたのだ。

前世では殆ど行かなかった秋葉原の予想以上の活気に驚きつつ、さあアイドルシヨツプへ行くぞと一歩踏みだした瞬間、知らない男性達に絡まれてしまったという……

「お嬢ちゃん聞いてるー?」

「お兄さん達いい所知ってるんだよ」

人好きのする笑みを浮かべ、男達は俺にそう告げた。

自分でも美少女の方だと思っていたが、まさか本当にナンパされるとは。

俺は中学生だぞ。しかも、中学一年生。

対して、男達は二十歳前後に見える。

……これって、通報されないか?

チラリと周囲に目を向けてみれば、野次馬は遠くから俺達の様子を窺うだけで、警察等に通報する気配はない。

気持ちにはわかる。俺だって、こんな面倒くさい場面に関わりたくないし。

しかし、それでも携帯で通報してくれるぐらい良いだろうに……。

ため息をついて気持ちを切り替え、改めて男達に視線を戻す。

俺に見つめられたからか、笑みを深めていく男達。

とりあえず、ここは適当に言って誤魔化そう。

そう思った俺が口を開こうとした瞬間――

「――待ちなさい！」

――女性の声が響き渡った。

声のする方向へと目を向ければ、野次馬を掻きわけた一人の少女が、こちらに歩み寄ってくる所だった。

ポニーテールにしている金髪を揺らしながら、少女は険しい目つきで男達を睨む。

「なんだお前？」

「オレ達の邪魔をすんじゃねえよ」

「その人が困っているじゃない。しかも、彼女は貴方達と歳が離れすぎているわ。どう見ても、これは犯罪よ！」

「んだとお……?」

そう告げ、男達に指を突きつけた少女。

すると、自分より年下の小娘に犯罪と言われたからか、男達は剣呑な雰囲気を漂わせはじめる。

にしても、この少女をどこかで見た事があるような?

「オレ達は善意で同行してもらおうつもりだったぜ? 犯罪なんて人聞きの悪い」

「どちらにしても、褒められた行為でない事は確かよ。さあ、早くこの場を離れなさい

！」

「調子乗るのもいい加減にしろよ……よく見たら、お前結構可愛いじゃねえか」

「確かに！ だったら四人で遊びに行こうぜ！」

「え、え？」

笑顔でそう提案した男達は、ズンズンと少女の方へ近づいていく。

すると、少女は話の雲行きがおかしくなった事に気が付いたようで、僅かに顔色を悪くしながらも、キツと男達を睨みつける。

「おうおう、随分と怖い顔をしちゃって」

「あ、貴方達！ 私をどこに連れていくつもりなの!？」

「なあに、楽しくカラオケでもしようと思ってるだけだぜ？」

「私は行かないわよ！」

きっぱりとそう返すが、少女の声は震えていた。

そのまま瞳に怯えの色を宿した少女を見て、男達は肩を竦めてゆつくりとにじり寄っていく。

「はあ……俺のせいだしなあ」

俺が男達に絡まれたせいで、少女が危険に陥ってしまった。

そう考えると、この後始末は俺が取るべきだろう。

一つため息を漏らしてから、俺はこちらに背を向けている男の尻目掛けて、脚を振り上げる。

「ぐあっ！」

「お、おいどうした!?!」

「誰かに蹴られたんだよ！ お前が蹴ったのか!?!」

「そんなわけねえだろ！ 後ろにいた女じゃねえの?」

「あいつか……おい、あいつはどこだ?」

「はっ? 俺が知るかよ?」

先ほどまで俺がいた場所に顔を向け、困惑がちに言葉を交える男達。

そんな彼等の様子を尻目に、俺は驚いたように目を見開く少女の手を取り、野次馬を掻きわけていく。

「ちよ、ちよっと!」

「いいから走って!」

「わ、わかったわよ……」

暫く走ってこの場から充分離れた後、男達に追いかけていない事を確認した俺は、少女の手を離す。

少女は暫し繋がれていた自分の手を眺めていたが、やがてはつとずるようこちらへ

と顔を向ける。

「ここまでくれば多分平気だろう」

「えっと、助けてくれてありがとう」

「それはこちらの台詞だ。助けてくれてありがとう」

「そんな、私は結局何もできなかったし……」

「そんな事はないさ。君が彼等を引きつけたくれたお蔭で、不意をつく事ができたんだから」

「あ、ありがとう」

改めてそう告げると、少女は照れたように頬を赤らめる。

そんなどこか可愛らしい少女を見て、俺はようやくこの既視感の正体に気が付く。

俺が知っている姿より幼いが、まさかこんな所で彼女と出会ってしまうとは……

「では、私はもう行くよ。お互いナンパには気をつけよう」

「ま、待って！」

「うん？ どうしたのかな？」

俺としては、物語を歪めないためにあまり関わりたくないのだが。

穂乃果達の方も、できるだけ会わないように接触を減らしているし。

俺だって、本当は穂乃果達ともっと仲良くしたい。

だけど、それだと物語に歪みが生じてしまう。

だから、これ以上物語の歪みを増やさないために、彼女とはここで別れるべきなのだ  
が……

「私達つて歳が近そうだし、私と一緒に遊びましょう！」

「いや、それはちよつとね」

「ね、ね？ いいでしょ？ お願い、私と遊びましょう？」

「お、落ち着いて！」

必死な形相で詰め寄ってくる少女に、俺はたじろじながら疑問を感じていた。

明らかに、少女の様子はどこかおかしい。

言葉とは裏腹に少女の表情には悲壮感が漂っているし、瞳の奥からは深い諦観に、それと同等以上の羨望の色が垣間見える。

なんだ、その孤独感を感じているような目は……これではまるで、少女がいつも独りでいるような——

「やつぱり駄目よね……ごめんさい、急に変な事を言って」

「いや、大丈夫だよ」

「そう。それじゃあ、ここで私はもう行くわね、さようなら」

痛々しい笑みを浮かべ、少女はそう告げた。

対して、今にも壊れてしまいそうな少女の様子を見て、俺は何故かイライラしてしま  
う。

その取り繕った笑顔を、何かを諦めたような姿を見ていると、俺は自分の苛立つ気持  
ちを抑えられない。

くそっ………なんですよ。なんで俺にそんな辛いような笑顔を向けるんだよ。

踵を返し、徐々に遠ざかっていく少女の背中。

その酷く寂しそうな背中を見てしまったからか、はたまた何か言葉を返さなきゃいけ  
ないと思ったからか。

「ま、待って！ やっぱり私と遊ぼう！」

「………えっ?！」

気が付けば、俺は少女へと叫んでいた。

俺の声に振り向いた少女は、驚いたように目を瞬かせる。

そして、信じられないといった表情を浮かべながら、少女は勢いよくこちらに駆け寄  
る。

「あ、遊び? 私と遊んでくれるの!？」

「その、君に助けてもらったお礼をまだしていなかったからね」

「ううん、いいのよ! それより、早く遊びに行きましょ!」

俺の言葉に慌てたように答え、少女はそう告げると意気揚々と足を踏みだす。想像以上の食いつきだな。そんなに俺と遊びたかったのだろうか？

ともかく、少女の横に並んで足を進めつつ、俺は自己紹介をするために口を開く。「私の名前は雨宮 朝陽と言う。好きなように呼んでくれて構わないよ」

「あ、そういえば自己紹介がまだだったわね」

薄らと頬を赤く染めた少女は、咳払いを一つ落とす。

そして、俺の方へと満面の笑みを浮かべ——

「私は絵里、絢瀬 絵里よ。よろしく、雨宮さん！」

——そう告げるのだった。

「——楽しかったー！」

心の底から満足そうな声を上げ、少女——絢瀬は伸びをした。

現在、俺達は近場の喫茶店で休憩をしている所だ。



絢瀬とは無難にゲームセンターで遊んでいたのだが、彼女の凄いはしやぎようを見ていると、なんとも言えない気持ちになったが。

「私も楽しかったよ」

「本当!? 私だけが楽しんでいるかもしれないと思ってたけど、雨宮さんも楽しんだみたいで良かったわ」

「まあ、絢瀬がゲーム一つ一つにアタフタしている姿が一番面白かったんだけどね」  
笑みを浮かべてそう告げれば、絢瀬は不満げに頬を膨らませる。

「あ、あれは仕方なかったの! 初めてゲームセンターに来たから、どういう風に遊ぶか全然わからなかったのよ」

「ああ、だからレースゲームでは逆走したり、ゾンビゲームでは私を撃つたりしたんだ」  
「ゾ、ゾンビは見た目が怖かったから……」

「レースゲームは?」

「ハンドルを動かしたら勝手に逆走したわ。きっとあれは壊れていたのね」

腕を組み、重々しく頷いた絢瀬。

しかし、気まずそうに絢瀬の視線が泳いでいる事から、自分の運転が下手なせいで逆走してしまったと理解しているらしい。

まあ、レースゲームとかは人によって操作が難しいゲームだし……難しいか?

俺だって数えるほどしかレースゲームで遊んだ記憶はないけど、今までで一度も逆走をした事がない。

うん、あれだ。絢瀬にとって相性が悪かったゲームという事にしよう。

「そういえば、どうして私の事をさん付けなんだい？ 自己紹介の時に私が歳下だと説明したはずだけど」

「えっと、今まで家族以外で呼び捨てにした事がなくて」

「つまり、私を呼び捨てにするのが恥ずかしいと」

要点を纏めると、薄らと頬を赤らめて小さく頷いた絢瀬。

絢瀬の気持ちはわからなくもない。誰だって初対面の人とは緊張してしまうだろう。

いや、穂乃果のようなフレンドリーと言うか、高い社交性を持つ人ならあっさりと呼び捨てにできるのだろうか。

「で、でもせっかくだし呼び捨てで呼んでみるわ……あ、雨宮」

「おお、しっかり言えたじゃないか」

「うう、やっぱり恥ずかしいわ」

呟きを漏らし、絢瀬は両手で顔を覆ってしまった。

絢瀬の耳が赤くなっている事から、俺の想像以上に恥ずかしかったのがわかる。

まあ、絢瀬もその内に慣れて呼び捨てにできるだろう。

にしても、絢瀬の仕草が日々可愛らしい。これが噂に聞くポンコツチカ――

「今、失礼な事を考えなかったかしら？」

「そんな事ないさ」

「本当に？」

「本当に」

「……まあ、そういう事にしておくわ」

いつの間にかジト目を送っていた絢瀬は、どうやら俺の言葉に納得してくれたらしい。

ため息を一つ落とし、絢瀬はおもむろに携帯電話を取り出す。

「誰かに電話でも？」

「そ、そうじゃなくて……あの、私と番号を交換しない？」

「えっ？」

不安げにこちらを窺う絢瀬。

対して、俺は絢瀬から告げられた内容に、内心で酷く驚いていた。

今日あつた絢瀬の性格から、流石にここまでイケイケになるとは思わなかったのだ。

だから、絢瀬とは今日だけの付き合いだと俺は思ったし、これならば物語の歪みを最小限に抑えられると考えていた。

しかし、絢瀬は俺と携帯の番号を交換したいと要求している。つまり、絢瀬は今後とも俺との交流を望んでいるという事だ。

正直、絢瀬の言葉は非常に嬉しい。

憧れていた人に携帯電話の番号を教えてもらえるなんて、普通ならこちらから喜んでお願いしたいぐらいだ。

ただ、それは物語となんの関係もなかった時の話。

もしも俺が絢瀬と番号交換をしてしまうと、今後交流が増え、やがて物語に大きな歪みができてしまうかもしれない。

「やっぱり、駄目よね……ごめんなさい。さっきの言葉は忘れて」

俺がどう答えるか悩んでいると、絢瀬は呟きを漏らして、傍から見てもわかるほど痛々しい笑みを浮かべる。

絢瀬の無理した言葉に、俺は即座に返事をする事ができなかった。

『——よろしく、雨宮さん！』

……どうして、このタイミングで絢瀬との自己紹介を思い出してしまったのだ。

ああ、わかっている。絢瀬と今日一日遊んでいれば誰だってわかってしまう。

遊びの一つ一つに全力で喜び、本気で楽しみ、全身で嬉しさを表現する。

見ているこちらが笑顔になるほど、絢瀬は全身全霊で遊びを謳歌していた。

……恐らく、絢瀬には友達がいないのだろう。

いつも独りで、孤独で、寂しくて。

だから、偶然とは言え自分と話すきっかけができた俺を遊びに誘い、これからも俺と交流をしたいから番号交換を望む。

俺にも気持ち的理解できる。誰にも自分の想いを相談できず、独りで何もかも抱え込んでしまうのは。

俺はまだいい。前世としての精神が安定剤になってくれるし、何より穂乃果達との思いが活力になっている。

しかし絢瀬の場合、孤独を割り切れるほど精神が成熟しておらず、自分を励ませるような尊い思い出がない。

……いや。俺の自惚れでないのなら、今日は絢瀬にとって心強い思い出となっただろう。

でもよく考えてみると、俺が絢瀬の心に止めを刺してしまった事がよくわかるのだ。

例えば深い絶望に陥っていた人に、希望を見せるとする。

すると、その人はその希望に一生懸命縋ろうとするだろう。

しかし、希望はあっさりと消え失せ、また絶望だけが残る。

結果、一度希望を知ってしまっただけに、その人はより深い絶望を味わってしまうだろう。

「……」

「ね、ねえ。ここのチョコケーキ美味しそうじゃない？　せつかくだし、これを食べましょう、ね？」

恐る恐るといった声色で、絢瀬は俺へと声を掛ける。

その言葉にいつの間にか俯いていた顔を上げると、絢瀬は無理矢理な笑みを作って俺を見つめていた。

俺は、選択肢を間違えたのか？

あの時、絢瀬に声を掛けずに知らない振りをするれば良かったのか？

寂しそうに微笑む絢瀬を無視するのが最善だったのか？

俺と同じような孤独を抱えている少女を見捨てるのがベストだったのか？

……………そんなわけがないだろう。

「絢瀬」

「あ、ごめんね？ さつきは変な事を言つて。怒ってる？ そうよね、今日会つたばかりの人と連絡先を交換したく——」

「私も、絢瀬とは連絡先を交換したいな」

「——えっ？」

矢継ぎ早に告げる絢瀬へと携帯電話を向ければ、彼女は呆然とした声を上げた。

やがて、脳が理解を迫いついたようで、絢瀬は震える声で告げる。

「今、連絡先を交換したいって言つた？」

「うん、そうだよ。駄目、かな？」

「う、ううんっ！ そんな事ないわ！ とつても嬉しい……凄く嬉しい」

慌てたように首を振つた後、絢瀬は様々な感情が籠つた言葉を落とす。

泣き笑いのような笑顔をする絢瀬と番号を交換し、お互いに番号が入っている事を確認する。

「愚痴でもなんでも連絡していいから」

「ありがとう……本当にありがとう」

「そんな、大袈裟な」

「——ううん。私にとつて、今日は一生の宝物よ」

目尻に涙を滲ませながら、たおやかに微笑む絢瀬。

窓から降り注ぐ夕陽に照らされ、その姿はどこかの名画のように酷く幻想的だった。絢瀨の笑顔に、俺は心から魅入ってしまう。

だが、直ぐに我に返って頭かぶりを振り、

「さて、時間も遅いしそろそろ帰ろうか」

「そう、ね。改めて、今日はありがとう。とつても楽しかったわ」

「こちらこそ、絢瀨と遊べて楽しかったよ」

会計を終えて店を出て、俺達は夕日を背に言葉を交わしていく。

暫くして駅前にたどり着いた俺達は、ここで別れる事にした。

「じゃあ、私はこっちだから」

「途中で居眠りしないようにね」

「もうっ。大丈夫よ、それくらい。……えっと」

「ん？ どうしたのかな？」

モジモジとしている絢瀨を不思議に思っていると、彼女は俺へと微笑み――

「――またね、朝陽！」

輝かんばかりの笑顔。

キラキラと煌めくその笑みに再度見惚れている間に改札を抜けた絢瀨は、恥ずかしそうに顔を赤面させていた。



辛うじて手を振ると、絢瀬は大きく手を振り返して駆け足でその場を離れていく。やがて、絢瀬の姿が俺の視界から消え去っていった。

「またね、か」

なんとなく電車に乗る気になれず、俺は駅にあるトイレに入る。

そのまま一番奥の個室の扉を開け、鍵を閉めて便座の上に座り込む。

「やってしまった……」

絢瀬の姿が自分と重なってしまったのだろうか。

気が付けば、絢瀬の心の中へと深く踏み込んでしまっていた。

「あの日に決意したはずなのに、結局俺の意思はこの程度か」

思わず自嘲の笑みを漏らしていると、携帯電話が震えだす。

携帯を開いて待ち受け画面を見てみると、どうやら絢瀬からのメールのようだ。

『今日はありがとう。朝陽と色んな思い出を作って、これからも仲良くしたい』か……」

絢瀬にとつて、俺はもう友達の範疇なのだろうか。

恐らく、絢瀬は俺を友達と思っている。

友達でなければ、普通は連絡先を交換しようと思わないだろうし。

「俺は絢瀬をどう思っている？」

絢瀬を表す言葉は色々ある。

μ sの一人、憧れのキャラクター、意外と抜けている、根が真面目……そして、孤独感を抱えている女の子。

俺が穂乃果に救われただけに、あの状態の絢瀬を放っておく事がどうしてもできなかったのだ。

「……高校が違うなら物語に支障は出ない、か？」

俺が考えた限り、物語に大まかな歪みは生じないと思う。

ただ、バタフライエフェクトはどこから何が起こるかわからない現象だ。楽観視はできない。

「最悪、穂乃果達と疎遠になればμ sはできるはず」

μ sが結成されるきっかけは、穂乃果達が廃校をなんとかしたいと思ったからだ。

つまり、俺と絢瀬が仲良くなっても物語に大まかな支障はでない、多分。

「だから、絢瀬と友達になっても大丈夫……もつと仲良くなっても平気なはず」

まるで、この絢瀬という繋がりを逃したくないように、自分の奥底に閉められた想いから目を背けるように。

自分でも何を思っているのかわからないまま、俺は絢瀬のメールに返事をしていくのだった。

## 第四話 突きつけられた選択

「はあ……寒い」

首筋を撫でる冷たい感覚に、俺は思わず肩を竦めた。

首に巻いてあるマフラーを巻きなおし、コートのポケットに手を入れつつ、急いで待ち合わせ場所に向かうべく足を速めていく。

秋葉原で衝撃的な出会いを経験してから既に二年が経っており、俺は中学三年生となった。

そろそろ受験シーズンを迎え、学校でも勉強の話題が頻繁に上がるようになっていく。

「高校、か」

やはりと言うべきか、穂乃果達は音ノ木坂に進学するらしい。

皆は俺も同じ高校に進学すると思っているようだが、残念ながら俺は別の高校に入学しようと考えている。

もちろん、穂乃果達が嫌いになった訳ではない。俺自身も音ノ木坂の雰囲気は凄く好きだし、音ノ木坂に入学したい気持ちは大きい。

しかし俺が音ノ木坂へと進学すると、本格的に物語の歪みが大きくなってしまい、やがてそれは無視できないうねりとなるだろう。

「いや、もう既に歪んでいるか」

未来を知っているというのも考えものだ。

俺の思考は、必ず物語が中心として展開されている。

ここまでくると、予知などと言った可愛いものではなく、もはや呪いに近い。

穂乃果達がこの事を知ったらどう思うだろうか。

物語を通してでしか見れない、<sup>イレギュラー</sup>面白い物の友達を……

「ま、答えは決まっているか——ん？」

自嘲の笑みを漏らしながら歩いていると、前方で一人の少女が座り込んでいる事に気が付く。

病気か何かで動けないかと思つて駆け寄れば、俺の足音が耳に入ったのか、少女は俯いていた顔を上げる。

「なこっ。」

「や、君が座っていたから心配になつてね」

「それなら平気よ。私はなんともないから、気にしないで」

鮮やかな赤髪を揺らし、紫色の瞳でこちらを見つめる少女。

見覚えのあるその姿に、俺は思わず頬が引き攣ってしまふ。

嘘だろ……どうして、何故このタイミングでこの子と出会ってしまったんだ？

「じゃ、じゃあ私はもう行くから」

「……」

不審そうな眼差しを送る少女を努めて無視して、俺は足早にこの場を離れていく。

まさか、こんなありふれた道のど真ん中で彼女と出会うとは。

これは運が良いと言つてもいいのだろうか？

正直、傍から見たら運は良いのだろうが、俺からすれば運が悪い。

まあ、彼女とはもう一生出会う事もないだろうし、このまま何事もなくこの場を去れ

ば……

「……もしかしなくても、だよなあ」

足元に落ちていたトマトのキーホルダーが着いた鍵を拾い、掌で弄ぶ。

この場でしゃがんで何かを探す素振りをする少女に、この高価そうなキーホルダーが着いた鍵……どう考えても、少女の私物だ。

「仕方ない、か。おーい、探しものはこれかな？」

大きなため息を零してから気持ち切り替え、振り向いて少女を呼んで手招きをする。

少女は疑わしそうな足取りでこちらまで近づいてきたが、やがて俺の手の中にある鍵を見つけると目を丸くする。

しかしそれも数瞬の事で、直ぐに澄ました顔に戻ると少女はそっぽを向く。

「ち、違うわ。その鍵は私のじゃないから!」

「じゃあ、これは交番に届けるよ」

「えっ?」

「君の邪魔をしてすまない。では、私はこれで」

「あっ……ま、待ちなさい!」

手を振って踵を返した俺を見て、少女は慌てたような声で叫ぶ。

対して、俺は掌にある鍵を少女へと放り投げて渡す。

目を白黒しつつも鍵をキャッチした少女を確認してから、俺は足を進めながら口を開く。

「それは君のだろうか? 無理して取り繕わなくてもわかるさ。次からはちゃんと鍵を落とさないようにね」

「わ、わかつたわよ……じゃなくて! 色々と言いたい事はあるけど!」

背後から聴こえる声を無視している俺に、少女は苛立つような声を上げ、俺の前へと回り込む。

そして、俺の前へと躍り出た少女は、こちらを睨みながらも声を掛ける。

「改めて鍵を拾ってくれて、その、ありがとう」

「どういたしまして。話はそれだけかな？」

「まあそれだけでも、貴女には色々と言いたい事があるわ。主に鍵を投げた——」

「話がないならもういいね」

「——事とかつて、待ちなさいよ！」

「私は急いでいるので、ここで失礼するよ」

「ああっ、もう！ 次に会ったら覚えておきなさいよっ！」

ジト目でこちらを見てくる少女の横を通り抜け、俺は全速力で脚を動かしていく。

背後から聞こえてくる悔しそうな叫び声を耳に入れつつ、俺は内心でため息を零す。

よりにもよって、物語の重要キャラクターである彼女に会うとは。

先ほどの少女は、ラブライブでμ'sの作曲担当にあるメンバーだ。

素直になれないツンデレであり、だけど内心では熱い想いを秘めている人。

その少女の名は——西木野 真姫。

「根に持たれただろうなあ」

次に会ったら色々と言句を言われそうだ。

大いにありえる未来に嘆いた俺は、再び大きなため息を漏らすのだった。

「はあ……はあ……待たせたね、すまない」

「それはいいんだけど、凄い汗ね？」

あれから、無事に待ち合わせ場所である喫茶店へとたどり着いたので、俺は鞆からタオルを取り出して汗を拭っていく。

驚いたようにこちらを見つめていた絢瀬に笑みを返しながら、コートやマフラーを外してから着席する。

そして、注文を聞きにきた店員に紅茶を頼んだ後、美味しそうにチョコを頬張っている絢瀬へと目を向ける。

「絢瀬は本当にチョコが好きなんだね」

「もちろんよ！ チョコが主食と言っても過言ではないわ」



「流石にそれはない」

「え？ こういうのがジヨークなんでしょ？」

「うーん、間違つてはいないかな？」

「ハラシヨー！ やつぱりこの本に書いてある事は正しかったのね！」

笑顔になると、鞆から一冊の本を取り出した絢瀬。

そのまま取り出した本を渡されたので、試しに目を通していく。

えつと、『猿でもわかるジヨーク集〜これで友達百人作ろう〜』……胡散くせえ。

本の内容も寒い親父ギャグばかり載っているし、とてもではないが役に立つ本だと思えない。

なんていうか絢瀬って、純粹だな。残念美人の本領発揮と言うべきか。

まあ、俺は今のようなボンコツエリーチカでも良いと思うが。

……そういえば、絢瀬のあの口癖は直ったのだろうか？

「賢い可愛い？」

「エリーチカ！ ……はっ、また言ってしまったわ」

「まだ反射的に答えてしまうのかい？」

「もう癖になっちゃってるのよ。とりあえず、朝陽が言うのを止めれば良いと思うのだから」

「ふふつ、それはできない相談だね」

「ううー」

不満そうな唸り声を上げ、ジト目でこちらを見つめてくる絢瀬。

頬を膨らませて可愛らしい仕草をする絢瀬を微笑ましく思いつつ、俺は店員が持つてきた紅茶を口に含んで笑みを返す。

すると、俺をジト目のまま見つめていた絢瀬は、やがて諦めたようなため息をつく。

このやり取りも恒例になっているからな。絢瀬も俺が止めない事を悟ったのだろう。

ともかく、それから暫く絢瀬と雑談を交わしていると、不意に彼女が真面目な顔つきに変化する。

「どうしたんだい、絢瀬？」

「あのね、朝陽つてどこを受験するか決めた？」

「……ああ、その事か」

一瞬言葉に詰まるも、直ぐに取り繕って視線を落とす。

このタイミングで話を切り出したという事は、絢瀬は俺に音ノ木坂へと進学して欲しいのだろう。

俺としても、絢瀬や穂乃果達と同じ高校に行きたかった。

だが、やはり物語の事を考えると音ノ木坂に行かないべきだ。

……物語の事を考えるくせに、絢瀬と交流を続けている自分に呆れてしまうが。

——もう少し、もう少しだけなら大丈夫。絢瀬と交流するだけなら、sは結成される。絢瀬が高校で親友を作るまでの間だけ。

そうやって自分に言い聞かせ、絢瀬との交流をズルズルと続けていく。

……孤独感に飢えているのはどっちだよ、全く。

今思えば、絢瀬も俺と同じ気持ちだつて勝手に決めつけて、俺の孤独感を埋めるための言い訳にしていたのかもしれない。

「本当に俺って最低だ……」

「なにか言つたかしら？」

「や、なんでもない。絢瀬には申し訳ないが——」

首を傾げている絢瀬に入学しない趣旨を伝えようとした矢先、俺の携帯電話が鳴りはじめた。

絢瀬に許可を貰ってから携帯の画面を見ると、どうやら穂乃果からの電話らしい。

突然の電話を不思議に思いつつ、通話ボタンを押して耳に携帯を当てる。

「もしもし」

『もしもし、朝陽ちゃん？ 穂乃果だよ！』

「いや、それは知っているよ」

『えへへ、一回言ってみたかったんだ』

『ことりもいるよ』

『私もいますよ』

「二人もいるのか」

ことり達がいるという事は、場所は穂乃果の家だろうか。

きつと二人で遊んでいるのだろうか。

『うん。今は皆でお喋りしているんだ！』

『違います。受験勉強をしているのでしよう？』

『穂乃果ちゃんが疲れたって言ったから休憩しているんだよ？』

『ご、ごめーん！ だって朝陽ちゃんの事が気になっちゃったんだもん！』

「私が？」

俺の予想に反して、穂乃果達は真面目に受験勉強をしていたようだ。

その事に驚きながらも、俺は穂乃果の言葉に思わず声を上げてしまう。

『うん。最近、朝陽ちゃんって穂乃果達を避けている気がして』

「それ、は」

寂しげな穂乃果の言葉に、俺は咄嗟に返事をする事ができなかった。

確かに、俺は絢瀬と出会ってから穂乃果達と会う頻度を下げている。

絢瀬と仲良くなる事とは反比例して、穂乃果達とは徐々に距離を離れていったのだ。

きつと、絢瀬と会っている事に後ろめたい気持ちがあったのだろう。

だから、物語の歪みの帳尻合わせのために、代わりに穂乃果達とは会わないようにする。

そして、穂乃果達と会えない寂しさを埋めるためか、俺は余計に絢瀬と交流を増やしていく。

……絢瀬には申し訳ない事をした。穂乃果達の代わりのように交流をして。

いや、絢瀬と会うのはいつも嬉しかった。俺の中では、絢瀬が一番に近いほど心を許しているだろう。

でも、それと穂乃果達の代わりをした事は別なわけで。

やはり、俺は絢瀬と関わるべきではなかったのだろう。

「朝陽？ 顔色が悪いけど、大丈夫？」

「平気さ。少しばかり驚いてしまっただけだよ」

「そう？ あまり無理はしないでね？」

心配そうにこちらを見つめていた絢瀬だったが、やがて再び追加注文したチョコを頬

張りはじめた。

ああ、取り繕う事ばかりを覚えていく自分に反吐が出る。

そして、また穂乃果に自己満足の嘘を重ねていく自分のどうしようなさにも。

「それは、きつと穂乃果気のせいだよ」

『そうなのかなあ?』

「そうさ」

『……うん、朝陽ちゃんの言葉を信じるよー』

止めてくれ。こんな俺を信じるなんて言わないでくれ。

物語を通してでしか見れない俺を、簡単に信じないでくれ。

軋みはじめる感情の蓋に鎖を巻きつつ、表情に仮面を被り、表面上を取り繕う。

「それで、もう用事はもう済んだのかな?」

『あ、うん。用事は——ことりちゃん?』

「うん?」

俺の疑問に穂乃果は肯定の声を上げたのだが、どうやらことりからも話があるらしい。

暫く電話の向こうで物音がした後、ことり特有の甘いボイスが耳に入ってくる。

『もしもし、朝陽ちゃん?』

「どうしたんだい？ 何か聞きたい事でもあるのかな？」

『えっと、その』

「ことり？」

迷うように言葉を泳がせていたことりは、やがて悲しげな声色で告げるのだった。

『——朝陽ちゃんって、音ノ木坂に入学しないつもりだよね？』

## 第五話 決意を新たに

「……なんの事かな？」

『誤魔化さなくてもいいよ。朝陽ちゃんが言葉に詰まったのが何よりの証拠だから』

断定口調でそう言ったことり。

まさか、ことりに指摘されるとは夢にも思わなかった。

いや、ことりはああ見えて鋭い所もあるから、どの道最初に気が付いてもおかしくはない、か。

俺もまだまだだな。幼馴染み一人誤魔化しきれないなんて。

「そう、だね。私は音ノ木坂に入学するつもりはないよ」

「え、それはどういう事よ朝陽っ!？」

『こ、ことりちゃん！ 今の話は本当なの!？』

『何故ことりはその事を知っているのですか!？』

俺の言葉を皮切りに、場は騒然としはじめた。

絢瀬は愕然とした声でチョコを手から落とし、電話越しでは穂乃果と海未が混乱したような声を上げている。



しかし、ことりだけは取り乱す様子は全く見せず、あくまでも冷静な素振りだった……少なくとも、電話越しでは慌てていない。

『やっぱり。そんな気はしてたんだよね』

「参考までに、どうやってわかったか聞いても？」

『だって、朝陽ちゃんって私達が音ノ木坂の話をすると、いつも悲しそうな顔をするんだもん。直ぐにわかっちゃったよ』

「ポーカーフェイスには自信があつたのだけどね」

『ふふつ。他の人達は騙せても、幼馴染みのことりだけは騙せませんっ』

『……穂乃果はわからなかったよ』

『……私もです』

恐らく、今のことりは満面の笑みを浮かべているだろう。

茶目つ気たつぷりに告げることりの背後から、穂乃果達の落ち込んだ声が聴こえてくるが、大丈夫。ことりが鋭すぎるだけだ。

……そう、か。ことりは俺の事を見ていてくれたのか。

正直、凄く嬉しい。にやけそうになる表情を取り繕うのに必死だ。

ことり達と疎遠になろうとしていたこんな俺を、ことりはしっかりと見てくれる。

これほど想われて嬉しい事はない……ないけど、それと俺が音ノ木坂に入学するかは

別。

やはり、俺の影響は大きくなっている。

ことに俺の気持ちを知られて嬉しい反面、彼女に影響を与えた自分に対して、恐怖心も抱いてしまう。

そんな事を考えていると、絶望したような表情を浮かべた絢瀬が震える声を上げる。

「あ、朝陽は音ノ木坂に来てくれないの……?」

「絢瀬には申し訳ないが——」

「ど、どうしてっ……どうして、音ノ木坂に入学しないの? 私と一緒に高校が嫌なの？」

「——そういう事じゃないんだ」

ハラハラと涙を流して尋ねる絢瀬を見て、俺は予想以上の反応に内心で困惑していた。

絢瀬の視点から見れば、俺が音ノ木坂に進学しなくても、会おうと思えばまた会える。だから、絢瀬がそこまで強い反応をする事自体を不思議に思ってしまう。

「わ、私は朝陽と一緒に高校が良いわっ」

「これには理由があつて——」

『ねえ、朝陽ちゃん。どうして音ノ木坂に入学したくないの?』

碧眼に涙を滲ませたまま、縋るように俺へと告げた絢瀨。

どこか迷子の子供のような絢瀨の様子に、俺は驚きつつも返事をしようとする。

すると、ことりは俺達の話を遮り、恐らく皆が気になっているのであろう事を尋ねた。

対して、俺はことりになんて答えようか頭を悩ませていく。

まさか、正直に未来を曲げるのが怖いとは言えないし、他に都合の良い言い訳があるというわけでもない。

「ことりに下手な嘘は見破られそうだし……」

「できれば、言いたくない」

『いやだっ！』

「いやだつて……」

『だつて朝陽ちゃん、今凄く辛そうな声だよ？』

「っ！」

こちらの心を抉るような、的確なことりの言葉。

確かに、俺としても真実を告げないのは心苦しい。

しかし、俺が音ノ木坂に行かない理由は狂気じみているし、何より誰も信じるはずがないだろう。

だから、こうして自分の感情に蓋をするか、素直に言えないと告げるのが最善だ。

「私にも言えない内容なの？」

『お願い、朝陽ちゃんっ！ 言える事だけでいいから、朝陽ちゃんが音ノ木坂に行けない理由を教えてっ！ 私は……ううん、私達は朝陽ちゃんと一緒に音ノ木坂に行きたいのっ！』

瞳を潤ませる絢瀬に、必死な声色で告げることり。

心から心配してくれているとわかるその様子に、俺は不謹慎ながらも笑みを浮かべてしまう。

ここまで俺を必要としてくれているのか。この世界で異物の俺をここまで。

ああ、この世界はなんて優しいのだろうか。この人達はなんて暖かいのだろうか。

心の奥底から歓喜が、喜びが、愛好が、愉悦等といった感情が湧き上がってくる。

それと同等以上に悲しみ、孤独感、哀愁、悲壮感等といった感情も膨れ上がっていく。

「怖いんだ」

感情を抑えられなかったからだだろうか。

気が付けば、俺はポツリと眩きを落としていた。

目敏く俺の声に反応した絢瀬は、不思議そうに首を傾げている。

「どういう事？」

『もう少し詳しく教えてもらってもいいかな？』

「……私は、ある事を懸念している。その懸念通りになってしまいう事が酷く恐ろしい」  
「うーん、どういう意味かしら」

『朝陽ちゃんは何に悩んでいるの?』

そして、それが私のせいだと責任を感じてしまうのが。

最後は口にしなかったが、やはり絢瀬達は俺の言葉を理解できなかつたらしい。

絢瀬は腕を組み思案する仕草をしており、ことりは率直に俺へと切り込んできた。

だが、俺はこれ以上の事は告げるつもりはない。

これ以上の事となると、あとは未来の内容しか話せる内容はないだろうし。

「すまない、これ以上は言えない」

『そっか……』

「すまない、ことり」

『ううん。言えないならしようがない——あつ、穂乃果ちゃん!』

突然驚いたような声をことりが上げた後、暫くしてから電話越しに聞こえていた物音が収まる。

『もしもし、朝陽ちゃん? 穂乃果だよ!』

「あ、ああ。穂乃果に変わったんだね」

『ほ、穂乃果ちゃん! ことりはもつと朝陽ちゃんとお話したいの——!』

『諦めなさい、ことり』

ことり達の声が聞こえるが良いのだろうか。

『えつとね、朝陽ちゃんの話聞いてただけど』

「うん」

『穂乃果にはさっぱりわからなかった!』

「……だろうね」

きつと、今の穂乃果は能天気な笑顔をしているだろう。

それと、穂乃果の声が大きくて耳から携帯を離しているのだが、それでもテーブルの向かい側にいる絢瀬にまで声が届いている。

実際、絢瀬も穂乃果の大声には驚いているのか、何度か目を瞬かせていた。

「ええと、随分と元気な子ね」

「まあ、それが穂乃果らしいと言えば穂乃果らしいからね」

『えへへー、朝陽ちゃんに褒められちゃった』

「穂乃果?」

何故か嬉しそうな声を上げる穂乃果に対して、疑問の声を上げて小首を傾げた絢瀬。

そういえば、物語の歪みを最小限にするために、絢瀬には穂乃果達の情報を伏せていたんだっただな。

……ここまできると、もはや物語の原型を保たせる事も難しい、か。

「穂乃果は私の幼馴染みの名前さ。それで、穂乃果は私に何か話があったのではないかな？」

「へえ、幼馴染みなんだ。……穂乃果、ね」

『あ、そうだった！ えつとね、朝陽ちゃんは音ノ木坂に入学するのが怖いんだよね？』  
「まあ、そうだね」

『音ノ木坂に入学すると、朝陽ちゃんの懸念通りになるかもしれない。だから、怖くて音ノ木坂に入れないんだよね？』  
「端的に表すと、そうなるかな」

意味深な眩きを落として思案する様子を見せる絢瀬を尻目に、俺は穂乃果の問いかけに肯定の声を上げた。

すると、穂乃果は数瞬の間を置いた後――

『それで、朝陽ちゃんは音ノ木坂に行きたいの？ 行きたくないの？』

――あつけらんかんとした口調で、そう告げた。

「……私の話を聞いてた？」

『うん。朝陽ちゃんが何に悩んでいるのか、難しくって穂乃果にはわからないよ。でも、そ

うやって本当の気持ちを抑えるのは違うと思う』

「本当の、気持ち？」

『うん、本当の気持ち。怖くて音ノ木坂に入れないって事は、本当は音ノ木坂に入学したいんだよね？』

「それは、は」

『色々考える事は大事だよ、海未ちゃんもいつも考えてるし。だけど、朝陽ちゃんは難しく考えすぎだと思っうなあ』

あっさりとした様子の穂乃果に、俺は歯を食いしばる事で、喉元から飛びだしかけた感情を抑えつけた。

穂乃果の言葉は正しいだろう。傍から見れば、俺の方が懸念しすぎだと誰もが思う思うだろう。

でも、違う。俺の持っている呪い知識は爆弾なのだ。

俺という異物が音ノ木坂に入ると、最悪μsが結成されずに廃校を阻止できないかもしれない。

何度も……何度も、考えすぎだと自分に言い聞かせても、どうしても杞憂だと笑い飛ばす事ができないのだ。

どうして、なんで自分にこんな知識が備わってしまったのだろうか。



何も知らなければ穂乃果達と笑い合い、絢瀬と同じ高校に行き、そしてμsの一員になれたかもしれないのに。

「……話は、そう簡単じゃない」

『うーん、どうして朝陽ちゃんがそこまで頑固なのかわからないや。穂乃果は朝陽ちゃんと同じ高校に行きたかっただけなのに……』

「えっ……?」

残念そうに漏らした穂乃果の呟きに、俺は思わず間抜けな声を上げてしまう。

そんな俺の呆然とした様子に気が付いたのか、穂乃果は声色に寂しさを滲ませて告げる。

『朝陽ちゃんと一緒に勉強したり、修学旅行に行ったりしたかったなああって』

「私、と?」

『当たり前だよ。だって、朝陽ちゃんは穂乃果の親友だもん!』

「――」

誇らしげに言葉を落とした穂乃果。

対して、俺は歓喜で震えそうになる身体を抑えるので必死だった。

どう、して……どうしてこう、穂乃果はなんでもない事のように言うのだろうか。

紛い物で、イレギュラーで、異物で、ろくでなしで、どうしようもない俺を親友と。

こんな俺ですら、穂乃果は親友だと言ってくれるのか。穂乃果にとつて、今の言葉に深い意味はないのだろう。

しかし、俺にとつては千金にも勝る嬉しい言葉だった。

……ああ、行きたい。穂乃果達と一緒に入学して、音ノ木坂で青春を謳歌してみたい。ことりとお喋りをしたり、海未と一緒にテスト勉強をしたり、絢瀬と共に下校して寄り道をしたり……。

きつと、穂乃果達と同じ高校だったら、毎日が楽しいだろう。脳裏に思い浮かぶのは、満面の笑みを浮かべている俺。

何気ない日常で幸せを噛み締め、ふとしたハプニングに慌て、そして廃校を阻止するために皆で一致団結をして……

「あ、朝陽っ!? 突然泣いてどうしたの!?!」

『もしかして、朝陽ちゃん泣いてるの!?!』

「……ああ、ごめん。ちよつとボーツとしてたよ」

「ちよつと所じやなかったわよ! 明らかに目の焦点が合っていなかったし、どこか具合でも悪いの?」

『大丈夫、朝陽ちゃん?』

「……大丈夫、目にゴミが入っただけだから」

乱暴に目を拭いながら、絢瀬達にそう返した。

すると、改めて現実に意識を戻したからだろうか。

心の奥底に閉じ込めた想いが、俺の制御を効かずに溢れだしていく。

「やっぱり、何か辛い事でも思い出したの?」

『悲しい事があつたのなら、穂乃果が聞くよ?』

心配になったのか、隣まで移動して俺を抱きしめた絢瀬。

労るように、ゆつくりと優しい口調で促す穂乃果。

絢瀬に抱かれたまま二人の声を耳に入れていた俺は、やがて自分の感情を抑えきれずに言葉を漏らしてしまう。

「私も、行きたい」

「音ノ木坂に?」

俺の背中を撫でて端的に問いかける絢瀬に、静かに頷いて瞳を閉じる。

この気持ちをも、この想いを止められない。

あれほど決意していたはずなのだが、穂乃果達の言葉であつさりと決意が揺らぐ。

……でも、俺が穂乃果達と同じ高校に進学するのは、やはり危険な行為だろう。

ウジウジとそんな事を考えていると、俺の雰囲気伝わってきたのか。

電話越しから穂乃果の怒鳴り声が聞こえてくる。

『ああ、もうっ！ 朝陽ちゃん悩みすぎ！』

「いや、だつて……」

『だつてじゃないよっ！ 決めたら即行動でしょ！』

「ほ、穂乃果？」

『私は朝陽ちゃんと一緒に音ノ木坂に行きたい！ はい、じゃあ朝陽ちゃんはどのようなっ！』

「え、ええと？」

促すように告げる穂乃果に対して、俺は咄嗟に口箆らせてしまった。

すると、穂乃果の声色が一段と低くなつていく。

『行きたいの!? 行きたくないの!?』

「い、行きたい！ 穂乃果達と音ノ木坂に進学したい！」

俺が思わず叫べば、穂乃果は暫くの間を置いた後、先ほどとは打つて変わつて穏やかな声で告げる。

『うん、ちゃんと言えたね。だったら、話は簡単でしょ？ 行きたいと思うのなら——』

——朝陽ちゃんも、音ノ木坂に行こうっ！

その言葉に、俺は穂乃果の太陽のような笑顔を幻視した。

電話越しからでもわかる、聴く者の心を揺さぶる言葉……いや、言霊。

これが、これこそが  $\mu$  s の原点である穂乃果の在り方。

人を強く引つ張り、皆を明るく照らす太陽のような存在。

ああ、俺も単純だな。

まさか、穂乃果にたった一言を告げられただけで、ここまであつさりと意見を変えるなんて。

穂乃果にここまで言わせてしまった以上、これに応えなければいけない。

……これを、最後の我が儘にしよう。

穂乃果達と一緒に音ノ木坂へと進学する。この我が儘を最後に、俺は物語から逃げるのを止める。

もう、後ろを見る事だけは止めて、前を見て穂乃果達を支えていきたい。

俺の影響で、物語は加速度的に歪んでいくだろう。

それを物語の近くで受け止め、歪みを最小限しようと足掻く。

それが、俺に唯一残された役割なのだから。

「ありがとう、穂乃果」

『えっ?』

「私も音ノ木坂に入学する決心がついたよ」

『本当!? 朝陽ちゃんと一緒の高校に行けて嬉しいよ!』

『ことりもことりも! ことりも朝陽ちゃんと音ノ木坂に行けて嬉しい!』

『私も朝陽と同じ高校で学べて嬉しいですよ!』

『あ、待つてよことりちゃん、海未ちゃん! そんなに携帯を乱暴にしたら——』

何やらドタバタと激しい物音がした後、穂乃果との通話が切れてしまった。

思わず苦笑いを零して携帯をポケットに仕舞い込み、隣で希望に満ち溢れたような表情を浮かべている絢瀬に目を向ける。

「今、音ノ木坂に来てくれるって」

「うん、私の心は決まったよ。迷惑を掛けるかもしれないけど、これからよろしく絢瀬先輩」

「……朝陽っ!」

「わっ」と

感極まったように抱きついてくる絢瀬を受け止め、落ち着かせるように背中を何度か叩く。

すると、顔を赤面させた絢瀬が慌てた様子で離れ、そのまま初めにいた席へ戻って着席する。

「ご、ごめんなさい。朝陽と一緒になれると思ったたら嬉しくて」

「ううん、気にしてないから大丈夫さ」

「そ、そう？ ……あ、そうそう。学校では先輩呼びにして欲しいけど、プライベートでは今まで通りでもいいのよ？ むしろ、そろそろ名前で呼んでほしいかなって——」

俺にドヤ顔を向けたかと思えば、急に不安そうな表情を浮かべたり。

コロコロと豊かに表情を変化させていく絢瀬。

見ているこちらが微笑ましくなるその様子を眺めつつ、俺は高速で思考を巡らせていく。

物語の歪みを直す……いや、物語をより良くするために成すべき事はなにか。

物語のように、 $\mu$ 、 $s$ を分散の危機にさせず、ことりの留学を早い段階で止める。

そうすれば、穂乃果達は悲しまないですれ違いが起きたりしないだろう。

知識として知っているからこそ、この問題を俺がなんとかしなければいけない。

これは、俺の自己満足で穂乃果達への償い……

「——って事なのよ」

「なるほど。絢……絵里はそう思ったって事なんだね」

「うっ……朝陽に絵里って言われると、なんだか照れて胸がドキドキするわね」

「エリーチカの方がいいかな？」

「それは止めて！」

「賢い可愛い絵里ちゃん」

「ううう……朝陽なんて知らないっ！」

不満そうに頬を膨らませると、絢瀬——絵里は顔を背けた。

やはり、絵里を弄ると面白い。反応が日々可愛い。

うん、綺麗でドジで可愛いとか反則だと思ふ。

「ハラシヨ——！ 絵里の反応が素晴らしい」

「ちよつと、私の真似をしないでよっ」

「すまない、一度使ってみたかったんだ」

「まあ、そういう事なら」

絵里はチヨロ……優しいな。直ぐに許してくれて。

「今、何か失礼な事を考えなかつたかしら？」

「そんな事ないさ。それより、音ノ木坂の事を聞かせてほしいな」

「いいわよ！ まず、音ノ木坂には——」

俺の言葉に笑顔で頷いた絵里は、身振り手振りを交えて語っていく。

楽しげに音ノ木坂の魅力を伝える絵里に頷きを返しつつ、改めて俺はこの魅力的な笑

顔を曇らせない事を決意するのだった。



## 第六話 王者と挑戦者

「——もう嫌だあ——！」

突然穂乃果がそう叫んだかと思えば、ペンを投げだしてテーブルに突っ伏してしまつた。

それを見たことりは苦笑いをして、海未は呆れたようなため息をつく。

「穂乃果ちゃん……まだ三ページしかやってないよ？」

「穂乃果は堪え性がなさすぎます」

「だってだって穂乃果が数学わかるわけないじゃん！」

「でも残っているのは数学だけではないだろう？」

「ぐっ……」

俺がそう呟くと穂乃果は言葉に詰まり、そつと目を逸らして口笛を吹きはじめた。

しかし、思つたより動揺していたのか上手く口笛が吹けていない。

「それより穂乃果。早く続きをやらなければ終わりませんよ」

「そうだよ、夏休みが後十日しかないんだから」

「わ、わかつてるよお……」

ことり達に宥められて、穂乃果は渋々といった様子で再びペンを手に持った。そんな幼馴染み達のいつもの光景を横目に、俺は手元の本に視線を落としながら記憶を掘りかえしていく。

俺が音ノ木坂へ入学すると決めてから早いもので、既に半年が経過している。現在は八月の半ばで、先ほどことりが言った通り夏休みも残り僅かだ。

この半年間も中々濃い出来事が多かったが、その辺は置いておこう。

「そういえば、朝陽は何を読んでいるんですか？」

「あ、ことりも気になる。もしかして恋愛本!? そんな朝陽ちゃんに恋人がいたなんて知らなかった——」

「ん? ああ、これだよ」

そのまま一人で妄想に耽ることりを努めて無視しつつ、不思議そうな顔をしている海未に本を渡す。

素直に受け取った海未が本に目を通すと、瞬く間に顔色を真っ赤に染めていく。

うん、海未ならいいリアクションをしてくれるかと思っていた。そのためにわざわざ本を渡したんだからな。

「なあっ! ああああ朝陽これは一体なんですか!?!」

「なんですかとは?」

「何故朝陽が私のノートを持っているのですか!？」

「え、海未ちゃんのみ!?　ことり見たい!」

「だ、駄目です!　これは私にとって大事な——」

「これは海未のポエむがっ!」

「——ななな何を言おうとしているんですかっ!？」

いつの間にか妄想から帰ってきたことりに内容を教えようとした瞬間、機敏な動作で海未が俺の懐に入り込み、口許を手で抑えてきた。

海未が近づいてきたので必然的に至近距離で見つめ合う事になり、海未の真っ赤な顔が間近に見える。

「むごっ……何ってことりに教えようとしただけだが」

「私のプライバシーは!？」

「ない」

「理不尽ですっ!」

海未の手を退かしてから正直に言うと、海未は小声で怒鳴るといふ器用な真似をしてくる。

鼻腔を擽る海未の清涼な匂いに内心でドキドキしつつ、小声で俺達は言葉を交わしていく。

「とは言つても、海未の母親に許可を貰ったんだよね」

「わ、私は許可してませんよ！」

「海未なら気にしないと思つてさ」

「気にするに決まつているじゃないですか!？」

「そうなのか。それはすまなかつた、申し訳ない」

「うっ……わ、わかればいいのです。これからは私に許可を貰つてからにしてください」  
弄るのはこの辺にして頭を下げれば、海未は一瞬怯んだ様子を見せた後、俺の肩に手を置く。

そして、海未はそのままずっと顔を近づけてくる。

「それはわかつたけどさ……」

「本当ですか？」

「うん。だからさ、そろそろ顔を離そう」

「へ? ……ひやあつ!」

目を逸らして告げた俺の言葉に、ジト目をこちらへ向ける海未は素つ頓狂な声を上げていたが、数瞬経つと今度は可愛らしい悲鳴を上げて後ずさつた。

海未つて普段は凜々しいくせに、こういう時は可愛い様子を見せるよな。

かつこよくて可愛いとか反則だわ……あれ、これつて前にも思つた気がする。

「ちよつと聞きましたかことりさん？ ひゃあつですつてひゃあつ。とつても可愛らしい悲鳴を上げていましたねえ」

「そうですねえ。あの海未ちゃんからひゃあつなんて言葉が出てくるとは思いませんでしたよ」

海未の悲鳴を聞いていたのか、いつの間にか身を寄せあつていた穂乃果達は、悪い顔をして小声で囁きあつている。

しかし、残念ながら俺達にまで声が届いているんだよな。ほら、海未が顔を真っ赤にして俯いているし。

「……………」

「うひひひひ、このネタを使えば夏休みの宿題をしないで済むかもー」

「ほ、穂乃果ちゃんもうそのくらいで……………ことり知ーらない」

口許に手を当てて不気味な笑い声を零しているが、穂乃果は海未の変化に気が付いていないようだ。

ことりは流石と言うべきか身の危険を感じたようで、いつの間にかさり気ない動作で俺の元に来ていた。

「……………穂乃果」

「どうしたの海未ちゃ……………ん……………?」

やつと穂乃果は自分が海未を弄りすぎたと理解したらしい。

涙目でこちらへと視線を送ってくるが、俺達が揃って首を横に振ると絶望した表情を浮かべた。

「どうやら穂乃果に甘くしすぎたらしいですね」

「う、海未ちゃん？ 落ち着いて、ね？ もうひやあつて可愛いなあとか、海未ちゃんつて偶にメルヘンチックな所があるなあつて思ったりしないから！ ……あ」

「ああー、穂乃果ちゃんやつちやつたー」

自ら墓穴を掘るとは流石穂乃果だ。

この後の惨劇を予想したのか、ことりは顔を両手で覆っているが、指の隙間から楽しげな瞳を隠しきれていない。

まあ、かく言う俺も高みの見物をしているけど。

「ふふふふふふ……ところで穂乃果？」

「な、何かな海未ちゃん？」

「私は思ったのですよ。夏休みの宿題をするだけでは穂乃果のためにならないと」

「そ、そんな事ないと思うなあ」

「いいえ。ですから、これから私が二十四時間穂乃果を監視して数学を克服させます！」

「に、にじゅっ!? それは無謀というものだよ海未ちゃん!? そ、それに海未ちゃんも大

変でしょ?」

「穂乃果のためなら徹夜ぐらいできます! さあ今からギリギリとやりなさい!」

「ひええ……助けてことりちゃん、朝陽ちゃん!」

「あはは、これ面白い」

鬼の笑みとはまさにこの事だろうか。

いつそ清々しいと言えるほどの爽やかな笑顔をしている海未が宣告した内容に、穂乃果は悲鳴を上げた後、瞳に希望の色を宿して俺達を見つめてきた。

しかし、見つめられたことりは既に漫画を読んでおり、どこか棒読みで声を上げている。

「あ、朝陽ちゃんは助けてくれるよね……!?!」

「あ、あー。残念だけど、私はこの後用事があるのでね。頑張ってくれたまえ」

「そんなあー!?!」

わざとらしく部屋の時計を見てから、立ち上がって俺がそう告げると、穂乃果は愕然とした声を上げて頭を抱えてしまった。

まあ、予定があるというのは本当で、時間的にもそろそろだったので、好都合と言えば好都合だった。

「どこに行くの朝陽ちゃん?」

「内緒。では海未、穂乃果の事を頼んだよ」

「ええ、教えてよ」

「任せてください、穂乃果に勉強の楽しさからかいの報いを教えてあげます！」

何か海未の言葉に違和感があった気がしたが、気のせいかな？

頬を膨らませていじけることに笑みが漏れつつ、海未に声を掛けてから扉を開ける。

「本当に行つちやうの朝陽ちゃん!？」

「さあやりますよ穂乃果。ふふふ、しっかりと穂乃果を見えますからね」

「い、嫌あー!」

扉が閉まる間に穂乃果の叫びが聞こえたが、まあ大丈夫だろう。

長年の付き合いであれば海未なりの仕返しだとわかっているので、穂乃果が反省したらほどほどにしてくれるはず……はずだよな？

先ほどの鬼の笑顔に思わず不安になりつつ、俺はある場所へ向かうべく足を向けるのだった。



「——着いた着いたつと」

あれから秋葉原へと赴いた俺は、アイドルシヨップを見上げながら眩きを漏らした。物語が始まるのも残り約半年となっており、もう俺にできる事はそう多くない。

しかし、アイドルの知識なら今後の役に立つかもしれないので、高校に入学してから力を入れて調べているのだ。

まあ、これから穂乃果達と出会うあの子達と比べたら、俺の知識なんてにわか程度なんだらうけど。

「早く行こうよ凜ちゃん！」

「待つてよかよちーん！」

「次はあつちに行くよ！ あの店に凄なお米があるんだつて！」

「だから待つてつてかよちんー！」

「そうそうあんな感じの……ん？」

アイドルシヨップから勢いよく出てきた人達は、そのまま機敏な動作であつという間に走り去っていった。

どこかで聞き覚えがあるようなないようなその声に、思わず首を傾げつつ俺はアイド

ルシヨップに入る。

「お、あつたあつた。やっぱりA―RISEは凄いな」

店内の一番目立つ場所にA―RISEのグッズが置かれており、その中の新作アルバムを手取る。

手に取ったアルバムの隣には限定バージョンのアルバムもあるのだが、別に俺はA―RISEのファンというわけでもない。

だから、限定バージョンは別に手に入れなくてもいいかなつてのが、俺の正直な気持ちだ。

それに、やっぱり俺としてはA―RISEより、sの方が好きだ。まあ、まだグループができてすらいないけどね。

「楽しみだなあ――」

「ねえ、その貴女」

「――ん？　もしかして私の事かな？」

「そうよ」

未来に思いを馳せていると、背後から声を掛けられた。

それに振り向いた俺の視界に入ったのは、明らかに変装です！　つて直ぐにわかる服装をしている女性だった。

えっと、俺って何かしたっけ？ 特にこの女性に会った覚えもないし、そもそもこんな不審者のような知り合いはいない。

「私に何か？」

「ちよつと気になる事があつてね」

「それは？」

「どうしてそのCDを見て笑顔になつていたのかがね」

「笑顔なら普通ではないかな？」

そのある意味当然な問いかけに、女性は首を横に振る。

そして、女性はサングラス越しに俺を見つめ――

「私が気になったのは貴女が不敵な笑顔をしていたからよ。そうね……簡単に表すと――  
――頂点を蹴落とす機会を窺う挑戦者と言つた所かしら」

「っ！」

――そう告げた。

その女性の言葉に俺は思わず納得してしまった。

確かにあの時は、μ、sがA―RISEを越えてラブライブを優勝する瞬間を思い浮かべていた。

それを間近で見られる幸運に感謝すると同時に、あのA―RISEにμ、sが勝つ

瞬間。

その時の気持ちさが表情として表れていたのだろう。

と言つても、俺が舞台上に上がるわけではないので、結局の所俺の独り相撲というわけだが。

俺がそんな事を考えていると、女性はすつと目を細める。

「その様子だと凶星のようね」

「……そうだね」

「ふうん……貴女、面白いわね」

「私が？」

思わず尋ねかえせば、女性は笑みを浮かべて頷く。

「そう。見た所、貴女が挑戦者という感じではない。でも、それだとさっきの表情と辻褃は合わない。という事は、貴女は期待しているんじゃないかしら、頂点が蹴落とされる瞬間を」

「……凄いな、そんな事までわかるのか」

「これくらい普通よ。でもまあ、残念だけど貴女の期待には添えそうにないわ」

「それは一体どういう事だい？」

今の発言ではまるで女性が頂点だと言っているようなもの——っ！

「——何故なら次も勝つのは私達だからよ」

その圧倒的な威圧感に思わず身構える俺を見て、女性は獰猛な笑みを浮かべた。

まさか、まさかまさかまさか！ 彼女はA—R—I—S—Eの——

「その様子だと気が付いたみたいね……そろそろ私は行こうかしら。貴女は中々面白そうだから、期待しているわ」

そう告げると女性……いや、綺羅ツバサは手を振りながら去っていった。

綺羅ツバサが見えなくなるまで見送り、やがて視界から完全に見えなくなった事を確認してから、俺は無意識に安堵の息を零す。

こんな所でスクールアイドルの頂点に会うとは思ってもいなかった。

しかも、何故か綺羅ツバサに目をつけられる始末。

これがスクールアイドルの頂点か……改めて生身で見ると、やはり存在感が違う。

なんていうか、俺とは住む世界が違うというか。これに勝った<sup>ん</sup> s<sup>つ</sup>て凄かったんだなあ。

「はあ……さっさとCDを買って帰ろう」

ため息をついて気持ちを切り替え、そのまま重い足取りで店のレジへと向かっていくのだった。

## 第七話 不審者アイドル

「ぐぬぬ……」

「ん？ レジの前で何を……うわぁ」

綺羅ツバサというスクールアイドルの頂点に立つ人と出会ってから、暫くして。

なんとか無事にレジの前へとたどり着いた俺は、そこで唸り声を上げている不審者を発見した。

綺羅ツバサと同じような格好で変装しているのだが、この不審者の場合は何故か怪しい雰囲気は凄く漂っている。

今思うと綺羅ツバサは変装もある意味着こなしていたな。この目の前の不審者とは違う。

でもなんだろう……この人をどこかで見た事があるような気がする。

「A—RISEの限定ポストカードがよりにもよって二人組限定だとは……ぐぬぬ」

「これをお願いします」

「かしこまりました」

サングラスにマスクという姿で地団駄を踏んでいる不審者を尻目に、俺は店員にCD

と代金を渡す。

そのまま袋に包まれるCDをなんとはなしに見ながらブーツとしていると、背後から声を掛けられる。

「ねえ、そこのおあんた」

「……？」

「違うわよ！ 今後ろを向いたあんたよあんた！ 大体後ろは店員でしょうがっ！」

不審者を見た後、お約束的に後ろを向くと案の定鋭く突っ込まれた。

ビシツと俺を指差した不審者は、サングラスを持ちあげてこちらをまじまじと見つめてくる。

「あ、もしかして音ノ木坂の人ですか？」

「やっぱり、あんたをどっかで見た事があつた気がしたのよ」

「先輩でしたか。私はてつきり不審者かと……」

「ぬあんでよ！ このスーパーアイドルであるにこをよりにもよつて不審者ですつて！？」

ジト目で勢いよく顔を近づけて、そう叫ぶ不審者。

いや、もう彼女が誰かはおおよそ見当がついているけど、認めたくないというかなんというか。

なんで同じ日に二人の重要人物と会うんだろう。やっぱり呪われているのかな。

「夏場にコートにサングラスにマスクを着ていて、不審者ではないと?」

「ぐっ……こ、これはアイドルの標準装備よ!」

「はあ、不審者の標準装備ですか」

「アイドルよア・イ・ド・ル! それに私には矢澤 にこつていう名前があるんだけど」

「なるほど、不審者先輩ですね」

「だから不審者じゃないって言ってるでしょ!」

やばい、不審者——矢澤先輩の反応が面白い。

頭を抱えながら「後輩に不審者と思われる」とか、「や、やっぱりこの格好はおかしかったのかしら」とか呟いている姿を見ると、どうしても弄りたくなってしまふ。

「それで、用とはなんですか?」

「ま、まあいいわ。用つてのはA—R—I—S—Eのポストカードをかうのを手伝ってほしいのよ」

「二人組限定のやつですか……まあいいですけど」

「本当!? あんた意外といいやつね」

意外とは余計だ余計。

それにしても、二人組限定グッズを前に唸っているという事は……あつ。



「ちよつと何よその生暖かい目は」

「いえいえ、なんでもありませんよ」

「わ、私にだって友達の人や百人ぐらいいるから！　今回はたまたま予定があわなかつただけよ！」

「あ、A—R—I—S—Eのポストカードもお願いします」

「は、はあ。かしこまりました」

隣で一瞬懸命身振り手振りで伝えてくる矢澤先輩を尻目に、俺は怒涛の展開に目を白黒していた店員へと追加注文した。

というか、目の前でグッズを得るためのズルをしたのだが、いいのだろうか？

店員も流されるままグッズを用意しているし。まあ、店員がいいならいいんだろう。

「どうぞ、矢澤先輩」

「だから私は全世界のファンが友達なのって何これ？　……ポポポポストカードじゃない!?」

俺に説明する事で本来の目的を忘れていたのか、渡されたポストカードを胡乱げに見つめていた矢澤先輩。

そのまま一度ポストカードから視線を外した矢澤先輩だったが、暫くするとこれが何か理解して凄い吃りながら二度見している。

や、やばい、矢澤先輩の反応がまんま芸人なんだけど。わ、笑い声が漏れそう……!

「ポ、ポストカードが欲しかったんですね。そ、それでは私はこれで……くくつ」

「あ、ありがと……つてちつがーう!」

「違うつて何がですか?」

笑っている事を矢澤先輩にバレないうちに急いで店を出た俺は、背後から大声で呼びとめられてしまった。

一度深呼吸してから振り向き矢澤先輩へと尋ねれば、彼女は俺を真っ直ぐ見つめて口を開く。

「あんたにまだお礼をしていないわ」

「いえいえ、大丈夫ですよ」

「私の気がすまないの!」

口では強気に言っているが、矢澤先輩の瞳は不安げに揺れていた。

そういうえば、矢澤先輩ってアイドル研究部で反りが合わず、部員が抜けていったんだっけ。

物語で知っているのはもちろん、実際に学校でもどこか浮いていると小耳に挟んだ事がある。

そうか……矢澤先輩にとっては失礼かもしれないけど、誰かと話すのは随分久しぶり

なのかもしれない。

「……わかりました。で、どんなお礼をするのでしょうか？」

「えっ？ ええと、あれよあれ」

「考えていなかったんですね」

「う、うるさいわね！ そう、そうよ！ あんたに紅茶を奢ってあげるわ！ さあ行くわよ、スーパードルにこに奢られる幸運をしっかりと噛み締めなさい！」

少しの間視線を泳がせた後、矢澤先輩はドヤ顔でそう告げた。

まあ、実際にはマスクはしたままなので、ドヤ顔をした雰囲気醸しだしていたというのが正確か。

それはともかく、そんなこんなで俺は矢澤先輩に連れられ、近くの小洒落た喫茶店に足を向けるのだった。

「矢澤先輩、そつちにはないですよ。あつちですよ」

「……知っていたわよ」

「私が案内しましょうか？」

「……し、仕方ないわねー。どおーしてもこをエスコートしたいって言うのなら、させてあげてもいいわよ？」

……結局、俺が矢澤先輩を案内する事になった。

「——何、あんたってA—RISEのファンじゃないの？」

「そうですね、特に好きってほどでも」

驚いたように尋ねる矢澤先輩の言葉に俺が頷くと、彼女は興味深そうにこちらを見つめた。

暫くすると矢澤先輩は俺から視線を外して、頬杖をつきながら空のグラスに刺さっているストローを回していく。

「なんか意外ねえ。アイドルシヨップでわざわざCDを買うぐらいだから、てつきり私はA—RISEのファンかと思っていたわ」

「まあ、私にも色々事情があるので」

「ふうん……ま、詳しくは聞かないわ。あんたにはあんたの考えがあるんだし」

「ありがとうございます」

矢澤先輩はやっぱり気遣いが上手い。

こちらの意思を汲み取って、ほどよい距離感を作ってくれる。

普段は馬鹿っぽくて暴走しがちだけど、流星はアイドル研究部の部長といった所か。

「今あんた、失礼な事を考えたでしょう」

「矢澤先輩っていい先輩だなんて思っていました」

「なっ!」

うん、嘘は言っていない。

疑問ではなく断定口調で言われた時は内心で動揺したが、咄嗟にそう返せば矢澤先輩は瞬く間に顔色を赤く染めていく。

後輩思いでノリも良くて責任感もあって取っつきやすそうな雰囲気で……あれ、矢澤先輩って完璧じゃね?

絵里も今のは当てはまると言えば当てはまるけど、ポンコツになる時が稀によくあるからな。

「矢澤先輩って、人に気配りができる優しい人だと思えますよ」

「ふ、ふうん。ま、まあにこのキュートでビューティフルな美貌にかかればファンもメロメロだしね」

「それ、性格とは全く関係ありませんよね」

「う、うるさいわね！」

「それと、調子に乗りすぎるのはどうかと」

「ぐっ……中々言うじゃない」

突然猫被りを始めたかと思えば、何やらポーズを取りだす矢澤先輩。

明らかに俺の言葉で調子に乗っている事がわかるので、自重して欲しい意味も込めて釘を刺す。

そして、それに素早く反応する矢澤先輩は、やっぱり芸人としての適性が高いと思う。「なんていうか、矢澤先輩って凄く親しみやすいんですね」

「そ、そう？ でも駄目なお、にこはみーんなのアイドルだから、特定の人と親しくなっちゃいけない——」

「あ、あれです。矢澤先輩って先輩って感じがしないんですね」

「——ってぬあんでよ！ それってにこがちんちくりんだって言いたいわけ!?!」

そう叫ぶと矢澤先輩はテーブルを強く叩いて、顔を勢いよく近づけてきた。

そうすると必然的に至近距離で目を合わせる事になり、俺達は間近で見つめ合う。

海末とは違うどこか爽やかさを感じさせる花のような香りに、見ていると吸い込まれるようになる輝く赤い瞳。

こう改めて見ると、矢澤先輩もやはり女の子という事がわかる。しかも、矢澤先輩は

滅多にお目にかかれない美少女だ。

……μ s の皆はどうしてこう魅力的な人ばかりなのか。

そんな事を内心で思いながら、眉尻を吊り上げて俺を睨みつけている矢澤先輩に声を掛ける。

「そんな事言っていないよ。ただ、矢澤先輩だと肩肘を張らないですむなあつて思いました」

「それはにこを舐めているという事？」

「違いますよ。ほら、学校の先輩方って凄く威圧感があるじゃないですか。実際には一年しか歳が違わないのに」

「まあ、言われてみればそうね」

絵里みたいな例外もいるけどね。

「それに比べて、矢澤先輩の場合はありのままの自分でいられるというか。緊張しないでいいというか」

「……ま、それで納得しといてあげるわ」

その言葉を聞いた矢澤先輩は、暫しの間俺を黙って見つめた後、やがて鼻を鳴らすと顔を遠ざけて席に座りなおした。

なんとか納得してくれたか。まあ、俺が言った発言は全部本当の事なので、嘘を言っ

ていないとわかってくれたのもあるだろう。

「わかってくれたようで何よりです……そろそろ時間ですし、私行きますね」

「……そう。気をつけてね」

「はい、矢澤先輩もお気をつけて」

ぷいっと俺と視線を合わせないで告げた矢澤先輩に、俺がそう言葉を返す。

すると、矢澤先輩はちらつと横目で俺を見た後、再び頬杖をついて窓の外を見はじめる。

なんていうか、凄くわかりやすい反応だ。今もチラチラと俺の方を横目で見ているし。

矢澤先輩の反応に察しがついてしまった俺は、傍から見れば生暖かい目をしているだろう。

そんな俺の変化に矢澤先輩は当然気が付き、どこか不機嫌そうな表情を浮かべる。

「早く行きなさいよ」

「矢澤先輩」

「何？」

「学校でも話しかけていいでしょうか？」

「……好きにすれば」



「ではまた学校で」

俺の挨拶におぎなりに手を振って応えた矢澤先輩。

しかし、微妙に頬が赤くなっている事から照れているのだろう。

その事に内心で微笑ましい気持ちになりつつ、俺は心なし軽い足取りで家へと帰るのだった。

## 第一章 三人の女神達

## 第八話 物語の始まり

「——おはよう朝陽ちゃん！」

「おはよう穂乃果」

桜が咲く穏やかな早朝のある日の事。

いつも通りの時間に家を出て、気持ちの良い朝日に頬を緩めながら学校へと向かっていると、背後から声を掛けられた。

その馴染みのある声に振り向けば、穂乃果達が手を振りながらこちらへやってくる所だった。

そのまま近くまで来た穂乃果が俺に飛びつき、それを咄嗟に受けとめている内にことり達も追いつく。

「穂乃果！ いきなり朝陽に飛びつくのは危ないではないですか！」

「えへへ、ごめんなさい」

「大体いつも穂乃果は——」

「おはよう朝陽ちゃん」

「おはよう、ことり」

海未に言われて俺から離れた穂乃果は、照れ笑いをして頭を掻いている。

それを見て穂乃果の説教を始めた海未を尻目に、ことりと挨拶を交わして歩いていく。

「やつとことり達にも後輩ができたんだよね」

「後輩……あつという間の一年だったかな」

「あはは、色々あつたもんね」

「本当に色々あつたよ」

穂乃果の思いつきに振り回されたり、海未の山頂アタックに付き合わされたり、ことりの服屋巡りに連行されたり。

うん、随分と濃い一年だったな。その一年が楽しかったと言えば楽しかったので、良い思い出になったとも言えるけど。

とまあ、過去を振り返るのは置いて、俺にとって重要なのは現在。

そう。先ほどことりが言った通り、俺達は高校二年生へと進級したのだ。

穂乃果達は無事に進級できて凄く嬉しそうだけど、今後の展開を知っている俺からすればどうしても憂鬱にならざるを得ない。

恐らく、今日から動き出すのだろう。穂乃果を中心とした物語——ラブライブが。

「朝陽ちゃん？」

「な、なんだいことり？」

「さつきから朝陽ちゃんがぼーつとしてたからどこか具合が悪いのかなって」

「いや、少し寝不足なだけだよ」

俺の言葉に対して、無言でじーつと見つめる事で応えることり。

そのまま暫しの間ことりと見つめ合っていると、やがて彼女は眉尻を下げて心配そうな表情を浮かべた。

ことりは鋭いからなあ……もしかして、何かを勘づかれたかもしれない。

「朝陽ちゃんって何か困——」

「助けて朝陽ちゃん！」

「待ちなさい穂乃果！ まだ話は終わっていませんよ！」

何かを話そうとしたことりの言葉を遮り、穂乃果が慌てた様子で俺の背中に隠れた。

それと同時に、海未が声を上げて駆け寄ってくるのだが、俺の前で止まると大声を出して恥ずかしかったのか、少々頬を赤く染める。

「へへーん、海未ちゃんはことりちゃんと朝陽ちゃんには怒れないもんねー」

「また調子に乗っているね」

「あはは、穂乃果ちゃんらしいや」

「穂乃果……あまりふざけていると、後悔しますよ」

俺の背中から顔だけ出して舌を見せる穂乃果の煽りに、海未は拳を掲げて肩を震わせている。

その明らかに爆発五秒前の姿を見てやりすぎたと自覚したのか、穂乃果の顔色が真っ青に染まっていく。

ああ、また穂乃果やつちやつたな。ことりもいつの間にか遠くまで離れているし、俺も逃げよう……つて、背中を掴まれて動けない!!

「ほ、穂乃果。離してくれないかな?」

「そうはいかないよ。穂乃果だけを犠牲にしようなんて考えは許さないから」

「元はと言えば穂乃果の自業自得だよね」

「そ、それでもだよ!」

「遺言はすみましたか、穂乃果?」

「ひい!?!」

穂乃果と小声で言葉を交わしている間に、海未が顔を俯かせたままゆっくりと近づいてくる。

それを見て穂乃果は悲鳴を上げて後ずさる。

うん、穂乃果が離れた今のうちに俺も退散しよつと。

「ふう、なんとか助かった」

「ぎゃー！ こつちに来ないでえええええ！」

「待ちなさい！ 今日という今日は貴女の根性を叩き直してあげます！」

両手を上げて走り去っていく穂乃果に、怒りの表情で彼女を追いかける海未。

あつという間に二人の姿は小さくなっていき、それを見て俺とことりは思わず顔を見合わず。

「遅刻しないうちに私達も行くか」

「そうだね」

なんとかことりの追求を有耶無耶にできた事に内心で安堵しつつ、俺達も急いで穂乃果達の後を追うのだった。

「——これからどうなるのでしょうか」

憂鬱そうに呟く海未の言葉に、ことりは表情を曇らせた。

現在、俺達は昼食を摂っている最中なのだが、掲示板に貼られた廃校という文字を見  
てしまったので、穂乃果達はいつもものように昼食を楽しめないようだ。

まあ、気持ちはわかる。穂乃果なんてよほどシヨックだったのか気を失ってしまった  
しな。

と言っても穂乃果の場合、転校試験を受けると勘違いしたからシヨックだったよう  
だ  
が。

「廃校か……：そういえば、一年生は一組しかないもんね」

「今の一年生には後輩ができないんですよね」

悲しげな表情を浮かべる海未とことりに対して、穂乃果は何かを考え込むような顔を  
している。

「あ、このパン美味しい！」

……俺の勘違いだったみたいだな。

「それはいつも食べているパンではないですか」

「ちつちつち、違うんだよ海未ちゃん」

「……何がですか」

先ほどとは一転して呆れた表情を浮かべた海未の問いに、穂乃果は人差し指を横に  
振ってドヤ顔になった。

そのやたら様になっていられる腹が立つ穂乃果の動作を見て、海未は頬を痙攣させながら頭痛を感じたように頭に手を置く。

また、ことりも穂乃果のいつも通りの姿に苦笑いしている。

確かに、海未の気持ちもわかる。そのやれやれだぜみたいなの穂乃果の煽り顔は俺もイラツとしたし。

それにしても、海未に今朝怒られたばかりなのにもう忘れているとは……穂乃果って鳥頭？

いや、鳥頭はことりか。これはトサカのような髪型に鳥頭を掛けて――

「朝陽ちゃん？　今、何か変な事を考えたでしょ？」

「そんな事ないさ」

「本当に？」

「本当本当」

「絶対嘘だよ！　朝陽ちゃん変な事考えたでしょ」

俺の言葉を聞いて、ことりはジト目で顔を近づけてくる。

そのまま頬を膨らませて更に追求してくることりをなんとかあしらっている間に、一通り海未を煽って満足したのか、穂乃果は満面の笑みを浮かべてパンを突きだす。

「なんとですね！　このパンはいつもより二割引だったんですよ海未さん！　いやー、



割引きされたパンは美味しいなあ」

「はあ……私達にできる事をしたいと思うのですが、どうでしょうか？」

海未をビシツと指した後、幸せそうな表情でパンを頬張っていく穂乃果。

その穂乃果の能天気な様子を見て諦めたのか、海未はため息をついてから俺達に尋ねてきた。

俺への追求を止めて顔を離れたことりも、海未の言葉に同意するように何度も頷いており、二人が心からこの学校が好きなのがわかる。

まあ、ことりの場合は親が理事長だしなあ。俺もこの過ごしやすい雰囲気がある音ノ木坂が好きなので、海未に言われるまでもなくなんとかしたいと思う。

「朝陽ちゃんはどうかな？」

「うん、私も——」

「ちよつといいかしら？」

不安げな様子を見せることりに頷こうとした俺を遮り、誰かが声を掛けてきた。

その僅かに焦燥感が滲みでる聞き慣れた声の方へと目を向ければ、そこには案の定絵里と絵里の親友である東條先輩がいたのだ。

いきなりこの学校の生徒会長に声を掛けられたからか、緊張した面立ちになる海未とことり。

それに対して、いつの間にかパンを食べ終えた穂乃果は、こっそり俺の方に体を寄せ  
てきて耳元で囁く。

「朝陽ちゃん、あの人達って誰？」

「はあ……彼女達は生徒会長と副会長だよ」

「ええ!?! 生徒会長!?!」

「う、うるさいよ……」

突然耳元で叫ばれたせいで、鼓膜に響いて耳が痛い。

思わず耳を抑えている俺と、口を半開きにして間拔けな姿を見させている穂乃果。

ことりと何やら会話をしていた絵里も、この声には驚いたのかこちらへと振り返つ  
た。

そこで絵里は初めて俺に気が付いたようなので、手を振って挨拶をすると数瞬表情を  
和らげる。

しかし、直ぐに厳しい表情に戻った絵里は、穂乃果を一瞥してからことりへと向き  
直った。

「それで、南さん。理事長から何か聞かされていなかった？」

「い、いえ。私も初めて知ったので」

「そう……」

「絵里ちっ？」

申し訳なさそうに首を横に振ったことりを見て、絵里は顎に手を当てて暫し考え込む素振りを見せる。

暫くすると考えが纏まったのか、絵里は俯いていた顔を上げて決意を瞳に宿す。

そして、絵里はそのまま俺達を見回しながら口を開く。

「昼食の邪魔をしちゃってごめんなさいね。貴女達は気にしないで今まで通り学校を楽しんでちょうだい。後は私がなんとかするから」

「は、はあ……」

「ほな頑張つてな」

困惑気味な声を上げる海未を見つめて微笑んだ絵里は、東條先輩を連れて去っていつてしまった。

嵐のように現れて消えた絵里の姿に、海未やことりは首を傾げていたが、穂乃果は難しい表情で唸っている。

「むむむ……穂乃果わかんない！」

「穂乃果ならそうでしょうね」

「とりあえず、生徒会長は学校を楽しめって言ったんだよ」

「うーん……」

絵里の言葉を要約したことりの言葉に、穂乃果はやはり難しい表情のまま腕を組む。穂乃果には言葉より行動で示した方がいいだろう。

そう思い、俺は色々考えすぎたのか目を回している穂乃果へと問いを投げかける。

「どうする穂乃果？　このまま指をくわえて見ているかい？　それとも廃校を止めるために何かをするかい？」

「……やる！　穂乃果この学校が好きだもん！　だから穂乃果も何かをして廃校を止めたい！」

拳を突きあげてそう叫んだ穂乃果を見て、海未達の表情の強ばりがほぐれていく。

海未達は穂乃果が絵里の言葉にどう反応するか不安だったのだろう。

でも、穂乃果は自分のやりたい事をすると言った。

そして、一度やると決めれば即行動するのが穂乃果だ。

「それで、まずはどうする？」

「まずは……」

『まずは……う？』

「もう一個パンを食べてからね！」

『はあ……』

そう告げると新しいパンを取りだし頬張っていく穂乃果。

そんないつも通りでぶれない幼馴染みの様子に、俺達はお互いの顔を見合わせ揃ってため息をつくのだった。

## 第九話 スクールアイドル

「——見て見てこれ！」

「どうしたのですかいきなり」

改めて廃校阻止する事を決心した時から一日経って。

昼休みになるのと同時に、穂乃果が瞳を輝かせて何かを机に置いた。

昨日、あれから皆で色々調べたのだが、廃校を阻止するための実績等を見つけられなかったのだ。

その事で気落ちしていた俺達は、穂乃果が机に置いたものにとりあえず目を向ける。

「今スクールアイドルってのが流行っているんだって！」

「わあ〜！ この衣装可愛い！」

穂乃果が机に置いたのは、やはりと言うべきかスクールアイドルの雑誌だった。

一体どこから持ってきたのかとか気になる事はあるが、それは大して重要ではないので置いておこう。

あ。ことりが残像が見えるほど素早く雑誌を手に取り、顔を輝かせて食い入るように読んでいる。

ことりは服が好きだからなあ。何度こたりの着せ替え人形の餌食になりかけた事か……まあ、大抵は海未を生贄推測して難を逃れていたけど。

「でねでね！ このスクールアイドルをやれば——」

「穂乃果、海未が消えたみたいだよ」

「——へ？」

机を何度も叩いて鼻息荒く告げる穂乃果にそう答えれば、彼女は素つ頓狂な声を上げて教室内を見渡していく。

しかし、教室内のどこを見ても海未の姿はない。

やがて、穂乃果は何かに気が付いたように教室を飛びだしたので、未だにトリップしていることりを促して俺達も追隨する。

「あ、海未発見」

「海未ちゃんどこ行くの！」

「はうっ！」

廊下を素早く見回している穂乃果と一緒に俺も海未を探すと、心配を殺してここから離れようとしていた姿を見つけた。

そして、俺に数瞬遅れて見つけた穂乃果は鋭く叫び、それを聞いて海未は可愛らしい声を上げて肩を震わせた。

暫くすると、俺達に見つかって逃げられないと悟ったのか、海未はゆつくりと振り返りぎこちない笑みを浮かべる。

「どこに行こうとしていたんだい？」

「わ、私は少し用事がありました」

「聞いてよ海未ちゃん！ 穂乃果凄い事を思いついちゃって——」

「はあ……皆でスクールアイドルをやる、ですよね？」

「——すごい、なんでわかったの!? 海未ちゃんつてもしかしてエスパー？」

「話の流れから誰でもわかります！」

で、スクールアイドルをやりたくないから海未は逃げだした、と。

確かに、スクールアイドルをするのは恥ずかしい。

でも、海未の場合は散々ポエムを作ったり、一人でポーズを決めていたりしているからな。

正直、一番スクールアイドルに向いているのは海未だと個人的に思う。

そんな事を考えていると、海未がジト目でこちらを見ているのに気が付く。

「どうしたのかな？」

「いえ、朝陽が生暖かい目で私を見つめていたので」

「ああ、その事か。実は今、海未がスクールアイドルに向いていると考えていてね」



「なっ！ と、突然何を言いだすかと思えばそんな戯言を」

「戯言じゃないよ。ことりもそう思うよね？」

頬を紅潮させて否定する海未の様子に、俺がいまだに雑誌を眺めていることりに同意を求めらる。

すると、ことりは視線を上げて無言で海未を見つめだす。

そんなどこか品定めするようなことりの視線を受けて、海未は警戒するように徐々に後ずさっていく。

「な、なんですか」

「……うん、海未ちゃんはこの服が似合うと思うな」

「わあ、本当だ！ 海未ちゃんにとつても似合いそうだよ！」

「穂乃果達は何を言っているのでしょうか……た、楽しそうです」

そう告げると雑誌のあるページを俺達に見せることり。

そのページはいわゆるステージ衣装を紹介しているコーナーで、確かに海未が着れば凄く似合いそうだ。

俺と一緒に雑誌をのぞき込んだ穂乃果は、感嘆の声を上げて笑顔で頷く。

そんな俺達のじゃれ合いを見て興味が湧いたのか、海未はどこか恐る恐るといった様子で近づいてきた。

その瞬間、穂乃果とことりの表情が悪どい顔に変わる。

ああ、これは海未を釣るための餌だったのか。穂乃果達も中々ずる賢いな。

「これなんかもいいと思うな」

「あ、本当だ。流石ことりちゃんだね！」

「わ、私にも見せてくだ——」

「かくほ——」

「えーい！」

「——は、嵌めましたね?!」

充分こちらまで海未が近づいた事を確認した穂乃果は、ビシツと海未を指差し号令を掛けた。

それを合図にことりが気の抜けた声を上げながら海未に抱きつき、穂乃果もそれに続く。

そして、海未は穂乃果達に騙された事にやっと気が付いたようで、心なしか涙目になってジタバタと暴れだす。

しかし、暫くして穂乃果達の拘束から抜けだせないと理解したのか、海未は唯一静観している俺へとどこか縋るような眼差しを送ってくる。

「あ、朝陽は助けてくれますよな? 困っている幼馴染みに手を差しのばしてくれます

よね?。」

「朝陽ちゃんわかってるよね?。」

「ことり達が今すべき事は何か」

不安げな表情で見上げる海未に、楽しげに笑う穂乃果とことり。

三人に見つめられた俺は、安心させるようににつこりと微笑む。

すると、海未はぱあつと顔を輝かせてキラキラとした瞳で見つめてくる。

「あ、朝陽……!。」

「うん、教室に連行しようか」

「イエッサー!。」

「大人しくしようね海未ちゃん〜」

俺が告げた言葉に海未はがっくりと項垂れた。

それに対して、穂乃果達は嬉々といった様子で海未を教室に引きずっていく。

その哀愁漂う海未の背中を視界に入れながら、俺も穂乃果達の後を追いかけるのだった。

海未拉致事件から時間が経って、その日の放課後。

現在、俺と穂乃果は屋上で流れる雲を見上げていた。

横目でさり気なく確認してみれば、穂乃果にしては珍しく落ち込んでいるようだ。

まあ、あれだけ海未にはつきりと否定されたらな。穂乃果の気持ちもわからないでもない。

「海未に言われた事が心に響いたのかな？」

「うっ……朝陽ちゃんもエスパー？」

「ふふふ、エスパーではないよ。ただ、長い付き合いだからなんとなくわかるだけさ」

「そっか……」

そう呟いたときり黙り込んだ穂乃果。

どうやら思ったよりも重症なようだな。

まあ、即断即決をモットーとしている穂乃果に対して、海未は石橋を叩いて渡るような慎重な性格だ。

そして、冷静な判断が得意な海未の指摘はもつともでもある。それがわかっているからこそ、穂乃果は落ち込んでいるのだろう。

……あんまりこういうのは得意じゃないんだけどな。

「穂乃果は甘いです」

「うっ」

「スクールアイドルとは本物のアイドルのように真剣にやってきた人達なのです」

「ううっ!」

「穂乃果のような好奇心だけでやっていけるほど——」

「や、止めてー! これ以上穂乃果を虐めないで朝陽ちゃんー!」

俺が海未に告げられた内容を口にする度に穂乃果は肩を震わせていき、やがて耐えきれなくなつたのか涙目で縋りついてきた。

ちよつと意地悪しすぎたかな。

まあ、今の内容を穂乃果が理解している事が改めてわかつたので、これから本題に入るでしょう。

「すまない。少々からかいすぎたね」

「もー、朝陽ちゃんって時々意地悪になるよね」

「そうかな? ……それで、穂乃果はどうするんだい?」

「えっ?」

目を瞬かせる穂乃果に向けて、言い聞かせるように口を開く。

「穂乃果の考えは、海未に言われただけで諦めるような簡単なものだったのかな？」

「そ、そんな事ない！ 穂乃果なりに一生懸命考えたんだもん！」

そう叫ぶと力強く俺を見返す穂乃果。

その強い意志を感じさせる穂乃果の煌めく瞳に、思わず笑みが漏れつつ続きの言葉を告げる。

「なら、穂乃果はこんな所で油を売っていていいのかな？」

「油を売る？ 穂乃果は油なんて売っていないよ？」

「……まあ、いつもの穂乃果で良かったよ」

「えへへ、そうかな……あれ、何か聞こえない？」

「そうだね、ピアノの音かな？」

不思議そうに辺りを見渡している穂乃果に対して、俺はこの音に大体の見当がついていた。

恐らく、このどこか惹き込まれるようなメロデーは、西木野の伴奏に歌声だろう。実際に西木野の生演奏をこの耳で聴くのは初めてだったが、やっぱり彼女は凄い。

ここまで圧倒的なセンスを感じさせると、もはや天職のように感じるな。

「ピアノ……はっ！ 穂乃果今からこのピアノの人に会ってくるね！ 励ましてくれてありがとう！」

「私は穂乃果の背中を少し押したただけだよ。また明日」

「それでも、だよ。またね朝陽ちゃん！」

何か考え込む仕草を見せていた穂乃果は、やがて笑みを浮かべると俺にそう告げて屋上を去っていった。

その見ているこつちを元気にさせるような笑顔に癒されつつ、俺は再び雲を眺めながら口を開く。

「それでいるんですね——東條先輩？」

「あはは、バレちゃったかー」

俺がそう呟いてから暫く経つと、屋上の扉が開いて中から東條先輩が出てきた。

そのまま東條先輩はゆっくりとこちらへと歩み寄り、俺の隣に腰を下ろして一緒に空を見上げる。

「絵里の様子はどうでしたか？」

「んー、朝陽ちゃんの心配した通り絵里ちは昨日寝ていないみたい」

「やつぱり……ちなみにどうやって確認を？」

「んん？ 知りたい？」

視線を東條先輩に移して尋ねれば、彼女は悪い笑みを浮かべて手をワキワキさせていた。

ああ……ワシワシされたのか。絵里も可哀想に。

「いえ、その手つきで大体予想がつかまりました」

「なんや、朝陽ちゃんはノリが悪いな」

「東條先輩が自重しなさすぎなんですよ」

「ほほー、朝陽ちゃんも中々辛辣やね」

「褒め言葉として受け取っておきます」

俺がそう返すと苦笑いする東條先輩。

それから暫しの間雑談を交わしていると、不意に東條先輩が真面目な顔つきに変わる。

「なあ、朝陽ちゃん」

「なんですか？」

「ウチと出会ってからそろそろ一年が経つんだけど、知ってた？」

「そうですね、絵里に紹介された時が切っ掛けですものね」

あの時の絵里は可愛かったな。

ドヤ顔で『朝陽！ 私にも同年代の友達ができたのよ！ どう、これでもうボツじゃないでしょ？』なんて言うもんだから、その場にいた東條先輩と二人して嘖きだしたのは記憶に新しい。



突然笑いはじめた俺達を見て、オロオロとしていた絵里の姿に、更に笑いが止まらなかつたし。

結局、あ後は事情を理解して不貞腐れた絵里にチヨコを奢る事になっただけ。初めて東條先輩とあつた時を思い返していると、その当の本人は何やら口を尖らせていじける様子を見せている。

「そろそろウチも絵里ちみたいに名前と呼んでほしいんや。ウチら、友達やろ?」

「でも先輩を名前で呼ぶなんて」

「絵里ちは名前で呼んでるやん」

「東條先輩でもいいじゃないですか」

「……」

「東條先輩?」

「……」

俺の言葉に東條先輩が反応しなくなつたので、不思議に思い再度問いかけるも、やはり無言。

「おーい、東條先輩ー?」

「……ツーンや」

自分で擬音を言っているよ……それに、その語尾は取らないのか。

まあ、今の反応で大体察しはついたけど。東條先輩って意外と可愛らしい所もあるんだな。

「……希先輩？」

「ん？ なんや朝陽ちゃん？ ウチになんでも聞いて」

俺が名前で呼んだ瞬間、背けていた顔を戻して東條——希先輩は満面の笑みを浮かべた。

なんとというわかりやすい反応。よっぽど名前で呼ばれたかつたんだな。

「では改めて、希先輩」

「うん」

「絵里の事をよろしくお願いします」

姿勢を正してから頭を下げ、俺は希先輩に頼み込んだ。

俺が頼むのは筋違いだというのはわかってるし、絵里にとって余計なお世話かもしれないのも理解している。

でも、学年が違う関係上絵里と会える時間は必然的に少ない。

それに、これから穂乃果達と一緒にいると対立する事もあるだろう。

だから、同じ学年で絵里をよく見ている希先輩が、一番適任なのだ。

希先輩なら絵里をしっかりと支えてくれるはずだ。この一年の付き合いでそれなりに

理解しているつもりだし。

そんな事を思いつつ顔を上げると、呆れた表情を浮かべた希先輩が目に入る。

「あんなー、朝陽ちゃん。そんな事言われなくても、ウチは絵里ちを支えるつもりやで」

「それでもです。これは私なりのケジメですから」

「……なるほどなあ。朝陽ちゃんも色々あるんだね」

今、一瞬だけ希先輩が複雑そうな顔をした気がするのだが、気のせいだったか？

「まあ、私にも事情がありますので」

「うんうん。女の子は秘密がある方が魅力的やからね」

「それとは違うと思いますけど……」

「そうかな？ ……さて、ウチはそろそろ行くな」

そう告げると立ち上がってお尻をはたいていく希先輩。

その様子をぼんやりと眺めている間に、汚れを落とし終わった希先輩は、俺へと向き直る。

「どうしました？」

「あんまり思いつめちゃ駄目や。朝陽ちゃんはもつと肩の力を抜く事を覚えな」

「……忠告、ありがたくいただきます」

「……ほな、またな」

最後になんとも言えない表情で俺を一瞥した後、希先輩は屋上から去っていった。それを見送った俺は、なんとなく動く気にもなれず空をぼーっと眺める。

「――肩の力を抜く、か」

今の心境を表すかのように、夕焼け空が曇っていくのだった。

## 第十話 結成、音ノ木坂スクールアイドル!

あれから、なんとなく憂鬱な気分のまま屋上を去り、教室に鞆を取りに行く途中の事。自然と俯き気味に歩いていると、前から声を掛けられた。

その聞き覚えのある声に視線を上げれば、案の定そこにはことりがいたのだ。

「どうしたんだい?」

「朝陽ちゃん一緒に来て!」

「うん? まあ、いいけど」

その有無を言わせない雰囲気を漂わせるこどりの様子に、疑問に思いつつ頷く。

そして、海末も連れていくためか弓道場へ向かうこどりに追隨する。

「それで、何か事件でもあったのかな?」

「ううん、そうじゃなくて……とりあえず、海末ちゃんも見つけてからだね」

「わかった……で、その海末なんだけど」

こどりと話しながら足を動かしている間に弓道場へとたどり着いたのだが、その肝心の海末の様子が変だ。

いつもと違い矢を的から外しているし、何やら頬を赤く染めたり頭を振り回したり忙

しそう。

……あつ。海未が何をしているか思い出した。

つて事は、これは上手くすれば面白い場面を見られるかも。

「朝陽ちゃん？」

「しーっ、黙って私に付いてきて」

「う、うん」

弓道場にいる他の部員も私に気が付いたようだけど、俺が口許に指を当てるジエスチャーをすれば、察してくれたのか笑顔で親指を立てる。

そのまま俺とことりが足音を殺しながら海未の方へと近づくと、彼女は何やらブツブツと独り言を漏らしていた。

「——何を考えているのですか私は。穂乃果にあれほどはつきりと否定してしまったのに、こんなは、破廉恥な事を考えて。うう……も、もう一度集中しなければ——」

「ラブアロー？」

「——シュート！ はっ、誰ですか今のは!？」

弓を構え直そうとした海未の耳元でそう呟いた瞬間、彼女はこちらに振り返って指を拳銃に見立ててパーンと撃った。

そして、満面の笑みを浮かべた後にウィンクを一つ零す。

突然の海未の奇行に弓道場になんとも言えない雰囲気の流れだし、暫くすると海未は我に返ったのか、周囲を睨みつけて誰かを探す様子を見せる。

「い、今のって……」

「園田さんって凜々しい雰囲気もあつたけど、今のは可愛かつたよね」

「園田先輩かつこいいい……!」

「ま、まさか……!」

周囲でヒソヒソと囁きあっている部員を見て、自分がやつた事の理解が追いついたらしい。

瞬く間に顔色を真っ赤に染めた海未は、半分涙目になりながら肩を震わせている。

ちなみに、海未が振り返った瞬間にはその場から離れていたもので、俺が呟いたとは思われていないだろう。

「海未ちゃん……」

「はっ! ち、違うんですことり! 私は穂乃果の事を考えていてただ——」

「うんうん。ことりはわかっているから、海未ちゃんは可愛いポーズが好きなんだよね!」

「——やっぱりわかっていないじゃないですかあ!」

頬に手を当てててにつこりと微笑むことりに対して、羞恥からか涙を滲ませている海

未。

そんな二人を暫し眺めて充分に堪能した後、本題に入るべく俺はことりに声を掛ける。

「それでことり、話はいいのかな？」

「あ、そうだった！ 海未ちゃんもちよつとこつち来て！」

「わ、わかりました……朝陽、私は可愛い願望なんてありませんから！」

「はいはい、その話は後で聞くから行こう」

「レッツゴ〜！」

「だから私は変な妄想していませんからー！」

さつさと弓道場を出てことりの案内に従い歩いていると、背後から慌てた足取りで海未が追いかけてきた。

それはいいのだが、段々と海未の弁明が墓穴を掘っているような気がする。海未も偶にドジになる時があるんだな。

「それで、どこに向かっているんだい？」

「そうですよ……全く、穂乃果がスクールアイドルをやりたい等と言うから、練習に身が入りませんでしたよ」

「ふふふ、その割にはノリノリだったようだけど？」



「ち、違いますよー!」

笑顔で俺がそう返せば、海未はワタワタと手を振り回して一生懸命弁明してきた。

しかし、既に海未のラブアローシユートを見た俺からすれば、その否定に説得力を感じる事ができない。

ことりも俺と同じ気持ちなのか、どこか微笑ましい表情で頷いている。

「海未ちゃんもスクールアイドルに興味があつたんだよね〜?」

「そんな事ありません!」

「またまたー、ことりは海未ちゃんの事をよく知っているから。ことりの部屋にあるぬいぐるみを羨ましそうに——」

「そそそそんな事ないですことりの勘違いですよ」

「えー、じゃあそういう事にしといてあげるよ」

そう告げると後ろで手を組み一步踏みだすことり。

そして、そのまま海未の顔を下からのぞき込んだことりは、穏やかな表情を浮かべる。

「ことり?」

「海未ちゃん覚えてる? 穂乃果ちゃんと一緒に木を登った時の事」

「……ああ、ありましたねそんな事も」

記憶を掘り返すように暫し虚空を眺めた後、海未はことりの言葉に頷く。

「あの時も穂乃果ちゃんが言いだしたんだよね」

「そうですね、そのせいで何度私達が振り回された事か……」

「あはは……そうだね」

「ええ、全くです」

呆れた表情で頷く海未を見て、ことりは苦笑いしながら顔を遠ざけた。

それにしても、ことり達の話に入れなくて少し寂しい。木を登った時に俺は予定が合わなかった……というか、前世を思い出した日の話だろう。

だから、物語としては知っているけど実際に体験した事はない。

まあ、これが本来の正しい姿なのはわかっているが。

俺がそんな事を考えている間に、ことり達の話は進んでいく。

「いつも尻込みしちゃう私達を、穂乃果ちゃんが引つ張ってくれた……そうでしょ海未ちゃん？」

「そう、ですね。ことりの言う通りです」

「それで今まで後悔した事ある？」

「……ありません」

暫し沈黙した後で頷く海未を見て、ことりは頬を綻ばせてある方向を指さす。

ことりが指し示す方へ目を向ければ、一心不乱にダンスの練習をしている穂乃果が目

に入った。

ダンスをするのが初めてだったのか、素人の俺が見てもわかるほどステップがバラバラだ。

それに、何度もこけたのだろう。制服のあちこちが汚れている。

「私もスクールアイドルをやりたいと思っっているんだ。海未ちゃんはどう?」

「私は……いえ、私もやりたいです」

「うわあっ!」

逡巡するように目を泳がせていた海未は、やがて瞳の輝きを強くするとそう告げた。

それと同時に、足がもつれて穂乃果が転び、それを見て海未とことりは苦笑いを漏らす。

「全く……立てますか、穂乃果?」

「いてて……ありがとう海未ちゃん」

「一人で練習しても意味がありませんよ。やるなら皆でやりましょう」

「海未ちゃん……!」

海未の言葉に向日葵のような笑顔を向ける穂乃果。

そのまま穂乃果達で話し合いを始めたのを尻目に、さり気なく皆から離れた場所にいる俺は、無事にスクールアイドルが結成された事に胸を撫でおろす。

一時はどうなる事かと思っただけど、海未もスクールアイドルをやると言ってくれたし、とりあえずは問題ないだろう。

「となると次の問題は、絵里か」

この後の展開をどうするか内心で悩みつつ、俺は穂乃果達に見つからない内にこの場を後にするのだった。

「——あれ、なんで朝陽ちゃんがこんな所にいるの!？」

一足先に生徒会室に向かい、絵里に体調の様子を尋ねていると、扉が開き穂乃果達が入ってきた。

穂乃果に続いて入ってきた海未とことりも、俺の姿を見つけて驚愕した表情を浮かべている。

そんな驚き固まっている穂乃果達を尻目に、こんな所と言われたからか頬を痙攣させていた絵里は、どこか険が籠った声色で告げる。

「こんな所で悪かったわね。……それで、私達に用があつたのではないですか?」  
「あ、そうだった!」

その言葉に穂乃果達は緊張した面立ちで絵里の方へと向かつていく。

そんな幼馴染み達の様子を尻目に、俺は近くにいた希先輩を手招きして呼ぶ。

興味津々な様子で絵里達を眺めていた希先輩は、俺の合図を見てニヤニヤしながら歩み寄ってくる。

「朝陽ちゃんもいけない子やなあ」

「何がですか?」

「絵里ちがにいるのに更に三人も手籠めにしているなんて」

「手籠めって……そんなんじゃないやありませんよ」

「またまたー、絵里ちが嫉妬してたんやで。穂乃果って誰よ! ってウチによく愚痴つけてくるんや」

「へー、絵里が嫉妬ですか……」

そう言つて肘でつついてくる希先輩をあしらいつつ、穂乃果達と対面している絵里に目を向ける。

確かに、言われてみれば穂乃果を見る時だけ、微妙に視線が鋭い気がするな。

うーん、それにしてもなんで穂乃果に嫉妬しているんだろう。穂乃果が何かやらかし

たのかな？

そんな事を考えてながら俺が希先輩とじゃれ合っている間に、向こうの話も佳境に入ったらしい。

「何故ですか?! この学校には部員が五人以下の部活があるじゃないですか。なら、私達がアイドル部を設立しても——」

「残念だけど部の設立には最低五人が必要な。今ある五人以下の部室はその後に部員が辞めたからね」

「そ、そんな……」

「あと二人やね」

希先輩が告げた内容に、穂乃果はキョトンとしてこちらを向く。

「え? 後一人だよね?」

「んん? だって君達三人しかないやん。もしかして、幽霊でもいるん?」

希先輩がそう尋ねれば、穂乃果は益々不思議そうな顔になっていた。

そして、穂乃果はことり、海未、俺、穂乃果自身を順番に指差していく。

「海未ちゃんにことりちゃん、朝陽ちゃんに穂乃果。ほらやっぱり四人だよ!」

「うん? 私はアイドル部なんて初耳だけど」

「……あれ?」

首を傾げた俺に対して、穂乃果は冷や汗をかき始めた。

穂乃果の背後では海未が厳しい目で彼女を見つめており、その威圧感を感じとつていいのだろうか。

まあ、アイドル部を設立するのは知っていたけど、こういうのは建前が大事だからな。入るのはやぶさかでもないが、せめて一言教えてほしかったよ」

「あはは……ごめん」

「穂乃果、行きましよう。ついでに穂乃果のおつちよこちよいを訂正しましょう」

海未さんや、さつきと目的が変わっていないかい？

この後の展開を予想したからか、顔色を若干悪くした穂乃果を筆頭部屋を出ようとする。

しかし、先ほどから黙ったままだった絵里が穂乃果達を呼びとめたのだ。

「どうしてこの時期にアイドル部を設立しようと思ったの？ 貴女達は二年生よね」

「私達は廃校をなんとかしたいと思っていたんですけど、その時に今人気のあるスクールアイドルをすればって——」

「今、スクールアイドルって言ったかしら？」

「——は、はい。そうですけど」

穂乃果の口からスクールアイドルという単語が出た瞬間、絵里の眼差しが鋭く変貌し

た。

そのまま有無を言わせない雰囲気で尋ねてくる絵里に、穂乃果が戸惑い気味に頷く。すると、数瞬何かを堪えるように目を伏せた後、顔を上げた絵里は穂乃果達を厳しい表情で見回していく。

「なら、悪いけど五人揃っても部の設立を認めるわけにはいかないわ」

「え……?」

「な、何故ですか!？」

「貴女達がこの学校をなんとかしたいと思ってくれたのは、正直凄く嬉しいわ。私以外にも音ノ木坂が好きなんだって知る事ができたから」

「な、ならどうして……!」

愕然とした様子で声を荒らげる海未に対して、絵里は柔らかい表情で優しく応えた。

「——でもね」

「っ!」

しかし、次の瞬間には絵里の表情は真剣な顔つきに変わる。

そんな絵里の雰囲気にもまれていた海未達へと、彼女は瞳に強い決意の色を宿して口を開く。



「部活は生徒を集めるためにやるものではないの。残念だけど、思いつきで行動しても何も変わらないわ。だから、貴女達は残りの二年を楽しんでちょうだい。廃校の件は私が必ずなんとかするから」

「絵里ち……」

心配そうな表情で絵里を見つめている希先輩に対して、俺は内心で酷く驚いていた。つつきり、穂乃果達をもっときつい言い方で否定するかと思っていたのだが、予想に反して絵里は理性的な対応だった。

しかも、内容は割と的確で客観的に物事を言っている。実際に穂乃果達も言い返せなくて、悔しそうに俯いていたりしていたし。

だが、絵里は一つ勘違いをしている。

確かに、絵里が言った通り廃校問題は凄くデリケートだ。絵里が慎重になるのも理解できる。

でも、今の音ノ木坂に必要なのは保守的な姿勢ではない。穂乃果達のような思いつき……変革なのだ。

言い方は悪いが、今の音ノ木坂にメリットデメリットを計算するほどの余裕はない。一発逆転に賭けてハイリスクハイリターンにするしかない、と俺は思う。

「厳しい事を言っでごめんなさい。貴女達の気持ちはよく伝わったわ。……この学校を

好きになってくれてありがとう」

「……失礼しました」

最後にそう締めくくると、ふわりと柔らかく微笑む絵里。

その花が咲いたような笑みを見て我に返ったのか、穂乃果達はどこか気落ちした様子で部屋を出ていった。

穂乃果達のフォローは後ですとして、まずは絵里からだな。

「お疲れ様」

「ふう……ありがとう、朝陽」

「絵里ちどうしたん？　なんかいつもよりかつこよかったで」

「もうっ、からかわないですよ」

いつものようにじゃれ合いを始めた絵里達を尻目に、俺は立ち上がって扉の方へと向かっていく。

その途中で振り返って、頬を薄らと赤く染めている絵里に声を掛ける。

「絵里ってスクールアイドルをよく思っていないかったよね？　よく我慢できたね」

「そう、ね。正直、最初に言われた時は頭に血が上ったわ。……でも、私の個人的な感情で否定しちゃうあの子達に失礼だから」

「なるほど、絵里も成長したって事かな」

「ちよつとそれどういう意味よー」

不貞腐れたような声を上げる絵里だが、顔が笑っている事から本気にしていないのだろう。

そんな絵里を希先輩は優しい表情で見つめており、この部屋にどことなくのんびりとした雰囲気が始める。

うん、これなら絵里は大丈夫そうだな。俺が何かをするまでもなかったか。

「では私はもう行くよ。仕事の邪魔をしちや悪いからね」

「そうね、そろそろ私も仕事の再開をしたいし」

「またいつでも遊びに来てな」

笑顔で手を振ってくる絵里達に手を振り返しつつ、俺は扉を開けて部屋を出た。

暫く廊下を歩いていると、思ったより気落ちしていた穂乃果達の姿を思い出して、本当に彼女達の心が折れていないか不安になってしまう。

「穂乃果達は大丈夫かな……?」

穂乃果達が落ち込んでいないか心配になりながら、俺は彼女達に連絡するべく携帯を取り出すのだった。

## 第十一話 衣装デザイン

「——朝からこれはなんですか？」

「講堂の使用許可をいただきたいと思ひまして」

「部活動に関係なく生徒は自由に講堂を使用できると生徒手帳に書いてありましたので」

ため息を漏らしつつ告げた絵里の言葉に、真面目な顔で穂乃果が答え、海未がその内容を補足した。

そんな二人の様子を尻目に、俺は昨日の事を思い出していた。

あの後、穂乃果達が心配になり連絡すれば教室にいるとの事だったので、急いでその場所へと向かったのだ。

そして、教室に入り穂乃果達を見つけたのはいいのだが、俺の予想に反して彼女達は特に堪えたような様子はなかった。

『えっと、大丈夫なのかな？』

その事を不思議に思った俺は、自然と要領の得ない問いかけになってしまった。

そんな風に戸惑っている俺を見て、穂乃果達はお互いの顔を見合わせて苦笑いする。

『確かにあの時は少し落ち込みましたが』

『穂乃果ちゃんかね』

『生徒会長が何を言っても、やると決めたからにはやりたい!』

各々がそう言って決意の表情を浮かべていた。

ああ、なんだ。俺が何をしなくても問題はなかったのか。

『なら良かったよ。それで、これからどうするんだい?』

『うん、これからね——』

「——新入生歓迎会の放課後やなあ」

「昨日の今日だからなんとなく予想はつくけれど……一体何をするつもり?」

昨日の事を思い出している内に、どうやら話は進んでいたらしい。

過去の話はとりあえず置いて、目の前の事に集中しよう。

「それは——」

「ライブです。スクールアイドルを結成したので、その初ライブを講堂でやる事にしたのです」

「ほ、穂乃果!」

絵里の問いに言葉が詰まっている海未に対して、穂乃果は背筋を伸ばして堂々とそう告げた。

あまりにも穂乃果があつさりと言ってしまったからか、海未は慌てた様子で穂乃果を見ており、ことりは苦笑いを浮かべている。

うん、まあここまで正直に言われると驚くよな。海未としてはこのまま黙って許可を貰いたかつたのだろうが。

「あはは、まだライブをできるかどうかわからないよ」

「ええ!? ライブはやるよ!」

「待ってください! まだステージに立つとは言つて——」

「そんな状態でライブをできるの? 見た所、グループ内の意見も纏まっていないようだけど」

「だ、大丈夫です!」

絵里の前でいつものようにじゃれ合いはじめてしまった穂乃果達。

それを見た絵里が呆れたようにそう尋ねると、穂乃果達は背筋を伸ばし直して何度も頷いていた。

まあ、絵里からしてみれば穂乃果達の行動は、行き当たりばつたりに見えるだろうな。そんな事を考えつつ希先輩と手を振りあっていると、そこで何故か絵里は俺の方へと

目を向ける。

「そちらの朝……雨宮さんはどう思っているのかしら？」

「私、ですか？」

「ええ。先ほどから殆ど意見を言っていないので、貴女の意見を聞かせてください」

そう告げた絵里の口許は、若干笑みを形作っていた。

長い付き合いだからこそわかるその微妙な変化に、俺はこれが絵里の仕返しだと理解する。

試しにこちらを見つめる絵里の瞳を見返すと、その目が『希と遊んでいるんじゃない』と言っていたしな。

はあ。ちよつとふざけすぎたか。穂乃果達も俺の意見に興味があるのか、固唾を呑んで見守っているし。

「そうですね……確かに穂乃果はしつかり予定を建てていないので不安になります」「うっ！」

「ならやつぱり——」

「でも、穂乃果達なら大丈夫ですよ。必ずライブを実現してくれるはずですよ」

「朝陽ちゃん……！」

自然と前に出て俺がはつきりと言うと、絵里は不機嫌そうに口をへの字にした。

そして、背後で嬉しそうな声を上げている穂乃果達をちらりと見た後、絵里は瞳を鋭くして口を開く。

「新入生歓迎会は遊びではないのよ。そんな根拠のない事を言われても」

「四人は講堂の使用許可を取りにきたんやろ？」

「希？」

自分の言葉を遮って不思議そうにしている絵里を尻目に、希先輩は席から立ち上がって窓の方へと向かっていく。

そして、窓の外を見ながら手を後ろで組んだ希先輩は、楽しげに続きの言葉を話す。

「部活でもないのに生徒会が内容にとやかく言う権利はないはずや」

「それは……」

希先輩が言った内容に思い当たるふしがあるのか、言葉を濁す絵里。

そんなどこか煮えきらない絵里の様子を俺が見つめていると、希先輩がこちらを見ている事に気が付く。

それに俺が反応したのを確認した希先輩は、こちらへとウィンクして小さく手を振る。

ああ、これは希先輩なりの手助けって事か。昨日は一応感情を抑えていた絵里だけど、やっぱりまだ割り切れていないようだ。



「それで、どうするん？」

「……希の言う事は正しいわ。講堂の使用を許可します」

「あ、ありがとうございます！ 失礼しました！」

暫く希先輩を睨みつけていた絵里は、ため息を一つ零して頷いた。

無事に許可を取れた事で穂乃果達は笑顔になっていき、やがて嬉しそうな声を上げて退室していった。

それに続いて俺も退室するのだが、その前に希先輩に絵里のフォローを頼むとアイコンタクトを送る。

その目配せに真剣な表情で頷いた希先輩を尻目に、俺は穂乃果達の後を追うべく生徒会室を出るのだった。

「——ふんふんふん」

楽しげに瞳を細めて、ノートに絵を描いていくことり。

鼻歌を歌いながら瞬く間にできあがっていく衣装の絵を、机に頬杖をつけて俺は見ていた。

現在、穂乃果と海未はここにはおらず、俺とことりの二人で衣装の相談をしている所だ。

「あ、この部分にヒラヒラいれると可愛いと思うよ」

「わっ、本当だ。ありがとう、朝陽ちゃん」

「気づいた事を言っただけさ」

素人ながらに衣装の意見を述べると、ことりは俺の方へと笑顔を向ける。

それに笑みを返しつつ、いよいよ初ライブが一ヶ月になったという事に、俺はどこか感慨深い気持ちを感じていた。

物語の記憶は年齢を重ねる事に薄れていつているが、大まかな流れは覚えている……はず。

俺の記憶が正しければ、穂乃果達の初ライブに観客は殆どいなかったと思う。

そして、この知識を活かしてできる事は二つある。

一つ目は、物事通りの展開に添う事。

このメリットはイレギュラーな事態が起きにくい事と、穂乃果達に挫折を経験させられるという事だ。

俺の見解では、あのファーストライブがあつたからこそ、μ'sはあそこまで成長できたと思う。

もしあの経験がなかったら、どこかで穂乃果達は折れたのではないか。そう思っているのだ。

反対にデメリットは、このファーストライブで穂乃果達の心が折れてしまう可能性があるという事だ。

まあ、正直これはあまり心配していない。穂乃果達がそれぐらいでへこたれるような人じゃないと、長い付き合いがある俺が知っているし。

二つ目は、この知識を活かしてファーストライブを成功させるという事だ。

これのメリットは、何より穂乃果達を悲しませないという事だろう。

初ライブで大成功。そしてそのまま廃校阻止のモチベーションに繋がる、という展開にもできる。

でも、その場合穂乃果達は挫折を知らないという事になってしまう。

まあ、俺がそんな上から目線で考える事そのものが間違いなのかも知れないけど。

デメリットは、単純にこの後の展開が変わってしまう事だ。

ファーストライブ成功したせいで、もしかしたら最悪新たなメンバーが増えないかもしれない。

そうなると恐らく廃校阻止は望めない……*s*は九人が揃わなきや駄目なのだ。九人いたからこそ、ラブライブで輝けたと俺は思っている。

「……ちゃん」

「はあ……ままならないものだな」

「朝陽ちゃん！」

「わっ！」

二者択一な状況に頭を悩ませていると、ことりが大声を上げている事に気が付いた。それに慌てて自然と俯いていた視線を上げれば、どこか不機嫌そうに頬を膨らませていることりの顔が目に入ったのだ。

「も〜！ さつきから呼んでいるのに朝陽ちゃんが全然反応してくない！」

「す、すまないことり。少し考え事をしていてね」

「……それって、最近朝陽ちゃんが感じている困り事？」

「えっ？」

不意に真面目な顔つきに変わったかと思えば、ノートを閉じたことりがそう尋ねてきた。

その問いかけに思わず目を見開いている俺を尻目に、ことりは俺の心を見透かすようにのぞき込んでくる。

「朝陽ちゃんって昔から偶に遠い目をする時があるよね」

「そんな事ない、と思うよ」

「ううん、してるよ。進級してから遠い目する事も増えだし、何より」

「何より？」

オウム返しで尋ねた俺の言葉に、寂しげに眉尻を下げることり。

そして、そのままことりは俯き気味に目を伏せながら口を開く。

「朝陽ちゃんって、スクールアイドルやるつもりないんでしょ？」

「……え？」

「どういう事だ？ 俺は穂乃果達と一緒に廃校を阻止するためにスクールアイドルを

やりたいと——

「私達と一緒に踊る気がないんだよね？」

——っ！

「……どうしてそう思うんだい？」

「最初は気のせいだと思ったの。でも、穂乃果ちゃん達と一緒にスクールアイドルの事を話している内に、段々と確信に変わったんだ」

「確信に？」

「うん。朝陽ちゃん、気づいてる？ 私達を羨ましそうに見ている時があるの」

「それ、は……」

ことりに告げられた内容に、俺は頭を殴られたような気持ちになった。

確かに、俺はことり達と同じ舞台に立てない。μ s というグループに俺は本来いてはいけない異物だ。少なくとも、俺はそう思っている。

その事については納得していたつもりだったが、どうやら心のどこかでは納得しきれていなかったらしい。

だから、無意識にことり達を羨望の目で見ていたのだろう。

「私は朝陽ちゃんとも一緒に踊りたいよ」

「……私もことり達と同じ景色を見たいさ」

「でも、それができない理由があるんだよね」

「そう、だね。うん、それだけはどうしてもできない」

そう。それだけはしてはいけない。

スクールアイドルをしたいか、ステージで目立ちたいとかそういうのではなく、俺はことり達と……μ s と同じ景色を見てみたかった。

ファーストライブでの悲しみ。新たなメンバーと踊れる喜び。自分達の踊りで廃校を阻止できた達成感。そして、ラブライブを優勝した瞬間の気持ち。

ある程度は一緒の気持ちを味わえるだろう。皆と喜びを分かちあえる事もできるだ

ろう。

でも、同じ気持ちにだけはなれない。皆と完全に気持ちを一つにする事だけはできない。

μ sはあの九人でμ sなのだ。俺の入る隙間はない。

そんな事を俺が考えていると、ことりは泣きだしそうな表情を浮かべていた。

「正直、朝陽ちゃんは何を考えてそういう結論になったのかわからない」

「そうだね。これはきつと誰も共感できないかな」

「……やっぱり折れる気はないんだね」

「うん。すまない、ことり。私は舞台上で輝くことり達を影で支える役目に徹しようと思っているよ」

「……………そっか」

そう呟きを漏らした後、ことりはポケットから取り出したハンカチで涙を拭いていく。

そして、気持ちを切り替えるように一度瞳を閉じたことりは、瞳を開いた次の瞬間にはいつも通りの優しい笑顔に戻っていた。

ことりに気を遣わせた事に内心で申し訳なく思いつつ、俺は衣装の話をするべくことりのノートを開く。

「さあ、早く衣装のデザインを完成させようか」

「……そうだね〜！ 海未ちゃんは嫌がりそうだけどね」

「スカートが短いつて言ってるね」

「あはは、海未ちゃんなら言いそう——」

そうしてことりと雑談をしながらデザインを作っていく、穂乃果達に来るまでには衣装が完成するのだった。



## 第十二話 早朝練習と祈禱

「わあー！ この服可愛いよー！」

「な、なんですかこれはあ!？」

以上がことりの衣装デザインを見た穂乃果達の感想である。

感嘆の声を上げて瞳を輝かせている穂乃果に対して、海未は愕然とした表情を浮かべている。

まあ、海未がこういう反応をするとは俺とことりも想定していたけどな。

「何って、衣装だよ？」

「……このスカートから出ている物体は？」

「足だよ？」

「そ、それはつまり。こ、この衣装のように素足がそこまで露出するということですか……?」

どうか私の思い違いであって欲しい。

そんな気持ちが頭になつてゐる海未の表情を見て、ことりは無慈悲に笑顔で告げる。

「アイドルだからね」

「海未ちゃんなら脚が細いから大丈夫だよ！」

穂乃果がフオローをしてくれているのだが、海未は俯いたまま反応をしない。

まあ、あれだ。大人しく観念しよう、海未。

しかし、そんな俺の感想とは裏腹に、海未はまだ諦めていなかったらしい。

ゆらりと脱力して身体を揺らしていた海未は、穂乃果に衣装の説明をしていたことりの元へ、瞬く間に間合いを詰めたのだ。

「びいっ!？」

「海未ちゃんいつの間にも!? に、忍者みたい！」

突如として目の前に現れた海未にことりは悲鳴を上げ、穂乃果は何故か意味不明な事を言つて再び顔を輝かせはじめた。

そういうえば、海未って時々身体能力が人間離れするよな。なんていうか、火事場の馬鹿力を自由に引きだせるのだろうか。

俺がそんな事を考えている内に、海未はことりの両肩に手を置く。

そして、引き攀つた表情を浮かべていたことりへと、顔を勢いよく近づける。

「ことり」

「は、はい！」

「スカート丈を膝下まで伸ばさなければ、私は履きません」

「え、でも——」

「いいですね?」

「——は、はいいい!」

ことりは抵抗する素振りを見せていたが、爽やかな笑顔をしている海未に危機感でも覚えたのか、涙目で何度も頷いていた。

ことが承諾したのを確認した海未は、近づけていた顔を離してやりきったという表情を作る。

そのままかいてもいない汗を拭う仕草をしている海未を見て、珍しく穂乃果が呆れたような眼差しを送っていた。

「海未ちゃんって……結構アホ?」

「なっ!? それは聞き捨てなりませんよ穂乃果!」

「だってスカート一つで大袈裟といふかなんというか」

「穂乃果は何もわかっていません! そもそも大和撫子たるもの——」

あ。海未が穂乃果にどうでもいい事を言いはじめた。

海未の変なスイッチを入れて明らかにやっちまった、という表情を浮かべた穂乃果を尻目に、俺は海未が離れて安堵の息を漏らしていることりの元へ向かう。

「お疲れ、かな?」

「あはは、流石にびっくりしたよ」

「海未は恥ずかしがり屋だからね」

「そうだね」

「でも、スカート丈を直すつもりはないんだろう？」

俺がからかい混じりにそう告げれば、ことりは満面の笑みで頷く。

いや、満面の笑みというよりは、どこか黒さが籠った笑みだろうか。

明らかに先ほど海未に驚かされた事を根に持っているな。

そんな風に俺が思っていると、不意に何かに気が付いたように目を瞬かせることり。

そして、ことりはじゃれ合っている穂乃果達や俺の注目を集める。

「そういえば、グループ名って決まった？」

『……あ』

そう尋ねたことりの言葉に、俺達はお互いの顔を見合わせて、揃って間拔けな声を上げるのだった。

「はあ……はあ……」

「遅れていますよ、穂乃果！ ことりも！」

「ま、待つてよ海未ちゃん！」

後ろを振り向きながら告げた海未の言葉に、息も絶え絶えでことりが返事をした。

そんなリズムよく走っている三人の様子を見ていた俺は、海未が階段を登りきった瞬間にストップウオッチを止める。

「うん。やはり海未は早いね」

「ふう……これでも鍛えていますから」

「そうだったね、はい飲み物」

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

自分の鞆からタオルを取り出して顔を拭いている海未へと、ほどよく冷えている飲み物を渡すと笑顔でお礼を言った。

その笑みに俺が手を振って応えている内に、穂乃果とことりが階段を登りきったので、ストップウオッチを再度止める。

「はあ……はあ……海未ちゃん速いよー」

「ことりもう動けない……」

「全く、二人とも体力がなさすぎます」

「はい、タオルと飲み物」

「ありがと〜」

「くうー！ 運動後の飲み物は旨い！」

座り込んだ姿勢のまま受けとることりに対して、穂乃果は腰に手を当ててオヤジくさい仕草で一気に飲み干す。

そんな穂乃果の姿を呆れるように見ている海未を尻目に、俺は昨日の事を思い返していた。

結局、あれからグループ名は中々決まらず色々考えた結果、穂乃果の提案によりグループ名を募集する事となったのだ。

そんなこんなでひとまずの問題は解決したわけだが……他にも様々な問題がある。まずは曲。まあ、これは穂乃果にあてがあるかわかったので、とりあえず保留。

これは恐らく西木野の事だろうが、彼女の場合は俺が出しゃばるとややこしくなると思う。

というより、目をつけられているので顔を合わせたくないというかなんというか。

ま、まあこれは置いておこう。

次に作詞。これはことりのお願い——というよりは半分脅し——により、海未が作つてくれる事になった。

あの時の海未は涙目で顔を真っ赤にして中々面白……可哀想だったな。

とまあ、そんな感じで決して順調とはいかないが、ゆつくりとスクールアイドルへの道は進んでいるのだ。

「——では。休憩もした事ですし、ダンスレッスンを始めましょう」

「よし、やるぞー！」

「まずは柔軟からだね」

腕を上げて気合いを入れている穂乃果。

そんな穂乃果へと思考を中断した俺が声を掛け、二人一組となって柔軟体操を始める。

練習メニューは俺と海未で考えており、海未は主に筋肉等の基礎トレーニングを。俺はダンス等に必要なたレーニングをネットで調べているのだ。

俺の仕入れた知識は、主にネットからなので殆どにわか仕込みだろう。でも、少なくともやらないよりはましだと思う。

そんな風に考えている間に柔軟体操は終わり、次にダンスレッスンをする事になった。

「これは……う？」

「残念だけど、私達には時間が足りない。だから、基礎的なものより実際に踊っている人を見た方がいいと思ってるね」

俺が持つてきていたノートパソコンを不思議そうに見ていた穂乃果達は、その言葉に益々不思議に満ちた顔で首を傾げた。

そんなどこか可愛らしい仕草に笑みが漏れつつ、俺がパソコンに入れたDVDを再生すると、穂乃果達ははっと驚いた表情に変わる。

まあ、これもやらないよりはマシって感じの気休め程度だろうが。それでもこれは穂乃果達にいい刺激になるだろう。

「これってA—RISEのPVだね？」

「そう。ことりの言う通りA—RISEのPVだよ」

「わあ！ やっぱりA—RISEは凄い！」

「ですが、何故今これを見せたのですか？」

そんな海未の当然の問いかけに対して、俺は笑顔を返す。

「海未にわかりやすく言うと、見取り稽古さ」



「……ああ、なるほど」

「どういう事？」

「穂乃果にもわかるように説明すると、だ。A—R I S Eはスクールアイドルの頂点、つまり彼女達はダンスが凄く上手い。ここまではいいかい？」

「うん、つまりA—R I S Eが凄いつて事だよね！」

本当にわかつているのだろうか？

まあ、多分大丈夫だろう……大丈夫だよな？

「だから、A—R I S Eのダンスを参考にして踊れば、闇雲に踊るより上達すると思ってね」

「でもいきなりA—R I S Eを見ても平気かな？ A—R I S Eのダンスにイメージが引つ張られるかもしれないよ？」

「ことりの不安もわかるが、さつきも言った通り私達には時間が足りない。一ヶ月でライブを成功させる必要があるんだ」

改めて俺がそう告げると、穂乃果達は各々が真剣な表情を浮かべた。

穂乃果達の注目が集まっているのを感じながら、俺は続きの言葉を話す。

「A—R I S Eのダンスをよく観察して、己の血肉とする……これが私の考えだ。きつと、初めはこのダンスが凄く難しく見えれると思う。でも、このダンスを見た事は必ず穂

乃果達のためになるはず。それに、廃校を阻止するにはこれぐらいできて当然だろう？」

「……うん！ これぐらいで躓いてちや廃校を阻止できないよ！」

最後に俺が挑発してみれば、穂乃果は決然とした顔で力強く頷く。

それを見たことりと海未の顔が引き締まった事から、どうやら俺の言葉は彼女達の心に届いたのがわかる。

まあ、俺が舞台上に立つわけではないので、今の言葉に説得力を感じられるかと聞かれなくても首を傾げてしまうが。

「よし、じゃあPVを見る前に……」

「見る前に？」

「——朝から元気やね」

「あ、副会長さん！」

俺が言葉を切つて視線を転じると、タイミングよく希先輩が声を掛けてきた。

巫女服で箒を持った希先輩を見て、穂乃果達は驚いたような声を上げている。

ま、いきなり生徒副会長が現れればびっくりするよな。しかも巫女服姿だし。

「お、おはようございます」

「どうして副会長さんが？」

「はいおはよう。ウチはこの神社でバイトしてるんや。スピリチュアルな気が集まる場所だからね」

「は、はあ……」

指を口許に当ててウインクする希先輩に対して、海未は戸惑い気味に相槌を打っていた。

わかる、わかるぞ海未。転生という存在自体がスピリチュアルな俺でも、希先輩の言っている内容は時々理解できない。

いや、スピリチュアルって意味はわかるけど、そんな気とか感じた事もないし。希先輩は気を感じられるのだろうか？

「それはともかく、ここの階段を使わせてもらっているんだし、お参りぐらいしても罰は当たらんと思うんや」

「それもそうですね」

「よし、皆で願事だー！」

「待つてよ穂乃果ちゃん！」

楽しげに走りだす穂乃果に続いて、追いかけることりと海未。

俺も穂乃果達の後を追おうとしたのだが、希先輩に呼びとめられたので前に踏みだした足を戻す。

「どうしました？」

「調子はどうか？」

「そうですね……なんとかライブができればいいかな、と」

「なるほど……でも、あの子達は本気みたいやね」

神妙そうな顔つきをした希先輩は、そのまま手を合わせて祈っている穂乃果達へ目を向けた。

そのこちらにまで伝わってくる真剣な姿を見て、不意に希先輩はふっと表情を和らげる。

「そういえば、絵里はあれからどうですか？」

「朝陽ちゃんがあの子達の味方をしちゃったから拗ねちゃってるで」

「あー、絵里って子供っぽいですもんね」

「それが絵里ちの可愛い所や」

「確かに」

恐らく俺と希先輩は同じ光景を思い浮かべただろう。口を尖らせて不機嫌そうにしている絵里の姿を。

思わず顔を見合わせた俺達は、やがてどちらともなく笑いはじめる。

そんな風に希先輩と笑いあっている間に、祈り終わったのか穂乃果達はこちらへと駆

け寄ってきている。

「ほな、ウチはそろそろ仕事に戻るな」

「頑張ってください。あと絵里にもよろしくと」

「絵里ちにもしつかり構わなきやあかんでー」

笑顔で手を振って去っていった希先輩と入れ替わって、穂乃果達が俺の元までたどり着いた。

すると、穂乃果は俺と遠ざかっていく希先輩を交互に見て、不思議そうな顔をして口を開く。

「副会長さんと何を話していたの朝陽ちゃん？」

「ん？ ただの世間話さ」

「むむむ……怪しい〜」

ジト目でこちらを見てくることに苦笑いが漏れつつ、俺は神社の方へと向かっていく。

それと同時に、この後の予定を告げるべく海未に声を掛ける。

「私もお参りしてくるから、その間はDVDを見てほしい」

「わかりました。穂乃果、ことりも練習の再開ですよー！」

「頑張るぞー！」

「は〜い」

「さて……お金を入れてつと」

そのままノートパソコンの方へと向かった穂乃果達を尻目に、俺はお賽銭箱にお金を投げ込む。

そして、両手を合わせて瞳を閉じた俺は、この平和な時間がいつまでも続く事を深く祈るのだった。

## 第十三話 ファーストライブへの根回し

早朝練習をした日の放課後。

現在、俺はアイドル研究部の扉の前にいた。

あれから色々考えた結果、やはり俺にできる事はなんでもしようと思ったのだ。

未来が変化する事は怖い、穂乃果達のファーストライブは成功してほしい。

そう思った俺は、まずは矢澤先輩にライブを見る事を確約してもらうために、ここに赴いたというわけだ。

……俺の存在というバタフライエフェクトのせいで、矢澤先輩がライブを見にいかない可能性もあるしな。

そんな風に考えつつ、俺が扉をノックすると段々と足音が近づいてくる。

「はいはいどなたって、誰かと思えば雨宮じゃない」

「どうも、矢澤先輩。少し話したい事があるので、中に入れてもらってもいいでしょうか？」

「別にいいわよ、まあ中に入りなさい」

「ありがとうございます」

俺の言葉に快く頷いてくれた矢澤先輩。

そして、俺はアイドル研究部の部室に入り、矢澤先輩と向かいあつて座る。

「それで、話つて何？」

「その前に、これを」

「ああ、そういえばあんたにDVDを貸してたわね」

鞆から取り出したアイドルDVDを渡すと、矢澤先輩は口許を緩ませながら受け取つた。

そのDVDのタイトルを暫し見つめた後、矢澤先輩は俺へと楽しげな視線を送る。

「それで、このグループはどう思った？」

「そうですね……個人的には、センターの子より右にいた人の方が好きですね」

「歌声が綺麗と評判の子ね。確かに私もあの子の歌声は好きだわ」

「矢澤先輩は左の人が好きなんでしたっけ？」

「そうよ。やっぱりあの子のキレのあるダンスは素晴らしいわ！ このグループはここ最近できたんだけどね——」

俺の問いかけに頷いた矢澤先輩は、楽しげな笑顔のままこのグループの魅力を語っていく。

それに対して、俺は相槌を打ちながら矢澤先輩の知識に内心で舌を巻いていた。



物語での知識でも知っていたし、実際に交流を持つようになって実感していたが、やはり矢澤先輩のアイドル知識は凄い。

そして、本当にアイドルが好きなんだって気持ちがちちらまで伝わってくる。

「——それで、このグループは」

「あの、矢澤先輩」

「何よ、今良いところなのに」

途中で話を遮られたからか、不機嫌そうな顔になる矢澤先輩。

矢澤先輩の話は面白いし好きだけど、そろそろ本題に入りたい。

そう考えつつ、俺は鞆から一枚の紙を取り出す。

そして、その紙を矢澤先輩が見やすい位置に置く。

「まずはこれを見てください」

「何よこれ……って、あんたこれ！」

俺がそう告げると、矢澤先輩は胡乱げな顔つきで紙を手にとった。

そのまま暫く紙に目を走らせていた矢澤先輩だったが、やがて弾けるように顔を上げると俺を睨みつける。

うん、矢澤先輩がそんな顔をする事は大体想定内だ。

「そうです。その紙に書いてある通り、私達は一ヶ月後の講堂でライブをする事になり

ました」

「そういう事を聞いてるんじゃないわよ！　なんでそれを私にわざわざ教えにきたのよ！」

机を強く叩いて立ち上がった矢澤先輩は、俺を鋭い目つきで射抜く。

それに俺が笑顔で返せば、矢澤先輩は益々視線を鋭くする。

「矢澤先輩の事情は前に聞きました」

「あなたには一応話したわね」

「はい。その時は詳しく聞きませんでしたけど……」

そう。俺は半年前に矢澤先輩から大まかな事情を聞いていたのだ。

その事を理解しているからこそ、矢澤先輩は俺がこれを渡したのが許せないのだから。

かつて、自分が目指した夢を目の前で見せつけられる。俺だってそんな事をされたら怒ると思う。

でも、だからこそ矢澤先輩にはちゃんと見てほしい。

穂乃果達の頑張りをその目で見ているから、その成果をアイドル関係で一番信頼している矢澤先輩に見てほしいのだ。

「一体どういうつもり？　ここをからかっていると云うのなら、その喧嘩をかうわよ」

「矢澤先輩にとつて、アイドルとはなんですか？」

「はあ？ 何よ突然」

「答えてください、矢澤先輩」

素っ頓狂な声を上げる矢澤先輩。

そのまま訝しげな表情でこちらを見つめてくるが、俺の真剣な思いが伝わったのか、やがて矢澤先輩はため息をつく。

「はあ……：ここにとつてのアイドルとは、ファンの皆を笑顔にする存在よ。これも前に言わなかったかしら」

「そうですね。矢澤先輩らしい素敵な答えです」

「ふ、ふん！ 褒めたって誤魔化されないわよ」

そう呟くと、矢澤先輩は腕を組んでそっぽを向いた。

しかし、矢澤先輩は強い口調で取り繕っているが、それに反して彼女の口許が僅かに綻んでいる。

うん、矢澤先輩って褒められるのが好きだよな。

ともかく、矢澤先輩から望む答えが聞けて自然と笑顔になった俺は、紙に書かれている項目へと指を這わす。

「( )を見てください」

「何よ。ただ新入生の歓迎会にライブをやるって書かれているだけじゃない」

「はい。矢澤先輩にはこのライブを是非見てもらいたいな、と」

「はあ……薄々感づいてはいたけど、まさか本当にライブを見にこいって言うとはね」

呆れたようにため息をついた後、席に座りなおした矢澤先輩は頬杖をつく。

まあ、ここまであからさまに見せれば気が付くか。

正直、矢澤先輩にこの事を伝えるかは少し悩んだ。

物語の通りに進むなら、矢澤先輩は穂乃果達からライブ開催のチラシを貰ったはず。

そして、スクールアイドルが結成される事が気に食わない矢澤先輩は、敵情視察のよ  
うな心境でファーストライブを見にくると思う。

だが、それは物語の中の話であって、今ここの俺達の世界の話ではない。

そこで、矢澤先輩がライブに出来ない可能性を考えて念押しに来たというわけだ。

「矢澤先輩にとつてこれは酷なお願いだという事はわかっています。でも、私は矢澤先  
輩に見てほしいんです——穂乃果達の輝きを」

「……輝き、か」

暫しの間、矢澤先輩は漏らした言葉を反芻するように口を動かしていた。

やや目を伏せて考え込む様子を見せる矢澤先輩に、俺はここが押し時だと思い畳みか  
けていく。

「矢澤先輩がいつも言っているように、アイドルはそんな甘くないです。穂乃果達の動きはまだ素人臭く、とてもじゃないですがアイドルとは言えません」

「ならなおの事このライブを見る必要が——」

「でも！ 穂乃果達は確かに輝いているんです！ 目が離せなくなるような、いつまでも応援したくなるような輝きが！」

「——っ！」

俺の声に驚いたように目を見開く矢澤先輩。

そんな矢澤先輩から目を逸らさず、俺は想いを瞳に込める。

そのまま暫く矢澤先輩と見つめあっていると、不意に矢澤先輩は表情を和らげて口を開く。

「あんたがそこまで入れ込むとはね」

「すみません。大声を出してしまって」

「別にいいわよ。……そうね、雨宮がそこまで気に入るそのスクールアイドル、興味が出てきたわ」

「じゃあっ！」

「勘違いするんじゃないわよ。あんたの熱意に免じて見にいくだけだからね！ スクールアイドルについてはまだ認めていないわ！」

嬉しさから満面の笑みになる俺を見て、矢澤先輩は慌てたようにそう告げてきた。

そんなどこかのツンデレが言いそうな言葉に、俺は思わず吹きだしてしまう。

それを見た矢澤先輩は、むっとして俺をジト目で見つめる。

「あんた、今くだらない事で笑ったでしょ」

「そ、そんな事ありませんよ」

「声が震えているわよ」

おっと、これ以上は墓穴を掘ってしまおう。

とりあえず、気を取り直して紙に指を置いて矢澤先輩の注目を集める。

「開催日時や場所はここに書いていますので」

「はいはい、後で見てくださいわ。で、このグループ名はなんて言うわけ？ 当然あるんで

しようね」

「……現在募集中です」

「はあっ？ 流石にそれは舐めすぎじゃない？」

矢澤先輩と目を合わせないと、彼女は呆れたような眼差しを送ってきた。

うん、矢澤先輩の言っている事は正しい。グループ名がないアイドルとか前代未聞だ

もんな。

ま、まあ今頃どつかのスピリチュアル巫女さんが、投票箱にグループ名を入れている

だろう。

「グループ名は近いうちに決まるので大丈夫ですよ」

「ふうん。なんていうか、随分と行き当たりばったりね」

「自覚はしています」

「まあ、私からすればどうでもいいんだけど。それより、このチラシってあんたが作ったの？」

興味深げにライブ告知のチラシを眺めていた矢澤先輩は、顔を上げてそう尋ねてきた。

それに俺が頷きを返せば、矢澤先輩は意外そうな表情を浮かべる。

「なんですか、その顔は」

「いやね、あんたがチラシを作るなんて意外に思ってた」

「まあ、ことり……私の友人達にも手伝ってもらいましたけど」

「そうよね。あんたがこんな可愛らしい絵を描けるわけないしね」

そう告げると、矢澤先輩は嫌らしい笑顔を俺の方へと向けた。

くっ……事実だけに言い返せない。

そういえば、前に矢澤先輩と絵を描く事になった時、俺の絵を見て矢澤先輩が大笑いしたんだよな。

俺の場合、何を描いても何故か気持ち悪い絵になつてしまうのだ。

前世ではそんな事はなかつたんだけど、本当に不思議だ。

ともかく、この流れを変えるために俺は強引に話を打ちきる。

「とりあえず、矢澤先輩はファーストライブに来てくれるつて事でいいんですね？」  
「話を逸らしたわね」

「ファーストに来てくれますよね？」

再度念押しをする俺を見て、矢澤先輩は呆れたように頷く。

「はいはい、何度も言わなくてもわかっているから」

「ありがとうございます。やっぱり矢澤先輩は頼りになりますね、尊敬します！」

「なっ！」

矢澤先輩の目を真っ直ぐ見つめてそう告げれば、彼女は驚愕した声を上げた。

そして、そのまま頬を赤らめて硬直した矢澤先輩を尻目に、俺はさっさと椅子から立ち上がり扉へと向かう。

「では、矢澤先輩。ファーストライブをよろしく願います」

「ちよ、ちよつと待ちなさ——」

扉が閉まる間際、矢澤先輩が何かを言っていた気がするが、気のせいだろう。

扉に勢いよく何かがあぶつかる音もしたが、それもきつと気のせいだろう。



ともかく、とりあえず矢澤先輩から確約を取れた事に思わず安堵の息を漏らす。

「これで、第一関門はクリアか」

矢澤先輩に関してはもう問題ないはず。

矢澤先輩は、例え口約束でも約束を破るような人ではないから。

となると、次は他の人達への宣伝か。

そう考えながら振り向いた瞬間、何かがぶつかるような感触を感じた。

「きゃっ!」

「す、すまない! しつかりと周りを見ていなかった」

「私も不注意だったから、お互い様よ」

尻餅をついた女性の手を取って立ち上がらせれば、彼女は制服を軽く叩きながらそう告げた。

とりあえず、怪我はしてなさそうで良かった——げっ!

「で、では私はこれで」

「……ちよつと待ちなさい」

女性の全体像を見て、俺は内心で呻いてしまう。

このままだと面倒くさい事になりそうなので、さり気なく女性から離れようとする。しかし、どうやら少々行動に移すのが遅かったらしい。

「な、何かな？ 私の腕を掴んで」

「貴女、どこかで会わなかった？」

「さ、さあ？ 他人の空似ではないかな？」

その言葉に、無言で俺の顔を見る事で応える女性。

やがて、女性は驚きからか徐々に目を見開いていき、俺を勢いよく指差す。

「あ、ああっ！ 貴女ってあの時私から逃げた人！」

「逃げた？」

「そうよ！ あれから貴女を探すのにどれだけ苦労したと思ってるのよ！」

「離してくれないかな？」

「嫌よ。どうせまた逃げる気なんでしょう」

女性はそう叫ぶと、俺の右腕を身体全体でがっしりと掴む。

いや、もう逃がさないみたいな表情をされても。

どうやら、女性は俺がまた逃げると思ったようで、これで捕まえているつもりなのだろう。

「もう逃げないから、離してくれないかな」

「話はどこで聞くのがいいかしら……：……やっぱり、音楽室ね。あそこなら誰も邪魔が入らないし」

「私の話を聞いてる?」

「じゃあ早速音楽室に行くわよ。ほら、早く歩きなさい!」

そう告げた女性——西木野は、上機嫌な足取りで俺を引っ張り、音楽室まで連行していくのだった。

## 第十四話 夕焼けでの小さな伴奏会

「——それで、あの時に私から逃げた弁明を聞こうかしら」

笑みを浮かべた西木野がそう告げると、脚を組み替えて俺を見据えた。

現在、俺達は音楽室にあるピアノの前で向かいあっており、西木野は椅子に座って立ったままでいる俺を見上げている。

「逃げたなんて人聞きの悪い事を言わないでほしい」

「逃げたじゃない、私から」

「あの時は大事な用事があったんだよ」

「ふうん……用事、ね」

そう呟くとジト目で俺を見つめる西木野。

それに対して、俺は西木野の綺麗なアメジストのような瞳を見返す事で応える。

「納得してくれたかな？」

「そうね、理解はしたわ。あの時は私にも非があったし」

「理解は、ね」

つまり、まだ納得はしていないという事か。

そもそも、西木野から逃げた時は関わりたくないと思つたからで、既に腹を括つた今となれば逃げる必要はない。

まあ、絡まれるのが嫌で今まで避けてたという事は否定しないが。

「そういえば、貴女って上級生だったのね。今さらだけど、言葉遣いを変えた方がいいかしら？」

「いや、無理して敬語にする必要はないさ。それに、君に敬語は似合つてなさそうだしね」

「なっ！ ちょっとそれはどういう意味よ！」

からかい混じりの笑顔を作つてそう告げれば、西木野は声を荒らげて勢いよく立ち上がる。

そして、そのまま俺の方へと顔を近づけていくのだが、西木野はわかっているのだから。

その反射的な回答が、俺の言葉に説得力を感じさせるといふ事が。

「まあ、細かい事は気にしなくてもいいさ」

「私が気にするの！」

「それより、西木野ってピアノが得意なんだろう？」

「話を逸らさないでよって、なんで貴女がその事を知っているのよ？」

訝しげな視線を俺に送ってくる西木野。

それに対して、俺はピアノの方へと目を向けて口を開く。

「西木野が私を音楽室に連れてきたから、もしかしていつもここを使っているのではないかと考えてね」

「本当にそれだけ？」

「まあ、後は穂乃果から聞いたというのものもあるかな」

「穂乃果？」

「君に曲を作るように頼んでいる先輩の事だよ」

「ああ、あの人の事」

小首を傾げていた西木野は、俺の言葉に納得したように頷いた。

そして、西木野はそのまま俺の方へと迷惑そうな視線を送る。

「どうしたんだい？」

「貴女からも言ってくれないかしら、曲作りを頼むのを止めてくれてっ」

「どうして？」

「あの先輩にも言ったけど、私は興味ないのよ。アイドルとかそういうジャンルの曲は」  
そう告げると椅子に座りなおし、西木野はゆっくりとため息をつく。

そして、自分の髪の毛を指に巻きながら、西木野は俺から目を逸らす。

口や素振りでは興味なさそうな様子を見せている西木野だったが、俺は彼女の微妙な変化を見逃さなかった。

「本当に興味がない？」

「ええ、私が好きなのはクラシックやジャズ——」

「では、どうして口元が笑っているのかな？」

「——っ！」

俺がそう告げた瞬間、西木野ははっとしたように口許を手で抑えた後、目を見開いた。自分で触ってみてわかったのだろう。口許が僅かに綻んでいる事が。

その事に気が付いたからか、西木野は頬を紅潮させて俺から顔を背ける。

「本当は、穂乃果のお願いを聞いてもいいかなくなって思っているんじゃないかな？」

「そ、そんな事ないわよ！ 貴女の勘違いじゃないかしら」

「へえ……じゃあ、そういう事にしておくよ」

「ふんっ」

全く、素直じゃないんだから。

そっぽを向いて不機嫌そうな表情を浮かべる西木野を見て、俺は内心で微笑ましい気持ちになる。

とりあえず、今の反応で西木野がスクールアイドルに興味があるという事がわかつ

た。

後は、物語の通りに曲を作ってくれば良いのだが。

……念のため、駄目押しもしておくか。

「お願いだ、どうか穂乃果の頼みを聞いてほしい」

「ちよ、ちよつと!?! いきなり頭を下げないでよ!」

「私にできる事はこれぐらいしかないから、ライブが成功するためならば何度だって頭を下げるよ」

「だ、だからって……ああ、もうっ!」

深く頭を下げたから西木野の様子は窺えないが、彼女の苛立ったような声色からおおよそ把握した。

やはり、西木野は上級生から頭を下げられて困惑しているようだ。

俺だって上級生……例えば、矢澤先輩辺りに頭を下げられると戸惑ってしまうだろう。

特に西木野の場合、実際に話して感じた性格から、俺に頭を下げられてどこか落ち着かないはず。

だから、俺はそんな西木野の良心につけ込んで、彼女に罪悪感を植えつける。

そんな打算的な考えに自己嫌悪しつつ、俺は頭を下げたまま続きの言葉を告げる。



「確約しなくてもいい。ただ、少しでも穂乃果達の事を考えてほしいだけなんだ」

「わ、わかったわよ！ ちゃんと曲作りの事を考えるから早く頭を上げて！」

「——ありがとう」

今の俺の眩きは、はたして何に対して向けられたものだったのか。

自分でもわからない色々混ざりあつた感情に蓋をしてから、俺は頭を上げて西木野へと微笑む。

そんな俺の姿を見て、西木野は不愉快そうに俺を睨みつけてくる。

「随分と腹黒いのね、貴女」

「なんの事かな？」

「……はあ、まあいいわ。貴女に言質を取られたのは事実だし、その責任は自分でとるわ」

ため息を一つ零して気持ちを切り替えたのか、西木野は脚を組んで指に髪を巻きつけていく。

良かった。とりあえず、西木野は穂乃果のお願いを考慮してくれるらしい。

「そういうえば、私はまだ西木野の伴奏を聴いた事がないんだよね」

「でしようね。何、私のピアノでも聴きたいの？」

「正直、西木野の伴奏は聴きたいかな」

「そう？　そこまで聴きたいって言うのなら、聴かせてあげるわ」

満更でもなさそうに頬を綻ばせた西木野は、そう告げるとピアノの蓋を開いた。

そして、ピアノの近くに椅子を持ってきて座った俺をチラリと見てから、西木野は鍵盤に指を置いて伴奏を始めるのだった。

——音が、踊っている。

ある時は楽しげに、ある時は悲しげに。

感情豊かに変化するその音色は、まるで生きているかのよう。

子供のように無邪気にはしゃぎ、老紳士の如く優雅にステップを踏む。

様々な動きを見せる音色達。

それらを奏でている西木野は、瞳を閉じて軽やかに指を跳ねさせていく。

大胆でもあり、繊細でもある。

一見矛盾しているかのように思えるそれらを、西木野は見事に表現していた。凄いい……いや、凄いなんで陳腐な表現では説明できない。

西木野がピアノが得意なのは知っていた、理解していたつもりだった。

だが、どうやら俺は西木野を想像以上に過小評価していたようだ。

これは、天才等といった生易しいものではない。

それほどまでに、俺は西木野の伴奏に心から聴き惚れていた。

——曲が佳境に入る。

徐々に指の動きを速めていく西木野。

窓から降り注ぐ夕陽に照らされているその姿は、酷く幽玄的だ。

口許を僅かに綻ばせながら、西木野の指は躍る、躍る、躍る。

そして、華麗に舞う。

流れるような手つきで旋律を奏で、音楽室を即席のコンサートホールへと変貌させて

いく。

西木野は鮮やかな紅髪を揺らし、紫色の煌めく瞳を開いて俺を見つめる。

表情には不敵な笑みを張りつけ、ピアノを弾きながら、西木野は俺へと目で問いかけていた。

——私の伴奏はどうかしら、と。

それに俺が思わず頷きを返せば、西木野は満足そうに微笑む。

そのまま俺から視線を外して、ピアノの方へと目を向ける西木野。

これからラストパートに入るのだろう。

西木野が奏でる旋律に併せて、音の妖精が宙を飛ぶ。

その音の妖精達が、即席のコンサートホールを今度は幻想的な場所へと変えていく。

聴いている者に空想的な風景を想像させる、躍動感溢れる演奏。

徐々にその数を増やしていく妖精達は、楽しげに音楽室を飛び回る。

そして、妖精達が音楽室が埋め尽くされた瞬間——

——世界が、弾けた。

「ふう………どうだったかしら」

「……」

「ねえ、ちよつと聞いているの?」

「はっ!」

あまりの凄さに、どうやら意識が飛んでいたらしい。

気が付けば、西木野が訝しげにこちらを見つめていた。

「それで、伴奏を聴いた感想は?」

「あ、ああ。私の語彙力じゃあ説明できないほど素晴らしかったよ」

「そ、そう? まあ当然よね。私が本気を出せばこれぐらい楽勝よ」

口ではそう強気に言っているが、西木野は口許を緩ませて視線を泳がせている。

うん、やっぱり西木野は西木野だな。

どんな素晴らしい演奏をしようと、伴奏者の西木野はちよつと素直になれない高校生。

ついさつきまでどこか遠くのような存在に感じていたけど、西木野は目の前にちゃんというのだ。

そんな風に考えつつ、俺は椅子から立ち上がる。

「では、感動的な伴奏も聴き終わった事だし、私はそろそろお暇するよ」

「そうね、そろそろ陽が沈むし私も帰るわ」

そう告げた西木野と力を合わせて音楽室を軽く掃除し、綺麗に椅子を整頓してから退室した。

「改めて、今日はピアノを弾いてくれてありがとう」

「ま、まあこれぐらい大した事ではないわ」

「それでも、だよ」

「ぐええ」

俺が何度も褒めたからか、西木野は奇妙な声を上げて後ずさる。

て言うか、その台詞を生で聞くとは思わなかったな。

うん、ある意味得をしたのかも。

「とりあえず、ここで別れようか。穂乃果のお願いをくれぐれも頼んだよ」

「はいはい……それじゃ」

最後に呆れたように俺を一瞥した後、西木野は手を振って去っていった。

その西木野の後ろ姿を見送りながら、俺は先ほどの伴奏を脳内で反芻していく。

心地よい余韻に浸らせてくれたその伴奏は、今でも俺の心に響いている。

やはり、作曲者は西木野しかない。

あの自信満々な表情から、俺が聴いた曲は西木野が作ったものだろう。

あのような素晴らしい曲を作るセンスと、それを完璧に演奏する技術。

それらができるのは、西木野だけだ。

「よし、まずは穂乃果達と作戦会議だな」

頬を叩いて気合いを入れ直した俺は、今後の展開に考えを巡らせつつ、帰路につくのであった。

## 第十五話 μ S

西木野が開いた素敵な伴奏会から一日経って。

現在、俺は穂乃果達と一緒に屋上へと来ていた。

「お願い、西木野さん！ 私達のために曲を作って！」

「だから、それは前にも断りましたよね」

手を合わせて必死な様子で頼む穂乃果に対して、西木野は呆れたような表情を浮かべて腕を組んだ。

そして、西木野は穂乃果の後ろにいる俺の方へと目を向け、なんとかしろと言わんばかりに見つめてくる。

それに俺が笑顔で手を振れば、西木野は頬を痙攣させていた。

まあ、あれだ。穂乃果は一度決めたら突っ走るから、恐らく西木野が頷くまで諦めないだろう。

穂乃果に目をつけられた事は、西木野にとつて幸運だったのか不運だったのか。

ま、その答えは近いうちに自ずとわかるか。

そんな風に考えていると、ことりが俺の方へと身を寄せて囁いてくる。



「ねえ、朝陽ちゃん。あの子と知り合いなの？」

「ん？ ああ、昨日ちよつと会ってね」

「ふうん」

その返答を聞いたことりは、意味ありげに俺を一瞥してから西木野の方へと視線を戻した。

まあ、ことりが考えているような大した事はなかったな。

ただ、俺が改めて西木野の才能を目の当たりにしただけだし。

「あ、もしかして作曲できないの？」

「そんな事ないわよ！ やりたくないだけです、そんな事」

穂乃果の問いかけに声を荒らげた後、西木野はため息をついて目を逸らす。

やはり、昨日の今日では西木野の心は変わってくれないか。

どうするか……俺にできる事は少ないが、一応やるだけやってみよう。

「昨日聴かせてくれた曲は、西木野が作曲したのか？」

「え？ ええ、そうだけど。それが何？」

「改めて言うけど、私は凄く感動したんだ。心の奥底まで染み渡るような綺麗なメロ

デーに」

「づええ!!」

不思議そうな顔をしている穂乃果を追いこし、訝しげにこちらを見る西木野の前まで足を進める。

そして、素つ頓狂な声を上げて後ずさろうとする西木野の手を握り、俺は柔らかい微笑みを意識しながら口を開く。

「私達には君が必要なんだ。他の誰でもない、西木野が」

「ちよ、ちよつといきなりすぎるわよ!」

「朝陽ちゃん!」

「は、破廉恥です!」

「ふふふ、朝陽ちゃんには後で聞きたい事ができたなあ」

その透きとおるような瞳を見返しつつ、俺がそう言えば西木野は顔を赤らめる。

背後で穂乃果達が何やら騒がしいが、まあ特に気にしなくてもいいだろう。

ともかく、西木野は気まずそうに俺から目を逸らし、それでも強い口調で告げる。

「そこまで言ってもらって悪いけど、私にその気はないのよ」

「どうしても?」

「ええ、今のところはね」

「その歌で廃校を阻止できるかもしれないのに?」

「興味ないし……もういいかしら?」

そんな西木野の問いかけに、俺は手を離す事で応える。

残念そうに肩を落としている穂乃果達を一瞥した後、西木野は僅かに視線を泳がせながら扉に近づいていく。

「西木野さん！」

「なんですか？」

「私、諦めないから！」

「……そうですか」

瞳に強い決意を宿した穂乃果の姿を見て、西木野はそう呟きを漏らして去っていった。

西木野がいなくなる事で辺りに重苦しい沈黙が流れはじめ、穂乃果達はお互いの顔を見合わせて難しい表情を浮かべる。

「断られちゃったね」

「なんていうか、海未ちゃんみたい」

「あれが普通の反応だと思えますが」

まあ、海未と西木野の性格は似てない事もない。

二人共真面目な性格だし、微妙に素直になれない所も共通しているし。

いや、西木野は海未ほどはっっちゃけていないか。

西木野がラブアローシユートなんてしたら……うん、ないな。

「さて、これからどうしようか」

「うーん、穂乃果は西木野さんの曲で歌いたいな」

「まあ、本命は西木野として。一応予備のプランも建てておいた方がいいだろうね」

「そうですね……最悪、他の人の曲を歌う事になるかもしれない」

俺の提案を聞いた海未は、顎に手を添えて思案する素振りを見せる。

そのまま四人で色々々と相談をしていると、不意に屋上の扉が開かれた。

それに俺達が揃って目を向ければ、そこには真剣な面立ちでこちらを見つめている絵里がいたのだ。

「生徒会長……」

「ちよつといいかしら」

「私達にどのような用でしょうか？」

思わずといった様子で呟きを漏らすことに、鋭い目つきで絵里を牽制していく海未。

「どうやら、生徒会室での一件からか海未は絵里に対して良い感情を持っていないらしい。」

まあ、あれだけきつぱりと否定されたしな。気持ちにはわからないでもない。

ともかく、海未から歓迎されていない空気が漂う中、そんな事を気にとめる様子を見せない絵里は、ゆつくりと俺達を見回していく。

「貴女達がスクールアイドルの結成を諦めていないみたいだから、その忠告をしに来たのよ」

「忠告、ですか？」

「ええ……まず、前提として音ノ木坂は廃校の危機にある」

「そうですが……」

穂乃果の問いかけに頷いて告げた絵里の言葉に、先ほどまで視線を鋭くしていた海未は戸惑いがちに頷いた。

それを見て、絵里は僅かに表情を柔らかくして指を立てる。

「それをなんとかしたいと思い、貴女達はスクールアイドルをやろうと思った。その事に間違いはないわね？」

「そうですけど？」

「その心意義は前にも言ったと思うけど嬉しいわ。ただ、貴女達は失敗をした時の事もちゃんと考えているのかしら？」

「え……？」

厳しい表情に変わった絵里がそう告げると、穂乃果は驚いたように目を大きく見開い

た。

それに対して、そんな穂乃果の様子を見た絵里はため息をつく。

「その様子だと考えていなかったみたいね。私に貴女達の活動を止める権限はないから、この際はつきりと言わせてもらおうわ。貴女達がスクールアイドルをしようのならば、失敗した時のリスクを考えた上でしてちょうだい」

「リスク……」

「何度も言うけど、思いつきで行動して欲しくないの。スクールアイドルをやりました、でもやっぱり駄目でした……もしそんな風に軽い気持ちでやるのなら、例え私情だとしても私が止めるわ」

そう言い放ち、決然とした表情を浮かべた絵里。

そんなどこか覚悟を決めたような絵里の姿を見て、穂乃果達は返す言葉が見つからないようだ。

「少し言いすぎではないですか？」

「……そうね、少し冷静じゃなかったわ。ごめんなさい」

「い、いえ！ それより頭を上げてください！」

圧倒されている穂乃果達に代わり俺がそう言えば、絵里は少し考える仕草をした後で頭を下げた。

それを見て我に返ったのか、海末が慌てた様子で絵里に頭を上げるように頼んでいる。

海末に促され頭を上げた絵里は、真剣な表情を浮かべて再度俺達を見回していく。

「スクールアイドルをする意味、ちゃんと考えてね」

そう告げて横目で俺をチラリと見た後、絵里は屋上を去っていった。

絵里がいなくなった事で、さきほどより重苦しい空気が流れだす。

「生徒会長、凄かったね」

「はい。あれは、責任を背負う者の目でした」

「私達って、軽く考えていたのかなあ……」

思わずといった様子で穂乃果がそう呟くと、ことり達は表情を曇らせた。

穂乃果達は絵里の言葉に随分と考えさせられたようだが、俺ではそこまで難しく考

えない方がいいと思う。

もちろん、絵里の言葉にも一理ある。

でも、前にも思った通り今の音ノ木坂にそこまで評判が落ちる知名度等はない。

だから、この場合は絵里のような慎重な考えより、穂乃果達のような大胆な思いつき

方が良い結果を生むはず。

そんな風に考えつつ、俺は悩む仕草をする穂乃果達へと目を向けて口を開く。

「とりあえず、そろそろ授業が始まるから私達も教室に戻ろう」  
「そう、だね」

代表して領いた穂乃果を筆頭に、俺達は教室へと戻るのであった。

あれから、俺達は教室へと戻って授業を受けていたのだが、絵里の言葉を考えているのか穂乃果達は上の空だった。

いつも机に伏せて眠っている穂乃果は頬杖をついて悩む様子を見せ、海未は黒板を見ているがどこかぼーっとしている。

ことりも意味もなくノートにペンを走らせていて、皆真面目に授業内容を聞いてないようだ。

まあ、俺も絵里の話には思う所があるので授業に集中できなかつたが。

そんな感じで授業が終わり、休み時間となった。

休み時間になると穂乃果は教室から出ていき、海未とことりが俺の席まで歩み寄って



くる。

「朝陽。授業中に少し考えてみたのですが、生徒会長の話にも一理あると思います」  
「でも、私達はそんな軽い気持ちでスクールアイドルをやるつもりはないよ」

「示しあわせたかのように海未達はそう告げ、俺へと力強い眼差しを送ってきた。  
そんな海未達の様子が嬉しく思いつつ、俺は領きを返して口を開く。

「うん、海未達が真剣な気持ちでスクールアイドルをしているのは、私がよく知っているよ。……とりあえず、生徒会長の話は念頭に置いて、今はファーストライブを成功させる事だけに集中しよう」

「みんなー!」

俺の言葉に海未達が頷いた瞬間、教室へと飛び込んだ穂乃果が笑顔で駆け寄ってくる。

「脚がもつれそうになるほど慌てた様子でこちらまで走ってきた穂乃果は、不思議そうに首を傾げていることり達にあるものを見せた。

「なんですか、それは?」

「あつたんだよ! グループ名の名前が!」

「本当に穂乃果ちゃん!」

「うん! まだ中身は見えてないんだけど、グループ名募集の箱に入ってたんだ」

そう告げて俺の机の上に一枚の紙を置いた穂乃果。

自然と全員の視線がその紙へと集まっていき、どこか張りつめた雰囲気は漂いはじめる。

「じゃあ、開けるよ?」

「どのような名前なんでしょうか」

「楽しみだね」

期待しているような面立ちで穂乃果がゆっくりと紙を開くと、そこには――

「……ゆーず?」

「ミューズではないですか?」

――μ sと書いてあったのだ。

「μ s……」

「神話に出てくる女神から取った名前だと思いますが」

「女神って、ちよつと恥ずかしい」

名前の意味に照れる様子を見せることに、穂乃果へとμ sの由来を伝える海未。

そんな海未達の様子を尻目に、穂乃果は暫し目を伏せて考え込む仕草をする。

やがて、噛み締めるように何度もμ sと呟いていた穂乃果は、顔を上げて輝かんば

かりの笑みを浮かべていく。

「うん！ すっごく良い名前だよ！」

「はい、私も良いと思います！」

「ことりも〜！」

「うん、穂乃果達にぴったりな名前じゃないかな？」

もしかしたら、他の名前になるかもしれないと思っていたが、無事に俺の杞憂に終わって良かった。

後は、 $\mu$ , s を考えた人の通りに——十中八九希先輩だろうが——メンバーが九人揃ってくれば……。

ともかく、俺達から賛成の意を受けて、穂乃果は笑顔のまま大きく頷く。

「これから私達は—— $\mu$ , s だ！」

今この瞬間から、音ノ木坂で一つのスクールアイドルグループ—— $\mu$ , s の物語が始動するのであった。

## 第十六話 絵里の気持ち

μ、sが結成された日の放課後。

現在、俺は廊下の陰に隠れてある人の様子を窺っていた。

その人……というか、西木野は今日貼ったライブの告知ポスターの前で立ち止まったり、何やら頻りに周囲を見回している。

暫く西木野を監視していると、やがて彼女は素早い動作で俺が置いておいたチラシを鞆に仕舞い込み、そのまま挙動不審な動きで去っていった。

よし、とりあえず西木野が穂乃果達μ、sに興味を持っている事がわかったな。

後は、西木野を上手く説得して作曲して貰えば……。

「さて、次は絵里の様子でも……ん？」

目的は達したので踵を返そうとしたのだが、遠目にいる一人の少女を見て気が変わった。

そのどこか気が弱そうな少女は、こちらまで伝わってくるほど顔を輝かせてポスターを見つめている。

……そろそろ、彼女とも接触する時期になったか。

そんな事を考えつつ、俺は一心不乱にポスターを見つめている少女の元へと近づいていく。

「早くライブの日にならないかなあ」

「スクールアイドルに興味があるのかい？」

「はいっ！ それはもう凄く気になり——ぴやあっ！」

俺の問いかけに振り返ってそう告げた少女。

しかし、次の瞬間には可愛らしい悲鳴を上げて、少女はおずおずと眼鏡越しに上目遣いで見つめてくる。

そんなどこか保護欲が刺激される様子に内心で苦笑いしながら、俺はポスターの方へと目を向けて口を開く。

「いきなり声を掛けてすまない。でも、そのポスターを見ていたのが気になってね」

「あ、えと、すみません。その、もしかしてこのスクールアイドルのメンバーですか？」

「ん？ いや、スクールアイドルをするのは私の友人達さ。私はその手伝いをしている者かな？」

「そ、そうなんですか……あの、先輩ですよね？」

「そうだね、そういう君は新入生？」

暫し残念そうに肩を落としていた少女は、やや戸惑いがちに尋ねてきた。

それに頷きを返せば、少女は慌てた様子で居住まいを正して口を開く。

「は、はい！ 今年から入学した小泉 花陽です。よろしくお願いします」

「よろしく。私の名前は雨宮 朝陽だよ」

そう告げて手を前に差し出す。

俺の手を見て、少女——小泉は恐縮したように手を握り返し、俺達は握手を交わした。

そういえば、俺と小泉は同じ漢字を使っているんだよな。

読み方は違うけど、なんとというか親近感が少し湧く。

「えと、雨宮先輩」

「ん、なにかな？」

「スクールアイドル、応援しています。頑張ってください！」

「ありがとう、できればライブを見にきてほしいな」

「はいっ！ 絶対に行きます！」

俺の言葉にそう返し、満面の笑みを浮かべる小泉。

そんな小泉の様子から、本当にスクールアイドルを好きな事が理解できる。

とりあえず、これで小泉に関しても一安心できるだろう。

それから小泉と暫し雑談を交わしていると、遠くから一人の少女が駆け寄ってくる。

「かーよちん！ 帰ろー！」

「あ、凜ちゃん」

「お友達？」

「はい、とつても大切な友達です」

「えっと、どうも」

小泉の言葉に照れる様子を見せた少女は、俺の方へと戸惑いがちに頭を下げた。

そんなどこかこちらを窺っている仕草に思わず笑みが漏れつつ、俺は小泉と同じくその少女に手を差し出す。

「私の名前は雨宮 朝陽だ。ようこそ、音ノ木坂へ。歓迎するよ」

「ほ、星空 凜と言います。よろしくお願いします」

少女——星空と握手をした後、俺達は少しだけ話を交えていく。

そして、ある程度小泉達と打ち解けた所で、そろそろ別れる事となった。

「では、また会おう。私には気軽に話しかけていいからね」

「はい。さようなら」

「さようなら！」

手を振ってくる小泉達に手を振り返しながら、俺は絵里の教室へと向かうのであった。

「絢瀬さん？ 絢瀬さんならもう帰ったわよ」

「そうですか、教えてくれてありがとうございます。それと、これを」

絵里の情報を教えてくれてくれた上級生に頭を下げた後、俺は鞆からライブ告知のチラシを取り出して渡す。

それを受け取って目を通した上級生は、思い出したような表情を浮かべる。

「そういえば、最近この学校にもスクールアイドルができたんだっけ」

「はい、ここ最近結成されました。そのチラシを友達に見せていただけば、と」

「まあ、別に減るもんじゃないしいいけど」

「ありがとうございます」

苦笑いして頷いた上級生へともう一度頭を下げてから、俺はクラスに残っている他の人達にもチラシを渡していく。

恐らく、知名度はない現状では俺の行動等あまり意味がないだろう。

でも、やらない後悔よりやった後悔。



ファーストライブを成功させる可能性が少しでも上がるなら、俺は迷わずそれを実行しようと考えたのだ。

ともかく、上級生に許可を貰って黒板にチラシを貼りつけ、教卓の上に残りのチラシを置く。

「ファーストライブは新入生歓迎会の日にやります。時間が空いている時にでも来てく  
ださい、お願いします！」

「はいはい。気が向いたら行かせてもらおうわねー」

「ありがとうございます！ では、失礼しました」

俺の告知におびなりに答えた上級生。

そんな手応えのなさを内心で嘆きつつ、俺は教室を出て学校を後にする。

そして、そのまま絵里の家へと向かうために足を進めていく。

「とりあえず、次は絵里だな……えっと」

あらかじめ鞆に入れておいた絵里へのお土産を確認する。

うん、ちゃんと持ってきていたな。

それにしても、やはりファーストライブの根回しは上手くいかない。

最初はなんとかいくと思っていたけど、全くそんな事はなかった。

そもそも、少し考えてみれば気が付く事だ。

新入生歓迎会の日というのは、つまり他の部活の勧誘の日でもあるという事。

ただでさえ自分の部のメンバーを増やすのに忙しいのに、ファーストライブを見にくる余裕等あるだろうか。

せめて、A—R—I—S—Eのように人気があれば話は別だっただろう。

しかし、μ'sが結成されたのはつい最近。

とてもではないが人が集まるとは思えない。

一応、色々と聞き回って帰宅部の人を中心にチラシを配っているが、はたして何人がファーストライブに来てくれるか……。

「つと、着いた着いた」

そんな事を考えている間に、無事に絵里の家へとたどり着いた。

とりあえず、色々考えるのは後にしてまずは目の前の事に集中しよう。

そう思った俺が家のチャイムを鳴らしてから暫しの後、玄関の扉が開いて中から一人の少女が顔を出す。

「あ、こんにちは朝陽さん！」

「こんにちは亜里沙。絵里は中にいるかな？」

「お姉ちゃんなら部屋で何かをしていますよ。呼びましょうか？」

「いや、私が直接絵里の部屋に行きたいのだが。いいだろうか？」

「わかりました、中へどうぞ」

「お邪魔します」

笑顔で頷いた少女——亜里沙に促され、俺は絵里の家へと入った。

そのまま亜里沙に絵里の部屋まで案内されて、扉の前で立ち止まる。

「お姉ちゃん、朝陽さんがお姉ちゃんに用事だつて」

『……中に入れてちょうだい』

亜里沙の言葉を聞いて、暫しの沈黙の後に絵里がそう告げた。

直接扉を開けにこない絵里に、不思議そうに首を傾げていた亜里沙は、振り返つて俺の方へと顔を向ける。

「お姉ちゃんがそう言っていますので、亜里沙はこれで」

「あ、これお土産」

「ハラシヨー！ ありがとうございます！」

俺が渡したお土産を受け取り、亜里沙は嬉しそうな笑みを浮かべた。

そして、そのまま亜里沙はお茶を用意してくると言つて去つていった。

絵里と同じ口癖を呟く亜里沙に思わず笑みが漏れつつ、俺は扉を開けて絵里の部屋に入っていく。

「絵里」

「ちよつと待つてて、今いい所だから」

俺に背中を向けたまま、絵里は机に齧りついて何かを一心不乱にしていた。

その言葉の通りに俺は腰を下ろし、どこか必死な様子を見せる絵里を静かに眺める。暫し間、この部屋には時を刻む音しか聴こえず、絵里の部屋は嫌な沈黙に包まれていた。

やがて、やっている事に一区切りが着いたのか、絵里は椅子ごと振り返つて俺の方へと顔を向ける。

「それで、突然どうしたの？」

「いや、絵里の様子が気になつてね」

「ふーん……高坂さん達のついでで？」

「どうしてそうなるのさ」

ジト目で俺を見つめる絵里にそう返せば、彼女はツーンとそっぽを向く。

そういうえば、絵里が穂乃果に嫉妬をしてるって希先輩が言っていたな。

つまり絵里は、自分より穂乃果達スクールアイドルを優先していて怒っているという事か？

なんていうか、今の絵里は子供っぽくて可愛らしい。

「別にいいのよ？ 私の事を気にしないでよ」

「そんな事を言わないでほしい。あ、これ絵里へのお土産」

「そんな事じゃ誤魔化されないわよ……ハラシヨー！」

俺が渡したお土産の中身を見て、絵里は興奮したような声を上げた。

うん、とりあえず気に入ってもらえたようだな。

今俺が渡したのは、絵里が好きな店で販売しているチョコだ。

それで、絵里は自分の大好物をお土産に貰って嬉しくなったのだろう。

ともかく、絵里は満面の笑みでこちらまで近づき、勢いよく俺の手を握る。

「ありがとう朝陽！ これで私はまだ闘えるわ！」

「いや、一体何と闘うつもりなんだい？」

俺の疑問には答えず、早速チョコを一つ頬張る絵里。

そして、幸福の絶頂にいるかのように身悶えした後、絵里は頬に手を当ててうっとり目を細める。

うん、一々仕草が大袈裟だと思わなくもないが、それほど絵里はチョコが好きなのだろう。

とりあえず、絵里の機嫌が直ったようで良かった。

そんな風に考えていた時、扉からノックの音が響く。

「お茶を持ってきたよ」

「ありがとう、亜里沙」

「そこに置いといて」

「はい。では、ごゆっくり」

絵里が示したテーブルの上に置いた亜里沙は、俺の方へと頭を下げて去っていった。

お茶の中身は俺がお土産で渡したハーブティーのようで、絵里の部屋に爽やかな香りが漂いだす。

「あら、この匂いは？」

「亜里沙にお土産で渡したハーブティーさ」

「へー、ハーブティーね。……あ、美味しい」

「気に入ったようで良かったよ」

リラックス効果があるものを店員に聞いて買ってみたんだが、どうやら絵里の口に合ったみたいだ。

これで少しでも絵里の疲れを癒す事ができたなら良いんだが……。

そんな事を考えつつ、暫く絵里と雑談を交わしていく。

「朝陽も飲んでみて」

「じゃあお言葉に甘えて……確かに、さっぱりして美味しい」

「朝陽の言う通り、このハーブティーは飲みやすいわよね」

絵里は俺の言葉に笑顔で頷き、亜里沙がお茶請けに置いていったクツキーを口に含む。

俺もクツキーを手にとって食べてみると、口の中で仄かな甘味が広がる。

うん、このハーブティーともよく合っているし、亜里沙のチョイスは素晴らしい。

ともかく、カップを傾けて喉を潤している絵里に、俺は机の上に目を向けながら口を開く。

「そういえば、絵里はさつきまで何をしていたんだい？」

「え？ ああ、ちよつと音ノ木坂の廃校を止める方法を探していたのよ」

「音ノ木坂の？」

「そ。生徒会でも色々と議論しているんだけど、思うような成果が出なくて」

そう告げると、絵里は憂鬱そうにため息をついた。

そして、そのまま絵里は自嘲げな笑みを浮かべて俺を見つめる。

「絵里？」

「情けないわよね。あれだけ朝陽達に啖呵を切っておいて、まともな案一つ思い浮かばないなんて」

「そんな事ないと思うけど」

「ううん。希達にも迷惑をかけているし、やっぱり私は情けないわ」

俺の言葉にも首を横に振り、絵里は目を伏せた。違う、絵里はよく頑張っている。

音ノ木坂の事を一番考えているのは絵里だし、そのために最も奔走しているのも絵里だ。

そんな風に励ましの言葉を告げるのは簡単だろう。

でも、今の絵里にそう慰めても、真面目に聞いてくれるように思えなかった。

……今の俺にできる事はなんだろうか。

目の前で困っている友達一人救う事すらできない。

そんな自分が嫌になり、歯がゆく思う。

そんな風に自己嫌悪する気持ちを抑えながら、俺は絵里の顔を上げさせて目を合わせます。

「絵里。私は絵里が凄く頑張っている事を知っている」

「朝陽？」

「一生懸命廃校をなんとかしようとして足掻いているも知ってるし、そのために一人で何もかも背負い込もうとしているのも知っている」

「そ、そんな事……」

弱々しく否定の声を上げ、目を逸らそうとする絵里。



それに対して、絵里の顔を抑えた俺は真っ直ぐその蒼い瞳をのぞき込む。

「機密上の関係で私に話せない事があるのはわかっている。でも、少しぐらいは私に頼ってくれないか？ 私はいつでも絵里の味方だ」

「でも、これは生徒会長としての——」

「絵里！」

俺の強い口調に、絵里はビクリと肩を震わせる。

そして、瞳に疑問の色を宿した絵里へと俺は語りかけていく。

「絵里にとって、廃校を止める事は義務感からかい？」

「違うわ！ 私はただお祖母様の母校を救いたくて！」

「じゃあ、絵里自身はどう思っているのかな？」

「私、自身？」

「そう。絵里自身の気持ちを聞かせて」

そう言つて俺が抑えてた手を離せば、絵里は考え込むように俯く。

そんな絵里の様子を、俺は近くで腰を下ろして静かに見つめる。

暫く部屋が静寂に包まれていると、やがて絵里は顔を上げた。

「私は、朝陽や希達との思い出が詰まった音ノ木坂を廃校にしたくない」

「それは生徒会長だからかい？」

「いいえ、これは私個人の気持ちよ」

そう告げると、俺の方へと力強い視線を送る絵里。

どうやら、絵里の中で何かしらの結論が出たらしい。

そして、その瞳の輝きから結論が良い内容だという事も。

……これで、いいんだろうか。

本来の物語ならば、この時点で絵里はまだ余裕がなかったはずだ。

しかし、俺が動いた結果、絵里はどこか余裕を取り戻している。

これで、本格的に物語とは展開が変わってしまう。

その影響がどこまで広がり、どこまで変化するのだろうか。

いや、ここは物語の中じゃない。

今ここにいるのは、俺の友達である絵里。紛れもなくここにいるのだ。

そんな事を考えながら、俺はこちらを見つめる絵里を見返す。

「その個人の気持ちを手伝いたいと思うのに、理由はいるかい？」

「……いらなと思うわ」

「では、改めて。私の事を頼ってくれないか、絵里？」

俺の問いかけに、絵里は数瞬迷うように目を泳がせる。

しかし、絵里は直ぐに気持ち固まったのか、真剣な表情を浮かべて俺の方へと頭を

下げる。

「お願い、朝陽。廃校を止めるための知恵を貸してちょうだい」

「喜んで！」

「——ありがとう」

俺の返事を聞いて頭上げた絵里は、花が咲くように頬を綻ばせた。

そして、絵里は目許に指を当て、じんわりと滲んでいる涙を拭う。

「じゃあ早速対策会議を開こうか。私なりに調べて資料を作ってみたんだけど」

「え、朝陽ったらそんなの作ってたの？」

「うん。それで、調べてみてわかった事なんだが——」

「なるほど、じゃあこっちは——」

鞆から取り出した紙の束を見て、絵里は驚いたように目を見開く。

それに笑みを返しつつ、俺はある項目へと指を這わして説明していく。

そして、そのまま亜里沙が夕御飯を知らせにくるまで、俺達は様々な議論を交わして

いくのだった。

……なお、時間も遅かったので絵里達の夕飯のご同伴に預かる事となった。

## 第十七話　START：DASH!!

「——ワン、ツー、スリー、フォー」

絵里の様子を見にいった日から数日後。

現在、俺達は神田明神でダンスの練習をしていた。

また、他にも俺が踊らない事で色々と一悶着あったが、まあそれは置いておこう。ともかく、俺の手拍子に合わせて穂乃果達は身体を動かしていく。

「穂乃果、前に出すぎ」

「ごめーん」

「ことり、二人から遅れているよ」

「は、はーい」

「海未、もつと手の振りを大きく」

「すみません」

穂乃果達を注意深く観察していき、気が付いた事を報告する。

それを聞いて、穂乃果達は直ぐにダンスの動きを直す。

うん、とりあえずはある程度形になってきたな。

A—RISE等と比べたらまだまだただけど、素人に毛が生えたぐらいには動けている。

「はい！ 今から十分休憩」

「たーっ！ 疲れたー」

「脚が重たいよお」

「穂乃果達も体力がついてきましたね」

俺の言葉に座り込む穂乃果達に対して、海未は僅かに汗を滲ませているだけだ。

やはり、普段から身体を動かしているからか海未は体力がある。

まあ、穂乃果達も体力がついてきたのでそちらも大丈夫だろう。

後は、ダンスの技術とライブ中に笑顔でいられる事——

「……あああ……!?!」

「あれ、今何か聴こえなかった？」

「うーん、気のせいじゃないかなあ」

唐突に耳に入った音に、穂乃果とことりは不思議そうに首を傾げた。

それに対して、穂乃果達よりはつきり聞こえたのか、海未は表情を引き締めて俺の方へと顔を向ける。

「朝陽、今のはもしかして」

「海未達は休憩しておいて。私が確認してくるから」

「いけません！　ここは警察に連絡を」

「待つんだ海未。あれは知り合いだから大丈夫だ、多分」

「本当ですか？」

携帯を片手に俺を見つめる海未に、笑みを返す。

まさか、海未が警察を呼ぼうとするのは予想外だった。

うん、普通なら通報してしまうよな。悲鳴らしき声が聞こえたんだし。

ともかく、心配そうな眼差しを送ってくる海未に見送られ、俺は階段を降りていく。

「あ、朝陽ちゃん。やつほー」

「ぶええ!?!」

角から顔を出すと、そこには案の定巫女服姿の希先輩に、自分の身体を抱いて頬を赤らめている西木野がいた。

俺に気が付きにこやかに手を振る希先輩に対して、西木野は奇妙な声を上げて勢いよく後ずさる。

えっ、その反応は傷つく。俺って西木野に避けられているのだろうか？

「うん、何事もなくて良かった」

「じゃあ、ウチはもう行くな。バイバイ」

「あ、ちよつとっ!」

手を伸ばして引き止める西木野を無視して、希先輩はさっさと階段を登ってしまった。

希先輩がいなくなる事でどこか気まずげな空気が漂いはじめ、西木野は視線をあちこちに飛ばしている。

かくいう俺も、突然の事になって声を掛ければいいか思いつかない。

……とりあえず、ここにいた理由から聞くとしよう。

「なんで西木野はここに?」

「え? えーつと、あれよ。たまたま学校の帰り道に通っただけよ」

「へー、そうなんだ。私はてつきり穂乃果達の様子を見にきたんだと思ってたよ」

「なっ! そんな事ないわ。貴女の勘違いじゃないかしら」

相変わらず認めないその姿勢は、流石西木野と言うべきか。

ともかく、西木野が穂乃果達へと本格的に興味を持つてくれたようだ。

これは恐らく、穂乃果が奮闘したお蔭だろう。

「では、私はもう行くよ。……改めて、作曲をお願いします」

「……まあ、気が向いたらね」

そう告げると、西木野は踵を返して去っていった。

先日とは違うその返事に、俺は内心で嬉しく思いつつ階段を登っていく。

西木野の心境の変化の原因は、これも恐らく穂乃果が説得してくれたからだろう。

やはり穂乃果は凄い。俺ではできなかった事をいとも簡単にやってくれる。

「おかえりなさい、朝陽。それで、どうでしたか？」

「私の想像通り、知り合いがふざけていただけさ」

「ほっ……何事もなくて良かったです」

穂乃果達の元へ戻ってきた俺へと、海未がそう尋ねてきた。

それに肩を竦める事で返してから、俺は休憩が終わり柔軟体操を始めている穂乃果達に目を向ける。

「では、時間も押している事だし練習を再開しようか」

「おーい！ 早くやろうよー！」

安堵したように息を漏らしている海未にそう告げ、手を振ってくる穂乃果達の元へ足を進めていく。

そして、背後から近づいてくる海未の足音を耳に入れながら、俺は頬を一度叩いて気合を入れ直すのだった。



ファーストライブまでの時間が近づいてきた時の事。

やけに機嫌の良い様子を見せる穂乃果に連れられ、俺達は屋上へと来ていた。

理由を話さず連れてきた穂乃果に、ことりは不思議そうに首を傾げ、海未は訝しげな眼差しを送っている。

「それで、私達を屋上に集めてどうしたんですか？」

「ふっふっふー、ついにできたんだよ」

「できた？」

こどりの疑問にも答えず、穂乃果は口をニマニマと緩ませるのみ。

そんなどこか不気味な穂乃果を見て、海未は益々不審そうに見ていた。

また、流石にことりもこれには引いているようだ。頬が僅かに引き攣っている。

正直、おおよその予想がついていた俺からしてみれば、穂乃果の嬉しさがわからなくもない。

ともかく、これ以上勿体ぶつても意味がないと思ったのか、穂乃果は笑顔で一枚のCDを差し出す。

「今朝ね、家のポストに入ってたんだ」

「これは、CDですか？」

「どうしてCDが……もしかして！」

何かに気が付いたように大きく目を見開くことり。

その数瞬後、海未も思い当たったのか徐々に表情に驚きの色を浮かべていく。

そんな海未達の様子を見た穂乃果は、ゆつくりと頷き俺達を見回す。

「そう、これは穂乃果達の曲。——*μ's*の歌だよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ことり達の歌!？」

「わわっ! 顔が近いよ二人共——!」

愕然とした声を上げて詰め寄ってくる海未達に、穂乃果は慌てたように手を突きだし

宥めている。

その様子を傍観していた俺も加わって海未達を落ち着けさせた後、穂乃果が事前に準備しておいたパソコンの前に腰を下ろす。

「本当に私達の歌ができるとは……」

「なんか実感が湧かないなあ」

「まあ、そのうち実感するさ」

「じゃあ、CDを再生するよ?」

真剣な面立ちで尋ねる穂乃果に、海未達は固唾を呑んだ様子で頷く。

そして、パソコンにCDをセットして穂乃果は曲を再生させた。

「海未ちゃんの歌詞が曲になってる……」

「これが……」

「私達の歌……」

パソコンから流れはじめるメロデー。

ピアノの伴奏と西木野の声が響き、俺達はその歌に惹き込まれていく。

それから、俺達はCDの再生が終わるまで声を上げる事ができなかった。

やがて、CDの再生が終わると俺達は揃って感嘆のため息を零す。

「凄い、凄い凄い凄いよ! これが穂乃果達の歌なんだね!」

「うん! ……ことり達の歌だよ!」

「そう、ですね」

笑顔ではしゃいでいる穂乃果達に対して、海未はどことなく歯切れが悪い。

そんな海未の姿を見て、穂乃果達は顔を見合わせ首を傾げる。

「どうしたの海未ちゃん? 曲ができて嬉しくないの?」

「そ、そういうわけではないんですが」

穂乃果の問いかけに曖昧な表現で答え、海未はチラチラとパソコンの方へと目を向けている。

うーん、海未がそこまで素直に喜べない理由か。

やたらパソコンを気にしているけど……あ、もしかして。

ある事に思い当たった俺は、僅かに目を泳がせている海未の傍に近づき、耳元でそつと囁く。

「自分の歌詞が曲になって、改めて恥ずかしくなったのかな？」

「なあっ!？」

「い、いきなり大声を上げてどうしたの？」

「なanananんでもありませんよ！ ええ、なんでもありませんとも！ 少し失礼します」  
明らかに動揺している様子を見せる海未。

そのまま不審そうな穂乃果の眼差しを無視して、海未は俺の手を握って穂乃果達から離れた場所まで連れていく。

穂乃果達から充分離れた所まで俺を連れてきた海未は、頬を赤らめながら口を開く。

「いいですか、朝陽。私は恥ずかしがっていません」

「いや、どう見ても恥ずかしがって——」

「いません！」

俺の言葉をピシヤリと遮り、海未はそう告げて睨めつけてきた。

うん。海未が恥ずかしがっていいのはわかったから、俺を睨みつけるのは止めてほしい。

そんな風に思いつつ、俺は海未の肩を二度叩く。

「まあ、どの道これからも海未が歌詞を創る事になるし、そのうち慣れるさ」

「だから私は恥ずかしがって等……へ？」

「だってそうだろう？ 穂乃果は当てにならないし、ことりは衣装を優先してもらいたい。もちろん私も手伝うが、歌詞制作のメインは海未になると思うよ？」

「……そうでした。これからもあるんです」

そう呟きガツクリと項垂れた海未。

このファーストライブで廃校が阻止できれば文句ないのだが、そんな都合の良い事が起きるわけない。

このファーストライブは、いわゆるスタート地点だ。

これから、海未達は何度も歌を創り、ライブをする事になるだろう。

つまり、その度に作曲や歌詞を創らなければいけないわけで……。

まあ、海未ならなんとかなるだろう。

「そもそも、どうして海未は恥ずかしがっている事を隠しているんだい？」

「うぐっ……」

「隠してもバレバレだからね？」

改めて俺から告げられ、海未は誤魔化しても無駄だと悟ったらしい。

諦めたようにため息をついた後、海未は目を逸らしながら自分の指を絡ませる。

「……あの時、こどりに言われた事が」

「あの時？」

「その、羨ましそうにぬいぐるみを見てるって」

「あー、海未が可愛いもの好きだって話？」

「はい。朝陽にはバレているので話しますが、あの時はつい見てないと嘘をついてしまいました」

「それと歌詞になんの関係が？」

「いえ、特にはないです」

「ないのかよ！」

そんな内心のツツコミはさておき、一体海未は何を言いたいのだろう。

うーん、海未の性格からしてもつとはつきり言うのかと思っていたのだが。

ともかく、俺は海未の言葉に返事をするために口を開く。

「結局、海未は何が言いたいんだい？」

「ええと、つまりですね」

「まさか、咄嗟に口から出ただけ？」

「……はっ」

容量の得ない海未に、俺が思いついた事を告げると、彼女は頬を引き攣らせて頷いた。え、何そのしようもない理由。

つまり、俺が言った言葉へ咄嗟に言い返したのはいいが、その後を考えていなかったって事か？

なんだろう。海未ってここまでポンコツだったのだろうか。

まあ、人間なら間違った事を言う時もあるよな。

そんな事を考えている間に、いつの間にか海未は頭を抱えていた。

「海未？」

「私だって失敗したと思いましたよ。でも、つい昔の記憶が蘇ってノリに乗ってしまったんですよ。そんな暴走の象徴とも言える曲を目の前で聴かされて、一体私はどういう顔をすればいいんですか！」

呟きの途中から俺の襟首を握り、前後に揺さぶっていく海未。

涙目でそう告げる海未を見て、俺は内心で吐き気を堪えながら口を開く。

「とりあえず、穂乃果達に正直に言っても問題ないと思うよ」

「それでは穂乃果達にからかわれるじゃないですか！」

「別にいいじゃないか」

「うう……」

なんとか海未を抑えてそう返せば、彼女は恨めしげな声を上げて俺を見つめた。

その視線を努めて無視して、俺は穂乃果達の方へと目を向ける。

穂乃果達は疑問に満ちた目で俺達を見ており、その事を海未の肩を叩いて教える。

「ほら、穂乃果達も待っているから戻ろう。正直に歌詞を聴いていて恥ずかしかつたつて言おう」

「……わかりました」

渋々といった様子で頷いた海未を連れ、俺達は穂乃果達の元へ戻った。

やっと戻ってきた俺達に、穂乃果は不思議そうに首を傾げて口を開く。

「二人はなんの話をしていたの？」

「大した事は話していないさ」

「それで、どうして海未ちゃんはさつき変な顔をしていたの？」

「海未は自分で創った曲を聴いて複雑な気持ちになつていたみたいだ」

「ここの問いにそう返すと、穂乃果達は顔を見合させた。

そして、揃って呆れたような表情を浮かべて首を横に振る。



「海未ちゃんがそう思うのは……ねえ？」

「うん、わかってた事だよね」

「へ？」

「海未ちゃんって照れ屋さんだから」

「わかりやすいし」

素っ頓狂な声を上げて固まる海未を尻目に、穂乃果達は言葉を続けていく。

「でも、別に恥ずかしがる事ないと思うけどなあ」

「うんうん。すつごく良い歌詞だったよ、海未ちゃん？」

「あ、ありがとうございます……」

笑顔でそう言った穂乃果達。

それに、海未は耳まで真っ赤にしながら消え入りそうな声で呟く。

えっと、とりあえず上手く纏まったの、かな？

まあ、なんにせよ海未もそのうち慣れるだろう。

いや、海未の場合その羞恥は治らないかもしれない。

「そういえば、この曲名はなんて言うの？」

そんな風に考えていると、不意に穂乃果が海未へと尋ねた。

それを聞いた海未は、どこか誇らしげな笑みを浮かべる。

「今回のコンセプトは、旅立ちやスタート等と言った希望や未来を想う歌詞です」

「おお！ 穂乃果達にピッタリなテーマだね」

「うん、ことりもいいと思うな」

そんな穂乃果達の感想に、海未は嬉しそうに頬を綻ばせる。

そして、海未は俺達の視線を集めてから口を開くのだった。

「希望に溢れた私達の歌の曲名は——」

——START:DASH!!

## 第十八話 脱・海未の人見知り克服計画

「海未ちゃん、大丈夫？」

「無理です……」

「どうしよう……」

心配そうに尋ねてくる穂乃果へと、海未は体育座りのまま緩やかに首を横に振った。また、どこか不安げな海未の様子を見て、ことりは困ったように頬に手を当てている。そんな穂乃果達の姿を尻目に、俺はここ数日の出来事を思い返していた。

海未がファーストライブで歌う曲名を告げた後。

初めてμ'sに票が入って喜びを交わしあったり、朝練の様子を見にきた西木野に穂乃果達の歌を聴かせたり。

色々と順調に日々を過ごしていたのだが、チラシ配りをしている今朝方に問題が発生してしまったのだ。

登校時に教室で見ってもらうために、俺達は朝早く学校へと来てチラシを配っていた。

とりあえず、生徒達がチラシを受けとつてくれて手応えを感じていたのだが……

『ねえねえ、今ここでダンスを見せてよ』

『いいですよ！ お客さんにはおまけしてあげますね』

『ライブに来てくれるなら、さらにもう少しおまけします〜』

『行く行く！』

チラシを受けとつた上級生がそう尋ねると、穂乃果達はにっこり微笑んで踊る体勢になる。

そしていざ踊ろうとしたのだが、いつの間にか海未がいなくなっていたのだ。

『あれ、海未ちゃんは？』

『朝陽ちゃん、海未ちゃんがどこに消えたかわかる？』

『海未なら学校に入つていったよ』

『えー!?!』

そう告げて学校を指差せば、穂乃果達は驚愕した声を上げた。

そのまま穂乃果達は呆気にとられた様子を見せる上級生達を置いて、海未を追うために学校へと入つていく。

『え、ええと？』

『すみません。もう一人のメンバーは用事があつたみたいで、先輩方にダンスを見せら

「れませんでした」

『そうなの?』

『申し訳ありません。楽しみはライブ当日まで取っておく、という事で納得していただけないでしょうか?』

『ま、まあ他の人達も行っちゃったしねえ』

『ありがとうございます。では、私もこれで失礼します』

頭を下げてから、俺も穂乃果達を追う。

海未が行きそうな場所を考えた結果、屋上へと赴くと案の定そこにいた。そして現状に至る、と。

「——もしかして、ライブまでの日が近づいてきて緊張しちやっただ?」

俺が思考から離れると同時に、ことりが心配そうな面立ちでそう尋ねた。

その言葉に海未はコクリと頷き、そのまま膝に顔を埋める。

「海未ちゃんって、チラシ配りもあまりできていなかったもんね」

「すみません……」

「どうしよう、朝陽ちゃん」

「うーん、穂乃果は何か思いつかないかい？」

俺がそう水を向けてみれば、穂乃果は顎に手を添えて悩む素振りを見せる。

暫くすると何かを閃いたのか、穂乃果は顔色を明るくして海未へと笑いかけた。

「海未ちゃん、皆を野菜だと思えばいいんだよ！」

「野菜、ですか？」

「そうそう！」

海未は穂乃果の提案を頭に思い浮かべてみたのだろう。

暫し虚空を眺めていた海未だったが、やがて薄らと頬を赤らめて涙目になっていく。

「わ、私に一人でライブをしろと言うのですか!？」

「ええ!?! なんてそうなるの!?!」

「あはは……」

悲痛な叫びで伝える海未に、穂乃果は驚愕した声を上げた。

そんな二人の様子を見て、ことりは苦笑いを浮かべている。

うん、俺も海未が何を言っているのか理解できない。

いや、海未がどうしてそういう結論に至ったのかはわかる。

だが、いくらなんでも突拍子すぎるだろ。

「やはり私には無理だったんです。すみません、穂乃果。どうやら私はここまでのよう

です」

「海未は何わけのわからない事を言っているんだい？」

「うーん……よし、特訓だ！」

「特訓？」

拳を突きあげてそう宣言した穂乃果。

その言葉にことりがオウム返しに尋ねると、穂乃果は大きく頷き笑みを浮かべる。

「穂乃果の虹色の頭脳に任せれば大丈夫！」

「に、虹色の頭脳？」

なんだその気色悪い脳みそは。

もしかして、穂乃果は灰色の脳細胞とでも言いたいのだろうか。

……うん、ありえそうだ。

ともかく、穂乃果はそのまま口許を緩ませながら、俺達を見回していく。

「名付けて脱・海未ちゃんの人見知り克服計画！」

「えっと、その計画の内容は？」

「ふっふっふ。まあ、とりあえずは名探偵穂乃果に任せたまえ。って事で、皆は放課後を

楽しみにしててね！」

意味深な笑い声を零した穂乃果は、上機嫌な足取りで屋上から去っていった。

そんな穂乃果を見送った俺達は、お互いの顔を見合わして首を傾げる。

「穂乃果ちゃんどうしたんだろう?」

「名前から私に關する事のようにですが」

「とりあえず、私達も行こうか」

その言葉にことり達が頷いたのを確認してから、俺達も穂乃果の後を追うべく屋上を後にするのだった。

「——さあ、ここなら思う存分練習できるよ!」

チラシを手に持つ穂乃果がそう告げ、満面の笑みを浮かべた。

それに対して、海未は頬を引き攣らせながら目を回している。

うん、まあなんとなく予想は着いていたよ。

現在、俺達は秋葉原の駅前にいた。

今日の授業が終わるまでずっとニヤニヤしていた穂乃果に、海未達が胡乱げな眼差し



を送っていたのは記憶に新しい。

そして、授業が終了するのと同時に穂乃果に連れられ、俺達は秋葉原へと赴いたというわけだ。

「よし、海未ちゃん。ファイトだよ！」

「ほ、穂乃果。人が沢山います！」

「当たり前だよ！これは海未ちゃんの人見知りを治すための作戦なんだから！このチラシを配り終われば、ライブの時も緊張しなくなるよね？」

「し、しかし……」

穂乃果にそう促されるが、海未は戸惑った様子で辺りを見回している。

そんな海未の姿を見て、穂乃果は眉尻を上げてことりの方を指差す。

「もう、海未ちゃんしっかりして！ことりちゃんを見てみてよ」

「お願いしま〜す」

「なっ!?!」

柔らかい笑顔で通行人へと手早く渡していることりに、海未は目を剥いて驚愕した声を上げた。

それにしても、ことりは凄いな。あつという間にことりのチラシの数が減っていく。

通行人達にさり気なくチラシを配るその手腕は、もはやことりの才能といってもいい

だろう。

いや、才能というよりことりの努力の成果か。

そんな風に考えている間にも、穂乃果達は会話を続けていく。

「ほら、海末ちゃんも挑戦してみて？ 皆は野菜なんだから大丈夫だよ！」

「な、なるほど。……あれは野菜あれは野菜あれは野菜あれは野菜——」

穂乃果の言葉に頷いた後、海末はブツブツと同じ言葉を反芻しはじめた。

そんなどこか不気味な海末の様子を見て、穂乃果は呆れたような表情を浮かべる。

「海末ちゃんって、最近はおっほっほいね」

「——あれは野菜あれは野菜あれは野菜……はっ！ 園田海末、行きますー！」

穂乃果の呟きは耳に入らなかったのか、海末は目を見開くとキリリとした面立ちになる。

そして、そのまま素早い動作で海末は人混みの中へ消えていった。

それを見て、穂乃果は俺の方へと顔を向けて首を捻る。

「海末ちゃんが行っちゃったけど、問題ないのかな？」

「まあ、海末の顔からして大丈夫だろう。多分」

「うん、海末ちゃんなら大丈夫だよ。よーし、穂乃果達も頑張るぞー！」

それから、俺達は笑顔を意識しながら通行人にチラシを配っていく。

早めにチラシを配り終わったことりに手伝ってもらい、俺達は無事に手元のチラシを消費する事ができた。

「お疲れー」

「チラシを配る時の笑顔はライブでの練習になったかな？」

「うん、ライブではいつも笑顔じゃなきゃいけないもんね」

「ところで、海未ちゃんは大丈夫だったのかな？」

心配そうに眩きを漏らした穂乃果。

その言葉に、俺とことりは自然と海未の姿を探す。

結局、あれからチラシを配っている時に海未を見つけれなかったのだ。

海未もしつかりとチラシを配っていたら良いのだが……

「あ、あそこー」

ことりがそう声を上げてある方向を指差す。

その指の先を追った俺の視界に入ったのは、ガチャガチャの前でしゃがみ込む海未の背中だった。

そのどこか哀愁漂う様子に、俺達はお互いの顔を見合わせてから近づく。

「ふ、ふふ……私にはやはり無理でした。野菜が喋るといふ超常現象には対応できませんでした……あ、レア物ゲットです」

『……はあ』

ガチャガチャのカプセルを開き、海未は嬉しそうに眩きを漏らした。

……うん、駄目だったんだな。

結果を聞かなくてもわかってしまう海未の様子を見て、俺達は揃ってため息をつくのだった。

「——今度は大丈夫なはず！」

ガチャガチャに小銭を投資していく海未を慰めた次の日の放課後。

俺達は現在、音ノ木坂の門の前にいた。

あれから、穂乃果が第二プランとして提案した作戦が、ここで生徒達にチラシを配るという事だ。

元々早朝から生徒達に配っていたので、海未にとってもやりやすいという判断だろう。

まあ、今まで海未がまともにチラシを渡せた事等なかったが。

ともかく、そう告げて気合い十分な様子を見せる穂乃果に対して、海未はどこか不安げに俺達を見つめている。

「あ、あの。本当に大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ海未ちゃん。ここなら知り合いもいるから渡しやすいでしょ？」

「それは、そうですが」

「ほら、もうひとりちゃんはチラシを配っているよ？」

「私達<sup>々</sup> sのファーストライブです。新入生歓迎会の日には、ぜひ見に来てください  
」

流石ことりと言うべきか。

昨日の時より、チラシを配る手腕が上達している。

相手を不快に思わせない距離感で声を掛け、さり気なくチラシを配る。

俺では絶対にできないであろうそんなことを見て、海未は不安げに揺らしていた瞳に決意の色を宿す。

「お、お願いします！<sup>々</sup> sのファーストライブに来てください！」

近くを通りがかった生徒へと、海未は若干声の上擦りつつも無事にチラシを渡す事に成功した。

それで勢いづいてきたのか、海未は徐々に自然な笑顔でチラシを配っていく。そんな海未の背中を穂乃果は優しい顔で見つめ、頬を緩ませる。

「これで海未ちゃんは大丈夫そうだね、朝陽ちゃん」

「そうだね。さて、私達もチラシを配らなきゃ」

「うん、そうだね。……新入生歓迎会の日に、sのファーストライブをやりまーす！

ぜひ見に来てくださいー！」

元気な声を上げてチラシを配りにいった穂乃果を尻目に、俺は近くを通りががった上級生……というより、矢澤先輩にチラシを突きだす。

「どうぞ、矢澤先輩」

「……あのねえ。そのチラシは前に貰ったばかりじゃない。それに、あっちの人にも貰ったし」

「まあまあ、いいじゃないですか。コレクションだと思つて受けとつてください」

「意味わからないわよ！ 大体コレクションって何？」

「保存用、観賞用、布教用です」

「なんでチラシを保存すんのよ！ しかも観賞用って……まあ、布教用ならなんとなく意味はわかるけど」

「という事で、どうぞ」

「あんだ私の話を聞いてた？」

流石に冗談が過ぎたか。

ジト目でこちらを見つめている矢澤先輩に、俺は手元にチラシを戻してから口を開く。

「一応、念押しです。矢澤先輩に限って約束を破る事はしらないと思いますが、ファーストライブにちゃんと来てくださいね」

「……わかつてるわ」

「席に隠れたりしないでちゃんと座ってライブを見てくださいね」

「……わ、わかつてるわ」

隠れながらライブを見ようとしていたな、絶対。

気まずそうに視線を逸らしている矢澤先輩を見ると、そう思わざるをえない。

まあここで釘を刺しておいたので、当日はちゃんと椅子に座ってライブを見てくれるだろう。

ともかく、そんな矢澤先輩へと頭を下げてから踵を返す。

「では、チラシ配りがあるので私はこの辺りで」

「はいはい。ま、せいぜい無様な姿を見せない事ね」

「さようなら、矢澤先輩」

俺の挨拶に手を上げて応えた矢澤先輩は、そのまま去っていった。

その遠ざかっていく背中を見送った後、俺は生徒達にチラシを配りながら穂乃果達を探す。

「あ、あの！ 絶対にライブ、見にいきます！」

「おお、本当に!? ありがとう！」

「では、貴女には一枚二枚と言わずこのチラシ全部を」

「海末ちゃん……」

「す、すみません」

穂乃果達を見つけた時には、小泉へと海末が手元にあるチラシを全て渡そうとしていた所だった。

それを見て穂乃果は呆れたような表情を浮かべ、小泉はアワアワと手を振って恐縮するように横に首を振っている。

うん、とりあえず穂乃果達は大丈夫そうだな。

海末もチラシを配れるようになってるし、後はライブに来てくれるかどうか、か。

……いや、穂乃果達の頑張りを信じよう。

胸中に渦巻く不安な感情に蓋をしつつ、俺も穂乃果達に負けじとチラシ配りを再開するのだった。



## 第十九話 ファーストライブ

——遂に、μ、sのファーストライブ当日となった。

海未の人見知りを克服する計画をしてからも色々とおつたが、無事にこの日を迎える事ができた。

まあ、色々と言っても完成したライブ衣装のスカート丈を見て、海未が愕然としてこたりに詰め寄ったり、改めて神田明神でファーストライブ成功の祈ったりしたぐらいだが。

ともかく、この一ヶ月の成果をいよいよお披露目というわけだ。

そして現在、俺は穂乃果達と一緒に衣装室に来ていた。

穂乃果とことりはお互いの衣装を見て褒めあつており、そして海未が更衣室に入つて着替えている最中。

「穂乃果ちゃん可愛い〜!」

「ことりちゃんもよく似合ってるよ〜!」

「そうかなあ……?」

笑顔で告げた穂乃果の言葉に、ことりはどこか不安げな表情で俺を見つめる。それに俺が頷きを返せば、ことりは照れくさそうに微笑む。

穂乃果達の衣装はそれぞれのイメージカラーになっていて、ことりは緑色だ。ヒラヒラのスカートに、白のニーハイソックス。

……うん、親父臭いけど俺にとっては眼福な光景だな。

「海未ちゃんまだー?」

「も、もうすぐです」

「海未ちゃんの衣装姿楽しみ!」

「海未は青色の衣装だったよね」

「うん。海未ちゃんにピッタリな色にしたんだ」

俺とことりが雑談を交わしていると、衣装室のカーテンが開いた。

その音を聞いた穂乃果達は、期待に満ちた表情で衣装室へと目を向ける。

「ど、どうでしょう?」

「おお……うん?」

「海未ちゃん可愛い……あれ?」

俯き気味に出てきた海未を見て、感嘆の声を上げていた穂乃果達。

しかし、完全に海未の姿を目に入れると、穂乃果達は不思議そうに首を傾げる。

うん、海未は何故ジャージを着ているんだろうか。

いや、海未の性格上こうなる事はわかっていたが、改めて衣装スカートから伸びる赤いジャージはシュールすぎるだろ。

ともかく、そんな海未の小さな抵抗を見た穂乃果は、呆れたような表情を浮かべて海未に近づいていく。

「海未ちゃん？　ここまで来てこれは？」

「その、鏡が」

「鏡？」

オウム返しに尋ねる穂乃果に、海未は頷いてカウンターに置いてある鏡へと目を向ける。

「あれに映る自分を見ると恥ずかしくなってる。」

「もー！　往生際が悪いよ海未ちゃん！」

「で、ですが……」

「見てられないよ。えいつ！」

「嫌あー!?!」

穂乃果に勢いよくジャージをずり下げられ、羞恥の悲鳴を上げる海未。

そのままスカートを抑えて頬を赤らめている海未だったが、笑みを浮かべた穂乃果によつて姿見まで連れていかれる。

「ほら、見てみてよ海未ちゃん！ とつても似合ってるでしょ？」

「そうだよ！ ことり達の中で一番可愛いよ、海未ちゃん？」

「うう……朝陽はどう思いますか？」

不安げな表情で尋ねてくる海未に、俺は微笑みを返す。

「凄く似合っている。もつと自信を持つていいんだよ、海未」

「……恥ずかしいです」

「よーし、衣装を着てもう一度練習だー！」

「あ、待つてよ穂乃果ちゃん！」

拳を振りあげた穂乃果が部屋を出ていき、慌てた足取りでことりも続く。

そして、恥ずかしそうにチラリと姿見に映る自分を一瞥した後、海未は俺の方へと顔を向ける。

「私も穂乃果達の元へ行きますね」

「うん、私は客席から海未達の勇姿を見守っているよ」

「では、また後で」

「——海未！」

去つていこうとする海未の背中へと、俺は思わず声を掛けてしまう。

その声に振り向いた海未は、不思議そうに首を傾げている。

「どうしました？」

「……いや、なんでもない。頑張つて、海未」

「はい、精一杯頑張ります！」

海未は笑顔で頷き、そのまま去つていった。

それを見届けてから、俺も客席の方へと足を進めていく。

……ライブに生徒達は来てくれるだろうか。

ここへ来る前にチラリと見てみたが、観客は誰もいなかった。

開演までまだ三十分ほどあるとはいえ、流石に一人もいないのには気になつてしま  
う。

「今なら流石に一人ぐらいはいるよな……なっ！」

俺はどこか樂觀的だったのだろう。

ここまでは、満員とは言わずも三分の一辺りまで観客がいます。

しかし、無情にも俺は現実を突きつけられてしまった。

——観客は、零。

何度目を擦っても、目を凝らしても目の前の現実は変わらない。

誰もいない。どの席にも誰も座っていない。

目の端に悲しげな表情を浮かべたクラスメイトのフミコが見えるが、そんな事はどうでもいい。

どうして、どうして誰もいない!?

チラシは配った。来てくれると言ってくれた人も沢山いた。確かに手応えを感じていた!

それなのに、どうして誰もライブを見にきていないんだ!?

「どうすれば……そうだ!」

今から外にいる生徒達に呼びかければ来てくれるかもしれない。

そう思った俺は、呼びとめてくる声を無視して講堂から飛び出す。

そして、そのまま校舎を出て下校している生徒を探すために見渡していく。

しかし、この場にいるのは部活勧誘をしている人達に、彼女達に連れられている新入生のみ。

「流石に勧誘中の人達を邪魔しては悪いか……なんで下校中の生徒がいらない?」

辺りを走りまわって探すのだが、ライブに来てくれそうな人は見つからない。

そして、そのまま俺が生徒を探すのにもたついていてる間に、とうとうライブ開始の五分前になってしまった。

額から滲みでる汗を拭いながら、とりあえず俺は講堂へと戻る事にする。

俺と入れ違いで講堂に来た人がいるかもしれない、という一縷の望みにかけて。

「どうだい!? ……いない、か」

再び講堂に飛び込んだ俺の視界に入ったのは、静寂に包まれている客席。

思わず俺がフミコへと目を向ければ、彼女はゆつくりと首を横に振った。

「ごめん。頑張ったんだけど……」

「……いや、フミコが悪いわけじゃないよ」

辛うじてフミコにそう返した後、俺は近くの椅子に座り込む。

何故、どうして観客は来なかったのだろうか。

……答えは簡単だ。所詮、生徒達にとって、sのファーストライブはその程度だったという事だ。

仕方ない。ああ、仕方ない。

誰が無名なアイドルグループを見にくるだろうか。誰が他人のために自分の時間を割いてくれるだろうか。

わかっていて、理解していた。そのつもりだった。

だけど、俺は無意識の内に期待していたのだろう。誰か……そう、一人ぐらいはライブに来てくれるって。

「それがこのザマかよ……はははっ」

もはや、俺には乾いた笑いを漏らす事しかできない。

俺は間違っていたのか。もっと精力的に動くべきだったのか。無理矢理にでもライブに連れてくるべきだったのか。

グルグルと思考が巡り、心の底から様々な感情が沸きあがってくる。

「クソー・クソクソクソー」

口から意味のない罵倒が飛びだし、そのまま頭を搔きむしる。

なんだよ、何故誰も穂乃果達のライブを見にきてくれないんだよ……。

穂乃果達は何をしたって言うんだ。あいつらの頑張りを誰も見てくれないのかよ！

どうして、どうして穂乃果達がこんなに苦しまなきゃ——

「……………えっ?」

不意に穂乃果の呟きが耳に入り、咄嗟に顔を上げる。

俺が思考の渦に沈んでいる間に、どうやら開演時間になっていたらしい。

お互いの手を繋いでいた穂乃果達が、この誰もいない客席を見て、呆然と立ち尽くしていた。



「ほの、か?」

「……そりやそうだ! 世の中そんなに甘くない!」

絞りだすように震え声を上げる穂乃果。

そんな穂乃果の様子を見て、ことりと海未は今にも泣きだしそうな表情を浮かべる。

違う……違う。俺は穂乃果達にそんな顔をして欲しくなくて、だからファーストライブを成功させよう……

「穂乃果!」

「朝陽ちゃん……?」

「笑って! 誰も観客がいないけど、誰も穂乃果達のファーストライブを見てないけど

! でも、それでも! この一ヶ月の成果を見せてほしい!」

「朝陽ちゃん……」

目頭が熱くなるが、唇を噛み締めて涙を流すのを堪える。

唇を強く噛みすぎて口内に血の味が広がるけど、構うものか。

これは、この涙は俺なんか流していいものではない。俺より穂乃果達の方が、ずっとずっと苦しい思いをしているはず。

だから、本来ならば穂乃果達が泣きたいはずなんだ。

でも、穂乃果達は泣いていない。瞳は潤み、目尻に雫が現れているけど、まだ泣いて

いない。

穂乃果達が泣かないように頑張っているのに、どうして俺が泣けるだろうか。いや、泣けるはずがない。

「μ、sの……μ、sのファーストライブ！ その輝きを見せてほしい！」

そんな俺の言葉に返事をしようと穂乃果が口を開いた瞬間、講堂入口から音が聞こえた。

それに慌てて振り向くと、扉に寄りかかった小泉の姿が目に入る。

「あ、あれ？ ライブは？」

不思議そうに辺りを見回している小泉を見て、穂乃果は決然とした表情を浮かべた。

「やろうー！」

「穂乃果、ちゃん？」

「だってそのために今日まで頑張ってきたんだから！」

「穂乃果……」

その聴く者の心を揺さぶる穂乃果の言葉。

それを聞いた海未達は、各々が瞳の輝きを強くして力強く頷く。

講堂の照明が落ち、穂乃果達は踊りの体勢を取る。

そして、音楽が流れるのと同時に、穂乃果達は踊りはじめのだった。

——ことりが歌う。

優しい声で、蕩けるような甘いボイスを響かせて、ことりは歌う。

その歌声に、その見る者の心を甘く溶かすような歌唱に、俺達は魅了される。

——海未が踊る。

軽やかな動きで、鋭さが垣間見えるキレを見せてつけて、海未は踊る。

その踊りに、その見る者の心を射止めるようなダンスに、俺達は惹き込まれる。

——穂乃果が笑う。

太陽のような笑顔で、輝かんばかりの笑みを浮かべて、穂乃果は微笑む。

その微笑に、見る者の心を驚掴みにして離さないような笑顔に、俺達は心底魅入る。

個々の動きはそれほど良くない。

微妙にステツプが合っていない時があるし、緊張からか歌声が僅かに震えている。そんな穂乃果達の踊りは、目が肥えている人達……絵里のような人達からすれば、見るに耐えないだろう。

しかし、穂乃果達のライブから目を離す事はできないはずだ。

何故なら、穂乃果達は輝いているからだ。

その歌で、踊りで、笑顔で、ライブを輝かせている。

穂乃果達……μ，sは今この瞬間、全ての人間を虜にしただろう。

それほどまでに、μ，sの煌めきは神がかったのだから。

「はあ……はあ」

曲が終わり、ライブが終了した。

穂乃果達は一様に息を乱しており、その姿から全力を出しきった事がわかる。

ともかく、そんな穂乃果達へと思わず立ち上がった俺が拍手をすれば、講堂のあちらこちらでも手を叩く音が響く。

思ったより多い音の数に、俺は辺りを見回してみる。

すると、先ほど見た小泉以外にも、星空や矢澤先輩を始め、俺がチラシを配った生徒達が目に入ったのだ。

「来てくれたんだ……」

数は十人にも満たないが、確かに穂乃果達の観客がそこにいた。

穂乃果達の頑張りが無駄にならなかつたんだ。

……良かった。穂乃果達のファーストライブを見てくれた人がいて。

そんな事を考えていると、講堂の奥から絵里が降りてきているのに気が付く。

穂乃果達も当然絵里の存在に気が付き、表情を強ばらせていた。

「生徒会長……」

「どうするつもり?」

その端的な問いかけから数瞬後、穂乃果は力強い瞳で絵里を見返す。

「続けます」

「何故かしら? あまりライブに観客が来なかつたようだけど」

「やりたいからです。今、私はもつと歌いたい、もつと踊りたいって思っています。……」

きつと、海未ちゃんもことりちゃんも」

「うん、ことりもそう思ってるよ」

「私も、もつと踊りたいです」

そう告げた穂乃果が海未達へと顔を向けると、彼女達は頬を綻ばせて頷く。

そんな海未達の姿を見た穂乃果は、嬉しそうな笑みを浮かべる。

そして、厳しい面立ちをしている絵里に向き直り、更に瞳を煌めかせながら穂乃果は高らかに声を響かせていく。

「こんな気持ちは始めてなんです！ やつて良かったって本気で思えたんです！ 今はこの気持ちを信じたいんです！ ……今の私達を誰も応援してくれないかもしれない。誰も見てくれないかもしれない。でも、それでも私達は届けたい！ 私達のこの想いを！」

「っー！」

その穂乃果の叫びに、絵里は僅かにたじろいだ様子を見せる。

今の穂乃果からは目を離せない。

その叫びに、想いに、魂の輝きから目を離す事ができない。

そんな講堂中の視線を一心に集めた穂乃果は、胸の前で拳を握って絵里へと言いつつ。

「いつか……いつか私達、私達々、sは——ここを満員にしてみせます！」

「……そう」

その宣言を聞いて、絵里はどう思ったのだろうか。

様々な感情が混ぜられたような眩きを一つ。

そして、絵里はそれ以上は何も言わずに講堂を出ていった。

「絵里……」

絵里の事も凄く心配だが、今はファーストライブを終えた穂乃果達を祝いたい。

そう思った俺は、絵里から一旦思考を外して穂乃果達の方へと駆け寄っていくのだった。

——穂乃果、海未、ことり……ファーストライブお疲れ様。

## 第二章 $\mu$ , s 始動に新たなメンバー

### 第二十話 新たな原石

—— $\mu$ , s のファーストライブを終えてから、暫くして。

俺はある計画を実行するべく、絵里の家へと赴いていた。

「——それで、突然どうしたの?」

自分の部屋に通して俺を座らせた後、絵里は不思議そうに首を傾げて尋ねてきた。

それに対して、俺は鞆からあるものを取り出しつつ口を開く。

「いや、絵里にファーストライブの感想を聞こうと思つてね。まだ聞いていないだろう?」

「感想ね……一言で表すなら、とてもじゃないけど見れるものじゃなかった、という所か

し」

「やっぱり絵里からはそう見えるか」

「朝陽も知っているでしょ? 私が昔バレエをしていたつて事」



そう告げると、絵里は僅かに瞳を細めた。

確かに、俺は絵里からバレエをしていたという話を聞いた事がある。

それなのに、俺が絵里にライブの感想を聞いたのが理解できないのだろう。

貴女なら私の感想なんて容易に想像つくでしょう、と。

ともかく、その問いかけに笑みを返した俺は、取り出したものを机の上に置く。

「一応、聞いておきたくてね。……さて、これが何かわかるよね？」

「何って、どこからどう見てもただのビデオよね。それがどうした……まさか」

「そう。このビデオには、μ sのファーストライブを録画した映像が入っている」

途中で察しがついたのか目を見開いた絵里へと領けば、彼女は困惑したように眉間に

皺しわを寄せた。

まあ、突然ビデオを見せられても困るか。

それも、μ sとあまり良い関係とは言えない自分に見せるとなれば尚更。

と言つても、これにはちゃんとした理由がある。

「それで、そのビデオが何？」

「その前に一つ確認させて欲しい。絵里って、ファーストライブの映像を転載するつもりだよな？」

「……なんの事かしら？」

「嘘は良くないよ、絵里」

その問いにポーカーフェイスを維持していたようだが、絵里と長い付き合いがある俺は騙されない。

そのまま暫く目を逸らさず絵里を見つめていると、やがて彼女は諦めたようにため息をつく。

「はあ……そうね。私はネットにライブ映像を上げようと思ってたわ」

「やっぱり。絵里の事だから、客観的な意見が欲しかったんだろう？」

「ええ、その通りよ。それにしても、よく私がサイトに上げるってわかったわね」

「絵里の考えている事ならなんとなくわかるさ」

間髪入れずにそう答えれば、絵里はどこか照れくさそうに視線を泳がせていた。

その数瞬後、絵里は自分の羞恥を誤魔化すように咳払いを一つ落とす。

「ん、ん。それで、結局朝陽は何が言いたいの？」

「結論から言うと、サイトに上げるのを私も手伝いたい」

「何故、と聞いても？」

「もちろん。……絵里はμsの客観的事実が知りたい。私はμsの知名度を上げたい。つまり、このビデオ映像と絵里が撮った映像を組み合わせて、PVを作りたいんだ」  
「なるほど。私と利害が一致しているから一緒にやりましょう、という事ね」

「その通り。駄目かな？」

俺の問いに顎に手を添えて悩む仕事をした後、やがて絵里は頷いて笑みを浮かべる。「いいわよ。PVでどれだけ良く見せようとも、結局酷いものは酷いつて感想が来るだけでしょうし」

「ありがとう。じゃあ早速PVを作ろうか」

「ところで、朝陽はPVを作るの？」

無事に了承を貰えた事に安堵していると、不意に絵里が思い出したように尋ねてきた。

その言葉に、俺は首を横に振る事で応える。

「いや、全くの素人だよ。ただ、そのまま上げるよりはいいかなって」

「そんなものかしら？」

「そんなものだよ、多分」

「……まあ、いいわ。早くPVを作りましょ」

何かを言いたげな顔をしていたが、やがて頭を振ってそう告げた絵里。それに頷きを返しつつ、俺は鞆からノートパソコンを取り出す。

そして、そのまま俺達は四苦八苦しながらPV製作を始めるのだった。

「——ふわあ〜」

白いアルパカに抱きつき、頬ずりをしていることり。

そんなアルパカに首つたけなことりの姿を見て、穂乃果と海未は困ったような表情を浮かべている。

俺達は新しいメンバーを集めるためにチラシを配ろうとしていたのだが、ことりがアルパカ小屋から離れないのだ。

「ことりちゃんってそんなにアルパカ好きだったっけ？」

「最近ハマったらしいです」

「まあ、アルパカ可愛いよね」

近づいてことりと一緒に撫でてみると、アルパカは気持ちよさそうな鳴き声を上げた。

それ見たことりは益々頬を緩ませており、アルパカ好きが筋金入りな事がわかる。

それにしても、実際に触ってみるのは初めてだったけど、凄く触り心地が良い。

なんだろう。高級の羽毛に手を埋めているような感触だろうか。

そんな事を考えていると、アルパカはことりの頬に顔を寄せ、舐めた。

「ひゃあっ!？」

「おっと、大丈夫ことり?」

「あ、ありがとう朝陽ちゃん」

「ことり!?! どうしましょう……そうだ、弓で反撃をすれば」

「海末ちゃん……」

咄嗟にことりを抱きかかえ、倒れるのを防ぐ。

思わずといった様子で瞳をギョツと閉じていたことりは、やがて瞳を開いて俺から離れるとお礼を告げた。

そして、そんな俺達の様子を見て、アホな呟きを漏らす海末に、彼女の残念な姿に呆れが籠ったため息をつく穂乃果。

うん、海末のポンコツ化が激しくなっていく件について。どうしてこうなった。

「アルパカさんに嫌われちゃったのかなあ……」

「その、大丈夫ですよ。楽しいから遊んでいただけだと思いますから」

悲しげに眉尻を下げたことりの呟きに答えたのは、いつの間にかここにいたジャージ姿の小泉だった。

そして、そのまま小泉はいそいそとアルパカの水を取り替えていく。

「アルパカ使いだねー」

「えっと、その、私飼育員ですから」

「へー、飼育員なんだ……あれ、貴女ってライブに来てくれた花陽ちゃん!？」

「駆けつけてくれた一年生の子だよね?」

「そういえば、確かに見覚えがあります」

小泉の側まで近づいていた穂乃果は、驚きの表情を浮かべた。

そんな穂乃果の眩きを聞いて、ことり達も思い当たったように頷いている。

穂乃果達にとつては、小泉は凄く印象に残っているだろう。

観客がいなかった講堂に訪れた初めての生徒だったから。

そんな風に考えていると、不意に穂乃果は小泉の両肩に手を置く。

「ねえ、花陽ちゃん。アイドルやってみない?」

「えっと?」

「いきなりすぎだよ、穂乃果ちゃん」

苦笑いして告げたことりの言葉にも穂乃果は答えず、困惑気味な小泉へと更に顔を近づける。

「君は光っている」

「へ？」

「大丈夫、悪いようにはしないから。さあ、私に全てを任せて！」

「え、ええ!？」

「なんか、凄い悪人に見えますね」

「あはは……」

そんな穂乃果の様子を見て、海未達は頬を引き攣らせていた。

うん、正直俺も穂乃果の顔が悪どく見えたよ。

詐欺師が言いそうな言葉と表情をしていたし、傍から見たら危ない人だと思われてしまっただろう。

ともかく、俺達の眩きが耳に入っていたのか、穂乃果はこちらに顔を向ける。

「でも、少しぐらい強引にならないとメンバー集まらないよ?」

「それは、そうですね」

「あ、あの」

「どうしたの花陽ちゃん?」

その問いかけに、小泉は穂乃果へと返事をしようとしたのだろう。

しかし、どうやら小泉の声が小さくて、よく聞こえなかったようだ。

それから、聴き直そうとしたのか穂乃果は小泉の方へ耳を寄せ、暫く何かやり取りを

交わっていた。

「何を話してるんだらう?」

「まあ、そのうちわかるんじゃないかな?」

「変な事を言っていないければいいんですが」

海末の中での穂乃果の扱いはどうなっているんだらうか。

真つ先に発言を疑われる穂乃果とは一体……。

まあ、穂乃果は失言が多いからな。海末が危惧するのもわからなくはない。

そんな事を考えている間に、どうやら穂乃果達の話は終わつたらしい。

小泉へと大きく頷いていた穂乃果は、そのまま笑顔で口を開く。

「そうだよねー! 私も大好きなんだ、あの子の歌!」

「だったら、その子のスカウトに行けばいいんじゃないですか?」

「もちろん行つたよー。でも、絶対やだつて言われちゃつた」

そのある意味当然な海末の問いかけに、穂乃果はそう告げると残念そうにため息を漏らした。

あの子とは、恐らく西木野の事だろう。

確かに、西木野の性格からしてあつさりと頷く事はしそうにない。

うーん、今の所は穂乃果でも駄目か。後で俺も西木野にメンバー勧誘の話を持ちかけ



てみよう。

そんな風に考えていると、小泉は申し訳なきような表情を浮かべる。

「その、すみません。私、余計な事を」

「ううん。ありがとう」

小泉の手を取り、微笑みを向けた穂乃果。

そんな穂乃果の嬉しそうな笑顔に、小泉は目を見開いて彼女を見つめている。

今の穂乃果の言葉に何か感じ入る事があったのだろう。

そのまま暫し二人が見つめ合っていると、遠くの方から声が聞こえてきた。

「かーよちーん。早くしないと体育始まっちゃうよー」

「あ……その、失礼します」

その声で我に返ったのか、小泉は頭を下げて星空の方へと向かう。

そして、星空と一緒に俺達へと目礼した後、二人は去っていった。

「私達も早く戻りましょう」

「そうだねー」

「……うん」

海末の言葉にもどこか上の空で答え、穂乃果は遠ざかる小泉達の背中を見つめている。

やがて、穂乃果は俺達の方へと振り返り、笑みを浮かべて口を開く。

「決めた。あの子達をメンバーにする」

「何故と聞いても?」

「あの子達……うん、花陽ちゃん達が入ってくれば、μ sはもつと輝く気がするんだ」

「μ sが輝く?」

「うん! よーし、これからの事を考えるぞー!」

オウム返しに聞いたことに、穂乃果は頷いて手を振りあげた。

そんな穂乃果の様子を見て、俺達はお互いの顔を見合わず。

「つまり、次はあの一年生を勧誘するという事かな?」

「穂乃果の言葉からそうでしょう」

「とりあえず、メンバー勧誘は早めにやらなきやね」

「そうと決まれば早く教室に戻るよ!」

「あ、穂乃果!?!」

「……私達も行くのか」

「そうだね」

呼びとめる海未の声を無視して、あつという間に穂乃果は走りさっていった。

それに俺達は揃って苦笑いを漏らし、穂乃果を追いかけていくのだった。

## 第二十一話 医者の卵、アイドルの卵

「さて、これからどうするか……」

廊下を歩きながら、俺はある事に頭を悩ませていた。

あれから、穂乃果達と新入生歓迎のチラシを配ったりしたのだが、やはりと言うべきか誰も入部しそうになかった。

いや、一応次に誰が入るのかは知っている。

しかし、本当に物語通りに進めても良いのかと考えているのだ。

個人的には、早くμ'sへと矢澤先輩が加わってほしい。

あのアイドルの情熱と知識、それに先輩だからこそ見える視点があるはず。

もちろん、小泉達後輩の視点も大事だけど、矢澤先輩は一度スクールアイドルに挑戦して、そして失敗している。

その時味わってしまった挫折や、実際に活動した事で得た経験。

それ等を使って穂乃果達を導いてほしいのだ。

「まあ、これは俺の我が儘か……ん？」

自分勝手な考えに思わず自嘲の笑みを漏らしていると、遠くの方で西木野の姿を発見

した。

前に見たような挙動不審な様子を見せつつ、西木野は新入生部員のチラシを手に取り、

そして、そのまま逃げるようにこの場から去っていった。

「あー、なんか西木野らしいな。お、今度は小泉か」

ちやうど俺がいる場所の反対側から小泉が現れ、西木野がいた場所へ向かっていく。

俺達が貼ったチラシを暫し見つめた後、小泉は何かに気が付いたのか足元に視線を落とす。

うーん、なんだっけな。この場面をどっかで見たような気がするな。

もう自分の記憶はあてにならないな。

徐々に薄れていく知識のため息を漏らしつつ、俺は小泉の方へと近づいていく。

「あれ、これって西木野さんの……?」

「なにをしているんだい?」

「ぴゃあっ!? あ、雨宮先輩」

「驚かせてしまったようだね、すまない」

「い、いえ」

「それで、突然しゃがんでどうしたのかな?」

「あ、これが落ちてたんです」

「どれどれ……」

恐縮そうに身を縮こまらせていた小泉は、俺に一つの生徒手帳を渡した。

その手帳を開いて中身を見てみると、どうやら西木野の生徒手帳のようだ。

あー、確かこれが切っ掛けで小泉と西木野が仲良くなるんだっけ？

いや、違ったっけ……まずいな、本格的に内容を覚えていない。

「あ、あの雨宮先輩？」

「ん？ なにかな？」

「その、難しい顔をしてたので」

「あ、ああ。すまない、大した事ではないさ。それより、これは西木野の生徒手帳のようだね」

「は、はい。さつきまで西木野さんがここにいたから、多分その時落としたんだと思います」

「なるほど、西木野がね」

西木野がいた事は知っていたけど、あえて言葉に出しておく。

それよりも、俺はこの生徒手帳をどうするか悩んでしまう。

実際に会って話した小泉の性格から、恐らくこの生徒手帳を西木野の家に届けるだろ

う。

それに俺も付いていくか、それとも小泉一人に任せるか……いや、この場合の選択肢は決まっているな。

そんな俺の考えを読みとったかのように、小泉は不安げな表情で口を開く。

「あ、あの。この手帳を届けるのに雨宮先輩も付いてきてくれませんか？」

「うん、私は構わないよ」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなに畏まらなくてもいいさ。じゃあ帰り支度したら行こうか。集合場所は校門前でいいかな？」

「は、はい。急いで準備してきます」

そう告げた後、慌ただしい足取りで去っていった小泉。

別にそんな急がなくてもいいのに……まあ、速いに越した事はないか。

ともかく、小泉を待たせるのは良くないので、俺も急いで準備をするために教室へと戻るのだった。

「お、大きい……」

「ここが西木野の家か」

あれから校門前で合流した俺達は、生徒手帳に記載されている住所に従い、西木野の家へと赴いていた。

そして、無事に西木野の家にたどり着いたのだが、その圧倒的な家の大きさに俺達は驚いてしまう。

チラリと横目で小泉の様子を見てみると、彼女は口を半開きにして目をまん丸に見開いていた。

そんな小泉のどこか愛くるしい驚きの表現に、俺は思わず笑い声を漏らす。

「えっと、なんで笑っているんですか？」

「くくつ……いや、なんでもないさ。それより、チャイムを鳴らすよ？」

「は、はい！ 心の準備はできています！」

「よしっ」と可愛らしい掛け声と一緒に拳を掲げ、気合い十分な様子を見せる小泉。

いや、何故そんなこれから戦地に赴くような顔をしているんだ。

まあ、この西木野の家の凄さを考えれば、小泉の気持ちは理解できなくもないけど。



チャイムを鳴らしてそんな事を考えていると、インターホンから女性の声が聞こえてきた。

『はい、どちら様でしょうか？』

「突然の訪問すみません。私、西木野さんと同じ学校に通っている二年の雨宮朝陽と申します。そして、こちらが西木野さんと同じクラスの」

「こゝ、小泉花陽です！」

『……少し待つてちようだい』

隣にいた小泉へと手を向けてそう告げる。

そして小泉はガチガチに緊張しているようで、震え声で答えていた。

うん、小泉の心の準備は意味なかったらしい。

ともかく、女性がそう返してからそれから暫くして、玄関の扉が開いて西木野によく似た女性が姿を現す。

「どうも初めまして。雨宮です」

「小泉です」

「いらっしやい。ささ、上がって上がって」

改めて頭を下げた俺達をにこやかに見ながら、女性——恐らく西木野母だろう——は手招きをした。

その言葉に甘え、俺達は西木野の家に上がらせてもらう。

「あの、西木野さんのお母さんですか？」

「そうよー、あの子とよく似てるでしょ？」

「はい、西木野さんにそっくりの美人さんです」

「まあ、お上手ね」

「ははは、本心ですよ」

「あら、それなら私の若さもまだ捨てたものじゃないって事かしら……さ、着いたわ。今紅茶を持ってくるから、適当に寛いでいてちょうだい」

「あ、ありがとうございます」

礼儀正しく頭を下げた小泉に、西木野母は微笑ましそうに見てから去っていった。

どうやら俺達を通されたのはリビングのようで、辺りを見回すと高級そうなソファやトロフィー等が目に入る。

「このトロフィーって西木野さんのかな？」

「恐らくそうだろうね。それにしても、凄く高そうなソファだな」

「あつさりとソファに座った雨宮先輩が言う事じゃない気がしますけど」

「いや、せつかくだし高級ソファに座ってみたいじゃないか」

「それはそう、ですけど」

「ほら、小泉も座つてみたかどうか？」

苦笑いをしていた小泉に手招きをすると、やがて彼女はちよこんとソファに腰を下ろした。

すると、小泉は驚いたような表情を浮かべた後、ふにやりと頬を緩ませる。

「はわあく、凄いふかふかだあ」

「本当に座り心地が良いよね」

「はい、凄いですう」

「——ごめんなさいね。今、あの子は病院に顔を出している所なの」

「はっ！」

俺の問いに頬を緩めたまま答えていた小泉。

しかし、紅茶を手に戻ってきた西木野母の声で我に返ったのか、小泉は顔色を赤く染めて恥ずかしそうに身を縮こまらせていた。

そんな小泉の姿を穏やかな表情で見つめていた西木野母へと、俺は先ほどの言葉に返事をするために口を開く。

「その、西木野さんが病院に顔を出すというのは？」

「ああ。家は病院を経営していてね、将来あの子が継ぐ事になっているのよ」

「す、凄い……」

事もなさげに告げた西木野母の言葉に、小泉は感嘆の声を上げていた。かく言う俺も、西木野母の言葉には思わず感嘆の息を漏らしてしまう。

実際に病院の事は知っていたが、改めて聞くと凄いとこの言葉しか出てこない。

病院の跡取り娘か……やばい、重圧を感じてきた。

本当に西木野は、医者への勉強とスクールアイドルを両立できるのか。そんな今更な事を考えてしまったのだ。

いや、物語では最終的に両立できていたのはわかる。わかるけど、この世界の西木野でも両立できるという保証はない。

だからと言って、μ'sに西木野を誘わないという選択肢はない。

……せめて、西木野の勉強を邪魔しないようにサポートをしよう。

俺にできる事はそれぐらいだ。医者への勉強なんてできるわけがないし、誘うだけ誘って西木野一人に勉強を任せるとするのはありえない。

だから、西木野に気持ちよく勉強できるように取り計らう事しか俺にはできない。

いや待て。そういえば、西木野の成績が落ちたとかで家族と揉めた場面がなかったか？

学業が疎かになってるとかで……くそ、忘れてしまっているな。後で記憶の整理をしなれば。

そんな事を考えている間に、どうやら西木野が帰ってきたようだ。

「ただいまー」

「お帰りなさい、真姫」

「誰か来てるの……うええ!？」

玄関で俺達の靴でも見つけたのか、西木野は不思議そうな顔でリビングに顔を出した。

そして俺達と目が合うと、西木野はお馴染みの声を上げて目を見開く。

そんな西木野の様子を微笑ましそうに眺めていた西木野母は、ごゆっくりーという言葉を残して去っていった。

「やあ、西木野。お邪魔しているよ」

「こ、こんにちは」

「な、なんで家にいるの?」

「それは——」

「お友達が遊びに来てくれたのよ」

「マ、ママ!？」

その疑問に小泉が答えようと口を開いた瞬間、西木野の紅茶を持ってきた西木野母が嬉しそうにそう告げた。

驚愕した声を上げた西木野を尻目に、西木野母は楽しげに俺達へと語っていく。

「本当に良かったわー。高校に入ってから友達が一人も遊びに来なかつたから、真姫の事がちよつと心配だったのよ」

「うっ!」

その言葉に純粋な心配が籠っていると理解したのか、それを聞いた西木野は辛そうに胸を抑えた。

うん、西木野の性格からして友達が沢山作れそうにないもんな。

「という事で、後は友達同士ゆっくりしていつてね」

西木野に言葉の棘をグサグサと刺していった西木野母は、最後に笑顔でそう告げてリビングを出ていった。

西木野母がいなくなった事で、辺りにどこか気まずげな雰囲気は漂いはじめる。

そんな空気を変えようとしたのか、ソファに座った西木野がわざとらしく席払いを落とす。

「コホン。それで、なんの用で来たわけ?」

「誤魔化したね」

「う、うるさいわね! そこは気を利かせなさいよ!」

「あはは……えつと、これが落ちてから渡しに来たんだ」

苦笑いを漏らした後、小泉はそう告げてテーブルに西木野の生徒手帳を置いた。

その生徒手帳を手に取り、目を通していく西木野。

「確かにこれは私のね。でも、なんで貴女が持っているの？」

「ご、ごめんなさい」

「なんで貴女が謝るのよ……」

思わずといった様子で謝罪する小泉を見て、西木野は呆れたような表情を浮かべ、今度は俺の方へと顔を向ける。

「それで、貴女は何か用事があるの？」

「いや、私はただの付き添いさ」

「ふうん。……ま、まあ。生徒手帳を届けてくれたのはありがたかったわ。その、ありがとう」

俺をジト目で一瞥してから、西木野は照れたように頬を紅潮させてそう告げた。

そのままそばを向いた西木野の姿に、小泉は何度か目を瞬かせている。

まあ、西木野のツンデレ的なお礼を初めて聞くと戸惑うよな。

素直になれないというかなんというか。そんなお礼が西木野らしいと言えば西木野らしいけど。

そんな風に考えている俺を尻目に、小泉達は会話を進めていく。

「ど、どういたしました？ ……そういえば、西木野さんって、sのポスターを見てたよね？」

「わ、私が？ 知らないわ。人違いじゃないの？」

「で、でも手帳がそこに落ちてたし……」

「ち、違うの！ あれは——っ！」

西木野の鞆の方を見ながらそう答えた小泉に言い返そうとしたのだろう。

思わずといった様子で立ち上がった西木野は、その勢いでテーブルに膝を打ちつけてしまったのだ。

そして、膝を抑えながら片脚で何度か跳ねた後、西木野はそれはもう盛大にソファと一緒に倒れ込む。

「に、西木野さん大丈夫!？」

「怪我はない？」

「へ、平気よ……問題ないわ。全く、貴女が変な事を言うから！」

ソファに倒れたままこちらに顔を向けた西木野は、不機嫌そうに小泉へとそう告げた。

そんな西木野の姿を見て、小泉は口許にてを当てておかしそうに笑いはじめる。

「ふ、ふふふ」



「笑わない！」

「くくっ、西木野は面白いね」

「貴女も笑わないの！」

小泉の笑い声に釣られて俺も笑みを零してしまう。

そんな俺達の様子に、西木野は顔を赤面させて叫ぶのだった。

「——私がスクールアイドルに？」

あれから、機嫌が悪くなった西木野をなんとか宥めた後、俺達は座りなおして話を再開する事にした。

その時、不意に小泉がスクールアイドルをやらなにかと提案し、西木野がオウム返しにその事を探ねる。

その言葉に小泉は頷き、やや俯き気味にスクールアイドルを勧めた理由を話していく。

「うん。私、いつも放課後は音楽室の近くに行ってたの。西木野さんの歌が聴きたくて」  
「私の？」

紅茶を口に含みながら、西木野は小泉の言葉に疑問符を浮かべている。

そんな西木野の様子を見て、小泉は苦笑いしつつ続きの言葉を話す。

「うん。西木野さんの歌はずっと聴いていたぐらい好きで、だから私は——」

「大学は医学部って決まっているの」

「そう、なんだ」

小泉の言葉を途中で遮り、西木野はそう告げた。

そして、戸惑い気味の眩きを漏らした小泉を一瞥してから、西木野はため息をついて

天井を仰ぐ。

「だから、私の音楽はここで終わってるってわけ」

その言葉から、西木野の感情を詳しく窺い知る事はできない。

ただ、少なくとも俺は西木野がまだ音楽を諦めていない事を感じた。

何故なら、西木野がそう眩いた時に悟ったような、あるいは悲しそうな表情を浮かべ

ていたからだ。

……一応、説得を試みてみるか。

「本当に音楽が終わったのかい？」

「そうよ。さつきも言ったけど、私の音楽はここで終わったの」

「じゃあ、どうしてそんなに悲しそうな目をしているのかな？」

「っ！」

俺がそう言葉を突きつけると、西木野ははっと息を呑む様子を見せた。

そして、いまだに悲しげに揺れている西木野の瞳と目を合わせ、俺は彼女へと語りかけていく。

「私には西木野の葛藤を察する事はできない。きつと、私には想像つかないような苦しい思いをしたんだろう。でも、だからと言って自分の本心を……いや、なんでもない」

「ふんっ」

流石に無神経すぎた。

西木野が俺を睨みつけているのに気が付いたので、途中で口を閉ざす。

出会って間もない人にズカズカと心に入り込まれるのは、普通は嫌な気持ちになるよな。

はあ、やってしまったな。西木野に不愉快な思いをさせてしまった。

そう考えた俺は、ソファから立ち上がって頭を下げる。

「すまない、いきなり知ったような口を聞いて」

「ちよ、ちよつと頭を上げなさい！」

「雨宮先輩!？」

「本当に申し訳なかった」

「……はあ、まあいいわよ」

もう一度頭を下げてから、ソファへ座りなおす。

そんな俺を呆れたように一瞥した後、西木野は戸惑っている様子を見せる小泉へと声を掛ける。

「それより貴女、アイドルをやりたいのでしょうか?」

「え、私!？」

「だって、この前のライブを夢中で見ていたじゃない」

「え、西木野さんもライブに来てたんだ」

「わ、私はたまたま通りがかっただけだけだ」

いや、その言い訳は無理があるだろう。

まあ、西木野がスクールアイドルに興味を持ってくれたのは嬉しい。

後は、西木野が $\mu$ sに入ってくれるかどうか……

「ええと。わ、私は——」

「ねえ、貴女もそう思うわよね?」

「ん? そうだね、小泉が $\mu$ sに入ってくれたら凄く嬉しいかな」

「——ええっ!?!」

不意に俺に水を向けた西木野。

その問いかけに頷いて小泉の方へと微笑むと、彼女は素つ頓狂な声を上げて頬を赤らめた。

そんなどこか照れている小泉の様子を見て、西木野は自分を誤魔化すかのよう口を開く。

「やりたいならやればいいじゃない。貴女がやるなら、私も少しは応援してあげられるから」

「私は西木野も<sup>も</sup> s 加入に大歓迎だよ」

「ぶええ!?!」

俺が横槍を入れて西木野にそう告げれば、彼女も頬を赤らめて目を泳がせた。

その明らかに動揺してるとわかる様子に、小泉は何か感じる所でもあったのか、柔らかに微笑む。

「——うん、ありがとう」

そんな小泉の笑みを見てどう思ったのだろうか。

暫くじつと小泉を見つめていた西木野だったが、やがて頭かぶりを振ると再度口に紅茶を含む。

やはり、西木野もスクールアイドルに憧れているのだろう。

西木野が小泉を見る瞳には、どこか羨望が混じっていた気がした。

……どうすれば、西木野達をμ'sに加入させる事ができるだろうか。

そのまま雑談を始めた小泉達を尻目に、俺は彼女達をどう説得するか頭を悩ませるのだった。

## 第二十二話 小泉と星空

あれからそろそろ時間も遅くなったので、俺達は西木野の家をお暇する事にした。

そして現在、俺達は西木野母娘に玄関前まで見送られ、帰りの挨拶を交えている最中だ。

「では、お邪魔しました」

「えと、ありがとうございます！」

「まあ、今日は良い気分転換になったわ」

頭を下げた俺達に、言葉に詰まりながらもそう告げた西木野。

その声に頭を上げてみれば、西木野は照れくさそうにそつぽを向き、指に髪の毛を巻いていた。

すると、相変わらず素直になれないそんな様子を見たからか、小泉はどこか優しげに微笑む。

「私も楽しかったよ」

「そ、そう？ ま、まあ私も貴女と色々と話せてその、悪い気はしなかったわよ」

「つまり、小泉との会話が楽しかったという事かな？」

「ち、違うわ——」

「そう、なんだ」

からかい混じりに俺がそう告げると、西木野は反射的といった様子で言葉を返す。

しかし、否定されたからか悲しそうに俯く小泉を目に入れた西木野は、途中で口を閉ざして視線を泳がせていく。

「——ち、違わなくもない事もないわ」

「はつきりしないなあ。結局、どっちなんだい？」

「ぐっ！……ええ、貴女と話すのは楽しかったわ。凄く楽しめたわよ」

「西木野さん……！」

「ぐええっ!？」

俺をジト目で一瞥した後、腕を組んで小泉へと自分の気持ち吐露した西木野。

それを聞いて、小泉は感激したように瞳を潤ませて西木野の手を握る。

「また遊びに来てちょうだい」

「わざわざ遅くまですみませんでした」

「いいのよ。あの子の楽しそうな笑顔も見られたから」

「それは、小泉と西木野の相性が良かったのでしよう。きっと二人は良い友達になれると思いますよ」



「まあ！ それはいい事を聞いたわ、近いうちにお赤飯を炊かなきゃ」  
「ちよつとそこは何を話しているのよ！」

小泉達を尻目に西木野母と会話をしていると、眉尻を吊り上げた西木野がこちらに指を突きつけた。

このまま西木野の怒りを買うのは面倒……怖いので、目を白黒させている小泉の手を取り、西木野母へと口を開く。

「ははは。では、そろそろこの辺で失礼します。行こうか、小泉」

「え、ええっ!？」

「またいらつしやいー」

「ま、待ちなさい！ また私から逃げるつもり——」

小泉の手を引つ張り、西木野の家を後にする。

途中で西木野の叫びが聴こえた気がするが、恐らく気のせいだろう。

うん、明日西木野に何か言われたら上手くはぐらかなきやな。

ともかく、暫くしてから歩いていた足を止め、小泉へと向き直つて頭を下げる。

「すまない、いきなり連れていくような事をして」

「その、私は気にしていないから大丈夫です」

「ありがとう」

改めて小泉にお礼を告げてから、俺達は再び足を動かしていく。ふと天を仰げば、日が沈む直前で辺りに茜色の光が降り注いでいた。

幾らかの星達も顔を覗かせており、自分を淡く光らせている。

「あの、雨宮先輩？」

「ん？ なんだい？」

「雨宮先輩は、sのお手伝いをしているんですよね？」

「まあ、そうだね。それがどうしたのかな？」

「その、どうして雨宮先輩はステージに立たなかつたんですか？」

「――」

「私は雨宮先輩も輝けると思うんです！ 雨宮先輩ならスクールアイドルとして凄く

……雨宮先輩？」

心配そうな声色で尋ねられ、我に返る。

そして、不思議そうに首を傾げている小泉に、俺はゆっくりと深呼吸してから笑みを向ける。

「……すまない、突然な事で少しびっくりしていた。それで、私が、sに入らない理由だったね。それには理由があるんだ」

「理由、ですか？」

「うん、理由……いや、正確には私のエゴかな」

「エゴ?」

うん。これは俺の自分勝手な思いだろう。

まあ、穂乃果達にとつては意味がわからないだろうが、俺がμ sに入る事は万が一にもありえない。そういう結論に至った。

今更だけど、小泉のような質問が来る事を想定しておくべきだったな。

ともかく、益々困惑気味な表情を浮かべている小泉に、俺は首を横に振って口を開く。「とりあえず、私がμ sに入る事はないと思ってくれて良いよ。それより、私としては小泉がμ sに入ってくれると嬉しい」

「わ、私ですかあ!? 私なんて無理ですよお」

「そんな事ないよ。小泉は可愛い顔立ちだし、スタイルも良い。声だって凄く綺麗だからアイドルに向いていると思う」

「あわわわわ……」

勢いよく首を振って否定の声を上げる小泉。

そのまま俺が小泉の良い所を挙げていけば、よほど恥ずかしかったのだろうか。小泉は耳まで真っ赤にして目を回しはじめ、口から言葉にならない声を漏らす。

うーん、少し急ぎすぎたな。小泉がオーバーヒートを起こした口ポットみたいな表情

になっている。

「まずは落ち着こう。ほら、深呼吸」

「は、はい……ひっひっふー。ひっひっふー」

「それは違う深呼吸だと思うけど」

お約束のポケをしてくれたのが、それほど小泉は混乱していたのだろう。

ともかく、今の深呼吸である程度落ち着いたようで、小泉は頬を赤らめたまま俺の方へと顔を向ける。

「も、もう大丈夫でしゅ」

「でしゅ?」

「……あ、あそこに和菓子屋がありますよ! お母さんのお土産に買っていきますね!」

噛んだ事実をなかつた事にしたのか、小泉は再び顔を赤面させると、いつの間にか近くにあつた穂むらを指差す。

そして、驚くほど素早い動作で店の中に入っていく。

「なんか、今の小泉を見てると和むな。まあいいや、俺も店に行こう」

小泉の愛らしい行動に思わず笑みが漏れつつ、俺も彼女の後を追うべく穂むらへと入店するのだった。

あの後、穂むらが穂乃果の家だった事に小泉が驚いたり、海未が一人でライブの練習をしているのを目撃してしまったり。

色々とおつたが、穂乃果達に改めてスクールアイドルの勧誘をされて、小泉はどこか迷うような表情を浮かべていた。

そんな出来事があった次の日。

現在、俺は学校の廊下で星空と偶然にも出会っていた。

「こんにちは、雨宮先輩！」

「こんにちは。今日は小泉と一緒にじゃないみたいだね」

「あ、そうだった！ かよちゃんを探しているんだった」

「小泉をか……ふむ、私も小泉を探すのを手伝ってもいいだろうか？」

「え？ 別にいいですけど、なんで先輩が？」

不思議そうに問いかけてくる星空に、俺は苦笑いを返す。

「小泉には少し用があつてね。それより、星空は本当に小泉と仲が良いな」

「当然にや！ 凜はかよちんと一番仲良しだよ！」

「にや？」

「あつ……」

満面の笑みで頷いていた星空は、自分が猫の語尾を言った事に気が付いたようで、思わずといった様子で口許に両手を当てる。

それから頬をやや紅潮させ、どこか窺うように俺を見上げる星空。

そんな彼女の可愛らしい動作に笑みが浮かびつつ、俺は星空へと返事をするために口を開く。

「そんなに堅苦しくしなくてもいいよ。私は先輩とか気にしていないから」

「よ、良かったー。怒られるんじゃないかって不安だったにや」

「流石に言葉遣いだけで私は怒らないさ。とりあえず、小泉を探しに行こうか」

「じゃあ、まずは中庭に行ってみましょう！」

そう告げると星空は俺の手を引っ張り、軽快な足取りで駆けだした。

突然腕を引かれて脚がもつれそうになるが、なんとかバランスを取って俺も続いて足を進めていく。

「おつとと……それで、どうして初めは中庭に行こうと？」

「えっ？ うーん、かよちゃんがそこにいるような気がしたんです」

「なるほど、小泉が中庭にか」

中庭……中庭か。

物語の中で、中庭で何か大事な場面があつたような気がしなくもない。

あれから昨日に記憶を掘り返したりした結果、物語の知識は殆ど忘れていた事がわかつたのだ。

今まで覚えていた事がおかしいのは理解しているが、これで本格的に手探りでμ、sのサポートをする事になるだろう。

まあ、ことりの留学等といった重要な場面は大まかに覚えているので、その事は不幸中の幸いだった。

そんな事を考えつつ、俺は星空と言葉を交えていく。

「そういえば、雨宮先輩ってスクールアイドルのお手伝いをしているんですよね？」

「そうだよ。星空も加入するかい？ 私は大歓迎だけど」

「えっ!? むむむ無理ですよ凜がスクールアイドルになるなんて!」

「どうして?」

「だって凜は可愛くないし、髪だって短いし……」

「星空……」

足を止めた星空の方へと顔を向ければ、彼女は俯き気味に目を伏せていた。

そして、星空は諦観が充分に籠った笑みを俺へと向ける。

「雨宮先輩だつてそう思いますよね？ 凜にアイドルは似合わないって。それに、凜じゃなくてかよちゃんがアイドルに——」

「そんな事ない！」

「——えっ？」

俺が大声を出したからか、素つ頓狂な声を上げた星空。

そのまま不思議そうな顔でこちらを見つめる星空に、俺は彼女の元へ近づいて両肩に手を乗せる。

「そんな事ないよ、星空。君はとても魅力的だ」

「そんな嘘を言わないでください」

「嘘じゃない。星空はとっても可愛いし、髪の長さだつて君の明るいイメージと凄く合っている」

「う、うう……」

「君の笑顔は見ているこつちまで笑顔にしてくれるし、一つ一つの仕草が凄く可愛らしい。君と知り合つて間もない私ですらそう思ったんだ。だから君は可愛い、少なくとも私はそう思う」

そう告げてからゆつくりと離れると、動揺するように視線を揺らしていた星空は、や



がて俺へと目を向けて口を開く。

「本当に……本当に、凜が可愛いと思ってるんですか？」

「思ってる」

「でも……でも、やっぱり信じられないよ！」

「何度だって言うよ。星空、君はとても可愛い」

俺の言葉を聞いて、星空は迷うように目を泳がせた。

その様子を黙って見守っていると、やがて星空は頭を振り、笑みを浮かべる。

「ありがとうございます、雨宮先輩。少し自信がつかしました」

「星空……」

「さあ、早くかよちゃんを探しましょう！」

そう一方的に告げ、俺の横を駆け抜けていく星空。

それに慌てて振り向けば、離れた場所で星空が俺へと手招きしていた。

「どうにかして星空達もμsに入ってくれないだろうか」

今後の展開に憂い、思わずため息をついてしまう。

先ほど話した時に思ったのだが、やはり星空はμsに必要なメンバーだ。

星空なら……いや、西木野や小泉達一年生なら、今のμsを更に輝かせてくれるは

ず。そう俺は確信した。

まあ、俺が何もしなくても穂乃果達がなんとかしそうだけど、星空達をμ Sにいれるために足掻いてみよう。

そんな事を考えつつ、俺は星空の元へ駆け寄っていくのだった。

## 第二十三話 新たな仲間達

あれから星空と中庭に来てみると、何やら小泉は西木野と向かい合っていた。

二人は両手を広げて口を開けており、どうやらボイストレーニングをしているらしい。

思わず星空と顔を見合わせた後、急ぎ足で小泉達の元へ駆け寄っていく。

「どう、声を出すと気持ちいいでしょ？」

「うん、凄く楽しかったよ！」

小泉達の元まで近づくと、彼女達の会話が耳に入ってきた。

ニコニコと嬉しそうな笑顔をしている小泉に対して、西木野はどこか照れくさそうにそっぽを向いている。

そんな西木野達の姿を見て、星空は数瞬眉を寄せてから小泉へと声を掛ける。

「かーちゃん！」

「あ、凜ちゃん！」

「何をしてたの？」

「あのね、今西木野さんと声を出す練習をしてたんだ」

「西木野さんど？」

「そうよ。彼女、声が綺麗なのに声量が小さくてもつたないって話していたの……それにしてよ」

星空へと返事をしていた西木野は、不意にジト目で俺を睨みつけた。

ああ、そういえば西木野から逃げるように立ち去ったんだっけ。

西木野はあの時の事を根に持っているのだろう。現に俺を睨んでいるし。

昨日の出来事を思い返しつつ、俺は西木野に微笑みかけて口を開く。

「どうしたのかな？」

「どうしたのじゃないわよ！ 昨日、貴女がまた私から逃げだしたんでしょ」

「うーん、そうだったっけ？」

「くっ……その笑顔が腹立たしいわ」

拳を掲げ、怒りからか肩を震わせている西木野。

そんな西木野の様子を見て、星空は驚愕した表情を浮かべている。

確かに、普段の西木野からは想像できない姿だろうな。

あくまでもこれは俺の予想だが、西木野はクラスではいつも澄ました顔をしていそうだし。

しかし、現在の西木野は表情がコロコロ変わって豊かだ。

「に、西木野さん落ち着いて。雨宮先輩も西木野さんをからかつちや駄目ですよ」  
「そうだね、すまない。少々からかいすぎた」

「貴女、謝ればなんでも許されると思っっているでしょ」

「そんな事は思っていないよ」

「だったら私の目を見て言いなさい」

西木野とふざけあっていると、星空が小泉の手を取る。

そして、突然の事に目を白黒している小泉を尻目に、星空は彼女の手を引つ張つていく。

「り、凜ちゃん？」

「行くよ、かよちん。今日こそはアイドルになりますって先輩達に言わなきゃ！」

「ええっ!？」

「雨宮先輩、かよちんをアイドルに入れてください！」

困惑気味な声を上げる小泉を無視した星空は、途中で俺の方へと顔を向けてそう告げた。

俺としては、小泉がμsに加入するのは大歓迎だ。

しかし、その小泉本人が戸惑っている様子を見せている。

……うん、この状況は使えるかもしれない。

「まあまあ、まずは少し落ち着こう」

「そうよ。そんな彼女をせかさせるより、もっと自信をつけさせてからの方がいいわ」

「なんで西木野さんが凜達の話に入ってくるの？」

「なんでって……スクールアイドルって歌うでしょ？ だったらそうした方がいいと思っただけ」

「それじゃあ駄目なの！ かよちゃんはいつも迷ってばかりだから、こういう時は凜がパツと決めた方がいいんだよ！」

「そうかしら？ 昨日、彼女と話した時はそんなイメージを持たなかったわ」

「ふ、二人共喧嘩は止めようよお……」

至近距離で顔を合わせ、口論していく西木野と星空。

そんな二人の姿を見て、小泉は涙目でオロオロとしている。

やがて、小泉は助けを求めるようにこちらを見たので、それに頷きを返してから俺は勢いをつけて手を叩く。

瞬間、辺りに小気味よい音が鳴り、西木野達が思わずといった様子で俺の方へと顔を向ける。

三人の意識がこちらに向いたのを確認した俺は、微笑みを浮かべて口を開く。

「二人共、落ち着いたかな？」

「私は元々落ち着いていたわよ」

「だったら、わかるよね？ 星空の言う事にも一理あるというのが」

「それは……」

「やっぱり、雨宮先輩も凜の意見が正しいって思いますよね！」

言葉を濁して目を逸らす西木野を見て、星空は勝ち誇つたように俺へと顔を向け、同意を求めてきた。

それに、俺は首を横に振る事で応える。

「星空。西木野の時もそうだけど、君達は大事な事を忘れてる」

「大事な事？」

「そう。小泉の気持ちを聞いていないって事だよ」

「え、え？」

小泉に視線を転じると、彼女は素つ頓狂な声を上げて交互に俺達を見つめた。

対して、西木野達は俺の言葉の意味に気が付いたのか、小泉へと申し訳なさそうな表情を向ける。

「ごめんなさい、貴女の意見を聞いていなかったわ」

「ごめんね、かよちん。かよちんだって言いたい事があるよね」

「ええと？」

「君の正直な気持ちを言えばいいんだよ」

「わ、私は……」

俺達に見つめられた小泉は、やがて瞳に決意の炎を灯す。

そして、俺達を順番に見回しながら、小泉は小さい声で、それでも充分熱が籠った声色で告げる。

「私、アイドルやりたいです。声が小さいし、背も低いけど……それでも、アイドルになるのを諦められない!」

「かよちゃん……!」

「それで、星空はどうなんだい?」

感極まったのか瞳を潤ませていた星空に水を向ければ、彼女は驚いたように目を瞬かせた。

数瞬して星空は俺の言葉の意味に気が付いたのか、両手を上げて勢いよく顔を横に振る。

「無理無理無理! さつきも言いましたけど、凜には無理ですって!」

「あら、私は貴女もアイドルに向いていると思うけど」

「西木野さん!?!」

「わ、私も凜ちゃんと一緒にアイドルをしたいなあ」



「かよちゃんまで!?!」

笑みを浮かべて告げる西木野に、不安げに頼み込む小泉。

二人に詰め寄られた星空は、あちこちに視線を飛ばしながら頬を紅潮させている。

そんな三人の様子を尻目に、俺はある事をした後、星空へと声を掛ける。

「私も星空には入ってもらいたいな」

「雨宮先輩っ!」

「小泉だつて、自分一人より星空達と一緒にの方が良いよね?」

「はい、凜ちゃん達と一緒になら心強いです!」

「そうよ。彼女のために貴女達も……達?」

小泉に続いて同意するように頷いていた西木野だったが、不意に何かに気が付いたのか首を傾げた。

そして、西木野が不思議そうにこちらを見たので、俺は笑顔を返す。

「うん。小泉、星空、西木野の三人だよ?」

「ぐええっ!?!」

「西木野さんもアイドルやってくれるの!?!」

「私はそんな——」

「に、西木野さんがやるなら凜もアイドルやる!」

「——なんでそうなるのよ!？」

暫くガヤガヤと揉めはじめた三人を眺めていると、遠くから人影が近づいてきているのに気が付く。

無事に来てくれた事を嬉しく思いつつ、俺は手を叩いて小泉達の注目を集める。

「星空も西木野も、スクールアイドルに興味があるんだよね?」

「別に私は……」

「興味がなかったら曲を創ってくれないでしょ?」

「え、あの曲を西木野さんが創ったの? その、凄く良い曲だったよ」

「あ、ありがとう」

小泉が笑顔で賞賛を告げると、西木野は照れたように指に髪の毛をクルクルしている。  
く。

思わず話が脱線してしまっただが、その空気を直すために咳払いを落とす。

「コホン。……ともかく、私は西木野にもμsに加入して欲しい。将来の事はもちろん大事だと思う。でも、自分のやりたい事に見えない振りするのは違うとも思う」

「私は……」

「音楽、西木野の音楽が好きなんだ。西木野がピアノを弾いている時、凄く輝いていた。もう一度、μsのメンバーとしてその輝きを見せてくれないかな?」

「輝き……」

眩きを漏らした後、思案する仕草をする西木野。

それを確認した俺は、今度は先ほどから悩むように瞳を揺らしていた星空に声を掛ける。

「星空、私は君にもμsに加入して欲しい」

「凜も？」

「星空は自分が女の子らしくないって言ってたけど、そんな事はない。むしろ、私は今まで見た人の中で一番女の子らしくて可愛いと思うよ」

「そんなの嘘です。かよちゃんや、先輩と一緒にいた南先輩とかの方が可愛いと思います！」

「確かに小泉も可愛らしいよ。だけど、仕草が一番女の子っぽいのは星空だと思うな」

「う、うう」

「か、可愛いって恥ずかしいよ……」

顔を真っ赤にしている小泉を尻目に、俺は唸り声を上げている星空の肩に手を置く。

「私の言葉は信用できないかもしれないけれど、もっと自信を持っていいたいんだよ」

「自信……」

「それに、ことりの場合は可愛いって言うより——」

「——ことりが、何かなく？」

背後から聞こえた声に思わず振り向けば、いつの間にかことり達が近くにいた。俺が伝えた内容からか、嬉しそうな表情で西木野達に目を向けている穂乃果達。対して、ことりはニコニコと満面の笑みで俺の方へと微笑んでいる。

もしかして、ことりは何かを感じとったのだろうか。

確かに、星空を説得するためにことりはあざとい時があると伝えようとしたが、それを察して俺に声を掛けたのか？

いや、流石にそれは考えすぎだよな。例えこつりの目の奥が笑っていなくても、どこかその笑顔が黒くても俺の考えすぎだろう。

ともかく、気を取り直して咳払いを落とし、穂乃果達へと声を掛ける。

「練習中呼びだしてすまない。改めて、穂乃果達に聞いて欲しくてね」

「全然いいよ！ それで、花陽ちゃんだよな？」

「は、はい！」

「私達と一緒にアイドルになるって本当？」

「えっと、その」

窺うようにこちらを見つめていた小泉に頷きを返すと、彼女は胸に手を置いて一度瞳を閉じた。

そして、深呼吸してから瞳を開いた小泉は、高らかに声を響かせていく。

「私、一年生の小泉花陽と言います。皆と違って背が低くて、声も小さいです。それに人見知りで、得意な事は何もありません。でも、アイドルへの情熱は誰にも負けないつもり……いいえ、誰にも負けません！ アイドルの情熱しか誇れない私ですけど、どうかμ'sのメンバーにしてください！」

様々な想いが込められた小泉の言葉。

途中からこの場の全員が惹かれたように小泉から目を離せず、誰もが彼女の言葉に耳を傾けていた。

そんな小泉の想いを受けとめた穂乃果は、大切な物を受けとったように胸に手を置く。

そして、小泉へとふわりと微笑み――

「――喜んで！」

――手を差し伸べた。

小泉は穂乃果の顔と手を交互に見ていたが、やがて涙を流しながらも嬉しそうにその

手を握る。

「ううー、良かったにやー」

「なんで貴女が泣いているのよ」

「そういう西木野さんだつて泣いてるよ」

「な、泣いてなんかいないわよー」

そう告げると、西木野はそっぽを向く。

しかし、西木野の目元がじんわりと滲んでいるのが見えるので、星空の言う通り泣いているのだろう。

それにしても、無事に小泉がμ sに加入してくれて良かった。

俺のできた事は殆どなかったけど、少しは小泉の背中を押せたのだろうか。

そんな事を考えつつ、俺はそのまま揉めだした西木野達に近寄っていく。

「それで、星空達はどうするのかな？」

「えっ……」

「……」

言葉に詰まる様子見せる星空に、黙して瞳を閉じた西木野。

そんな二人の様子を見たことり達は、微笑みを浮かべて手を差し伸べる。

「まだまだμ sは」

「部員募集中ですよ」

ことり達が手を差し伸べてから、どれぐらいの時間が経っただろうか。

何度も小泉とことりの手に視線を送っていた星空だったが、やがて真剣な表情を浮かべると、大きく一步踏み出す。

「二年生の星空 凜と言います！ 先輩達みたいに可愛くないし、女の子らしくありません！ それでも、私もスクールアイドルをやってみたいです！ だから、私もμ s に入れてください！」

そう想いを告げ、星空はことりの手を握る。

対して、ことりは柔らかい笑みを星空へ向けて口を開く。

「ううん、凜ちゃんはとっても可愛いよ！ これからは一緒に可愛い衣装を沢山着ようね」

「あ、ありがとうございます……」

ことりに褒められて照れている様子を見せる星空を尻目に、俺は瞳を閉じたまま微笑だにしない西木野に問いかける。

「西木野もどうかかな？」

「……貴女、言ったわよね。私が本心を押し殺しているって」

「そう、だね。確かにそのような事を言った」

突然どうしたのだろうか？

あの時は、西木野に不愉快な思いをさせてしまっただけだと思っていたのだが。

そんな事を考えていると、西木野はふっと自嘲したような笑みを浮かべ、目を開く。

「貴女の言う通りだったわ。私はまだ音楽を諦めきれなかったみたい」

「という事は？」

「ええ。……私の名前は西木野 真姫。貴女達 $\mu$ 、 $s$ の曲を手掛けた一年生よ。改めて、貴女達の輝きに魅せられたわ。私も $\mu$ 、 $s$ の中で輝いてみたい。だから、私を $\mu$ 、

$s$ の一員にしてください」

最後に敬語で締めくくり、西木野は海未の手を取る。

対して、海未は頬を綻ばせて優しい口調で言葉を返す。

「私も、貴女の曲に魅せられました。これからは協力して $\mu$ 、 $s$ を更に魅力的にしていきたいでしょう」

「ええ、もちろん。これからも貴女の詩には期待しているわ」

「そ、そうですね。はい、これからも頑張ります……頑張りますよ」

突然吃つてあらぬ方向に目を向ける海未に、西木野は不思議そうに首を傾げていた。

ああ、いまだに海未は自分の詩を聞くのが恥ずかしいのか。

できるだけ俺も手伝っているが、やはり作詞のメインは海未になってしまう。



だから、海未には作詞に慣れてもらうしかないとか……。

作詞を恥ずかしがいる海未の姿を思い返しつつ、とりあえず一年生が全員加入してくれる事に、俺は思わず安堵の息を漏らすのだった。

「——ふあー、眠いにやあ」

「ほら、もつとシヤキツとしなさい」

「朝練ってこんなに朝早くからやるのお？」

「当たり前じゃない。朝から練習するから朝練って言うのよ」

何度も目を擦って欠伸を漏らしている星空に、気合い充分な様子を見せる西木野。

そんな二人の様子を尻目に、俺は一年生達が  $\mu$  s に加入した喜びを噛み締めていた。

小泉達が  $\mu$  s に加入した次の日。

早速六人となった  $\mu$  s で朝練をしようという話になり、俺達は神田明神に集合する

事となった。

そして、神田明神に向かう途中で星空と西木野に会い、こうして三人で階段を登っている。

「ふふふ、西木野は随分とやる気みたいだね」

「なっ！　ち、違うわ。これは最初が肝心だからしつかりしてるだけよ」

「ふーん、まあそういう事にしておくよ」

「くっ……また嫌らしい笑顔をして」

おっと、顔に出ていたか。

西木野が不機嫌そうな眼差しを送ってくるので、俺は表情を作りなおして咳払いを落とす。

「ん、んん。よし、これでいいな」

「何がいいのよ、意味わかんない」

「私もよくわからないな」

「益々意味わかんない……って、なんで髪の毛を指に巻いているのよ」

「西木野の真似をすれば賢くなれそうだから」

「ま、またそうやって私をからかっているんでしょ!?!」

そんな風に西木野とじゃれ合っていると、頭で船を漕ぎながら階段を登っていた星空

が、不意に顔を上げる。

「にや? ……あ、かよちん!」

ちやうど階段を登りきった所で、俺達は小泉の後ろ姿を発見した。

星空が元気な声を上げて駆け寄っていき、その言葉に振り向いた小泉は――

「おはよう、凜ちゃん」

――眼鏡をかけていなかった。

「あれ? かよちん、眼鏡は?」

「えつとね、自分を変えるためにコンタクトにしてみたんだ。変、かな?」

「そんな事ないよ! 可愛いよ、かよちん!」

「えへへ、ありがとう」

星空に褒められ、恥ずかしそうにはにかむ小泉。

それから暫し二人がやり取りを交わした後、星空が俺達の方へ顔を向けて口を開く。

「雨宮先輩と西木野さんもそう思うよね?」

「うん、眼鏡をしていた小泉もいいけど、眼鏡がない方も可愛いな」

「まあ、似合っていると思うわよ」

「えつと、その。褒めてくれてありがとうございます」

不安げな面立ちでこちらを見つめていた小泉にそう返すと、彼女は頬を赤らめて微笑

んだ。

すると、小泉の笑顔を見て照れたのか、西木野はサツと目を逸らす。

「小泉から目を逸らしてどうしたんだい？」

「う、うるさいわね！ ……ねえ」

「うん？」

「私達つて、*μs*に入ったじゃない？」

「まあ、そうだね」

要領の得ない西木野に、俺は思わず首を傾げてしまう。

小泉達も不思議そうに西木野を見つめており、自然と全員の注目が彼女に集まっていた。

「だからね、その」

「その？」

「な、名前で呼んで！」

「名前？」

「そう、名前。せっかくチームになったんだから、その方が効率的でしょ？」

自信満々に告げるが、西木野は不安げに瞳を揺らしていた。

そんな西木野の様子を見て、小泉達はお互いの顔を見合わせ、くすりと笑う。

「うん、私も西木野さん……ううん、真姫ちゃんとはもつと仲良くなりたいな」

「凜も真姫ちゃんとはもーつと仲良くしたいにやー!」

「花陽……凜……」

小泉達から名前を呼ばれ、眩きを漏らす西木野。

そして、次に彼女達は揃って俺の方へと顔を向ける。

「その、雨宮先輩の事を名前で呼んでもいいですか？ 私の事は花陽でいいので」

「凜も先輩を名前で呼びたい!」

「わ、私も名前で呼んでいいかしら?」

三者三様で尋ねてくる小泉達に、俺は笑みを返して頷く。

「もちろん、いいよ。改めて、これからよろしく。花陽、凜、真姫」

その言葉を聞いて、小泉——花陽達は各々が満面の笑みを浮かべるのだった。

『——よろしくお願ひします、朝陽先輩!』

## 第二十四話　μ、sの親睦会

「——じゃあ、改めて。真姫ちゃん、凜ちゃん、花陽ちゃん。μ、sへようこそ！」  
笑顔で穂乃果が告げると、真姫達は各々が嬉しそうな表情を浮かべた。

そんな様子を見た穂乃果が一度頷き、手に持つコップを掲げる。

「堅苦しい事はなしにして、今日は皆で楽しもう！　かんぱーい！」

『かんぱーい！』

穂乃果の号令に併せて、俺達も手に持つコップを掲げた。

ガラスが当たる音が室内に響き、その音を皮切りに場は騒然としていく。

穂乃果達二年生組は笑顔で談笑を始め、真姫達一年生組は興味深げに室内を見回す。

新たに六人となったμ、sの様子を尻目に、俺は今日の記憶を掘り返していくのだった。

真姫達がμ'sに加入してから、数日後の事。

放課後の練習を終えた時、おもむろに穂乃果が真姫達に声を掛けた。

「今日、うちに来ない?」

「えっ? 穂乃果さんの家にですか?」

代表して不思議そうな面立ちで尋ねた花陽に、穂乃果は笑顔で頷いて俺達に顔を向ける。

「そうそう。花陽ちゃん達がμ'sに加入したから、その歓迎会をやりたいなあつて」

「あゝ、それはいいかも!」

「だよね、ことりちゃん! やっぱり、こういう新規メンバーの歓迎会をするのは当然だよね」

「……穂乃果、本当にそれが本音ですか?」

「や、やだなあ海未ちゃん。せつかくの後輩に良い所を見せたいなんて、穂乃果はこれっぽっちも思つてないよ?」

視線を泳がせ、海未からの追求を逃れようとする穂乃果。

対して、海未は呆れたような表情を浮かべてため息をつく。

まあ、穂乃果の様子からして大まかな事情は察したのだろう。

もちろん、穂乃果が真姫達と親睦を深めたいと思つた事も本当だろうが。

「まあ、いいです。穂乃果にしては珍しく良い提案でしたので、私もそれには賛成です」  
「ちよつと、海未ちゃん。珍しくとはどういう意味かな？」

「どうでしょうか？ 皆さんの時間が空いているなら、これから歓迎会兼親睦会をするというのはい？」

「無視しないでよ海未ちゃん！」

海未の言葉を聞いて、真姫達はお互いの顔を見合わせた。

「朝陽ちゃん！ 海未ちゃんが虐めるー！」

「よしよし、穂乃果は可哀想に」

俺に泣きついてきた穂乃果をあやししながら傍観していると、やがて真姫達は恐る恐るといった様子で口を開く。

「私は別に構わないけど」

「その、迷惑じゃないですか？」

「そこは穂乃果の返答次第になるかと……穂乃果、今から貴女の家にも上げてもらつてもいいんですか？」

「えっ？ うん、大丈夫だよ！ お母さんならきつとわかってくれるって」

「えっと、連絡とかしなくていいのかなあ？」



「あ、そうだね。一応、お母さんに電話しておこつと」

不安げに尋ねたことりに頷いて俺から離れた穂乃果は、懐から携帯を取り出して耳に当てる。

そのまま電話でやり取りを始めた穂乃果を尻目に、俺は真姫達の元へ近づいていく。

「これは、穂乃果なりに真姫達と仲良くなりたいつて考えたんだと思うよ」

「それはなんとなくわかつてるわよ」

「うん、私達に気を使ってくれたんですよね？　うう、ちよつと緊張しちゃうなあ」

「大丈夫だよ、かよちゃん！　先輩達は皆いい人だから、きつと凄く楽しいと思うよ！」

「まあ、今回は時間も時間だから軽い親睦会という感じだろうね。その内、休日を使つてちゃんとした歓迎会をやるんじゃないかな？」

真姫達と話していると、どうやら穂乃果は親から無事に許可を貰えたらしい。

嬉しそうな笑みを浮かべた穂乃果は、俺達を順番に見回して腕を振り上げる。

「よーし、じゃあ穂乃果の家でパーティーだ！」

「パーティー楽しみだにゃー！」

「白いご飯があつたら嬉しいんだけどなあ……」

穂乃果に釣られて跳び上がる凛に、期待に満ちた面立ちになる花陽。

なんていうか、本当に花陽はお米が好きなのだろう。

現在も、キラキラとした眼差しで空にある茶碗に似た雲を眺めているし。

まあ、唐突な穂乃果の提案からお米はないと思うが。

「とりあえず、私は一度家に戻って準備をしたいのですが」

「ことりも、一回お家に帰りたいなあつて」

「駄目だよ二人共！ こう言う時は直ぐに行動するんだよ。ほら、前に海未ちゃんも善は急げとか言ってたじゃん」

「あ、あれは穂乃果が勉強をサボってたからです！」

「いいからいいから！ よーし、穂乃果の家にレッツゴー！」

「だ、だから話を——」

「ほ、穂乃果ちゃ——」

海未の言葉にも耳を貸さず、穂乃果は海未とことりの手を取って駆けだす。

そして、穂乃果は叫び声を上げる海未達を連れ、あつという間にここから去っていった。

結果、この場に残された形となった俺達は、自然と互いの顔を見合わず。

「私達も行こつか」

「……穂乃果さんつて、いつもあんな感じなんですか？」

「まあ、思い立ったら吉日を地で行くのが穂乃果だと思うよ」

「苦労しているのね」

同情したような眼差しを送ってくる真姫に対して、俺は苦笑いを返す事しかできなかった。

苦労していないと言えば嘘になるが、それ以上に穂乃果と過ごすのは楽しい。

これも、一種のカリスマと言つてもいいだろう。

まあ、時折行きすぎて海未に叱られるという場面もあるが。

そんな事を真姫達に話しながら、俺達も穂乃果達の後を追うのだった。

「——朝陽ちゃん!」

「ん? どうしたんだい、穂乃果?」

記憶を掘り返していた俺は、穂乃果の掛け声で現在に意識を戻した。

声の方へと視線を転じていけば、穂乃果が笑顔で割り箸を俺に向けている。

反射的に受け取った割り箸には『王』という文字が書いており……

「はい、じゃあ王様だーれだ？」

「えっと、私みたいだね」

「おおつ、一番目は朝陽ちゃんが王様かー」

どうやら、俺が意識を離している間に王様ゲームをする事になったらしい。

俺以外は全員割り箸を手を持っており、固唾を呑んだ様子でこちらを見つめている。

いや、いきなり王様ゲームと言われても状況に付いていけないのだが。

「王様ゲームをやる事になった経緯は？」

「あれ、朝陽ちゃん聞いてなかったの？ 駄目だよ、人の話はちゃんと聞かないと」

「面目ない。ちよつとポーツとしていたよ」

「今回、私達はお互いの事をよく知るために、何かゲームをしようという話になったんです」

「それで、凜ちゃんが王様ゲームをしようって提案して」

「穂乃果が賛成したって事！」

海未達の説明を聞いて、俺は凜達へと視線を移した。

凜は笑顔でこちらに手を振っており、花陽は緊張したように俺を凝視している。

また、真姫は早く命令をしろと視線で圧力を掛けてきてもいる。

……とりあえず、理由はわかったからさっさと命令を済ませよう。

「では、改めて王様からの命令を告げます。まずは初めだから簡単な命令にするよ」

「ドキドキ……」

「は、早く言いなさいよ!」

「溜めても仕方ないね。では、三番は自己紹介をしてください」

俺の言葉に、皆は手元の割り箸に視線を落として番号を確認していく。

すると、おずおずといった様子で花陽が手を上げる。

「わ、私です」

「おー、花陽ちゃんか。じゃあ、自己紹介お願い!」

「かよちゃん、頑張つて!」

「う、うん。えつと……名前は小泉 花陽と言います。歳は十五で、誕生日は一月十七日、血液型はB型です。好きな食べ物はいいご飯で、好きなものはアイドルですっ! これからよろしくお願いします!」

最後に頭を下げ、花陽は自己紹介を締めくくった。

対して、笑顔で俺達が拍手をすると、花陽は恥ずかしそうに頬を赤らめていく。

特に凛は頬を綻ばせ、優しい瞳で花陽を見つめていた。

「うんうん、花陽ちゃんらしい良い挨拶だったよ」

「あ、ありがとうございます穂乃果さん」

「よし、では皆から割り箸を回収して……はい、割り箸を取って」

皆が割り箸を取ったのを確認した後、穂乃果はにやけた笑みを浮かべる。

「穂乃果、顔に出ていますよ」

「あ、わかっちゃった？　じゃあ行くよ、王様だーれだ？」

『王様だーれだ？』

「はいはい！　王様は穂乃果でーす！」

「そりゃあ、あんなにニヤニヤしてたら誰でもわかるわよ」

「あはは……」

呆れたように眩く真姫に、ことりは苦笑いを零した。

対して、そんな真姫達の様子を全く気にしていないのか、穂乃果はにやけた笑みのまま俺達をゆつくりと見回していく。

「さてさて、何を命令しちやおつかなあ？」

「穂乃果、あまり過激なのは駄目ですよ。これは、あくまでも親睦会なんですから」

「わかっているよ、海未ちゃん。……あ、そうだ」

海未に窘められた穂乃果は、不意に何かを思いついたのか。

おもむろに、海未へとジーツとした視線を送りはじめる。

唐突なその行動に警戒心を滲ませる海未を尻目に、穂乃果は何かを確かめるように眩

きを落としていく。

「一」

「な、なんですか？」

「二」

「穂乃果？」

「三」

「ですから、先ほどから穂乃果は何を——」

「四」

「——言っているんでしゅか？」

この瞬間、俺達は誰に言われずとも心をついにしていた。

——ああ、海未の番号は四番に違いない、と。

時が凍り、辺りになんとも言えない微妙な空気が漂いだす。

俺達が揃って生暖かい瞳で海未を見つめていると、海未はその視線を敏感に感じ取ったのだろうか。

顔色を真っ赤に染め上げた海未は、穂乃果からついつと目を逸らす。

「じゃあ、命令をしようかな」

「ま、待ってください！ 不正です、今のは不正です！」

「えー、穂乃果はただ順番に数字を言ったただけだよ?」

「それが不正なんです!」

穂乃果に指を突きつけ、いきり立つ海未。

ともすれば、海未の姿は犯人を追いつめた探偵役に見えるだろう。

しかし、探偵海未に弾劾された本人である犯人は、表情に不敵な笑みを張りつける。

「ふっふっふー。穂乃果は一言も海未ちゃんに番号を尋ねていないんだよ? 穂乃果が思っている番号は、実は海未ちゃんとは違うかもしれないじゃん」

「で、ですが」

「あれれー? もしかして、海未ちゃんは自信がないのかなー? 穂乃果に当てられる

のが、怖いのかなー?」

「くっ……」

腹立たしい笑顔をしている穂乃果に、海未は肩を震わせて拳を掲げる。

だが、暫くして海未は落ち着いてきたのか、ため息を一つ漏らして頷く。

「いいでしょう。そこまで言うのなら、穂乃果の挑戦を受けて立ちます!」

キリリと瞳の力が増し、威厳に満ちた表情を浮かべた海未。

その様子は、まるで戦場に赴く戦士のような面立ちであった。

「じゃあ、行くよ?」



「いつでも構いません」

「——四番、今までで一番恥ずかしいエピソードを暴露する」

「……今、なんと?」

穂乃果に告げられた意味を、脳が処理してくれなかったのだろう。

呆然とした声を上げた海未に、穂乃果は悪役が如く微笑み、

「四番さんに、覚えている中で一番恥ずかしいエピソードを話してほしいなって」

「だ、誰ですか四番は?! ……私でした」

「王様の命令は?」

「絶対、です」

「ふっふっふー。日頃から穂乃果に勉強を強要する仕返しだよ! これに懲りたら、もう少し穂乃果の勉強時間を減らすんだね! ……本当に、もう二十四時間監視で勉強するのは嫌だよ」

瞳に絶望の色を宿し、崩れ落ちる海未。

対して、海未へと高笑いを響かせていた穂乃果だったが、不意に瞳を空虚にして涙を一粒落とした。

そんな二人の様子を静観していた俺達は、揃って呆れた表情を浮かべてしまう。

「なに、この茶番?」

「しっ！　そういう事を言ったら駄目だよ、真姫」

「海未先輩があそこまでなるエピソードってなんだろう。ちょっと、気になるかも」  
「でも、嫌な思い出を聞くのはいけない事だよ？」

「海未ちゃんの場合は、なんとなく予想がつくけどね」

俺達が身を寄せあつて囁いている間にも、穂乃果達の状況は変化していったらしい。

いつの間にか立ち直ったようで、海未は決然とした表情を浮かべ、俺達を見回す。

「無念ですが、王様の命令は絶対です」

「む、無理して言わなくてもいいんですよ？」

「いいんです、花陽。これも、勝負に負けた私の責任です。……私が、生涯で最も恥ずかしいと考えているエピソードは」

何故かそこで言葉を区切り、海未は口籠った。

俺達は自然と海未の様子を注意深く見守り、辺りには重苦しい沈黙が漂い出す。

「エピソードは？」

「エ、エピソードは……うう、やはり恥ずかしすぎて言えません！」

そう叫ぶと、海未は部屋の隅に走っていき、そのまま座り込んでしまった。

こちらに背を向けているので、海未の表情はここからだと窺えない。

しかし、海未から醸しだされる雰囲気から、凄く羞恥心を覚えている事がわかる。

そんな海未の様子を見たからだろうか。

穂乃果は仕方ないなあ、というようなため息を漏らして口を開く。

「流石にやり過ぎたよ。だから、命令を変えるよ」

「……本当ですか？」

「うん。皆で仲良くやるのが王様ゲームだからね！」

「穂乃果っ！」

ぱあつと子供のような笑顔になった海未を見て、穂乃果も笑みを落として頷いた。

そんな二人の様子を眺めて、真姫が眩きを一つ。

「……今のは、落としてから上げる人の心理に漬け込む手法よね」

「……」

戦慄した様子で告げた真姫の言葉に、俺達は返す言葉を見つけられなかった。

幸いなのは、穂乃果がこれを天然でやっている事だろうか。

いや、どちらにしても穂乃果が恐るべきなのは変わらないが。

ともかく、それからは終始和やかに王様ゲームは進んでいき、互いに俺達は仲を深める事に成功するのだった。

## 第二十五話 不審者アイドル、再誕

「あ、おはよう朝陽ちゃん」

「おはよう、ことり」

神田明神で練習の準備をしていると、階段の方からことりが手を振りながら近づいてきた。

ことりの挨拶に笑みを返した俺は、地面に敷いたシートの上に、タオルや機材を手早く並べていく。

すると、忙しく動く俺を見たからか、ことりが申し訳なげな表情を向けてくる。

「やつぱり、これからはことり達も手伝った方が……」

「いや。私はことり達のサポートをする役割だからね。これぐらいはさせて欲しい」

「でも、朝陽ちゃん一人の負担にするのは」

「それを言ったら、ことり一人に衣装デザインを考えさせている私も辛いよ」

「そ、それはことりが好きだからいいのっ！」

慌てた様子で告げることりを見て、俺は苦笑いを浮かべつつ首を横に振る。

「私も、ことり達のサポートをするのが好きだから……こうして、誰かの役に立つのが

……」

「朝陽ちゃん？ 最後の方になんて言ったの？」

「ううん、なんでもない。それより、早く準備体操を始めよっか」

「そうだね。穂乃果ちゃん達が来る前に——」

不思議そうに首を傾げていたことりだったが、不意に目つきを鋭く——と言つても、随分と可愛らしい目つきだが——すると、素早い動作で背後に顔を向ける。

釣られてことりの方に目を向けてみれば、僅かに影が角に隠れる姿を発見する。

「——朝陽ちゃん。今、誰かいたよね？」

「まあ、いたような気がするけど」

「やっぱり、見間違えじゃなかった」

頻りに頷いていることりを尻目に、俺は角の方に視線だけを動かしていく。

すると、不審者の格好をした少女が角からそーっと顔を出す。

角度の問題からことりには見えていないようだが、俺からはその間抜けな姿が丸見えだ。

「ことりことり。今、その人が顔を出しているから、不意をついて振り向いてごらん」

「うん、わかった……えいっ！」

「やばっ！」

俺の言葉に頷いてから数瞬後、今度は身体ごと素早く振り向いたことり。対して、不審者は焦ったような声を上げ、さっと物陰に隠れた。

しかし、急いで隠れたからか、不審者のツインテールにしている髪の毛が隠れきれない。

そんなどこか間抜けな不審者の様子を見たからだろうか。

ことりは凄く微妙な表情を浮かべ、視線で俺に助けを求めてくる。

「ええと、どうすればいいのかな？」

「とりあえず、私が様子を見てくるよ」

「え、危ないよ朝陽ちゃん！ 危険な人かもしれないよ！」

「まあ、多分大丈夫だと思っから」

「おはよー！」

「じゃあ、ことりは穂乃果に事情を説明しておいて」

「あ、朝陽ちゃん！」

呼び止めてくることりの声を努めて無視して、俺は静かな足取りで不審者の元へ歩み寄っていく。

すると、どうやら俺が近づいてくるのを感じとったようで、不審者はコソコソとした動きでこの場から離れようとしている。

「そうは問屋が卸さないよつと」

「ふっ！ ……あ、あれ？」

「どうしたんですか？ 手を伸ばしたりなんかして」

俺の脚を掴もうとしたのだろう。

物陰に隠れてしやがみ込み、こちらの方へと手を伸ばしていた不審者。

不審者はビクリと肩を震わせ、ぎこちない動作で俺を見上げる。

そして、呆れた表情を浮かべた俺と視線が合った不審者は、指でサングラスを押し上

げながら、何事もなかったかのように立ち上がる。

「な、なんの事かしら？ あんた、どつかの超絶可愛いアイドルと私を見間違えているん

じゃない？ 私はあんたと初対面よ。決して、スーパーアイドルのにこじやないわ」

「はあ……おはようございます、矢澤先輩」

「ちよ、ちよつとっ！ にこの変装セットを取らないでよー」

ため息をついてから、不審者——矢澤先輩のサングラスを奪いとった。

狼狽したように取ったサングラスに手を伸ばす矢澤先輩に、俺は改めて要件を尋ねる

べく声を掛ける。

「それで、どうして私達を観察するような真似をしたんですか？ まあ、大方予想はつき

ますけど」

「観察じゃないわよ。敵情視察よ、敵情視察」

「ま、そういう事にしておきましょう」

「そういう事つてなによ！」

声を荒らげる矢澤先輩へと手を突きだし、今日の予定を素早く確認してから。

「ところで、矢澤先輩。今日の予定は空いていますか？」

「は？　なによいきなり……まあ、今日は特に何も無いけど」

「じゃあ、今日の放課後に矢澤先輩に会いに行きますね」

「はあ？」

「そろそろ皆を待たせているので、私はこれで失礼します」

「ちよ、ちよつとどういう事——」

矢澤先輩の頭にサングラスをかけ直した後、頭を下げ、踵を返した。

暫くして、矢澤先輩の慌ただしい声が聞こえなくなった事から、恐らく彼女はこの場を離れたのだろう。

「あ、朝陽ちゃん！　何もされなかった？」

「ことりちゃんから変な人がいるって聞いたんだけど」

「どうやら、穂乃果達の事が気になっていたらしいよ」

「それって、もしかしてμ'sのファン!？」



それらしく矢澤先輩の事をぼかして伝えると、何故か穂乃果は瞳を輝かせはじめた。また、意外すぎる穂乃果の言葉を聞いたことは、頬に手を当てて苦笑いを浮かべる。まあ、今の矢澤先輩の行動はある意味、μ'sのファンと言っても過言ではないかもしれないが。

μ'sの迫っかけをしているし、μ'sを酷く意識しているし、こうして近くで観察をしているし。

「とりあえず、朝練を始めよう。海未達も来た事だし」

「ええー、そのファンの話をもっとよく聞きたいよお」

「ファンじゃないと思うけど……まあ、近いうちに会えるから」

「すみません、遅れました」

「あ、聞いてよ海未ちゃん——」

申し訳なさそうな表情を浮かべた海未の元へと、穂乃果は機嫌良さげな足取りで駆け寄っていく。

そのまま海未に笑顔で先ほどの出来事を伝えている穂乃果を尻目に、俺は柔軟体操の手伝いを再開するため、ことりの方へと足を進める。

「それで、結局誰だったの？」

「穂乃果が気に入る人、かな」

「穂乃果ちゃんか？」

不思議そうな面立ちで、首を傾げたことり。

それに頷きを返しながら、内心で今後の展開に思考を巡らせていく。

現段階ではわからないが、穂乃果が矢澤先輩を気に入るのは間違いないと思う。

矢澤先輩のアイドルへの情熱は花陽に並ぶほど……いや、一度挫折した経験のある矢

澤先輩の方が強いかもしれない。

穂乃果ならば、そんな矢澤先輩の熱い想いに気が付き、 $\mu$  s に勧誘しようとするはず。

後は、俺が穂乃果の行動を影でサポートをして、より確実に矢澤先輩を $\mu$  s に引き込むようにするだけ……

「待っていてください、矢澤先輩」

「何か言った、朝陽ちゃん？」

「ことりの気のせいじゃないかな？」

「そうかなあ？」

ことりの背中をゆっくりと押しつつ、俺は矢澤先輩へと思いを馳せるのだった。

矢澤先輩がμ sの観察に来た日の放課後。

用事があると告げて、念のため海未に人数分のタオルを預けた後。

矢澤先輩に会うために、俺はアイドル研究部の部室前に赴いていた。

既に矢澤先輩は中にいるようで、部室の明かりが点いている。

「どうも、矢澤先輩」

「あーはいはい。用は中で聞くからさっさと入って」

「お邪魔します」

ノックをすると、矢澤先輩が扉を開けて顔を出した。

そのまま矢澤先輩に手招きをされたので、言葉に甘えて部室の中に入り、促されるまま椅子に座る。

矢澤先輩も俺と向かい合って着席し、これで話をする準備が整う。

「で、私になんの用があるわけ？」

「まあまあ、本題の前に少し雑談をしましょう。矢澤先輩の目から見ても、μ sはどうでしたか？」

「どうって、そんなの駄目駄目に決まってるじゃない」

ぶすつとした顔つきで頬杖をつき、ジト目で俺を見つめる矢澤先輩。

やはり、いまだに矢澤先輩は、sを認めていなかったか。

なんとなく想像はついていたが、念のため矢澤先輩に、sの印象を聞いてみたのだ。

ファーストライブから、sが見違えるほど成長したとは言え、それはあくまでも素人から見た場合の話。

矢澤先輩のような厳しい目線を持つ人からすれば、sはまだまだスクールアイドルとして半人前にも満たないのだろう。

「まあ、やっぱりそう思いますよね」

「じゃあなんでわざわざ聞いてきたのよ？」

「矢澤先輩の気持ちを確認しておきたかったんです」

「ふーん、私の気持ちねえ」

「そういう事です……あ、そういえば。どうして、矢澤先輩は、sの練習風景を見ていたんですか？ 駄目駄目なら見る必要はないと思いますけど」

不意な俺の言葉を聞いて、矢澤先輩はビクリと肩を震わせ、そつと俺から目を逸らした。

虚空を眺め、明らかに作り笑いだとわかる笑みを浮かべ、矢澤先輩は裏返った声色で告げる。

「そ、それはあ。あの子達の踊りがあまりにも見ていられなくて、にこは放っておけなかったのお。ああ、駄目駄目なアイドルも見捨てられないにこって、なんて優しくて魅力的な女の子なんでしょう」

「つまり、*μ's*が心配で心配で堪らない、と」

「ち、違うわよ！　ただ、あんな腑抜けた活動をしているのなら、さっさと解散した方がいいって言おうとした——ったあい!？」

ニヤニヤして言葉を返せば、矢澤先輩は机を強く叩いて立ち上がった。

しかし、矢澤先輩はあまりにも机を強く叩きすぎたのか、言葉の途中で顔を真っ赤に染め上げ、プルプルと肩を震わせはじめた。

顔色と同じように真っ赤になった手のひらを見つめ、涙目で息を吹きかけている矢澤先輩。

……なんていうか矢澤先輩って、お約束を外さないというかなんと言えればいいか。

矢澤先輩のはそれはそれで美味し……可愛らしい反応なのだが、これってどちらかかと言うと芸人的な反応だと思う。

アイドルとして考えると、どうしても弄られ役等と言ったポジションになるだろう

が。

「そんなにμ sは腑抜けていましたか？」

「ふーっ……ふーっ……ええ？ ええ、そうね。あいつ等はアイドルを冒読しているわ。アイドルの事を何一つわかっていないのよ！」

「本当に、アイドルを冒読していますか？」

「……ええ、しているわ」

再度問いかけるも、矢澤先輩は俺の目を見てそう言い切った。

暫くそのまま矢澤先輩と見つめ合っていると、やがて彼女は僅かに目を逸らす。

やはり、矢澤先輩は心の奥底ではわかっているのだろう。

穂乃果達μ sは、スクールアイドルを決して舐めていないという事を。

だけど、穂乃果達——花陽は除く——のアイドルへの情熱が、矢澤先輩ほどないという事も事実。

でもまあ、だったら話は早い。矢澤先輩にアイドルの事を講義してもらえば良いのだから。

「そういう理由で、矢澤先輩もμ sに加入してください」

「は、はあっ!? 何がどうなって、あんたの中でそんな結論が出るわけよ!」

「まあまあ、試しに入ってみるだけでもいいじゃないですか。入会金は無料ですよ？」

しかも、今なら愉快的仲間達も付いてきますし」

「途端に胡散くさい勧誘になったわね……じゃなくて！ 私はあんた達のグループに入るつもりはないから」

白けた眼差しをこちらに送っていた矢澤先輩は、再び腰を下ろしてそっぽを向く。

自分の意見を曲げるつもりはないと言外に告げるその様子に、俺は思わず表情に苦笑いを落とす。

矢澤先輩に断られるとは思っていたが、まさかここまであっさりとは否定されるとは。

まあ、矢澤先輩は穂乃果達の事を殆ど知らないのです、いまだに彼女達々、sを信用できないのだろう。

——また、あの時のように自分だけ先走るのではないか。自分だけがアイドルに高望みをしているのではないか。前のように自分を置いてスクールアイドルを辞めるのではないか……。

恐らく俺の予想が正しければ、矢澤先輩はこのような想いを抱えているはず。

勇気を出して一步を踏み出すのが怖くて、また自分の期待が裏切られるのを恐れて、俺の勧誘を断ってしまう。

でも、それはつまり期待を持っている事の裏返しなわけで……

「私は、矢澤先輩に々、sへと是非とも加入したいだけです」

「なんでそこまでして私を？ 他にも勧誘できる人達はいるでしょ」

「矢澤先輩だからです！ 矢澤先輩でなければ、駄目なんです！」

「っ！」

ありつたけの想いを込め、それを瞳に乗せて言葉突きつけた。

俺の言葉を聞いて、矢澤先輩は目を大きく見開き、こちらをまじまじと見返す。

部室内は静寂に包まれ、時計の針を刻む音だけが木霊する。

暫くすると、矢澤先輩は俺から視線を外し、顔を俯かせた。

「どうしました？」

「今さら、遅いわよ……」

「何か言いました、矢澤先輩？」

「な、なんでもない！」

「そう、ですか」

慌てた様子でそう返し、袖で目元を拭う矢澤先輩。

そして何度か鼻をすすった後、矢澤先輩は不敵な笑みを浮かべて口を開く。

「ま、まあ。あんたがあのアイドルグループに入れ込んでるのはわかっていた事だけ

ど」

「まあ、そうですね。穂乃果達ならなんでもできるんじゃないかって思いますし」



「だから、にこがあいつ等をテストしてあげるわ」

「テスト、ですか？」

矢澤先輩は、オウム返しに尋ねた俺へと頷いた。

「そうよ。あんたがそこまで言う価値があるのか、私が試すの」

「……今朝のように、コソコソとしたり小賢しい真似をしたりしないでくださいよ？」

「し、しないわよ。にこがそんな小物のような事をするわけないじゃない」

コソコソとした事をしようとしていたな、絶対。

俺のジト目に気が付いたのか、矢澤先輩は素知らぬ顔をして顔を背ける。

しかし、若干声の上擦っていたのを聞いたので、俺の予想は間違っていないだろう。

「あまり、陰険な手段は取らないでくださいね？」

「大丈夫よ。私が、あいつ等にアイドルとは何かを教えてあげるわ！」

「……不安になってきたなあ」

拳を掲げ、不敵な笑みのまま叫ぶ矢澤先輩。

そんな矢澤先輩の様子を見て、俺は今後の展開に頭が痛くなっているのだった。

「——私のテストを受けなさい、高坂穂乃果！」

「へ？」

指を突きつける矢澤先輩に、素っ頓狂な声を上げる穂乃果。

……どうしてこうなった。

「あんた達がスクールアイドルに相応しいか、にこが見極めてあげるわ！」

「え、え？」

——もう一度言おう……どうしてこうなった!?

## 第二十六話 にこのアイドル認定試験

矢澤先輩がどこか間違った決意をした次の日の放課後。

ここ最近梅雨の時期なので、毎日のように雨が降っていた。

しかし、今日は珍しく晴れ模様だったので俄然皆のやる気は上がり、さあこれからμ'sの練習を始めようという事になっていたのだが……

「失礼するわよ」

「ええと、誰？」

唐突に屋上の扉が開かれ、中から不審者の格好をした矢澤先輩が現れた。

当然、俺以外は矢澤先輩の事を知らないなので、皆はその怪しい姿に警戒を募らせている素振りを見せる。

そんな俺達の視線は全く気にしていないのか、矢澤先輩は堂々とした足取りでこちらに近づいていく。

「あんたが高坂穂乃果ね」

「そ、そうだけど……」

戸惑い気味に頷いた穂乃果へと、矢澤先輩は勢いよく指を突きつけ――

「私のテストを受けなさい、高坂穂乃果！」

「へ？」

——そう告げるのだった。

現在、辺りには緊迫感漂う空気が充満していた。

指を突きつけたまま、大物感を醸しだしている矢澤先輩。

矢澤先輩の突然の指名に、驚いた様子で目を瞬かせている穂乃果。

そして、二人から離れた場所で静観している俺達。

「あの人を止めなくていいんでしょうか？」

「制服を着ているから、この学校の生徒なのは間違いないと思うけど……」

心配げに穂乃果を見つめる海未達。

対して、とりあえず危険はないと判断したからか、真姫達一年生組はどこか気楽な様

子だった。

「まあ穂乃果先輩が指名されたし、私達には関係ないんじゃない？」

「なんのテストをするんだろう？」

「ラーメンの早食いとか？」

「それはないんじゃないかな、流石に」

ガヤガヤと好き勝手に言葉を交わしていると、矢澤先輩が穂乃果へと突きつけていた指をこちらに移す。

「そこっ！ あんた達にもこのテストを受けてもらうから」

「ええっ!？」

「私達は練習をしたいんですが——」

「そのテスト、受けるよ！」

「——ほ、穂乃果!？」

海未が慌てるのも無理はない。

見知らぬ怪しい人からのテストより、μ'sの練習を優先するのが普通だろう。

しかし、穂乃果は矢澤先輩からのテストを優先した。

それは、ただ単に面白そうだと思ったからなのか、はたまた穂乃果がこれを受けた方が良いと感じたからなのか……

「それで、なんのテストをするの？」



「アイドルの事は何一つ見逃せませんっ！」

「一人乗り気な人もいるし、今日の練習は諦めた方がいいんじゃないかしら?」

「そう、ですね。穂乃果がテストを受けると言ってしまった以上、後は見守るしかありませんね」

諦めた様子でため息をつく海未等露知らず、穂乃果達は静かに言葉を交えていく。

「私があんたに質問するから、その内容について答えてもらおうわ」

「クイズって事ですか? なぞなぞなら穂乃果得意だよ!」

「ふふふつ、その余裕がいつまで続くか見物ね」

「どんな問題なのでしょうか……!」

「かよちゃんが楽しそうで良かったにゃー」

不敵な笑い声を零した後、矢澤先輩は穂乃果へと問いを投げかけるのだった。

「——お客さんがアイドルに求めるものって何かしら?」

「お客さんが、求めるもの？」

矢澤先輩の問題を聞いて、穂乃果は顎に手を添えてウンウン唸りはじめた。

俺達も自然と矢澤先輩の問題を考えるべく、互いの顔を見合わせて議論を交わしている。

「なんだろう？ 可愛い衣装とかかなあ？」

「やはり、技術ではないですか？」

「歌声じゃないかしら？」

「うーん、凛はダンスだと思うなあ」

「候補が多すぎて絞りきれません……！」

各々が好き勝手に自分の見解を述べる中、穂乃果は虚空を眺めたまま答ええない。

しかし、暫くして自分なりに答えを思いついたのか、矢澤先輩の方へと穂乃果は視線を戻す。

腕を組んでふてふてしい態度を取る矢澤先輩に、穂乃果は笑顔で頭を掻きながら口を開く。

「わかんない！」



『……………わかんない?』

「うん。だって、穂乃果はただ皆とアイドルをしたいって思っただけだもん。だから、今までお客さんを意識した事はあまりなかったなあ」

確かに、穂乃果がスクールアイドルをやるきっかけになったのは、廃校を阻止したいという目的に、自分もアイドルとして輝いてみたいと思ったからだっただけはず。

お客さん達を楽しませるためではなく、あくまでも自分達が楽しむためにアイドルになる。

人によつては、酷く傲慢に感じる考え方だろう。

しかし、だからこそ穂乃果は誰よりもスクールアイドルを楽しんでおり、そしてその気持ちを通して誰よりも輝いている。

「……………それが、あんたの答えでいいのね?」

「はい! 穂乃果は、sの皆と輝きたいだけだから!」

「つ……………そ、そう」

陽だまりのような笑みを浮かべた穂乃果。

そんな穂乃果の笑顔を見て、矢澤先輩は何を思ったのだろうか。

矢澤先輩は僅かに言葉に詰まった後、かぶり頭を振ってこちらに顔を向ける。

「あんた達は、さっき言っていた事でいいのよね?」

「え、ええ。私達はそう考えていますが」

「ふうん……じゃあ、次はあんだ達の踊りを見せなさい」

「へ？ 穂乃果達のダンスを？」

矢澤先輩は素つ頓狂な声を上げた穂乃果に頷き、コツコツと俺達の周囲を回りはじめた。

指を立て、俺達へと言い聞かせるように、矢澤先輩は言葉を紡いでいく。

「そうよ。あんだ達がどれぐらい成長したか、この私が直々に採点してあげるわ」

「あの。そもそも、貴女にテストしてもらう理由が私達にはないんですわ」

「甘いつー！」

「きやつ!？」

むつとした様子で言葉を返した海未。

しかし、矢澤先輩に勢いよく指を突きつけられ、海未は可愛らしい悲鳴を上げて肩を震わせる。

それから、思わずといった様子で頬を赤らめている海未を尻目に、矢澤先輩は順番に俺達を見回していく。

「あんだ達はなんにもわかってないわ。アイドルというのはね、常にアイドルとしての意識を持つ事が大切なのよ。私にテストをしてもらう理由がない？ そんな腑抜けた

考えは甘えだわ！ 私がテスト云々言う前に、お客さんの要望を瞬時に答えるのが、アイドルとしての心構えって言うもんでしようが！」

「な、なるほどっ。参考になります！」

「そう、なのですか？」

「あんたも、あんたも、あんたも……あんた達全員、腑抜けている！ アイドルを冒瀆しているわ！ そんなんで、スクールアイドルが務まると思っているの!?!」

俺達を指し示した後、イライラした様子で何度も靴を鳴らす矢澤先輩。

対して、ここまで強く否定されたからか、海未達の表情が険しくなっていく。

しかし、穂乃果だけは神妙な顔つきで思案する仕草をしていた。

「……よし、やろう！」

「穂乃果ちゃん？」

「だって先輩……えっと、名前を聞いてなかった。名前を聞いてもいいですか？」

「にこよ」

「ありがとうございます。それで、にこ先輩がアイドルに強い想いを持っているってわかるから、今の穂乃果達の全力を見せて評価してもらった方がいいかなって」

「ですが、そのですね」

言葉を濁らせている海未だったが、彼女の言いたい事は概ね理解できる。

得体の知れない先輩に評価されても、自分達のためになるとは思えないのだろう。しかも、自分達と初対面の先輩とくればなおさら。

だが、穂乃果は一度決めると一直線に進んでしまうので……

「大丈夫だよ、海未ちゃん。にこ先輩の想いは、本物だと思う」

「穂乃果先輩の意見に、私も同意します！」

「花陽ちゃん？」

「あの人からは、私と同じぐらいの熱い感じを感じました。アイドルが好きなのに、悪い人はいません！」

瞳に情熱を宿した花陽は、そう告げて胸の前で可愛らしく拳を握った。

ある意味勘と言ってもいい花陽の自論を聞いて、海未達は毒気が抜けたように呆れた表情を浮かべる。

まあ、花陽がそこまではつきり言うとは思わなかったから、海未達はなんとなく気が抜けたのかもしれない。

少なからず、皆にも矢澤先輩のアイドルへの想いが伝わっていた事もあるだろうが。

「やるだけやってもいいんじゃない？ ライブ前の練習と思えばいいし」

「あの人に凜達を認めさせるんだね！」

「海未ちゃん、やってみよ？」

「……そうですね。私達の全力を見てもらいましょー！」

μ sの皆が穂乃果の周囲に集まり、矢澤先輩と対峙した。

また、俺はさり気なく穂乃果達から離れた場所へと退避しており、こうして矢澤先輩とμ sの間で緊迫感が漂っていく。

「にこ先輩、これが私達の全力ですっ！」

「見せてもらうわよ、あんた達の想いを」

重々しく頷いた矢澤先輩を尻目に、穂乃果達は踊りはじめのだった。

「……はあ……はあ……どうですか、にこ先輩？」

肩で息をしていた穂乃果は、顔に滲む汗を拭ってそう尋ねた。

穂乃果以外にも全員疲れた様子を見せ、μ sの皆が全力で踊ったという事がわかる。

対して、矢澤先輩は腕を組んだまま黙って語らない。

そんな両者の様子を尻目に、俺は内心で酷く驚いていた。

このダンスは練習途中のもので、いまだに穂乃果達の動きはぎこちなかったはずだ。

しかし、今の穂乃果達の動きは最低限ダンスとして見せられるものになっていた。

これは恐らく、矢澤先輩という観客がいる事で気が引き締まったのだろう。

誰かに見られているという緊張感が、穂乃果達の意識を高め、それに比例してダンスのキレが鋭くなっていく。

「やっぱり、ムッ s は凄い……」

静かに賞賛をしている間に、矢澤先輩は俯き考え込む素振りを見せる。

穂乃果達は固唾を呑んだ様子で見守り、辺りには再び緊迫感が漂いだす。

やがて、遠くの方で鳥が鳴く声が響いたところで、矢澤先輩は顔を上げて口を開く。

「駄目ね」

「ど、どうしてですか!」

「確かに、ファーストライブの時よりは上手くなったわ」

「あれ? 穂乃果達のライブに来てくれていたんですか!」

瞳を輝かせた穂乃果を見て、矢澤先輩はわざとらしく咳払いを落とす。

「んん……と、とにかく! あんた達には色々足りないのよ!」

「私達に何が足りないのでしょうか?」

「そうよね。否定ばかりするんじゃないわ、その根拠を提示して欲しいのだけど」  
「勉強させてくださいい！」

ジリジリと近づいてくる $\mu$  sに、矢澤先輩はゆっくりと後ずさっていく。

そして、自分を包囲しようとする $\mu$  sに目を向けた矢澤先輩は、脚を高く上げ、それを思いつき振り下ろす。

辺りに軽めの音が響き、穂乃果達はビクリと身を震わせ、足を止める。

「つたあ……とりあえず、あんた達は解散しなさい！」

「あ、まっってくださいにこ先——ぎやつ！」

一方的に言い放つと、矢澤先輩は涙目になりながら屋上を後にしていく。

脚を抱えて兎のように跳ねる矢澤先輩を穂乃果が追いかけるも、勢いよく屋上の扉に当たり、額を抑えて蹲うずくまっている。

「大丈夫ですか穂乃果!？」

「待ってて、穂乃果ちゃん。今、絆創膏を持ってくるから！」

「お、おでこが赤くなってるないよね？」

慌てた様子で穂乃果へ駆け寄る海未とこりを尻目に、俺は一年生組の元へ近づいていく。

「お疲れ様、いい踊りだったよ」

「ありがとうございます、朝陽先輩」

「まあ、私にかかれればこれぐらい楽勝ね」

「ところで、さっきの人は誰だったんだろう?」

「……はっ! もしかして、凜達のライバルアイドルかも」

いや、それは違うと……間違っていないかもしれない。

一応、矢澤先輩も元スクールアイドルだったようだし、現在もアイドル研究部の部長だ。

それを踏まえれば、凜の言葉は意外と的を射ていると思う。

「とりあえず、私達も穂乃果の様子を見にいこうか」

「あの先輩には逃げられちゃったし」

「……前途多難ね」

ため息をついて呟いた真姫の言葉が、この場にいる俺達の心境を表していた。

まさか、矢澤先輩が直接穂乃果達と対峙するとは……いや、昨日の言葉から薄々勘づいてはいたが。

ともかく、遂に $\mu$ 、 $s$ は矢澤先輩と出会った。

ここから、矢澤先輩と $\mu$ 、 $s$ のぶつかり合いが始まるのだろう。

早く矢澤先輩が $\mu$ 、 $s$ に加入してくれればいいのだが……



「果てしなく不安だ」

口の中で言葉を転がしながら、俺達は穂乃果の元へ駆け寄るのだった。

## 第二十七話 盜賊にこにこ

矢澤先輩襲来から、少し経ち。

現在、俺達は音ノ木坂の近くにあるファーストフード店で、矢澤先輩に言われた内容を議論していた。

外は雨が降っており、今日は練習ができなかったからちようどいい、という話になったのだ。

ポテトを摘みながら、穂乃果は海未達を見回していく。

「どうして、にこ先輩はμsを解散しろって言ったのかな？」

「詳しくはわかりませんが、あの人からは並々ならない熱意を感じました」

「アイドルに拘りがあるって事なのかなあ？」

やはりことりが告げた内容に、全員が行き着いたらしい。

あそこまでアイドルを特別な目で見ているのなら、矢澤先輩はそれほどアイドルが好きなのだろう、と。

そんな結論に至った俺達は、自然と花陽に視線を集める。

μs全員から注目され、花陽はおっかなびっくりな様子で頷く。

「そ、その。にこ先輩は、凄くアイドルが好きなんだと思います。だから、私達の活動が気に食わなかったんじゃないかなって」

「別に、あの先輩の言葉に従う必要はないんだけど」

「そうだよ！ あんな変な格好しているんだから、言っている事はデタラメに決まってるにやー！」

凜が頬を膨らませてそう告げた瞬間、俺の右側から物音が聴こえてきた。

だが、どうやら今の音は俺にしか聴こえなかったようで、皆はこちらの方には注意を払っていない。

にしても、右にいる人の帽子はどうなっているのだろうか。

人数の関係上、俺だけ $\mu$  sとは仕切りを挟んだ反対側に座り、仕切りの上に顔を乗せる形で話し合いに参加しているのだが……

「な、なによ。言いたい事があるのなら聞けけど」

それで、改めて俺の向かい側の席にいる人の格好が酷い。

頭にはピンク色のソフトクリームのような帽子を被っていて、凄い奇抜な白服を身にまとい、おまけにサングラスもしている。

……いや、この人が誰かはわかってる。

ただ、それを認めなくなかったと言うべきか、前の人の知り合いだと思われなくな

かったと言うべきか。

「……いえ。奇遇ですね、矢澤先輩。こんな所で会うなんて」

「ほ、本当にね。まあ、あんたはこの美貌に釣られてここまで追いかけてきた——」

「なにあの帽子、だっさーい！」

「——ぬあんですって！」

「ひいつ！」

サンングラスを外してあざとい笑みを浮かべた矢澤先輩だったが、見知らぬ少年に指を差され、口許をへの字に変えた。

そして、矢澤先輩はギロリと言うほど鋭い眼光で少年を睨み、彼を追い払う。

「今の子供、泣きそうでしたよ？」

「その、この変装を馬鹿にされたからつい」

「……大人げない」

「なんか言った？」

「いえ、何も」

ジト目で見つめてくる矢澤先輩から目を逸らし、穂乃果達の会話へと耳を傾けていく。

「それで、私達はあの先輩に対してどう対処するんですか？」

「適当にあしらってあげばいいんじゃない？」

「そ、それは駄目だよお」

「うーん、ことはこれからもあの人に見てもらいたいかなあ」

「凜は反対！ きつと、また変な事を言つて凜達に解散しろつて言うに決まつてる！」

「変な事つてなによ、変な事つて」

凜の言葉に、矢澤先輩は小声で不機嫌そうに呟いた。

矢澤先輩の場合、その格好のせいで凜達に警戒されていると思うのだが。

せめて、変装しないで普通に指摘してくれば、もう少し真面目に矢澤先輩の言葉を凜達も捉えると思う。

……そもそも、わざわざ屋上で会うのに変装する必要はあつたのか？

うん、その辺は矢澤先輩だから気にしないでおこう。

「穂乃果はどう思いますか？」

「そうだなあ……よし！ にこ先輩には、sに入つてもらおう！」

『ええっ!？』

「は、はあつ？ なんでそうな——むぐつ！」

「はいはい、抑えてくださいね矢澤先輩。叫ぶと穂乃果達に気づかれますけど、それでもいいんですか？」

身を乗り出して矢澤先輩の口許を抑え、そう囁いた。

すると、矢澤先輩は目で俺に礼を告げた後、ゆつくりと頷く。

もう大丈夫だと思つて俺が手を離すと、矢澤先輩は疲れた様子でため息を漏らす。

「助かつたわ」

「まあ、こうなる事は予想していたんで」

「……あんたの入れ知恵？」

「違いますよ。穂乃果が自分で出した結論です」

俺が矢澤先輩と話している間に、向こうも一頻り騒ぎおえたらしい。

代表して、怪訝そうな顔つきの海未が穂乃果に声を掛ける。

「その、穂乃果。正気ですか？」

「あの先輩がまともだとは思えないんだけど」

「私は賛成です！」

「私は保留かな」

「うーんうーん、かよちんがいい人つて言うなら、実は本当にいい人なのかも」

比較的常識的な思考を持つ海未達が難色を示し、花陽は笑顔で肯定の意を示す。

対して、ことりは困惑気味に眉を寄せて中立的な意見を述べ、凜は花陽の見る目を信

じているのか悩んでいる様子だ。

そんなμ sの意見を一通り聞いた矢澤先輩は、なんとも形容しがたい表情を浮かべていた。

「にこつて、そんなに変な先輩なのかしら」

「恐らく、その格好が問題なのかと」

「アイドルとして当然の身だしなみなんだけど」

それは、矢澤先輩の心の中だけだと思う。

ツツコミたい衝動を抑えつつ、俺はひっそりと穂乃果達の様子を窺う。

「朝陽ちゃんは どう思う？」

「ん？ 私はある人にはμ sに加入してほしいね」

「だよねー！ やっぱ朝陽ちゃんはわかってるー！」

「朝陽も穂乃果の意見に賛成なのですか？」

「うん。μ sにあの人は絶対に必要だと思っから」

俺がそう告げると、矢澤先輩が机に額を押しつけた。

その際、辺りに小さな音が響いたのだが、どうやら穂乃果達は気にしていないらしい。

再び矢澤先輩の加入の可否について議論しだした穂乃果達を尻目に、俺はポテトを摘

みながら口を開く。

「矢澤先輩？」

「……あによ」

「矢澤先輩は、皆に必要とされているんですよ？」

「反対してる人がいるじゃない」

「あれは、矢澤先輩の人となりを知らないからですよ。しつかり矢澤先輩と会話をすれば、海未達も $\mu$  sに貴女が加入してほしいと考えるはずですよ」

机に寝そべったまま、顔だけを上げてジト目を向けてくる矢澤先輩。

暫く矢澤先輩と目を合わせていると、やがて彼女は不機嫌そうな様子で姿勢を正す。

そして、一転して表情にニヤリとした笑みを張りつけた矢澤先輩は、素早い動作で右腕を伸ばし、仕切り越しに穂乃果のポテトを掠めとっていく。

「スーパードールのこを勧誘するなんて、生意気なのよ」

「その割には嬉しそうでしたけど」

「むぐっ！」

俺の言葉を聞いて、どうやら矢澤先輩は喉にポテトを詰まらせたようだ。慌てて矢澤先輩はジュースを手に取り、それを勢いよく口に含んでいく。

「つて事で、 $\mu$  sにこそ先輩を勧誘する事を決定しまーす！」

「新しいメンバーですね！」

「さつきから、かよちんのテンションが高いにや」



「まあ、お試し期間として考えればいいのかしらね」

「いやー、安心したらお腹が減ってきちゃったよ」

「安心するのはまだ早いですよ、穂乃果。にこ先輩の勧誘だけではなく、雨天時に練習する場所など、決めなければいけない事が多いんですよ？」

「わ、わかつてるよお。その前に塩分を補給しようとしただけ……ああっ！」

ニコニコしていた穂乃果は、自分のポテトがなくなっている事に気が付き、愕然とした声を上げた。

そんな穂乃果の声を聞いて、海未は呆れたようにため息をつく。

「頭の働きの良いのは、塩分ではなく糖分ですよ。それで、今度は何をやらかしたのですか？」

「やらかしたって、海未ちゃんが穂乃果のポテトを食べたんでしょ！ 食べたいなら一

言ぐらい言えばいいのに、海未ちゃんの食いしん坊！」

「ちよ、ちよつと待つてください！ 私は穂乃果のポテトを食べていませんよ！ 自分で食べたのを忘れていたんじゃないですか？」

「いくら穂乃果でも、どれぐらいポテトが残ってたか覚えてるよ！」

頬を膨らませている穂乃果に、彼女に胡乱な眼差しを送っている海未。

そんな穂乃果達のいがみ合いなど気にする様子を見せず、ことりは凜へと声を掛

ける。

「ねえ、凜ちゃん。次の衣装の時、モデルをして欲しいんだけど、いいかな?」

「ええっ!? 無理です、凜にモデルはできませんよ! 凜より真姫ちゃんやかよちんの方がモデルに相応しいと思います」

「ぐええっ!? ど、どうしてそこで私の名前が出てくるのよ!」

突然凜に水を向けられた真姫は、いつもの声を上げて頬を赤らめた。

そんな真姫の様子に、凜は指をモジモジさせながら口を開く。

「だって、真姫ちゃんってスタイルいいし」

「うーん、じゃあ凜ちゃん達三人に頼もうかな。それなら、凜ちゃんもモデルをしやすいでしょ?」

「で、でもやっぱり……」

「はむっ。ハンバーガーも美味しいけど、白いご飯が食べたいなあ」

モデルの提案は、ことりなりの交流の仕方なのだろう。

自分が好きな衣装を通して、後輩と仲良くなりたいたい。

そんな気遣いを、ことりから感じた。

……にしても、ことり達のやり取りを気にしないで、ハンバーガーを食べる事に集中している花陽はなんというか、大物だな。

「ふーん、いいもーんだ。このハンバーガーを食べた後に、またポテトを買うんだもん」  
「穂乃果、食べすぎると太りますよ」

「大丈夫だもん！ よし、そうと決まれば早速ハンバーガーを——」

一通り海未に話して満足したのか、穂乃果は再びニコニコしながらハンバーガーへと手を伸ばす。

しかし、目の前でハンバーガーを奪われる場面を見てしまい、笑顔のまま穂乃果の表情が凍りついた。

当然、海未もその現場を目にしており、目を丸くしてこちらの方を凝視している。

「やっぱり、手軽なハンバーガーはいいわね」

「それ、犯罪ですよ」

「うぐっ……」

穂乃果のハンバーガーを食べている矢澤先輩にそう告げれば、彼女は気まずげに俺から逸らし、穂乃果へと視線を転じた。

すると、涙目で自分を見つめている穂乃果と目が合い、矢澤先輩はバツが悪そうに財布から五百円玉を取り出し、穂乃果のトレイの上に置く。

「穂乃果のハンバーガーを返してえ！」

「そ、そのお金で弁償するわ。じゃ、そういう事で」

「あ、待つてよ！」

「にこはあんた達を認めないから！」

呼び止める穂乃果の声を無視して、矢澤先輩は華麗な動きでこの場を去っていった。

矢澤先輩がいなくなった事で辺りに微妙な空気が漂いはじめ、穂乃果は五百円玉を手にとつて俺達に顔を向ける。

「今のつて、にこ先輩だよな？」

「だと思えますよ……とところで、朝陽。にこ先輩の前にいたという事は、当然貴女は知つていましたよね？」

「まあ、そうだね。彼女は私達が来る前からここにいたよ」

「じゃ、じゃあ穂乃果のハンバーガーが盗られる所も見てたの!？」

「いや、ハンバーガーの時は目を離していたから、穂乃果のが盗まれていた事は知らなかった」

ポテトの方は黙認していたが。

穂乃果はその言葉を素直に信じたようだが、海未は俺に疑わしげな眼差しを送つてい

る。  
対して、俺は海未の視線に笑みを返し、彼女と無言の応酬を交わしていく。

「あれ? どうして穂乃果ちゃんは立つてるの?」

「凜達との話はいったのかな？」

「うん、凜ちゃん達と一緒に衣装を作る事にしたんだ」

「ことり先輩に押し切られちゃったにや……」

「私も巻き添いを食らったわ」

ことり達の方も話が一段落して良かった。

不思議そうな面立ちでこちらを見ていたことり達に、穂乃果は先ほどまで矢澤先輩がここにいた事を話していく。

すると、ことり達は各々が大層驚いた様子を見せる。

「そうだったんだ。全然気づかなかったよ」

「話に集中していたし、無理はないと思うよ。それより、話を再開しようか？」

「話って？」

「うん？ 雨の時でも練習できる場所を考えるんじゃないかった？」

「……あつ！」

首を傾げていた穂乃果にそう尋ねてから数瞬後、彼女ははつとしたような表情を浮かべ、ポンと掌を叩いた。

明らかに忘れていたと言外に示すその様子を見て、真姫は呆れた様子でため息を漏らす。

「大丈夫なのかしら、このグループ」

「えへへ、ごめんごめん。それで、練習場所はどこがいいかな？」

「普通に考えれば、体育館がベストなんですが」

「他の部活が使ってるからね」

「うーん、校庭？」

「それだと雨の時は使えないよ、凜ちゃん」

各々が自分の意見を述べていき、議論は白熱していく。

しかし、様々な意見が出されたが、全員が納得できるような意見はなかった。

深刻そうな素振りで穂乃果達を考え込んでいると、やがて真姫がポツリと言葉を落とす。

「そもそも、雨天時の練習場所って応急処置のようなものでしょ？ だったら、先生に教

室を借りれば問題ないんじゃないかしら？」

「それなんだけど、前に穂乃果達も先生に頼んでみたんだ」

「でも、ちゃんとした部活じゃないと教室を貸せないって言われちゃって」

「残念ですが、部員が五人以下の私達はいまだに正式な部と認めて……もらって……いない……」

言葉の途中で、海未は弾けるように顔を上げた。

海末の言葉で真姫も思い至ったのか、素早い仕草で、sの面々に目を走らせる。

「ねえ凜、花陽」

「ど、どうしたの真姫ちゃん？」

「私達つて、今何人いるかわかる？」

「えっ？」

「真姫ちゃんは数も数えられないの？　しょうがないから、凜が真姫ちゃんの代わりに数えてあげるね！」

真姫に朗らかな笑顔を向けた凜は、順番に俺達を指し示していく。

「かよちゃんに真姫ちゃん、ことり先輩に穂乃果先輩に海末先輩、それに朝陽先輩に凜の七人だよ！」

「やっぱりそうよね……ことり先輩。部が認められるのは、何人からですか？」

「五人からだよ、真姫ちゃん」

「海末先輩。私達は何人いますか？」

「七人、ですわね」

海末の言葉に重々しく頷き、ゆっくりと穂乃果の方に顔を向ける真姫。

対して、冷や汗を流して俺達から目を逸らしている穂乃果。

そんな穂乃果の様子を見て、真姫は呆れと諦観が籠った表情を浮かべる。

「穂乃果先輩。部活申請の紙を提出しましたか？」

「ご、ごめーん！ すっかり忘れてた……本当にごめんなさい！」

「あ、部活申請書なら私が作っておいたよ」

『えっ？』

手を合わせて謝罪する穂乃果を遮り、手を上げて俺がそう告げると、この場にいる全員の視線がこちらに集まる。

複数の視線に晒されて思わずたじろぎそうになるが、なんとか態勢を直してから口を開く。

「いや、穂乃果の事だから提出していないかかって思っただけ。今日ここへ来る前に、先生に確認してきたんだ。すると案の定、まだ提出されていなかったから、とりあえず提出用の紙だけは作っておいたのさ」

「どうしてその時に提出しなかったんですか？」

「いや、こういうのはリーダーの穂乃果が提出するものだと思って」

まあ、本当は矢澤先輩のアイドル研究部と被ってしまうから、部活申請が受理されないのを知っていたからだ。

しかし、穂乃果達はその事をまだ知らないのです、それらしい言い訳を告げたという理由だ。



「とりあえず、これで練習場所は解決したって事でいいのよね？」

「そうだね！ 明日、皆で提出しに行こう！」

そう締めくくった穂乃果の言葉で、俺達の練習場所問題の議論は幕を閉じるのだった。

「はあー、安心したらお腹空いちやったよ」

「駄目です。これ以上の飲食は私が許しません！」

「う、海末ちゃん酷いよお。どうしても、駄目？」

「駄目です！」

「うう……」

……そろそろ、穂乃果にダイエットするように仕向けた方が良いのかもしれない。

## 第二十八話 アイドル研究部

矢澤先輩がシーフにジヨブチェンジした次の日。

部活申請書を提出するという話になったので、早速俺達は生徒会室へと赴いていた。

人数の関係上、生徒会室に入るのは俺達二年生組となり、真姫達一年生組に見送られて入室していく。

「失礼します」

「生徒会にどのような用でしょうか？」

代表して声を上げた穂乃果に、絵里は走らせていたペンを置いて顔を上げ、俺達へと営業スマイルを向けた。

すると、表面上でも笑みを浮かべた絵里を見たからか、穂乃果達は驚いた様子で目を大きく見開く。

「せ、生徒会長が笑ってる」

「ど、どういう心境の変化でしょうか」

「何か良い事でもあったのかなあ？」

「ぶ。ぶ。随分と驚かれていますみたいやね、絵里ち」

「の、希っ!」

「ほらほら、後輩達が見てるでー?」

口許に手を当て、忍び笑いを漏らした希先輩。

絵里はその言葉に頬を赤らめ、声を荒らげる。

しかし、希先輩に俺達に見つめられている事を指摘された絵里は、今の醜態をなかつた事にするように、何度か咳を落とす。

「ん、んんっ……さて、用件を聞こうかしら」

「あ、はい。これを提出しに来ました」

「これは?」

「はい。部員が五人以上になったので、私達を正式な部活と認めてください」

「アイドル部、ねえ」

穂乃果に手渡された紙に一通り目を走らせ、呟きを漏らした絵里。

対して、希先輩は俺に不思議そうな眼差しを送っている。

恐らく、希先輩は穂乃果達に矢澤先輩の事を伝えていないのが不思議なのだろう。

確かに、どの道矢澤先輩の所へ行かなければならないのに、わざわざ生徒会室に来るのは二度手間だ。

だが、俺が穂乃果達に矢澤先輩の事を言わなかったのには、ちゃんと理由がある。

まあ理由と言つても、今の絵里が穂乃果達にどのような対応をするのか確かめたかっただけだ。

とりあえず、絵里の方は穂乃果達の事がある程度認めたらしい。

でなければ、表面上でも穂乃果達に笑顔を向けられないからな、絵里の場合。

「認めてくれますよね？」

「残念だけど、認めるわけにはいかないわ」

「な、何故ですか！ 部活申請の規定は守っていますよ！」

「この学校には、既に同じような部活があるのよ」

「へ？」

強い口調で尋ねる海未に、絵里は言い聞かせるように言葉を落としたり。

その言葉を聞いて素っ頓狂な声を上げる穂乃果を尻目に、絵里は希先輩へと顔を向けて口を開く。

「たしか、アイドル研究部だったわよね？」

「うん、にこつちがいる部やね」

「つまり、この学校にはアイドルに関係する部があるから、同じような部を作る事は認められないの」

「そ、そんな……」

愕然とした声を上げた穂乃果。

海未達も沈んだ表情を浮かべており、辺りに重苦しい沈黙が降りてくる。すると、そんなどこか哀愁漂う穂乃果達の姿を見たからだろうか。

悩むように目を泳がせていた絵里は、やがて大きなため息をつけてから、穂乃果に声を掛ける。

「はあ……………ねえ、高坂さん」

「は、はい。なんですか？」

「貴女達は、どうしてもアイドル部を設立したいのよね？」

「そうですー！」

「だったら、そのアイドル研究部の人と話し合いをしたらどうかしら？」  
「えっ？」

恐らく今、この場の全員が同じような気持ちを抱いただろう。

Ms を敵視していた絵里が、わざわざ助言をしてくれている、と。

これには大層予想外だったのか、希先輩も驚愕した表情を浮かべている。かく言う俺も、まさか絵里が助言するとは思わず、酷く驚いてしまう。

そんな俺達の様子を見て、絵里はむっと表情に不満げな色を宿す。

「どうせ直ぐにわかる事だから教えたまよ。そんな顔をされるのは心外だわ」

「いやいや、絵里ちの言葉は充分に驚く事やん」

「……貴女達をまだ認めてはいないわ。でも、だからって貴女達に意地悪するのは違うでしょ」

「え、えつと。ありがとうございます?」

戸惑い気味に首を傾げた穂乃果の言葉に、絵里は目を伏せて再びペンを走らせはじめた。

これ以上言う事はないと言外に示すその様子を見た希先輩は、優しげな笑みを浮かべて穂乃果に声を掛ける。

「ふふつ……さて、君達。今からアイドル研究部に行くんやろ?」

「は、はい。これから頼みにいこうと思っています」

「なら、善は急げや。場所は朝陽ちゃんを知っているから、朝陽ちゃんに教えてもらつてな」

「え、朝陽ちゃんが?」

驚いた様子でこちらへと振り向く穂乃果達。

対して、俺が希先輩に目を向ければ、彼女はにこやかに手を振っていた。

……元々、アイドル研究部について言うつもりだったが、まさか希先輩からバラされるとは。

まあ、希先輩にバラされても実害はないのだが、なんとなく釈然としないというか。

「うん、一応その人とは知り合いだからね」

「じゃ、じゃあ最初からその人の所に行けば良かったじゃん！」

「実は、その事をすっかり忘れていたんだよ。すまない、穂乃果」

「私には、朝陽がわざと黙っていたように見受けられるのですが」

「気のせいではないかな？」

笑みを張りつけてそう告げるも、海未は疑いの表情を俺に向けたまま。

また、ことりも俺へと探るような視線を送っている。

対して、穂乃果は素直な様子で、なら仕方ないというように頷く。

……誤魔化した俺が言うのもなんだけど、穂乃果が単純すぎてあれだな。

いやまあ、穂乃果の場合はこれぐらい純粹なのが美点だと思うが。

「話が終わったのなら、退室して欲しいのだけど」

「あ、ごめんなさい。じゃあ、失礼しました」

絵里の心境の変化を直接聞いてみたいが、残念ながら今は聞けるような状況ではない。

穂乃果達と一緒に頭を下げ、笑顔の希先輩に見送られ、生徒会室を後にした。

それから廊下を歩いていると、穂乃果が好奇心を宿した瞳で俺を見つめる。

「それで、それで。アイドル研究部の人は誰なの？ 穂乃果達が知ってる人？」

「まあまあ、それは一年生の皆がいる時に言うから」

顔を近づけてくる穂乃果を押しとどめつつ、俺はこちらまで歩み寄ってくる花陽達に視線を転じた。

すると、俺達の元までたどり着いた花陽が、不安げな表情を浮かべて口を開く。

「あ、おかえりなさい。あの、それで無事に許可を貰えましたか？」

「それが、これからアイドル研究部の所へ行く事になったんだ」

「つまり、まだ部活申請できていないの？」

「そのアイドル研究部にいる人と私達で、話し合いをしなければいけない事になったのです」

真姫にそう言葉を返すと、俺に顔を向けた海未。

釣られて全員の注目が俺へと集まり、自然と皆が押し黙る。

やがて、沈黙に耐えきれなくなったのか、凜が首を傾げて尋ねてくる。

「朝陽先輩がどうしたんですか？」

「どうやら、朝陽がそのアイドル研究部の人と知り合いなようなんです」

「ええっ?! アイドル研究部の人と知り合いななんて、羨ましいです」

「そこなのね、花陽は」



「では、聞かせてもらえますよね？」

そんなに凄まなくても教えるのだが。

強い眼差しを送ってくる海未に、俺は内心で思わず苦笑いを漏らす。

まあ、もったいぶつても仕方がない。さっさと海未達に教えるでしょう。

この後に驚くであろう皆の反応に期待しつつ、俺は海未達へと告げるのだった。

「アイドル研究部にいる人は——にこ先輩だよ」

「——で、ここに会いにきたってわけ？」

机に頬杖をつき、不機嫌そうな面を隠しもせず、矢澤先輩はそう尋ねた。

対して、穂乃果達は各々が興味深げな表情で室内を見回している。

現在、俺達は矢澤先輩へと突撃していき、アイドル研究部の部室内に赴いていた。

俺は前からここに来ていたので、この室内の内装を見慣れている。

だが、やはり穂乃果達にとつては凄く物珍しい光景に映るのだろう。

「凄い凄い！ アイドルのポスターがいっぱいあるよ、海未ちゃん！」

「確かに、これは見事に揃っていますね。状態も丁寧に保存されていますし、よほど大事にしているのでしょうか」

「あ、これ知ってる！ A—RISEのポスターだよ」

「圧巻と言うべき光景ね」

各々が感嘆の眩きを漏らす中、二人の人物は他の皆とは違う行動を取っていた。

その内の一人である花陽は、瞳に星屑を散りばめさせながらも、残像が残るほどの動作であちこちを歩き回っている。

「はわあー！ これは福岡のアイドルグループのグッズで、こつちは限定PVっ！ 初

回限定盤のDVDに、ライブ限定グッズまで……！」

「あら、これ等の価値がわかるなんて、あんたも中々やるわね」

「こ、これほどのグッズを集めるとは——こ、これはっ!？」

「ああ、気づいた？」

満更でもなさそうに頷く矢澤先輩を尻目に、花陽は一つのDVD BOXを手にとった。

このDVD BOXがなんなのか理解しているのか、まるでとんでない物を手にしたかのように、花陽は目を刮目させる。

そして、花陽は感極まった様子で身体をうち震わせ、瞳に銀河を創りだしていく。

「本当に……本当にこれは、伝説のアイドル伝説なんですっかっ!？」

「そうよ、よくわかったわね」

「こ、これが伝説のアイドル伝説……しかも、全巻DVD BOX! 私、全巻持っている人を初めて見ましたっ!」

「そ、そう?」

矢澤先輩が引いているぞ、花陽。

あつという間に近づかれ、キラキラとした眼差しを送られた矢澤先輩は、頬を引き攣らせて花陽から目を逸らしていた。

しかし、そんな矢澤先輩を気にする様子を全く見せず、花陽は頬を赤く染めて熱く語っていく。

「はいっ! 本当に、本当に凄いですっ! 今まで生きてきた中で、一番尊敬できる人に出会いました!」

「そう、なの?」

「へー、これってそんなに凄いんだ」

矢澤先輩達の話聞いていたようで、穂乃果は感心したように頷いた。

——瞬間、花陽の瞳に雷光が走る。

驚くべき速さで穂乃果へと振り返り、花陽は信じられないといった様子で眦を吊り上げる。

「知らないんですかッ!？」

「ええと、ごめんね？」

「それなら、私が教えます！ 伝説のアイドル伝説とは各プロダクションや学校や事務所等が限定生産を条件に歩み寄り古今東西の素晴らしいアイドルを集めたDVD BOXで——」

いつの間にか矢澤先輩のパソコンの前に着席していた花陽は、凄まじい速さでタイプングをしながら伝説のアイドル伝説——通称『伝伝伝』の素晴らしさについて、語りはじめた。

自然とこの場にいる全員はその話に耳を傾けていき、徐々に花陽の独擅場へとなっていく。

「は、花陽ちゃん。キャラが変わりすぎじゃない？」

「凜はこっちのかよちゃんも好きだにゃー」

「よっほどアイドルが好きなのね」

「——オークションに出店しても即完売されてしまう伝伝伝を二セットも持っているなんて……!」

「ふふん。家にもうワンセットあるわよ」

「もうワンセットっ!」

鼻を伸ばしている様子でふんぞり返っている矢澤先輩を見て、穂乃果は閃いたというような表情を浮かべ、口を開く。

「あ、じゃあ皆でこのDVDを見てアイドルの勉強をしようよ!」

「それは保存用だから駄目ね」

「そ、そんな……」

ぼつさりと穂乃果の意見は却下された。

すると、花陽は瞳に悲しげな色を潜ませ、項垂れるように顔を伏せ、一筋の涙を流す。

そんな花陽の様子を見た凜が、呟きを一つ。

「かよちゃんがいつになく落ち込んでる」

「泣くほど見たかったのね」

ある意味愉快とも言つていいやり取りをしている花陽達を尻目に、俺は天井付近に飾られている色紙を見ていることに声を掛ける。

「どうしたんだい、こことり?」

「ひやつ！ な、なんでもないよ朝陽ちゃん！」

「ああ、それは秋葉のカリスマメイド、ミナリンスキーさんのサインよ」

「へー、これがミナリンスキーのサインか」

「あ、朝陽ちゃん知ってるの!?!」

「名前ぐらいしか知らないけどね」

俺がそう告げると、ことりはあからさまに安堵した様子で胸を撫で下ろしていた。

まあ、俺は知識としてミナリンスキーがことりだという事を知っているのだが。

まだことりは、俺達にミナリンスキーの事をバレたくないのだろう。

穂乃果達に知られるも時間の問題だと思うが、ことりが隠したいと考えているのな

ら、俺も黙っているべきだ。

……ただ、ことりの働いている姿は見てみたい。

今度、変装してミナリンスキーを探してみようかな。

「ことり、どうしましたか？」

「なんでもないよ海未ちゃん！ ことりはいつも通りだよ、いつも通り」

「まあ、私もオークションで手に入れたから、ミナリンスキーの顔を知らないんだけど

ね」

「良かったあ」

ところで、ことりさん。

貴女、ミナリンスキーだと隠す気はあるのですか？

いや、本人が真面目に隠したがっているのはわかるのだが、それにしても誤魔化し方が雑というかなんというか。

幸いな事に、俺以外は誰もことりの様子を不審に思っていないらしい。

とりあえず、このまま俺は静かにことりの誤魔化しを傍観しよう。

「と、とにかく！ にこ先輩は凄い人だよ！」

「褒めたって何もでないわよ？」

「……口がにやけていますが」

「う、うるさいわね！」

そんな俺の思いが、表情に現れていたのだろうか。

ことりは慌てた様子で話を逸らし、矢澤先輩がその世辞を聞いて、満更でもない表情を浮かべる。

しかし、微妙な面立ちで海未に指摘され、矢澤先輩は恥ずかしそうにそっぽを向く。相変わらず、矢澤先輩はどこか締まらない。

個人的には、そんな所が矢澤先輩の美点だと思っているが。

ともかく、それから俺達は各々が着席していき、ようやく矢澤先輩と話し合いをする

準備が整うのだった。



## 第二十九話 アイドルとは

「で、あんた達の話はなに？」

改めて告げられた矢澤先輩の言葉に、俺達は姿勢を正して表情を引き締めた。あらかじめ決めた通り、穂乃果がその疑問に答えるために口を開く。

「私達は、にご先輩にμ'sへ入ってほしいんです」

「ちよつ、ちよつと穂乃果。先ほどの打ち合わせと順序が違いますよ！」

「はあ？ 希に話をつけてこいつで言われたんじゃないの？」

訝しげに目を細めた矢澤先輩に、穂乃果は頷きを返す。

「言われました。だけど、先に私達の気持ちを伝えたいって思ったんです」

「ふうん、なるほど。でも、お断りよ。あんた達のグループに入る気はないわ」

「お願いします！ μ'sに入ってください！」

「嫌だつて言ってるでしょ」

穂乃果が頭を下げるも、矢澤先輩は取りつく島もない。

そんな二人の様子を見て、海未達も頭を下げはじめる。

『お願いします！』

「つ……なんで、そんなに私を」

「にこ先輩と一緒に輝きたいと思ったからです！ だから、私達と一緒にアイドルをやりましょう！」

頭を上げ、強い眼差しで矢澤先輩を射抜く穂乃果。

対して、穂乃果の視線を受けた矢澤先輩は、僅かにたじろぐ様子を見せる。

しかしそれも数瞬の事で、直ぐに不機嫌そうな顔つきになると、矢澤先輩は自身に言い聞かせるように言葉を零す。

「あんた達はね、歌もダンスも全部駄目駄目なのよ。あんた達にはプロ意識ってものが足りていないわ！」

「それって、あの時言ってたお客さんがアイドルに求めるものですか？」

「……お客さんがアイドルに求めるものは、楽しい夢のような時間よ」

「夢のような、時間？」

頭に疑問符を浮かべる穂乃果達を尻目に、矢澤先輩は真剣な表情で言葉を紡いでいく。

「お客さんはね、アイドルという存在に癒されに来るの。嫌な事や辛い事、思い出しくない事を全部忘れて、楽しい思い出や幸せな夢を見にくる。そんな人達の想いに応えるために、私達アイドルはプロとしての意識を持たなきゃいけないのよ」

「プロとしての意識……」

「いい？ 私達アイドルは、お客さんに笑顔をプレゼントするの。辛い事があっても頑張って、悲しい事があっても負けないで……そういう想いを届けるの。そして、お客さんが自然と笑顔になるようにするのよ。あんた達は、今までその事を意識していた？」

矢澤先輩の言葉に、俺達は誰も二の句を告げられなかった。

穂乃果達は各々が考えに耽っている様子で、辺りが重苦しい沈黙に包まれる。

しかし暫くすると、穂乃果が確かめるように言葉を落とす。

「……先輩の言った通り、私はそんな事を考えていかなかったと思います。皆と楽しくスクールアイドルをして、頑張って廃校を阻止して、それで誰かが見てくれればいいって。そんな事ばかり考えていました」

「……それで？」

「だから、確かに私にはプロ意識が足りないと思います」

そこで言葉を区切り、穂乃果は瞳を煌めかせた。

穂乃果はμ'sの面々を見回していき、最後に矢澤先輩で視線を止める。

「だったら、さっさと解散しなさい」

「それでも、私はμ'sの皆とスクールアイドルを続けたいです！」

「……へえ、何故かしら？」

「スクールアイドルをやりたいからです！」

「っ！」

息を呑んだ矢澤先輩から目を逸らさず、穂乃果は言葉をぶつけた。

——私の感情を、想いを感じて。これが、この在り方が私だ。

穂乃果の言葉からは、剥きだしな気持ちを感じた。

純粹で、自分勝手に、綺麗で、傲慢で、そして輝いていて。

色々と混ざった穂乃果の心情を受けとった矢澤先輩は、思わずといった様子で天を仰ぎ、瞳を閉じる。

二人の会話に口を挟めなかった俺達も、固唾を呑んで静かに見守っていく。

「……あなたは馬鹿ね、大馬鹿よ」

「へ？」

「そんな考えじゃあ、アイドル失格だわ」

「でも、これが穂乃果の気持ちだから——」

指を突きつけて穂乃果の言葉を遮り、不敵な笑みを浮かべた矢澤先輩。

不思議そうに首を傾げる穂乃果を尻目に、矢澤先輩は不敵な笑みを浮かべたまま、俺達を見回していく。

「あんだ達には、やっぱりプロ意識が足りないわ。だから、スーパーアイドルのここが」

つアドバイスしてあげる」

「アドバイス、ですか？」

「メ、メモの準備をしなきゃっ！」

「変な助言じゃないでしょうね？」

「そんなわけないでしょうがっ！」

胡乱げの真姫に告げられ、矢澤先輩は心外そうに眉尻を釣り上げた。

海未達は困惑気味に互いの顔を見合わせており、どうやら矢澤先輩のアドバイスを聞

くのが不安らしい。

なお、花陽のみは瞳を輝かせてメモ帳を取り出し出している。

矢澤先輩の言葉から、恐らく例のあれをするのだろう。

個人的には凄く好きなのだが、果たして穂乃果達に受けるかどうか。

……正直、穂乃果達の反応は薄々わかってしまうが。

「それで、どんなアドバイスなんですか？」

「もったいぶつても仕方ないし、言うわよ。いい、耳をかつぽじつて聞きなさい！ あん

た達に一番足りないものは、ずばりキャラ作りよ！」

『キャラ作り……？』

「そう、キャラ作りよ！ アイドルには様々なタイプがいるわ。元気なアイドルや無口

なアイドル、小悪魔系や天然系なんてジャンルもあるわね」

「ふむふむ、なるほど！」

自信満々な様子で告げた矢澤先輩に対して、穂乃果達はなんて言ったら良いかわからないようだ。

そんな彼女達の様子を気にする素振りを見せず、矢澤先輩は言葉を続けていく。

「お客さんを笑顔にするために、夢のような時間を見てもらうために、私達アイドルはキャラを作ってその要望に応えるのよ！」

「流星にこそ先輩ですっ！」

「キャラを作る必要はあるのでしょうか」

「要はぶりっ子って事よね」

「ちよつとキツいと思うにや」

相変わらず楽しそうな花陽は置いておいて。

海未、真姫、凜の三人は矢澤先輩の結論に半信半疑な様子だ。

対して、穂乃果とことりの二人はなんとなく理解したような表情を浮かべている。

まあ、穂乃果は素でキャラとしてよく立っているし、どちらかと言うとことりもキャラ作りをしている方——

「朝陽ちゃん？」

「どうしたんだい、ことり?」

「ううん、なんか朝陽ちゃんが変な事を考えていたみたいだから」

「気のせいだよ、うん」

「朝陽ちゃんつてわかりやすいから、気のせいじゃないよ。それで、何か言いたい事でもあるのかな?」

ニコニコと満面の笑みで首を傾げたことり。

やはり、ことりは無駄に勘が鋭い。こういうのが腹黒のように見える原因だと思うのだが。

目の奥が笑っていないことりの笑顔から目を逸らしつつ、そんな事を考えていた俺は、気を取り直して矢澤先輩へと声を掛ける。

「せっかくですから、手本を見せてください」

「誤魔化したね、朝陽ちゃん」

「おお、それはいい考えだね!」

「私にもこ先輩がどんなキャラ作りをしているのか気になります」

「つたく、しようがないわねえ。どーしてもにこのが見たいって言うのなら、特別に見せてあげるわ」

そう告げるも、矢澤先輩の頬は大層緩んでいた。

明らかに見せたがっていたとわかるその様子に、思わず呆れた表情を浮かべてしまった俺は悪くない。

あからさまに真姫達も俺と同じような表情を浮かべているし。

ともかく、そんな俺達の視線を一心に集めた矢澤先輩は、おもむろに席を立ち上がり、一度後ろを向く。

その数瞬後、矢澤先輩は直ぐにこちらへと振り返り――

「にっこにっこにっ！」

――表情に満面の笑みを落とした。

中指と薬指だけを折り曲げた両手を頭上に掲げ、愛らしい笑顔で俺達へと微笑む。

唐突なその変貌に声も出ない様子の穂乃果達を尻目に、矢澤先輩は全身を使って自身のキャラを見せつけていく。

「あなたのハートににっこにっこにっ！」

次に胸の前でハートの形に指を合わせ、

「あなたに笑顔を届ける矢澤にっこにっこにっ！」

今度はおでこの上に立てた右手を当て、

「にっこにっ！って覚えてらぶにっこにっ！」

最後に輝かんばかりの笑顔を向け、最初のポーズで締めくくった。



部屋が嫌な沈黙に包まれ、穂乃果達は互いの顔を見合わせる。

対して、キャラ作りは終わったからか、いつものジト目に戻った矢澤先輩は、腰に手を当てて口を開く。

「どう？」

「うん、やっぱりいつ見ても素晴らしいです」

「はいっ！ 参考になります！」

自然と笑顔で拍手をした俺に、高速でペンを走らせながら頻りに頷く花陽。

好意的な印象を持った俺達に対して、穂乃果達は感想に詰まっているらしい。

花陽以外は初見のインパクトに驚くだろうと考えていたが、やはり案の定と言うべきだったか。

これはこれで、矢澤先輩の愛らしさを表す良い自己紹介だと思っただが。

「キャラ作りかー。穂乃果にはどんなキャラが似合ってるかな？」

「穂乃果の場合は元氣キャラでいいんじゃないでしょうか」

「海未ちゃんは大和撫子のキャラだよね」

「そういうことりちゃんは癒し系キャラ？」

やがて、穂乃果二年生組はお互いのキャラを考えはじめ。

「なんていうか、お客さんへの気持ちがあつごく伝わったよ！」

「まあ、一応楽しんでませようとする努力はよくわかったわね」

「真姫ちゃんは素直じゃないにやー」

「ちよつとそれはどういう意味よ!」

凜と真姫は純粹に矢澤先輩の感想を述べていた。

そんな中、sの様子を見て、矢澤先輩は酷く驚いた様子で目を見開く。

「あんた達はなんにも言わないのね……」

「何か言いましたか、にこ先輩?」

「な、なんでもないわよ」

そういえば、以前この部活に所属していた部員達にこれを見せた時、あまり良い感想を貰えなかったと、矢澤先輩が前に愚痴を零していた。

だから、純粹に自分のポーズを貶さない穂乃果達に驚いたのだろう。

いやまあ、あの独特な自己紹介を受けつけない人はいるだろうが。

幸いと言うべきか、穂乃果達は矢澤先輩の自己紹介にも一定の理解を示したようだ。

「にこ先輩! にこ先輩の話は凄くためになりました。だから、私達にもつと色々教えてください!」

「っ……」

『お願いします!』

穂乃果がそう頼んだ後、再びμsの全員で頭を下げた。

すると、頭上でゴシゴシと何かを擦るような音が聞こえてくる。

「悪いけど、今日は帰って」

「え、でも——」

「……穂乃果、ここは矢澤先輩の言う通りにしよう」

「——朝陽ちゃん？」

「お願い、穂乃果」

念押しをすると、どうやら穂乃果はわかってくれたらしい。

他のメンバー達も促し、俺達は矢澤先輩に挨拶をしてから部屋を後にしていく。

最後に俺が部屋を出る前、チラリと矢澤先輩の方へと目を向ければ、彼女は座り込んで俯いていた。

矢澤先輩の心中は窺えないが、僅かに震えている肩から少しはわかる。

……μsなら大丈夫ですよ、矢澤先輩。

「朝陽ちゃん」

「やっぱりここに来ましたね、希先輩」

俺が扉を閉めたのを見計らったかのように、物陰から希先輩が姿を表した。

驚いた様子で生徒副会長がやって来た事に目を瞬かせている穂乃果達を尻目に、俺は

希先輩の顔を見返す。

「そろそろかと思っただんや」

「カードがそう告げたんですか？」

「……ふふっ、そうやね」

クスリと微笑を零してから、希先輩は穂乃果達に真剣な表情を向ける。

「言うんですね？」

「うん……高坂さん達々sには聞いてほしい事があるんやけど」

「へ？ なんですか？」

「ここでは話しにくいから、ウチについてきて」

「私は用事があるので、その辺は希先輩に任せます」

「つまり、どういう事ですか？」

困惑気味に眉を寄せている海未に、俺は希先輩に目を向けて言葉を返す。

「とりあえず、希先輩から話を聞けばいいって事さ」

「朝陽ちゃんの用事って？」

「ちよつとね。ほら、早く希先輩と行っておいで」

それから少し揉めたが、無事に穂乃果達は希先輩とこの場を去っていった。

遠ざかるその背中を見送った俺は、アイドル研究部の扉に背中をもたれかけ、おもむ

ろに口を開く。

「もう、私以外いませんよ」

『…………』

「穂乃果達の言葉は本気です。本気でμ sに入ってほしいんですよ」

『…………』

「もちろん、私も加入してほしいと思っています。だから、変な意地を張らないで自分に素直になつたらどうですか」

『…………』

「今度は、μ sなら貴女の熱意に答えてくれますよ、必ず」

『……………わかつてるわよ、それぐらい』

「待っていますよ、矢澤先輩」

最後にそう告げ、扉から背を離して歩きはじめた。

とりあえず、俺にできる事はこれぐらいしかない。

穂乃果達の言葉を聞いた矢澤先輩の背中を少し押すぐらいしか。

後は、再び穂乃果達が説得してくれれば、矢澤先輩がμ sに加入してくれると思う。

希先輩からあの話を聞いた後なら、なおさら矢澤先輩をμ sに入れようするだろうし。

言い方は悪いが、穂乃果は狙った獲物を逃さないからな。

だから、穂乃果ならば矢澤先輩が折れるまで勧誘し続けるはず。

「矢澤先輩を救ってくれ、穂乃果」

この場にはいない太陽のような幼馴染みに想いを馳せつつ、俺は希先輩達の姿を探すのだった。

## 第三十話 蒼天に輝くは七つの笑顔

穂乃果達を探した結果、俺達の教室に全員揃っていた。

「どうやら、希先輩から矢澤先輩の事は聞き終わったようで、穂乃果達はどこか理解したような表情を浮かべている。」

「や、遅れてすまない」

「あ、朝陽ちゃん。ううん、大丈夫だよ」

「それで、どういう状況かな？」

「ついさっきまで、希先輩からにこ先輩の話聞いていたんだ」

「まさか、にこ先輩にそのような事情があったとは思いませんでした」

「あの人は、私達も遅かれ早かれスクールアイドルを辞めると思っているのですよね」

髪の色をクルクルしながら、眩きを落とす真姫。

不満げな色が宿っているその言葉を聞いて、凜も納得がいかない様子で頬を膨らませる。

「凜達は一生懸命アイドルをやっているよ！それに、スクールアイドルを辞めるつもりなんかないし」

「でも、私達の言葉を先輩が受け入れるかは別でしょ？」

「それは、そうだけど」

「難しい問題だよお……」

花陽達は頭を抱えたり、顎に手を添えて目を伏せたり、各々が考え悩んでいるようだ。特に、海未と真姫はお手上げ状態だと言いたいのか、諦めの表情でゆるりと首を横に振っている。

「穂乃果。にこ先輩を勧誘するのは諦めましょう。私達には、にこ先輩を説得するような実績がありません。ですから、あの人の信用を勝ち取る事はできないと思います。ここは素直に部室を使わせていただけるように話し合いを——」

「まだ、諦めるには早いよ」

「——穂乃果？」

首を傾げた海未を一瞥した後、穂乃果は真剣な表情で俺達を見回していく。

「先に確認したいんだけど、朝陽ちゃんもにこ先輩の事情は知っていたんだよね？」

「そうだね。一応、前に矢澤先輩に教えてもらったよ」

「うん、なら大丈夫だね」

「何が大丈夫なの？」

「えっとね、皆に聞いてみたいんだ。希先輩からにこ先輩の話を聞いた時、どう思った



か」

穂乃果の言葉に、俺達は互いの顔を見合わす。

何故、今更俺達の感想を穂乃果は知りたいのだろうか。

俺達が考えるべき事は、どうやって矢澤先輩を  $\mu$  s に加入して貰うかだ思うのだが。

俺以外の皆もそう思っていたようで、自然と穂乃果に困惑気味の視線を送っている。

「その、私達の感想を聞いてなんの意味があるのでしょうか？」

「うーん、なんとなく穂乃果が聞きたいと思っただけだから、特に意味はないかも」

「何それ、意味わからない」

「お、真姫の口癖が出た」

「こ、こんな時にからかわわないでよー」

頬を赤らめて肩を怒らせた真姫に謝罪しつつ、俺は穂乃果の考えを読もうと思考を巡らせていく。

今しがた穂乃果が言った通り、その提案には意味がないのかもしれない。

しかし、少なくとも俺は穂乃果の提案に一定のメリットがあると思う。

矢澤先輩の話の感想を言い合う事で、互いの共感を深め、 $\mu$  s の結束力を高め、改めて矢澤先輩を誘うという意見を一致させる。

パツと思いつくのも、これぐらいのメリツトがあるだろう。

とまあ、無駄に理屈っぽく考えを纏めてしまったが、要は穂乃果の提案は決して無駄ではないと言いたいのだ。

そう考えた俺は、手を叩いて皆の注目を集めてから口を開く。

「とりあえず、やるだけやつてもいいんじゃないかな？ 皆の意見を聞いた結果、何か良い考えを思いつくかもしれないし」

「……ま、お互いの認識を擦り合わせるといふ事で納得しておくわ」

「そういうものでしょうか？」

「海未ちゃんは真面目すぎるんだよ」

「じゃあ、賛成した私から感想を言わせてもらうよ。私から言える事は、やつぱり矢澤先輩には、sに加入して欲しい、という一言だけだね」

小さく笑みを落としてそう告げると、穂乃果と花陽、それにことりが追隨するように頷いた。

「うん、穂乃果も朝陽ちゃんの話に賛成」

「私にもこ先輩には、sに来てほしいです」

「だけど、にこ先輩の意思は固いよね？」

「そうなんだよね……海未ちゃん達はどう思ってるの？」

腕を組んでいた穂乃果に水を向けられ、表情に難しい表情を張りつけた海未。

真姫も海未のような表情を浮かべており、対して凜は戸惑い気味に眉を寄せている。

「私は、そつとしておいた方がいいと思います。にこ先輩にはにこ先輩の事情があるので、安易に彼女の心へと踏み込むのは良くない事かと」

「海未先輩に賛成。無理して、sに入れる必要はないわ」

「うーん、凜はよくわかんないや。にこ先輩の気持ち次第じゃないかな？」

ポツリと呟いた凜の声が、教室中へとすると駆け抜けた。

その言葉に、俺達は思わず顔を見合わず。

すると、俺達の反応が予想外だったのか、凜は慌てたように視線を飛ばしていく。

「え、え？ 凜、何か変な事を言った？」

「ううん、凜ちゃん言う通りだよ！ 穂乃果達が色々と考えても、にこ先輩の気持ちちはつきりしないと意味ないよね」

「ですが、穂乃果。にこ先輩は、私達、sを敵視しているではありませんか」

「それは違うと思うなあ」

否定の声を上げた海未。

しかし、ことりがその言葉に異を唱え、自然と全員の視線が彼女に集まる。

俺達に見つめられても気にする様子を見せず、ことりは意味ありげに海未を一瞥した

後、穂乃果に目配せをした。

すると、ことりの視線の意味に気が付いたのか、穂乃果はポンと掌を叩いて得心がいったように何度も頷く。

「なるほど！ だったら、にこ先輩も<sup>μ</sup>sに入ってくれるかも」

「うん、あとは私達が説得するだけだよ〜」

「あの、二人共。二人で納得されても、私達は理解できないんですが」

困惑気味に眉を潜めている海未に声を掛けられると、穂乃果とことりは揃って彼女へと暖かな眼差しを送りはじめた。

対して、海未は益々理解できないように首を傾げており、真姫達も不思議そうな表情を浮かべている。

一体、穂乃果はことりの目配せから何に気が付いたのだろうか。

穂乃果達の表情から、海未に関係しているというのわかるのだが。

……待てよ。矢澤先輩の対応は、どちらからと言えばツンデレに近い。

本当は興味があるのに、自分はなんとも思っていないような振りをして。

つまり、海未も矢澤先輩のようにツンデレ的な対応をした事があるというわけで……

「あ、なるほど」

「朝陽もわかったんですか？」

「多分ね。……穂乃果はこのまま矢澤先輩にアタックを続けたらいつて事だよね？」

「うん。穂乃果達の真剣な想いをぶつければ、きつとにこ先輩もわかつてくれると思うんだ」

「……あ、凜もわかった」

「私も、なんとなく理解したかもしれない」

暫くすると、凜と花陽も顔色を明るくして頷き、真姫へと顔を向ける。

しかし、真姫はいまだにわかっていないようで、どこか不機嫌な様子で腕を組んでいる。

また、海未も答えに行きついていないからか、不満げな表情でことりに問い詰めている。

「もったいぶらずに教えてください、ことり」

「えー、どうしよっかなあ」

「凜達も教えなさいよ」

「もー、仕方ないなー。つまり、真姫ちゃんにこ先輩は似てるって事だよ！」

「なによそれっ!？」

ガヤガヤと場が騒然としはじめたが、穂乃果が声を上げて俺達の注目を集めた。

全員が黙って自分に目を向けたのを確認した穂乃果は、朗らかな笑顔で海未達に視線

を転じていく。

「にこ先輩の拒絶が実は本心じゃなかったら、海未ちゃん達も $\mu$  sに誘うのは賛成なんだよね？」

「まあ、にこ先輩が拒絶をしないならば、私も $\mu$  sに勧誘するのは異論はないですが」  
「だけど、本当にあの拒絶は本心じゃないのかしら？」

「それは大丈夫だと思うよ。だって、穂乃果達に興味がなかったらあんなに指摘できないもん」

「それに、わざわざことり達を観察する必要もないよね？」

穂乃果とことりの話を聞いて、海未達はようやく思い至った様子で頷いた。

しかし、直ぐに穂乃果達の視線の意味を悟ったのか、揃って頬に桜を散らす。

「ほ、穂乃果！ つまり、それは私がいつも素直ではないと言いたいのですか!？」

「だって海未ちゃんが小さい時、遊びに入りたいのに素直になれないで隠れてたじゃん」  
「うんうん。ことりのぬいぐるみに興味があるのに、澄ました顔で興味がない素振りもしていたし」

「あ、あれは……!？」

ニヤニヤしている穂乃果達に詰め寄っていく海未。

対して、真姫も頬を赤らめたまま凜達へと追求していた。

「私が捻くれているって言いたいの？」

「真姫ちゃんって素直じゃないよねーって思ったただけだよ」

「くっ……は、花陽はどう思っているの？」

「え、えつと。その、そんな真姫ちゃんも好きだよ？」

「な、なんでいきなり好きとか言われなきやいけないのよ」

困った様子で微笑んだ花陽の言葉に、真姫は目を逸らして髪の毛をクルクルしていた。

「どうやら、真姫は花陽に褒められて照れてしまったらしい。」

「まあ、真姫のそういう反応が凛達にツンデレだと言われる原因だと思うが。」

「ともかく、これで俺達の意見は一致したと見て良いだろう。」

「そういう理由で、μsに矢澤先輩を誘う事に異論はないね？」

「微妙に納得がいかない理由でしたが、まあ異論はないです」

「ええ。凄く複雑だけど、私も特に反論はないわよ」

「では、早速だけどうやって矢澤先輩を説得するか決めよう」

俺がそう告げると、穂乃果が元氣よく手を挙げた。

「はいはい、それなら穂乃果に良い考えがあるよ！」

「どんな考えなの、穂乃果ちゃん？」

「それはね——」

ことりに話を促された穂乃果は、楽しげに俺達を見回しながら、己の計画を話しているのだった。

穂乃果の計画が明らかになってから、暫く経ち。

現在、俺はアイドル研究部の扉へと身体を寄りかからせていた。

何故、穂乃果達と別行動をとっているのかと言うと……

「なっ……」

「どうも。待っていましたよ、矢澤先輩」

「……アイドルの雑談をしに来たわけではなさそうね」

「はい。矢澤先輩には、是非とも来ていただきたい場所があるんです」

「言っただでしょ。あんた達のグループに入る気はないって」

「気まずげに目を伏せ、拒絶の言葉を落とした矢澤先輩。」



もう放っておいてくれ、と身体で告げるその様子に、俺は笑みを返して口を開く。

「言いましたね。ですが、あえて言わせてもらいます。その言葉に私は嫌だと答えます」  
「……もう、もう何もかもが遅いのよ。終わったの、全て——」

「矢澤先輩！」

「——な、なに？」

思わず叫べば、矢澤先輩はビクリと肩を震わせる。

大きな孤独感を抱えているその小さな肩に手を置き、瞳に深い諦観の色を宿している矢澤先輩へと言葉を紡ぐ。

「本当に、本心からそう思っていますか？」

「お、思ってるわよ。あんた達のような駄目なアイドルグループになんか入りたくないわ」

「こんなに、μ'sの皆が矢澤先輩に加入して欲しいと懇願しても？」

「……………よ」

「はい？」

思わず問い返すと、矢澤先輩は俺の手を振り払い、涙目でこちらを強く睨みつける。

そして、剥きだしの本音をさらけ出していく。

「怖いのだよ！ あんた達が本気でアイドルをしてるって事ぐらいわかってるけど、それ

でも凄く怖いの！ あの時のように皆が辞めるんじゃないか、また私独りになつちやうんじゃないかつて、考えちやうの！ 頭ではわかかっていても、心がいつも囁いてくるのよ！ 期待するな、どうせ裏切られる、また見捨てられる、お前には無理だつてっ！」

途中で縋るように俺の裾を掴んでいた矢澤先輩は、やがて思わずといった様子でヨロヨロと後ずさろうとした。

しかし、俺が咄嗟に矢澤先輩の手を掴み、逃げようとするその足を止めさせる。

涙を流しながらこちらを見つめる矢澤先輩の顔を見返し、

「やつと、やつと本心を言ってくれましたね」

「雨宮……?」

「ついてきてください。屋上で穂乃果達が待っています」

「ちよ、ちよつとっ!」

慌てたような声を上げる矢澤先輩の手を引き、俺は屋上へと向かっていく。

途中で逃げるのを諦めたのか静かになった矢澤先輩を連れ、閉じられた屋上の扉を開け放つ。

「待ってたよ、朝陽ちゃん」

「遅くなつてすまない。さあ、矢澤先輩」

「な、なによ?」

「矢澤先輩は言いましたよね、怖いつて」

「だからそれがなんなのっ！」

苛立つように鋭く叫ぶ矢澤先輩へと微笑み、

「その考えが杞憂だと、穂乃果達が証明してくれます」

「えっ？」

「大丈夫です。だから、しっかりとその目で見てください……穂乃果」

戸惑い気味の様子の子の矢澤先輩を一瞥してから、穂乃果達へとバトンタッチした。

力強く頷いた穂乃果は、後ろで待機している4人の面々を見回し、最後に矢澤先輩で目を止める。

「私達はこの先輩の昔の事を聞きました」

「……希からね」

「はい。私達には、当時のこの先輩の気持ちを察する事ができません。きっと、私達の想像以上に辛い思いをしたと思うから」

「もう過去の事よ」

なんでもないように告げるも、矢澤先輩の声色は僅かに震えていた。

当然、穂乃果もその変化に気が付いたようで、矢澤先輩を見据えている瞳の力強さが増している。

「……どうして、私達の事をいつも見ていたんですか？」

「そ、それはあんた達がアイドルを汚していたから——」

「本当は、まだ引きずっているんじゃないですか？」

「——っ！」

穂乃果に言葉を突きつけられ、矢澤先輩は目を大きく見開く。

しかし、直ぐに顔を俯かせると、そのまま微動だにしなくなった。

「あの時の事を引きずっているから、スクールアイドルになつた私達を見ていたんじゃないですか？」

「……………のよ」

「え？」

「あんたに……あんたに何がわかるって言うのよッ！」

突然怒鳴られて目を白黒している穂乃果が目に入っていないのか、矢澤先輩は心の底から絞りだすように言葉をぶちまけていく。

「そう、そうよ！ あんたの言う通り、私はあの時の事を引きずっているわ！ いまだにあの日の事が夢にも出てくるぐらい忘れられないのよ！ 私はこんな辛い気持ちを味わったのに、あんた達はいつも楽しそうにアイドルをして！ ……私あんた達に嫉妬してたの！ 毎日アイドルの事を考えて、歌を創って、ダンスの振り付けを話し合っ

て、皆で一つの目標に走っているあんた達が羨ましかったのよ！」

肩を大きく上下させ、酷く息を乱している矢澤先輩。

暫くすると、自分が何を口走ったのか理解したようで、矢澤先輩は表情に怯えの色を宿す。

しかし、穂乃果は微塵も気にした様子を見せず、穏やかな面立ちで矢澤先輩を見つめている。

「にこ先輩」

「あつ……にこ、これは違うの」

「にこ先輩は前にアイドルはお客さんを意識しろって言いましたよね」

「えっ?」

「突然ですが、私達のダンスを見てください」

「あんた達の、ダンスを?」

脈絡のない穂乃果の言葉に、矢澤先輩は困惑気味に目をさまよわせていた。

暫し悩むように目を泳がせていた矢澤先輩は、やがてゆっくりと頷く。

矢澤先輩が了承した事を確認した後、穂乃果は黙って待機していた。sの面々を見直し、皆でダンスをする体勢を整えていく。

「にこ先輩には、言葉よりダンスの方が私達の気持ち伝わると思いました。だから、見

てください。私達のダンスを」

穂乃果言葉を合図に、μ sは前に矢澤先輩に見せたダンスを踊りはじめた。

初めは呆然と穂乃果達を見ていた矢澤先輩だったが、やがて惹き込まれるように目を見開いていく。

辺りにはステップを刻む音と、穂乃果達の息遣いのみが響いていた。

——ダンスが終わり、μ sは動きを止めた。

穂乃果達は一様に息を乱しており、疲労した様子が垣間見える。

暫くして息を整えた穂乃果は、目を見開いたままの矢澤先輩に声を掛ける。

「どうでしたか?」

その問いかけにも答えず、矢澤先輩は静かに瞳を閉じた。

固唾を呑んだ様子で穂乃果達が見守り、辺りに重苦しい沈黙が舞い降りていく。

やがて、矢澤先輩は瞳を開き、晴れやかな表情を浮かべる。

「なによ、その下手くそな踊りは。あれから全然成長していないじゃない……でも、あんな達の想い、しつかりと伝わったわ」

「にっ」先輩!」

「その気持ち忘れなければ、あんた達は大丈夫。きっと、アイドルとしてやっていけるわ」

そこで言葉を区切り、矢澤先輩は表情に自嘲の笑みを落とす。

「滑稽ね。目の前で一つのアイドルの旅立ちを見せつけられるなんて」

「何を言っているんですか？ これはお客さんのためじゃなくて、にこ先輩のために踊ったんですよ？」

「えっ……？」

「私達には、まだまだお客さんへの意識とか足りないものが多いです。だから、これからは、sの一員として私達に色々教えてください！」

『お願いします！』

穂乃果に続いて頭を下げたμ、sに、矢澤先輩は信じられないような顔を向けた。

何度も首を横に振り、どこか不安げな様子で矢澤先輩は声を震わせる。

「な、んで……どうして、そんなに私を誘うの？」

「にこ先輩と一緒に輝きたいからです！ にこ先輩がμ、sに入れば、μ、sが輝いてもっともつとアイドルを好きになれると思うんです！」

穂乃果にそう返され、矢澤先輩は二の句を告げないようだ。

わかつているのだろう。穂乃果は本気で自分を勧誘しているという事を。

矢澤先輩はμ、sのダンスを通して、言葉では表せない深い感情を肌で感じたはず。実際、矢澤先輩の瞳には僅かだが、希望の色が灯りはじめている。

……もう少し、後少して矢澤先輩はμ、sに入ってくれれると思う。

そう考えている間にも、両者の会話は続いていく。

「あ、あんた達には酷い事をしたわ」

「酷い事だと思っと思っています!」

「解散しろとも言った」

「にこ先輩と一緒にアイドルをやりたいから、μ、sは解散しません!」

「……………前に、あんたの勧誘は断ったわ」

「何度だつてにこ先輩を誘います!」

「っ!」

「だから、もう一度言います——」

——私達と一緒にスクールアイドルをやりましたよう、にこ先輩!

手を差し伸べ、満面の笑みを向けた穂乃果。

穂乃果の後ろでは、他のμ、sメンバーも微笑んでいる。



蒼天の元で輝くその笑顔は、満開の花を咲き誇らせていた。

「あん、たは……!」

そんな笑みを向けられた矢澤先輩は、大きく身を震わせ――

「にっこにっこに――!」

――目元を拭つて両手を掲げ、表情を煌めかせた。

「えっ?」

「さつさとやるっ! はい、にっこにっこに――!」

「に、にっこにっこに――?」

戸惑い気味に矢澤先輩と同じポーズ取る穂乃果だったが、矢澤先輩にビシツと指を突きつけられて駄目出しをされる。

「手の形が甘い! 後ろのあんた達もやりなさい! にっこにっこに――!」

『に、にっこにっこに――』

「声が小さい! もう一度!」

『にっこにっこに――』

「もつと大きな声で! そんなんじゃあ、お客さんを笑顔にできないわよ!」

『につこにつこにー!』

矢澤先輩の指示に従っている内に何かを察したのか、穂乃果達は嬉しそうな笑みを浮かべていく。

対して、矢澤先輩は泣き笑いのような表情でにつこにつこにーをしている。

その笑顔は、蕾が花開くような儚くも魅力溢れる笑みだった。

「ふう……」

どうやら、無事に矢澤先輩はムsに入ってくれるらしい。

一時はどうなるかと思つたが、なんとか丸く収まつたようであつた。

だが、安心するわけにはいかない。次の問題がすぐそこまで迫っているのだから。

「雨宮もこつちに来てやりなさい!」

矢澤先輩に声を掛けられ、現実へと意識を戻した。

とりあえず、今だけはこの喜びに浸りたい。

それぐらいなら、俺にも享受する権利はあると思う。

軽くお腹を撫でつつ、俺は矢澤先輩達の元へ駆け寄るのだった。

## 第三十一話 東の間の休息

μ、sのメンバーが七人になった日から、時が流れ。

現在、俺は秋葉原の駅前で絵里を待っていた。

今日はμ、sの練習もない休日だったので、息抜きをするのに最適な日だったのだ。

元々、近い内に絵里に気分転換をさせようと思っていたから、今日は都合が良かったという事もある。

「希先輩には感謝しなきゃな」

初めに誘った時、遊んでいる暇はないと絵里が断ってきた。

しかし、その場にいた希先輩も説得に加わり、結果として絵里は俺の申し出を受けてくれたのだ。

また、気を遣わせてしまったのか、希先輩は二人で行ってこいとも告げてきた。

改めて、今度は希先輩に休んでもらいたいと思った事も記憶に新しい。

内心で希先輩に感謝の念を示していた俺は、改札口から絵里が近づいてくるのを目に入れる。

「お待たせ、朝陽。もしかして、来るのが遅かった？」

「いや、約束の時間にはまだ余裕があるよ」

「なら良かった。朝陽がいるもんだから、遅刻しちやっただかと思つたわよ」

「絵里は真面目すぎると思うけどね」

「そうかしら？　時間より早めにくるのは普通でしょ？」

肩を竦めてそう告げると、絵里は不思議そうに首を傾げた。

一般的に十分前行動と言われているが、時間にルーズな人もいる。

酷い場合だと三十分や一時間遅れはザラであり、中にはドタキャンをしてしまう人もも。

その点絵里は根が真面目なので、そのような事は起きないだろう。

「絵里にとつては普通でも、他の人では普通じゃないという事さ」

「そういうものかしら？」

「ま、細かい事はいいと思うよ。とりあえず、行こうか」

「ええ！　早く朝陽のオススメの喫茶店に行きましょう！」

全身からワクワクとした雰囲気滲ませている絵里に、俺は内心で微笑んで喫茶店へと彼女を連れていく。

同時に、μ、sに新たなメンバーが加入してからの日を振り返るのだった。

——無事に矢澤先輩がμ sに入ってくれてから。

改めて、穂乃果の家でメンバー加入の歓迎会を開き、それはもう盛大に祝った。

初めての先輩という事もあって、μ s……特に一年生組は緊張していたが、矢澤先輩の人徳のお蔭もあり、直ぐに打ち解けていく。

なお、その時に矢澤先輩からの提案で、俺達は互いに名前呼びをする事になる。

より実践的なアイドルの知識がある矢澤——もとい、にこ先輩。

彼女の加入は、μ sにとって非常に大きな意味を持つ事になるだろう。

楽しげに笑みを交わし合う穂乃果達を尻目に、俺は今後の事を考えていくのだった。

「——朝陽？」

「ん、なにかな？」

「ううん。なんだか朝陽がボーツとしていた気がして。大丈夫？」

「私は平気さ。そういう絵里はクラクラするとかない？」

「私も平気よ。それより、ここが朝陽のオススメ？」

瞳を輝かせて尋ねてくる絵里。

普段クールな印象が強いだけに、このような子供のような表情は新鮮だ。

まあ、絵里はポンコツの時が稀によくあるので、クールビューティーなのかと聞かれても首を傾げてしまうが。

ともかく、楽しい様子の子の絵里を引き連れ、俺達は喫茶店の中へと入る。

店内は小洒落た空間になっており、全体的に落ち着いた雰囲気だ。

昼時をやや過ぎた後だが、人はそれなりにいるらしい。

上品な雰囲気店の店員に連れられ、俺達は窓側の席へと案内される。

絵里とは向かい合わせに座り、メニュー表を開く。

「それで、こここのチョコレートケーキが絶品なんですよ？」

「友人から聞いた話によるとね。絵里はそれにするんだよね？」

「もちろんよ！ 朝陽はどれにするの？」

「うーん、私はミルクレープにしようかな」

「あら、それも美味しそうね。チョコレートケーキは外せないし、でも二つも食べると

……ああ、このパフェも捨て難いわ」

絵里は眉間に皺を寄せ、メニュー表とにらめっこをしていた。

「どうやら、他にも食べたいメニューがあつて困っているらしい。」

確かに、どのデザートも美味しそうに撮られており、心なしかキラキラと光っている

ような。

改めて眺めていると、俺も自分の決意がぐらついてしまいそうだ。

「まあ、また次に来た時食べればいいじゃないか」

「……それもそうね。やつぱり、私はチョコレートケーキにするわ」

「私もミルクレープのままかな」

無事に頼む物が決まったので、呼び鈴を鳴らして店員を呼んだ。

デザートと飲み物を頼んで店員が去っていった後、来る時に置かれた水を口に含みながら絵里を見る。

彼女はメニュー表に写っているデザートを見つめており、この姿からある程度リラックスしていると思われるだろう。

とりあえず、無事に絵里にとっての気分転換になったようだ。

廃校の危機が脳裏にちらついて、今日の休暇も上手く休めないかと思っていた。

最近の絵里は暗い顔ばかりしていたから、今のような気負いのない笑顔を見られて嬉しい。

しかし、根本的な解決の目処が立った訳ではないのだ。

である以上、また絵里が無理をしてしまうのはもはや必然。

だからこそ、俺ができる事で絵里達を手伝いたい。

穂乃果達 $\mu$  sには、にこ先輩も加わってくれた。

七人になった $\mu$  sならば、俺がいなくても問題はないだろう。

まあ、初めから俺がいなくてもどうにでもなっていた気もするが。

ともかく、 $\mu$  sを手伝う事はもちろんだが、なにより今は絵里を支えたいのだ。

「どうしたの？」

「いや、絵里があまりにも楽しそうだったんでね。微笑ましく思っていたのさ」

「だって、朝陽がオススメするから凄く楽しみなんだもん」

「楽しみなら良かったよ……どうやら、来たみたいだ」

注文していたチョコレートケーキがテーブルに置かれると、絵里はキラキラと瞳を輝かせた。

手に持ったフォークでケーキを切り分け、上品な仕草で口に含む。

目を瞑って味わうように口を動かし、やがて絵里はゆっくりと目を開く。

「ハラショー……」

艶のある感嘆の吐息を漏らす絵里を尻目に、俺もミルクレープを食べてみた。

なるほど。確かに勧められる店の事だけはあ。

しつこくない甘味と、柔らかな舌触り。

生クリームが特に絶品であり、総合して優しい味といった所だ。



まあ、俺は特に美食家でもないので、今の評価が妥当かどうかは首を傾げてしまおうが。  
「これも美味しいよ」

「私のもすつごく美味しいわ！ 改めて、この喫茶店に来て良かった」

「気に入ってくれたのなら連れてきた甲斐があったよ」

「……ねえ、朝陽」

「ん、どうしたんだい？」

チラチラと俺に目を向けていた絵里は、仄かに頬を赤めて指を絡ませていた。

明らかに恥ずかしがっているとわかるその姿に、思わず首を傾げた俺は不思議ではないはずだ。

暫く視線を行ったり来たりさせていき、やがて何か覚悟でも決まったのか。

俺から僅かに目を逸らしながらも、絵里はゆっくりと口を開いていく。

「その、希から聞いたんだけど。喫茶店では、仲の良い友達同士で食べさせあいつこをさせるって」

「……………あー、うん」

何を吹き込んでいるのですか、希先輩!?

ニヤニヤと笑っている彼女が目には浮かび、思わず頬を引き攣らせてしまう。

絵里の言葉は間違っていない。仲の良い友達同士なら、違うデザートを頼んで分け

合いつこはよくする。

穂乃果もことりとそういう事をしているのを目にしていた。俺と海未は恥ずかしいからしていなかったが。

それに俺の場合、前世が男という事もあつて尚更抵抗があつた。

「ほら、私達も付き合ひが長いでしょ？ だから、希の言うように食べさせあいつこをし  
たいなつて」

「その事なんだけど、それは希先輩が——」

「私とするのは、嫌？」

「——うぐっ」

瞳を潤ませて、小首を傾げた絵里。

どこか不安そうな表情を浮かべる彼女に、俺は言葉に詰まってしまふ。

普段がクールだからか、そんな可愛らしい仕草は卑怯だ。

の、希先輩い……どうして俺にこんな試練を与えるのですか。

いやまあ、どう考えても自分が楽しむためだとはわかつているが。

だけど、絵里は凄く美人で可愛くて綺麗なのに、そんな恋人のような恥ずかしい事をするなんて。

それに、俺と絵里だとそういう行為をするのは釣り合わないと思うし。

「やっぱり、駄目よね。我が儘を言つてごめんなさい」

「そんな、我が儘じゃない！ その、そういう事するのに相応しい人が絵里にも必ず現れるから、その時まで待てばいいと思う」

「私は朝陽とやりたい！」

「わ、私と？」

思わず声が裏返つてしまった。

驚いて問い返すと、絵里は頬に桜を散らして頷く。

「朝陽とそういう思い出を作つてみたいの」

「わ、私と……その、なんていうか、とても恐縮であるというか」

「恐縮？」

「えっと、その、とても嬉しいです、はい」

やばい。今、絶対顔が赤くなっている。

顔全体から熱さを感じ、恥ずかしくて俯いてしまう。

絵里から色々な思い出を作りたいと告げられ、正直心が舞い上がっている。

普段はできるだけ気にならないようにしていたが、やはり美少女である絵里にそこまで言われると、非常に照れくさく感じてしまうのだ。

しかも、今回は食べさせあいっこというただの思い出ではなく――

「朝陽？」

「ひゅい!？」

「ど、どうしたの変な声を出して？」

「い、いや。なんでもないさなんでも、ハハハ」

咄嗟に笑つて誤魔化したのだが、どうやら絵里は理解してしまつたらしい。

珍しく意地悪そうな表情を浮かべた絵里は、口許に手を添えてクスクスと笑みを落とす。

「もしかして、さっきの言葉で照れてるの？」

「そ、そんな事ないよ？」

「ふふつ、声が裏返つてるわよ。それにしても、あの朝陽も恥ずかしがるのねえ」

「か、からかわないでくれ！」

「どーしよつかなあ」

くつ、ニヤニヤしやがって。

楽しげに微笑む絵里に対して、俺は涙目で睨みつける事しかできなかった。

暫く絵里から弄られていて、不意に彼女は口を閉ざす。

チョコレートケーキに視線を落とし、悩む様子で俺と交互に見つめ。

やがて、フォークでケーキを切り分けた絵里は、ゆっくりと俺にそれを差し出す。

「え、絵里？」

「や、やっぱり朝陽とやりたいから。……あ、あーん」

頬を火照らせ、期待に満ちた眼差しを送りながら、絵里はこちらにフォークを向けてきたのだ。

まさか、あれだけ恥ずかしがっていた絵里からやるとは思っていなかった。

しかし彼女の手は震えており、徐々に涙目になっている事から、やはり羞恥心はあるのだろう。

……こ、これは食べなければいけないのか？

素早く周囲を見回すが、誰も俺達の事は気にしていないらしい。

つまり、今なら誰にも見られずに事が行えるという訳だ。

だがしかし、やはり恥ずかしいものは恥ずかしいのだが。

「ほ、ほら。絵里はひとまず落ち着こう」

「私は落ち着いているわ。あ、あーん」

「だからね？」

「あーん」

「その、絵里？」

「うう……あーん」

意固地になつてゐるのか、俺にフォークを向けたままの絵里。彼女は悲しげに眉を下げ、寂しそうな唸り声を上げた。

そこまでして、絵里は俺に食べさせたいのか。

……ここまでさせてゐるのに、俺が臆しても良いのだろうか。いや、そんなはずはない。

元男として、絵里に恥をかかせる訳にはいかないだろう。

内心で決意を固めた俺は、意を決して突き出されたフォークを啜える。

瞬間、絵里の表情に満開の花が咲き誇つていく。

「ど、どう?」

「う、うん。美味しいよ」

「ええ、このケーキは絶品よね……やった!」

辛うじて言葉を返すと、絵里は小声でガツポーズを取った。

どうやら、俺に食べさせられた事が大層嬉しいらしい。

そこまで喜ばれて恥ずかしい反面、どこか嬉しい気持ちもある俺は変だろうか?

ともかく、これで無事に試練を乗り切ったはずだ。

「なんとか助かった」

「その、朝陽。私も朝陽に食べさせてもらいたいな」

「……やっぱり?」

「駄目?」

うん、そうなると思った。

絵里は食べさせあいつを言っていたので、俺からも食べさせる事になるだろうとは感じていたのだ。

本当に頬が熱くなるのだが、絵里の方は慣れたのか冷静になっている。

……どうしても、食べさせなければ駄目だろうな。

半分諦めの境地でミルクレープを切り分け、フォークに乗せて絵里の方へ差し出す。

「あ、あーん」

「や、やられる方も恥ずかしいわね……はむっ」

「どう?」

「ええ、食べさせあいつこつて楽しいわ!」

俺は味の感想を聞きたかったのだが。

食べる事で吹っ切れたのか、絵里は破顔して大きく頷いた。

どうやら、念願の食べさせあいつこをできてご満悦であるらしい。

なんていうか、絵里が騙されているような気がする。

元はと言えば、希先輩が変な事を告げなければここまで悩む必然がなかったと思う。

まあ、絵里が楽しんでくれるのなら、俺も羞恥心を押し殺した甲斐があった。

「絵里が楽しいのなら良かったよ」

「朝陽！ 食べさせあいつこって良いわね。なんだか、いつもより距離が近い感じがするの」

「まあ、少なくとも物理的に縮まったんじゃないかな？」

「だからもう一度食べさせあいつこしましょ」

「……えっ？」

「はい、あーん」

満面の笑みでケーキを差し出す絵里を見て、俺は思わず頬が引き攣ってしまふ。

絵里が楽しそうな事は良いのだ。気分転換になったという事だから。

しかし、それと食べさせあいつこは別な訳で。

……絵里の疲れを癒すため、と前向きに捉えておこう。俺の羞恥心は、この際気にしない。

結局、それから俺達は互いに食べさせあいつこをしていくのだった。

——とりあえず、絵里は吹っ切れると押しが強くなると覚えておこう。



### 第三章 九人の女神が揃うまで

#### 第三十二話 $\mu$ ' s の P R 撮影

にこ先輩が  $\mu$ ' s に加入してから時が経ち。

七人になった  $\mu$ ' s は、更に輝きを増していく。

特に、にこ先輩が加入してくれた事により知識はもちろん、上級生がいるという安心感等から  $\mu$ ' s の結束力が強まったのだ。

メンバー間の仲も良好であり、 $\mu$ ' s は非常に良い雰囲気ของกลุ่มになったというだろう。

そんな順風満帆と表せるスクールアイドルグループ、 $\mu$ ' s。

彼女達が現在、何をしているかと言えば――

「――はい、笑って笑ってー」

「えつとお……えへへ」

「じゃあ、決めポーズもつけてくださーい」

凜の要求に、穂乃果は戸惑い気味に様々なポーズを取っていく。

「はっ！ ほっ！ やっ！」

「これが、音ノ木坂学院に誕生したスクールアイドルグループ『μ s』のリーダー、高坂穂乃果だ」

「……そのポーズじゃあ誤解されると思うけど」

「音ノ木坂戦隊μ s、とか？」

カメラを回している凜の隣で、希先輩がナレーションをしていた。

しかし、苦笑いを浮かべることが告げた通り、シャキーンとしたポーズを取っている穂乃果を見ると、どうしてもスクールアイドルとは思えない。

怪人と戦う正義の使者というか、変身する時にやりそうなポーズというか。

……この場合、敵サイドの役は誰になるのだろうか？

やはり、今までで穂乃果を叱った事が多い海未で怪人ラブアロ——

「朝陽？」

「どうしたのかな、海未？」

「いえ、今の貴女から不穏な空気を感じたので。何か変な事を考えませんでしたか？」

「うーん、気のせいだと思うな。決して、戦隊物で穂乃果が主人公だったら、海未は敵幹部だろーうなんてこれっぽっちも思っていないよ？」

「そ、それは私が悪役っぽいという事ですか？」

「うん？ 海未を悪役っぽいなんて考える訳ないじゃないか」

頬を引き攣らせている海未から目を逸らし、さり気なく口笛を吹く。

だが、どうやら海未を誤魔化す事ができなかつたらしい。

勢いよく立ち上がった彼女は、表情に不満の色を宿して口を開く。

「嘘です！ 明らかに隠す気がないじゃないですか！」

「はははっ、私に疚しい気持ちはないよ。全く、海未は疑い深いなあ」

「だったらその腹立たしい笑顔はなんなんですか！」

肩を怒らせて近づいてくる海未に、俺は身を翻して凜の背後に隠れる。

そして、ビデオに顔を寄せて囁く。

「これが、μ'sの作詞担当である園田海未だ」

「凜達一年生の面倒を見てくれる、凄く頼りになる先輩だにや！」

「わ、私はただやるべき事をしてるだけで……」

「自身に謙虚な姿が、後輩達に慕われる所以なのかもしれない」

誇らしげに胸を張った凜の言葉を聞いて、海未は頬を赤らめて髪を弄っていた。

チラチラと凜とビデオに目を向け、やがて何かに気が付いたのか、彼女は慌てた様子で両手を突きだす。

「そ、そうです！ いきなり撮らないでくださいっ！」

「と、このように恥ずかしがり屋なのが玉に瑕である」

「朝陽っ！ いい加減怒りますよ!?!」

「ふふふっ、すまない。海未を見ているとついね」

「ついじゃありませんよ……全く」

「あゝ。それで、これって？」

大きなため息を漏らした海未を尻目に、ことりが希先輩に尋ねた。

マイクを手ニコニコと俺達の様子を見守っていた希先輩は、楽しげな笑顔のまま穂乃果達へと理由を明かしていく。

「実は、生徒会で部活動の紹介をするビデオを制作していてな。今のように各部に取材をしている所なんや」

「おお、取材って良い話だね！ なんかアイドルって感じで」

「二応、ことり達はスクールアイドルなんだけど……?」

「まあ、取材って言葉を聞くと改めてアイドルって思えるよね」

恐らく、普段では縁がなさそうな取材という事に、アイドルとしての実感が湧いてきたのだろう。

今までも、μ'sは歌やダンスでスクールアイドルとして動いていたが、あれは自分

達の周りで完結していた話だ。

しかし、この取材という外部からの接触で自身達の立ち位置を認識した、という感じだと思う。

まあ、閲覧数等から外部の評価というものはあったのだが。

ともかく、これがきっかけで $\mu$ 'sは加速度的に認知されていくだろう。

つらつらとそんな事を考えている間にも、どうやら状況は動いていたらしい。

ビデオを撮る事に賛成の色を見せている穂乃果達に対して、海未は非常に渋い表情を浮かべていた。

「私は嫌です」

「ええ!? どうして、海未ちゃん?」

「最近スクールアイドルが流行っているし、 $\mu$ 'sにとっても悪くない話だと思うんやけど?」

「音ノ木坂の知名度を上げるためにも良い事だと思うよ?」

「そ、それはわかってますけど。やっぱりカメラに映るのは……」

やはりと言うべきか、海未の恥ずかしがり屋は筋金入りのようだ。

穂乃果達もどこか察したような表情を浮かべており、辺りになんとも言えない難い雰囲気だ漂いだす。

すると、ことりはこのままだと海未が断ってしまうと思ったようだ。

「ことりは、海未ちゃんと一緒に映りたいなあ」

「で、ですが」

「取材を受けてくれたらカメラを貸すで？」

「おー！ カメラがあれば、sの事を沢山知ってもらえるね！」

「PVも作れるしね」

「新しい曲にゃ！」

思い思いに今後の展開を描いている中、海未は迷うように瞳を揺らしていた。

——皆の言いたい事は理解している。μ sを知ってもらうためには必要な事。だ

けど、どうしても恥ずかしい。

そのような複雑な感情が、手に取るようにわかる。

暫くすると、海未は表情を明るくして口を開く。

「では、私以外のメンバーがカメラに映るといのは？」

「えー。流石にそれはないよ、海未ちゃん」

「うん、皆で一緒にやろう？」

「七人になったメンバーで新曲をやりたいて言ってたでしょ？」

「新曲のPVを創ろう、海未ちゃん！」

両手を組んで、海未へとキラキラとした眼差しを送る穂乃果とことり。

彼女達の瞳から煌めく星屑が、海未の元に勢いよく飛んでいく。

対して、海未は顔の前に手を翳しており、僅かに後ずさっている。

「ま、眩しい……」

「海未ちゃん！」

「おねがぁい！」

やがて、穂乃果達の攻撃に屈したのか。

大きなため息をついた後、海未は肩を落としてゆっくりと頷いた。

表情を輝かせはじめた穂乃果達を尻目に、彼女は疲れた様子で口を開く。

「タイミングが良いのはわかりますし、皆で撮りましょう」

「海未ちゃん！」

「やったー！ 穂乃果は皆を呼んでくるね！」

「凜もかよちん達の所へ行く！」

あつという間に、穂乃果と凜はこの場を去っていった。

カメラを持ったまま二人がいなくなったので、俺達は手持ち無沙汰になってしまう。

「あ、待つてよ穂乃果ちゃん！」

「走ると転びますよ！」

海末とことりも穂乃果達を追いかけていき、残った俺は自然と希先輩と顔を見合わす。

「良いグループやね」

「そうですね。本当に素晴らしいスクールアイドルですよ、μ'sは……本当に」

「朝陽ちゃん？」

「あ、そうだ。希先輩に渡したい物があつたんです」

「渡したい物？」

地面に置いていた鞆を手に持ち、中から幾らかの紙の束を取り出した。

不思議そうに眺めていた希先輩にそれ等を渡し、紙の内容を説明していく。

「この束は私が高校に見学しにいった時の所感で、こつちが友達に聞いた音ノ木坂に進学すると決めた理由の纏めです。で、これが街の人達から聞いた事を元にした音ノ木坂を客観的に見た資料で——」

「ちよ、ちよつと待つて朝陽ちゃん！ この紙全部が音ノ木坂についてなの？」

「——え？ ええ、そうですが」

「この高校の見学つて、複数の学校について詳しく書いてあるけど」

「ああ。それはGWの時や休日の時に学校にアポを取っておいたんです。それで、学校にいた生徒達にその学校の自己アピールをしてもらつて、改めて音ノ木坂との違いを図



とかで表しただけです」

「この友人達に聞いたというの？」

「そつちは音ノ木坂の生徒達にどうしてこの学校に入学したのか、というアンケートを取っただけです。アンケートの上位がわかれば、音ノ木坂はそこを重点的にアピールすれば良いかなと」

聞かれた内容について説明していくと、希先輩は驚いた様子で紙の束に目を通していった。

にしても、そんなに驚く事だっただろうか？

自分にできるのは色々な所から情報を集め、絵里達の手助けになれば良いと考えただが。

資料にしたって、時間が空いている時や夜にレポートとして纏めただけだし。

「もしかして、これ全部朝陽ちゃん一人で？」

「はい。ですから、資料としては役に立つかはわかりません。でも、私なりに音ノ木坂を分析して、改善案や提案等を書いてみました。絵里達生徒会の助けになればいいんですが……」

やはり、この程度じゃ駄目だろうか。

俺みたいな素人では、経営や運営について全く理解できない。

だけど、だからって何もやらないのは違うと思う。

……こんな事しかできないのが歯痒い。

少しでも絵里や希先輩の力になれたら良いのだが。

そんな風に考えていたのだが、どうやら希先輩にとつては嬉しかったらしい。

紙の束を胸に搔き抱き、彼女は柔らかに微笑む。

「ううん。わかりやすく書いてあつて、凄く良い資料や。これは生徒会で参考にさせてもらうね」

「参考になるなら良かったです。……私にできる事ならなんでもします。だから、自分一人で抱え込まないでください」

「うん。絵里ちにそう伝えておく」

「希先輩もです」

「ウチも？」

不思議そうに首を傾げた希先輩。

絵里が抱え込むのは知っている。それだけ長い付き合いだし、性格を熟知しているから。

しかし、それは希先輩にも言える事だ。

μ、sの皆を支えてくれている優しい先輩。

絵里を助けて欲しいと願う親友思いの人。

でもそれは、いつも自分を後回しにしているという事。

俺は知っている。希先輩も素直になれないだけで、本当は自分を押し殺しているというのを。

「私にとつて、希先輩は大切な友達ですから。何か悩みがあつたら、遠慮なく頼ってください」

「朝陽ちゃん……」

「では、そろそろ私も行きますね。これからは、頻繁に希先輩達の様子を窺いにいくと思いますので」

希先輩が持つていたマイクを渡してもらい、俺は頭を下げて踵を返す。

「——ありがとう、朝陽ちゃん」

背後から聞こえてきたその声に、足を進めながら思わず唇を噛み締めてしまう。

何が頼ってくれだよ。自分が誰にも頼ろうとしていなくせに。

自分ができない事を、平然と相手に要求する。

改めて、酷い偽善に溢れた言葉だろう。

「この程度の事しかできない俺を頼れとか、説得力がまるでないな」

$\mu$ 'sのように我武者羅に突き進んでいる訳でもないし、かといって絵里のように責

任を背負っている訳でもない。

誰でもできる事を、傍観者の立場からしているだけだ。

である以上、俺にできるのは誰よりも足掻く事のみ。

考える限りの可能性を想定して、それ等に対処できるように考えを練る。

彼女達の道が険しくならないように、己の全てを使って整えていく。

「だから、あれだけじゃ足りない」

μ s が廃校を阻止してくれるとは思っている。

しかし、万が一彼女達が廃校を阻止できなかったとしたら？

そのような考えが脳裏を過ぎる以上、俺はその可能性をできる限り排除する。

簡単にいくとは思っていない。俺が何をしても無駄なのかもしれない。

だが、どうしても何もしないという選択は取れなかった。

知識として知っているのに、指を啜えて見ているだけ。

そんな事はできない。見て見ぬ振りをする事は俺が自分を許さない。

穂乃果達と関わる事を決めたのだ。

ならばこそ、できるだけ良い未来にしようと考えるのは自然だろう。

「俺が他にできる事は……」

PV撮影にホームページの更新、メンバーの体調管理に絵里達生徒会の手伝い。

音ノ木坂の魅力を考える事、他校の視察。

$\mu$ 's の広報活動もある。秋葉原等でチラシ配りはしているが、少しずつ手応えを感じはじめている。

グッズ関係については、素人の俺が口を出せる問題ではないだろう。

一応、原案は紙に纏めているのだが。

「後は、ここのりの問題か」

いつぐらいに留学の誘いが来たのかは覚えていない。

しかし、そう遠くない内に知らせがやってくるだろう。

である以上、より一層ここのりの事を気にかけて些細な変化も見逃してはいけない。

また、絵里の様子も強く気にするべきだ。

恐らく、今の彼女の内心は凄く不安定だと思われる。

様々なしがらみに囚われ、生徒会長という重圧に苦しんでいるはず。

だからこそ、俺が絵里を手伝って少しでもその不安を取り除いてやりたい。

「PVが一段落ついたら、急いで絵里の所に行かなきゃ」

やるべき事の多さに、頭が痛む。

しかし、これは俺が望んだ事だ。

俺の行動一つで皆が笑顔になれるのなら、これぐらいどうって事はない。

「考えていても仕方ない。頑張るぞ！」  
頬を叩いて気合を入れつつ、俺は駆け足で部室へと向かうのだった。

## 第三十三話 中庭の木の下面

PV撮影すると決めた翌日の放課後。

現在、俺達はことりがこつそりと撮影したビデオを見ていた。

ビデオに映っているのは、穂乃果の今日一日の行動である。

画面内の穂乃果は授業中に居眠りをしたり、美味しそうにパンを食べたりしてフリーダムだ。

なお、涎を垂らして寝ていた事は彼女の名誉のために指摘しないでおこう。

「スクールアイドルと言えども、彼女は今をときめく高校生。普段はこのようにどこにでもいる少女なのだ」

「は、恥ずかしい……」

抑揚のない声色でナレーションをしていく希先輩。

対して、穂乃果は顔から蒸気を噴きながら、机に顔を伏せていた。

まあ、希先輩はありのままを撮ると言っていたが、これはあけつびろげになり過ぎて羞恥心を感じるだろう。

流石に気の毒に思っているのか、海未も微妙な表情のまま穂乃果に注意をしないし。

「あくん、バレないように撮影するのドキドキしちゃった〜」

頬に手を添え、笑みを浮かべることり。

しかし、その笑顔がやけにツヤツヤしている事から、撮影を大層楽しんだのだろう。

……穂乃果も可哀想に。

思わず同情の眼差しを送っていると、穂乃果はガバリと顔を上げ、うがーつと両手を振り上げる。

「どうして黙って撮ったのー！撮るなら真面目に授業を受けたよー！」

「授業は毎日真面目に受けるものですが」

「パンだつてもつと上品に食べたもん！」

「えー？ それじゃあありのままの姿にならないよ？」

「そうですよ。普段からだらけなけなけで真面目にしていれば、いつ撮られても問題ないはずです」

腕を組んで告げた海未に、穂乃果は頬を膨らませてビデオを手に取った。

どうやら、海未のビデオを見ようとしているらしい。

暫く穂乃果がビデオを弄っていると、やがて画面に海未の姿が映る。

「お、海未は弓道の練習をしているのかな」

「海未先輩カッコイイです！」



「そうね。凜としていて悪くないわ」

「そ、そんな事はないですよ」

海未は傍観していた花陽達に褒められ、満更でもない様子で目を逸らした。

確かに彼女達の言う通り、ビデオ内の海未はキリリとした表情で弓を構えている。

背筋も伸びており、まさに大和撫子のような立ち姿だ。

弓に矢をつがえ、弦を引く。そして静かな所作で放ち、残心。

その惚れ惚れするような一連の流れに、各所から感嘆のため息が漏れる。

「流石だよ、海未ちゃん！」

「素敵です！」

「凜も凄いと思うよ！」

「そんな、私なんてまだまだです。無心で矢を放つ境地に行っていませんし、他にも直す

べき所は沢山あります」

皆からの賛辞を受けた海未は、どこか照れくさそうに頬を赤らめた。

ここまで言われると、普通なら自分は凄いと驕ってしまふ。

しかし、海未は決して自惚れず、常に成長しようとしている。

自身に厳しく、地に足を着けて己を律す。

だからこそ、海未は凜としている魅力的な少女なのだろう。

そんな事を考えている間に、カメラ内の海未は鏡に目を向けた。

『…………えへっ』

「わ、わあああああ!?!」

可愛らしく頬に拳を添え、満面の笑みを浮かべたカメラ内の海未。対して、目の前にいる海未は大声を上げてカメラの電源を落とす。

「えっと、笑顔の練習?」

「海未ちゃんかわいい〜!」

「プ、プライベートの侵害ですっ!」

「えー? 可愛いからいいじゃん! ねえ、真姫ちゃん?」

「どうして私に振るのよ!?!」

ニコニコしていた穂乃果が、真姫に水を向けた。

真姫は口許をひくつかせており、涙目の海未に見つめられて居心地が悪そうだ。

「ま、真姫は私の味方ですよね?」

「…………まあ、隠し撮りは駄目よね」

「大丈夫。ちゃんと顧問の先生に許可は貰ったから」

「私に許可を得てください! ……うう、一生の不覚です」

……とりに抗議した後、海未は両手で真っ赤になった顔を覆ってしまった。

花陽と凜はなんとも言えない表情を浮かべ、希先輩は楽しげにニヤニヤしている。まあ、傍から見たら面白いだろう。

普段から真面目な海未が、一人の時は可愛らしい仕草をしている。いつもと違うギャップに、俗に言う萌えを感じるのとは否定しない。

ただ、海未本人にとっては、非常に不本意な感想だろうが。

「やっぱり君達は面白いなー」

「私は面白くありません！」

「うーん。でも、海未ちゃんは可愛い笑顔の練習をしてたんだよね？」

「そ、そうなりますかね？」

「だから、次は海未ちゃんのために、可愛い衣装にします！これなら可愛い笑顔がより栄えると思うんだ〜」

「ス、スカート丈を短くするのですか?! そ、そんなハレンチな服は着ませんよ」

「ことり先輩はスカートの事なんか言っていないわよ？」

「海未先輩はおつちよこちよいだにやー」

呆れた様子で眩きを漏らした真姫達を尻目に、穂乃果は怪しい動きでことりの鞆に歩み寄る。

そして、ゆっくりとチャックを開きながら、邪悪な笑みを浮かべて口を開く。

「うひひ。ことりちゃんのプライベートも見ちゃうよ〜」

「あんまりそういう事は良くないと思うけど？」

「えー、朝陽ちゃんも見たくない？」

正直、非常に気になります。

ことりの鞆の中を見た事はないが、なんとなく怪しい物が入っているような。

一般的な女子が持つ私物以外に、実はこんなのが……なんて。

ともかく、無言で穂乃果に頷くと、彼女も表情を引き締める。

「じゃあ、ご開帳！」

「どれどれ……なんだ、普通の物しかないね」

「本当だね。ことりちゃんのプライベートに繋がるような物は……あれ、これって——」

隠されるように入っていた、一枚の写真。

室内を照らす光の加減のせいで、全体像を見る事は叶わなかった。

不思議そうな面立ちの穂乃果がそれを手にしようとした瞬間、俺達の視界から鞆が消

え失せる。

穂乃果と揃って視線を上げると、ぎこちない笑顔のことりが鞆を背に隠していたのだ。

「もう、駄目だよ二人共！ 勝手に鞆を開けちゃ」

「ねえ、ことりちゃん。今の写真って——」

「や、やだなー。ことりは写真なんて鞆に入れてないよ?」

「え、でもさつき——」

「ナンノコトカナ?」

急に片言になると怪しいぞ、ことり。

穂乃果も納得がいていないのか、微妙に不満げな表情を浮かべているし。

しかし、どうやらことりの方が一枚上手だったらしい。

口を開こうとした穂乃果を遮り、ことりは充分に黒さが籠った笑みを向ける。

「ひっ!」

「穂乃果ちゃん。写真なんてなかったよね?」

「う、うん。穂乃果の勘違いだったみたい」

「わかってくれて良かった。……うん、正直者の穂乃果ちゃんのために、明日はお菓子を持つてくるね」

「え、ことりちゃんのお菓子!? わーい、やったー!」

穂乃果は両手を上げ、全身で嬉しさを表現していた。

……ことりに誤魔化されているのだが、良いのだろうか?

そんな風に考えていると、微笑んで穂乃果を見つめていたことりが、視線を鋭くして

俺に声を掛ける。

「朝陽ちゃんも、写真なんて知らないよね？」

「うん。メイド服を着たことりの写真なんて知らないね」

そう返すと、ピシリとことりの笑顔が固まった。

頬を痙攣させながら、ことりは不自然な笑みで俺の方に近づいてくる。

「ア、アハハ。アサヒチャンハナニライツイルノカナ？」

「うん、だからメイド服——」

「わー！ お願いだから待ってえー！」

背に隠していた鞆を放り投げ、飛びついて俺の口許を抑えたことり。

その唐突な大声に、室内で談笑していた皆の視線が集まってしまう。

全員から注目された事を感じ取ったことりは、俺の肩越しに顔を出して笑みを張りつける。

「どうしたんですか、ことり？」

「な、なんでもないよ？」

「なんでもない声ではなかったけど」

「本当に大丈夫だから……あ、そうだ！ ことりちよつと朝陽ちゃんに用があるから！」

「ちよ、ちよつとことり!」

ことりは棒読みでそう告げ、俺を引つ張つて部屋から出ようとした。

対して、俺は思わず抗議の声を上げるのだが、目が笑っていないことりの笑顔に気圧され、なすがままにされてしまう。

……素直に知らない振りをしておけば良かったかもしれない。

しかし、これはある意味チャンスでもある。

せつかくことりと二人つきりになれたので、この機会に不安に思っている事を聞くべきだ。

俺で力になれるだろうか……いや、なれるなれないではない。ことりの力になりた  
い。

独りで悩みを抱えているのなら、少しでもそれを軽くしてあげたいのだ。

「大事な話があるから、付いてきて」

「……うん、わかった」

「その、いつてらつしゃい？」

「直ぐに戻るから！」

頭に疑問符を浮かべている海未達を尻目に、俺達は部室を後にするのだった。

「——ここなら大丈夫かな」

俺を引き連れていたことりは、そう呟くと手を離れた。

現在、俺達は中庭にある木の下にいる。

わざわざここまで来る必要はないと思うのだが、ことりなりに何か考えでもあるのだろうか。

「それで、話とは？」

まあ、おおよそ見当がついている。

先ほど俺が漏らした通り、何故ことりがメイド服を着ているかについてだろう。

チラツとしか見えなかったが、あれは間違いなくことりの写真だった。

そして、この時期にことりがメイド服を着ているという事は——

「……朝陽ちゃんは、見ちゃったんだよね？」

「そう、だね。メイド姿のことが写っていた写真なら見たかな」

「やっぱり。だからあの時、ことりをからかおうとしたんだ」

静かに微笑んでいたことりは、俺から視線を外して木を見上げた。



風に靡く髪を抑え、憂いに帯びた表情で口を閉ざすことり。

辺りには沈黙が舞い降り、どこか気まずげな雰囲気漂いはじめる。

「ことり？」

「聞かないんだね」

「ことりが言いたくないなら無理して聞かないよ」

「……やつぱり、朝陽ちゃんは優しい」

そんな事はない。俺が優しいなんてありえない。

俺が優しいのなら打算的な考えをしないし、メリットデメリットの計算もしないだろう。

優しいのは、むしろことりの方だ。

皆の事をよく見ていて、さり気ない気配りもしていて、いつも笑顔で癒しをくれていて。

ことりがいるから、*μ* *s* は頑張れているのだ。

他の誰でもないことりが縁の下を支えてくれていてからこそ、皆はバラバラにならない。

そんな風に考えながら、俺はことりの近くにある椅子に腰を下ろす。

「私は優しくなんてないさ。ことりの方が優しいよ」

「そんな事ない。ことりより朝陽ちゃんの方が！」

鋭く否定の声を上げたことりに、俺は手招きして隣に座らせる。

「どうして、そう思うんだい？」

「だって、ことりにはなんの取り柄もないから……」

「それはどういう事？」

思わず首を傾げると、ことりは俯く。

膝の上で揃えた両手をギョツと握り、自嘲の色が宿った声色で告げる。

「私には、なんにもないの。海末ちゃんみたいにしっかりしてないし、穂乃果ちゃんみたいに皆を引っ張ってもいない。朝陽ちゃんのように、sを支えている訳でもない。ただ、皆に付いていっているだけ」

「ことり……」

もしかして、俺のせいかな？

俺が、sに関わってしまったせいで、物語よりことりを追い詰めてしまった？

今のことりの様子は、吹けば飛びそうなほど危うい雰囲気がある。

辛そうなその横顔に、俺は思わず唇を噛み締めてしまう。

口内に広がる鉄の味。

しかし、そんな事はどうでもいい。

何故、なんで気づかなかった？

ことりが思い詰める事を知っていたではないか。

だったら、あらかじめフォローしておくのが当たり前のはずだ。

……それを怠ってしまったのは、単に俺が自惚れていたから。

知識の通り進めれば大丈夫、と無意識の内に甘えていたのだろう。

馬鹿か、俺は。俺というイレギュラーを考慮しろ。

極端な話、これでことりが俺達と会うのが気まづくなる可能性だってあった。

最悪、μsを辞めたいと思う可能性も。

……いや、後悔は後だ。

今すべき行動は、自己嫌悪する事ではない。

「だから、私はメイドをしようと思ったのかな……ごめんね、変な事を言つて。うん、話したら少しスッキリしたかな。皆も待つてるし、戻ろ——」

「ことり——」

「——朝陽、ちゃん？」

作り笑いを浮かべ、立ち上がろうとしたことり。

しかし、咄嗟に彼女の手を取り、こちらへと引き寄せる。

不思議そうに目を瞬かせていたことりに、俺は内心の想いを伝えようと口を開く。

「付いていつているだけじゃない！　ことりに何もなんて事はない！」  
「えっ？」

「μ、sの皆を支えているのはことりだし、一番氣遣っているのもことりだよ！」  
「そ、そんな事ないよ」

「体調が悪そうな人がいる時、最初に気づくのはいつもことりだよね？　これって、皆の事をよく見ているからじゃない？」

「私が言わなくても朝陽ちゃんだって気づくと思うけど……」

瞳を揺らしていたことりの手を包み込み、しっかりと彼女を見据える。

「ううん。これはことりにしかできない事だよ。誰よりも優しく、人一倍μ、sを氣にかけてくれることりだけの長所」

「でも……」

「どうやら、いまだにことりは自分に自信が持てないようだ。」

悲しげに目は伏せ、声色は弱々しい。

「……どうすれば、ことりの心を癒す事ができるのだろうか？」

俺なんか穂乃果の代わりを務めようなんて烏滸がましかったのか？

「ただ、あんなことりを見て見ぬ振りできる訳がない。」

この場に穂乃果がいらない以上、俺なりのやり方でことりと向かい合うべきだ。

内心で決意した後、ことりの手を引いてそつと抱き締める。

「ことりはもつと自信を持つていいんだよ」

「朝陽ちゃん？」

「*μ* *s* がバラバラにならないのは、ことりが皆を気にかけてくれるからだよ。皆が皆穂乃果みたいだとやりたい放題になつちやうし、海未みたいだとともにスクールアイドルなんてできやしない」

「確かに、穂乃果ちゃんばかりだったら大変かも」

クスリと笑ふことりの声が耳に入り、少しは気分が晴れた事が伝わった。

背中に回した腕の力を強めながら、俺は彼女の耳元で言葉を紡ぐ。

「一年生の中で最も慕われているのは、多分ことりだと思うよ」

「えっ？」

「私達の中で、ことりが一番気遣いをしているよね？ 花陽達が言つてたよ、ことり先輩

のお蔭で *μ* *s* に直ぐに馴染めたつて」

「そう、なんだ」

「皆はちゃんとわかつてるんだ。ことりが *μ* *s* を支えてくれている事を。何も取り柄がないんじゃない。穂乃果達が走っているなら、その背中を押しているのがことりなんだよ」

「朝陽ちゃん……」

「だから、付いていってただけなんて悲しい事を言わないで。ことりは私……うん、皆にとつてかけがいのない大切な人なんだから」

そこで言葉を区切り、ことりの反応を窺う。

彼女は俺の肩に顔を押しつけているので、どのような表情をしているかわからない。しかし、僅かに身体を震わせている事から、何かしら心境に変化があったのだろう。

「私、は」

「うん？」

「私は……私にも、何かがあるの？」

「もちろん。穂乃果達みたいに目立っていないけど、ことりもしっかりと皆を引っ張っているよ。……確かに、今までのことりは穂乃果達に付いていただけかもしれない。でも、少なくとも今のことりは違う。しっかりと自分の足で歩いて、穂乃果達を支えながら一年生達を引き連れている」

「っ！」

身じろぎすることりを身体から離し、その潤んだ瞳と目を合わす。

彼女の頬を伝っていく雫を拭い、俺は柔らかに微笑む。

「もっと自信を持って。ことりは自分の意志で立ち上がって、皆を引っ張ってくれる素

敵な人だからさ」

「——朝陽ちゃんっ！」

勢いよく胸に飛び込んできたことり。

思わず抱き締めて頭を撫でると、胸元から嗚咽の漏れる声が聞こえてくる。

……少しは、ことりの不安を晴らす事ができただろうか。

自分なりに感じたことりの個性や良い所を挙げて、実際に何も無い事はないと証明したかったのだが。

確かに、穂乃果は皆を明るく照らす太陽のような存在だし、海末も、sをより良くしようとしてくれていた頼もしい人だろう。

しかし、それはことりにだつて言える事だ。

まず、他の人ではできない衣装関係だけでも充分凄い。もちろん、それ以外にも……特に、サポート関係ではことりが一番だと思う。

だからこそ、ことりが自身を卑下する必要は全くない。

「落ち着いた？」

「……うん」

「私の言葉じゃ説得力がないかもしれないけど、穂乃果達も同じ気持ちだと思うよ」

「ううん。朝陽ちゃんのお蔭で、少し自信を持てたよ」

「なら良かった。……穂乃果達とことりは違うんだから、そうやって比較する必要もないさ。ことりはことりのやり方で、*μs*を支えていけば大丈夫だ」

「うん、ありがとう。やっぱり、朝陽ちゃんは凄いなあ。今みたいのことりの事を励ましてくれたし」

胸元から見上げてきたことりの言葉に、俺は思わず言葉に詰まってしまった。

不思議そうな眼差しを送ってくる彼女から目を逸らし、無意識に強ばらせていた口許を緩める。

そして唾を呑み込み、ゆっくりと口を開く。

「……凄くなんてないさ」

「えっ?」

「私が凄い事なんてありえない」

「でも、朝陽ちゃんはいつもことり達を助けてくれてるよ?」

ことりの顔をまともに見れない。

胃からせり上がる不快感に、内心で顔を歪める。

ああ、そうだ。俺が凄いなんで話がある訳ない。

俺がしている事は、己が曲げた道を戻そうと足掻いているだけ。

今回の話だって、元々は穂乃果達がことりを救ってくれた。



俺が何もしなくても、ことりはμ sの言葉で吹っ切れたはず。

俺がしたのはただの真似事。誰にでもできる薄っぺらい言葉。

……ああ、気持ち悪い。物語に縛られてしまう自分の情けなさが。

知識がなければ何もできない自身の愚かさが。

表面上だけの中身がなんにもない己の滑稽さが――

「本当に、吐き気がする」

「朝陽ちゃん？」

「いや、なんでもない。それより、そろそろ戻ろうか。皆も心配してるだろうし」

「待って！」

いつもの笑みを浮かべ、ことりを離そうとした。

しかし、真剣な面立ちのことりに引き寄せられ、俺達は再び抱き合う格好になる。

「ことり？」

「朝陽ちゃん、辛そうな顔をしてる。悩みがあるなら聞くとよ？ 私の事を聞いてくれた

みたい」

「悩み？ 私に悩みなんてないさ」

「嘘。朝陽ちゃんが悩んでるのはわかるよ。だから本当の事を話して、ね？」

耳元で甘く誘惑してくることりの声。

……話したい。相談したい。縫りたい。何もかもぶちまけたい。

でも、駄目だ。俺個人の問題に巻き込む訳にはいかないし、何よりこんな荒唐無稽な話を信じるはずがないだろう。

理性ではそう考えているのに、そう思っているのに……

「ことりが言うように、私は凄くないんだ。皆のように輝いていないし、誰かのために頑張ってもいい。私が何もしなくても、sは大丈夫で、むしろ私がいる事でややこしくなっていて。それに、ことり達が知らないだけで私は中身が空っぽだし、何より私は本来いては——」

はっと意識を戻すと、ことりは困惑気味に目を瞬かせていた。

「朝陽ちゃん……?」

「——つて、夢を見たんだ。なんていうか、悪夢に近いのかな。そう誰かが囁いてくる夢を」

ことりから離れて立ち上がり、背を向けてそう告げた。

今の自分の顔を、彼女には見せられないと思っただから。

きつと、今は酷く澱んだ暗い瞳をしているだろう。

だから数瞬目を瞑り、思考をリセットして笑みを張りつける。

「朝陽ちゃんに変な風に考えすぎだと思ふなあ。夢は夢だから、難しく考えなくてもいい

いと思うよ?」

「うん、そうだね。ことりに話したら気分が晴れたかな。私はもう平気だから、早く穂乃果達の所に戻ろう?」

「……はい」

「どうやら、上手くことりを誤魔化す事に成功したらしい。」

「明るい声色で返事をした彼女は、柔らかい表情で俺の隣に並ぶ。」

「その際、俺達の距離が心なしに縮んだような気がする。」

「肩と肩が触れ合う距離で歩いていると、不意にことりは一歩前へと踏み出す。」

「ことり?」

「改めて、朝陽ちゃんに言っておこうと思って——話を聞いてくれて、ありがとう」

「後ろで手を組み、下から覗き込むように首を傾げ。」

「たおやかに微笑み、ことりはそう告げた。」

「穏やかな風が彼女の髪を撫で、ことりから柔らかい香りが漂ってくる。」

「対して、俺も笑顔を返して口を開く。」

「何かあったらまた相談してきて」

「うん、朝陽ちゃんを頼りにしてるね? じゃあ、早く行こっ!」

「ちよ、ちよっ」

一つ頷いたことは、俺の手を取って駆けだす。

慌てて歩幅を合わせながら、俺は内心で安堵の息をついていた。

とりあえず、ことりの表情からは思いつめた様子は見えない。

ある程度吹っ切れたのか、はたまた俺が内心を見抜けなかったのか。

ともかく、一応及第点は超えたと思う……いや、思いたい。

楽しげなことを目に入れつつ、改めて俺は、sを気にかける事を決意するのだ  
た。

## 第三十四話 リーダー議論

「——私、髪を結ぶ事でスイッチが入るんです」

部室に戻ってきた俺達の視界に入ったのは、下ろした髪を撫でているにこ先輩だった。

憂いを帯びた表情を浮かべており、どことなく色つぼい雰囲気が漂っている。

対して、同室にいる穂乃果達は感心した様子で頷く。

「おー、流石にこ先輩だね」

「確かに、そういう自己暗示をする人がいるとは聞いた事あります。まさか、にこ先輩がそうだったとは思いませんでした」

「その凶太さは凜も見習いたい！」

「ふむふむ！ 参考になりますっ！」

目をキラキラさせてペンを走らせている花陽は置いておいて。

一体、これはどういう状況なのだろうか？

いやまあ、にこ先輩の態度を見ればなんとなく予想はつくが。

ことりも察したのか、苦笑いをしているし。

「と、このように普段から猫を被るのもアイドルに必要な事なのだろう」  
「ちよつと希！ 猫を被るつてどういう事よ！」

「どういう事と言われても、本当のここちを教えただけやん？」

「本当のここは大人の色気がある……コホン。全く、希つたら変な事を言いだして。私はいつてもこのような感じなんですよ？」

あ、まだ続ける気なんだ。

困つたように微笑むにこ先輩を尻目に、俺達は穂乃果の元へ近づいていく。

「で、どういう状況かな？」

「おかえりー。えーつと、部活動の生徒の素顔に迫る感じで撮影したくて」

「にこ先輩がいつものをやろうとしたのですが、当然却下されました」

「その結果、あの猫被りがでたつて感じね」

「そこ、聞こえてるわよ！」

呆れた口調で締めくくつた真姫に、にこ先輩が勢いよく指を突きつけた。

しかし、真姫は大して動じた様子も見せず、我関せずと髪の毛を弄っている。

にしても、髪を下ろしたにこ先輩か。

改めて観察してみると、普段とは違つた印象を受けて新鮮だ。

背中まである黒髪は艶があり、先ほどの憂いに満ちた瞳と凄く合っている。

正直、ギャップもあつてドキツとした俺はおかしくはないと思う。

「とりあえず、朝陽ちゃん達も帰つてきたし中庭で撮影しようよ!」

「穂乃果先輩にさんせーい!」

「ちよつと二人共……行つてしまいましたか」

「ま、ここで撮るよりはマシですよ。ほら、花陽もメモしてないで行くわよ」

「もう少しで新たな開拓ができる所なんですつ」

「全く……」

「朝陽ちゃん達も早くおいでな」

続々と部室を後にしていき、残るのは俺とことり、にこ先輩。

不服そうに眉を寄せている彼女に、ことりが声を掛ける。

「にこ先輩は行かないんですか?」

「行くけど、なんか納得がいけないというか」

「私は髪を下ろしたにこ先輩も良いと思いますよ」

「え、本当!」

喜色の笑みを浮かべたにこ先輩に対して、何故かことりは瞳に不満げな色を宿した。

「ふーん。朝陽ちゃんはその思つてたんだ」

「どうしたんだい、ことり?」

「別にー。さつきはあんなに激しくしてくれたのに、ことりよりにご先輩に夢中なんだなーって」

「激しっ!?!」

「は、はあ?!」

ちよ、ちよつと何を言っているのですかことりさん!?

激しくって、ただ俺はことりの悩みをなんとかしたいと思っただけなのだが。

それがどうして誤解を招くような発言に変わっているのだ。

実際、何か良からぬ事を想像でもしたのか、にご先輩は顔を真っ赤にしているし。

「ああああんた達ー！ ア、アイドルに恋愛はご法度なのよ！ し、しかも女の子同士なんて不健全にもほどがあるわ！ これはアイドル研究部の部長としてしつかりと指導を

——

「やだなー、にご先輩。私は激しく抱き締めてもらったって言ったんですよ？」

「——へ？」

「ふふふ、駄目ですよ早とちりは」

素っ頓狂な声を上げたにご先輩へと、ことりにはにつこりと微笑んだ。

楽しげなその笑みには、Sっ気が混ざっているような。

いや、むしろSっ気しかないのでは。



何故、ことりがいきなりにこ先輩をからかおうと思つたのかはわからないが、人を弄れるほど精神的に余裕があるのなら良かった。

まあ、弄られるにこ先輩にとっては溜まったものではないだろうが。

「あ、あんたねえ……」

「恥ずかしがるにこ先輩、とつても可愛いかつたです」

「は、恥ずかしがつていないわ!」

「ふふふ」

「笑つていないで訂正しなさいよ。スーパーアイドルであるにこがこれしきの事で取り乱すわけないでしょ?」

「そういう事にしておきますね」

「だから——」

眉尻を上げて突つかかるにこ先輩と、笑みを浮かべてそれを躲すことり。

話しながら二人も去つていき、部屋には俺が一人取り残される。

なんとなく直ぐに追いかける気になれず、自分の席に座つてため息をつく。

「はあ……」

とりあえず、ある程度ことりに余裕はできたのだろう。

にこ先輩を弄る事が何よりの証左だと思つてから。

実際、今のことりからは一步踏み込んだ距離感を覚えた。

恐らく、何かしら自身の中で区切りがついた事で、 $\mu$  sのメンバーとより仲良くなるうと考えたのだろう。

それがSつ気だと言うのは、なんていうか腑に落ちないのだが。

「問題は、これからか」

鞆から取り出した物を口に含みながら、今後の展開を脳裏に描いていく。

現在、 $\mu$  sの知名度は加速度的に増している。

ホームページに新メンバーを記載した事で、一年生組にファンが着いたりしたのだ。

穂乃果達二年生組のファンも増しており、とりあえず $\mu$  sは順調と言ってもいいだろう。

対して、音ノ木坂そのものについては、あまり宜しくない。

スクールアイドルに興味はあるが、自分の入学を決めるほどではない。そのような感じと思われる。

つまり、絵里の負担や責任が軽減されていないという事だ。

「んくっ……経営に関しては、俺が口を出せる問題ではないんだよなあ」

ペットボトルの水で喉を潤した俺は、頭が痛い問題にため息を零した。

希先輩に素人ながらの分析結果を渡したとは言え、あんな物が役に立つとは考えられ

ない。ないよりはマシ程度が関の山だ。

「それに、これは絵里一人で抱え込む問題じゃない」

生徒会が首を突っ込む問題ではないはずなのだが、絵里の性格が見て見ぬ振りはできないのだろう。

以前、一度絵里の想いを再確認させた事があった。

あれ以降は焦りの感情が形を潜めたのだが、最近になって再び浮上してしまっている。

このままでは、絵里はμ、sと衝突したり過労で倒れてしまうかもしれない。

「……希先輩がいるから、μ、sは心配ないか」

携帯を取り出し、μ、sのグループチャットに行けない趣旨を送った。

返事を見ないでそれをポケットに仕舞い、鞆を持って立ち上がる。

俺にできる事は少ないが、せめて雑用だけでもしよう。

絵里の負担を少しでも減らすために。

「絵里は大丈夫だろうか……」

最近増えたため息にげんなりしつつ、絵里の元へ足を進めるのだった。

絵里の手伝いをした次の日。

俺の危惧した通り、絵里は一人で背負い込もうとしていた。

なんとか宥めたり雑用をしたり、疲れが溜まっていく絵里の肩を揉んだり。

お土産に絵里が好きチョコレートを渡した事もあるだろうが、昨日の彼女は終始和やかな雰囲気だった。

そんな廃校の危機がなければ、平和な昨日の一時。

改めて、絵里の生真面目さに内心で苦い思いをしたのは記憶に新しい。

もう少し肩の力を抜く事を覚えてくれれば……

「——会議を始めるわ」

その声を聞いて、俺は現実へと意識を引き戻した。

現在、俺はμ、sの皆と部室におり、暗い室内でこ先輩が重々しいポーズを取っている。

机の上で両手を組み、口許にそれを乗せているにこ先輩。

対して、俺達も背筋を伸ばして彼女の言葉を待っていた。

辺りに緊迫感が漂う中、にこ先輩は海未へと目を向ける。

「今回の議題を述べなさい」

「リーダーは誰が相応しいかですね」

「流石海未ね。完璧な対応よ」

「は、はあ。ありがとうございます？」

「凜、μ、sの内訳を述べなさい」

次に、にこ先輩は凜に尋ねる。

座ったまま見事な敬礼をした凜は、真面目臭い面立ちで口を開く。

「いえっさー！ μ、sは穂乃果先輩達二年生組が四人、凜達一年生組が三人、そしてに

こ先輩三年生組が一人です！」

「ご苦労ね、凜」

「こ、光栄でありますにや！」

感極まったような嘘泣きをする凜を尻目に、にこ先輩は立ち上がってホワイトボードに歩み寄る。

自然と集まる全員の視線を気にする様子も見せず、彼女は重々しく腕を組んで俺達を睥睨する。

「諸君！ 先日の希の言葉を思い出してほしい。彼女と一緒にPRを撮影した時、リー

ダーは誰なのかという問題が浮上した。そこで、私は疑問に思った。何故、私が入した時に考えなかったのだろうか、と」

そこで言葉を区切ったにこ先輩は、ホワイトボードをバンツと強く叩いた。

見事に半回転したそれを指差し、彼女は高らかに声を響かせていく。

「よって、私は議題を提示する事にした！ それはつまり、μ s のリーダーとは誰が相応しいかという事だ！」

言葉を締めくくり、こちらにドヤ顔を向けたにこ先輩。

対して、俺達は電気をつけたり、机に頬杖をついたり、思い思いに寛ぎはじめ。

「穂乃果ちゃん、お菓子食べる？」

「うん、食べる！」

「かよちーん、今日はラーメン屋に行こー」

「えっと、いいけど……いいのかな？」

「いいのよ、どうせ茶番だし」

「全く、部屋が暗いと目を悪くしますよ」

「ちよちよつと！ せつかくかつこよく決まってた所だったのに、これじゃあ駄目じゃない」

不満げな表情を浮かべるにこ先輩だったが、大丈夫。

あれをかつこいいと思つてゐるのは、にこ先輩以外ないから。

実際、海未や真姫などは白けた視線を向けているし。

「ぐぬぬ……ええい、ちゅーもーく！　まずはこれを見なさい！」

「えーつと……リーダーに必要なもの？」

首を傾げた穂乃果の言葉の通り、ホワイトボードには三つの事柄が記載されていた。

——誰よりも熱い情熱を持つて、皆を引っ張つていける事。

——精神的支柱になれるだけの懐の大きさを持った人である事。

——メンバーから尊敬される人である事。

「どうやら、にこ先輩はこの三つの内容がリーダーに必要なだと考えてゐるらしい。

「そもそも、にこが部長に就任した時点で考え直しておくべきだったのよ」

「私は穂乃果ちゃんのままが良いと思うけどなあ」

「いえ、今回の取材ではつきりしたでしょ？　この子にリーダーは向いていないって事が」

呆れた口調で答えたにこ先輩。

まあ、取材中の穂乃果は涎を垂らして眠つていたり、ニコニコとお菓子を食べたり、作詞をしている海未の応援をしたり、作曲をしている真姫を励ましたり……あれ？

確かに、穂乃果がリーダーらしい事をしてゐるかと思われたら、思わず首を傾げてし

まう。

俺以外にも思い当たる節はあるのか、各々がにこ先輩の言葉を聞いて目を逸らしているし。

「はむっ。今日もパンが美味しい！」

「……さて。これで、リーダーになるのに相応しいのはにこ——」

「凜は海未先輩がいいと思うにゃ」

「わ、私ですか？」

「まあ、海未はしつかりしてるからね」

幸せに満ちた顔でパンを頬張る穂乃果を尻目に、凜は海未を推薦した。

まさか自分が勧められると思つてなかつたようで、海未は驚いた様子で目を瞬かせている。

「だからね、海未よりはこの方が——」

「海未ちゃんやつてみない？」

「その、私には恥ずかしくて無理です。それに、穂乃果もリーダーじゃなくなるのは嫌だと思えますし」

「ふえ？ 穂乃果は別にリーダーじゃなくてもいいよ」

「ええっ!？」



パンを食べ終わった穂乃果がそう告げると、驚愕した表情で花陽が勢いよく立ち上がった。

彼女は机を強く叩き、視線を鋭くして穂乃果へと顔を近づけていく。

「穂乃果もいつて言っているし——」

「は、花陽ちゃん？」

「リーダーじゃなくなるという事は、センターじゃなくなるという事なんですよ!」

「でも、リーダーじゃなくてもμ'sの皆と一緒にでしょ？」

「それは、そうですけど」

「じゃあ、別にリーダーじゃなくてもいいかなー。それより、皆と一緒にの方が大事だし

！

「そ、そういうものなのかな……?」

朗らかな笑顔で答えた穂乃果を見て、花陽は戸惑い気味に席へと戻った。

まあ、アイドル好きな花陽からすれば、リーダーに執着しないのは不思議なのだろう。

「穂乃果がリーダーを辞めるなら、やっぱりここに——」

「じゃあ、やっぱり海未先輩がリーダー？」

「ですから、私にリーダーは向いていません」

「全く、面倒な人ね」

いや、真姫に言われたくはないと思うが。

むしろ、俗に言うツンデレで素直になれない真姫の方が、人によつては面倒なのでは……まあ、そこが真姫の魅力だけど。

「そもそも、リーダーというのはにこのような——」

「ことり先輩は？」

「うーん、ことりちゃんも副リーダーじゃない？」

「確かに、リーダーって感じじゃないわね」

「だったら、朝陽先輩はどうか？」

「私は踊らないからね。私がリーダーになるのは変だと思うよ？」

「じゃあ、やつぱり朝陽ちゃんも一緒に踊ろう！」

穂乃果が元気よくそう告げると、皆が期待の眼差しを送ってきた。

対して、俺は苦笑いを返して肩を竦める。

「だから、にこがリーダーになるのは当たり前——」

「前にも言ったけど、私がスクールアイドルになるのは無理さ」

「ええー！ いいじゃんいいじゃん！ やろうよおー！」

「すまない。これだけはどうしてもできない事なんだ」

「どうしても？」

「どうしても」

「……そっか」

申し訳ない表情を浮かべた俺を見て、穂乃果は残念そうに肩を落とした。

海未達も同じような行動をしており、辺りにどこか気まずい雰囲気は漂いはじめる。

すると、先ほどから自己主張をしていたにこ先輩が、おもむろに机を強く叩く。

「あんたら私の話を聞きなさいよっ！ ……仕方ないわね。こうなったら勝負で白黒はつきりつけましょう！」

「勝負？」

「そう、スクールアイドルらしい勝負よ。てことで、皆はにこに付いてきなさい」

不思議そうな面立ちの穂乃果達を尻目に、にこ先輩は意気揚々と部屋を出ていった。

とりあえず、俺達も彼女の後を付いていけばいいという事だろうか？

「よくわかりませんが、私達も行きましょうか」

「あ、私はちよつと用事が——」

「朝陽ちゃんも行くよね？」

「——え？」

「用事って、また朝陽ちゃん何か一人でしょうとしてるでしょ。最近、朝陽ちゃんは働きすぎ！ たまには休まなきゃ」

「そんな事はないと思うけど」

「ううん、そんな事あるよ。とにかく、今日は私達に付き合つて、ね？」

「……わかつた」

自分が必要ないと思つたので、絵里の手伝いをしようと考えたのだが。

何か勘でも働いたのか、ことりに捕まってしまう。

暫くの問答の末、ことりのお願いに折れる事となつた。

「ありがとう、朝陽ちゃん！ 皆も行っちゃつたし、早く行こつ」

絵里の事が心配なだけだ。

先ほどのことりの事も脳裏を過ぎり、本当に彼女がもう大丈夫か見ておきたい。

……今の笑顔から、問題はないと思つてはいるが。

ともかく、嬉しそうに微笑むことりに手を引かれ、俺も皆と行く事になるのだつた。

## 第三十五話 新たなリーダーの座は誰が手に？

「――まずはこれよ！」

にこ先輩に連れられた俺達は、現在カラオケ店にいた。

気合い十分な様子を見せるにこ先輩。どうやら、今からカラオケの点数でリーダーを決めるつもりなのだろうが。

皆は興味深そうに室内を見回しており、残念ながらにこ先輩の話聞いていない。

「カラオケ来るの久しぶりだなー」

「へえ、この店にはトマトジュースがあるのね」

「ラーメン屋に行けなかったから、ここで食べようかな」

「海未ちゃんは何を歌う？」

「カラオケはあまり好きでないんですが。そうですね、演歌はどうでしょうか？」

思いつきに寛ぎはじめる彼女達。

対して、にこ先輩は頬をひくつかせた後にため息をつく。

「あんたら緊張感なさすぎ……まあ、いいわ。今の内にマークしておいた曲を入れちゃおうっと。これでリーダーの座は貰った！」

クツクツクと邪悪な笑みを零したにこ先輩は、欲望ダダ漏れの内容を呟いた。

しかし、俺の呆れた視線に気が付いたのか、笑顔のまま固まる。

「にこ先輩……」

「ち、違うわよ？ あらかじめ高得点が出やすい曲を調べておいて、本番で良い点数を取ろうなんて思っていないわよ？」

「あの、自爆していますよ」

にこ先輩って、誤魔化し方が下手だからな。

前にも嘘をつく時挙動不審だったり、わかりやすいほど目を泳がせていたり。

というより、現時点でのμsのメンバーで嘘が上手い人が少ないと思う。

海未や凜に穂乃果は顔に出そうだし、そもそも花陽は嘘をつきそうにない。

この中だということが一番マシだろうが、彼女もメイドのやり取りで墓穴を掘っていた。

今はメンバーではない希先輩が、最も嘘をつくのが上手いだろうな。

そんな事を考えていると、にこ先輩が両手を合わせて頼み込んでくる。

「お願い！ 今日はこの先輩としての威厳を見せなきゃいけないの。だから、今のは見なかった事にしておいて」

「まあ、いいですけど」

「恩に着るわ！ ……さて、まずはどの曲を入れようかしら。やつぱり無難な曲から？」

「いやでも、初っ端から切り札を見せてプレッシャーをかけるのも——」

「一番、高坂穂乃果！ 歌います！」

「——ぬあんですって!？」

いつの間にか、穂乃果が曲を入れていたらしい。

愕然とした声を上げたにこ先輩を尻目に、彼女は楽しげに歌いはじめるのだった。

あれから、μ'sの皆は何曲か歌ったりしていき。

とりあえず、全員の最高得点が決定した。

全員が九十点以上で凄かったが、その中でも真姫と花陽が群を抜いて高得点だ。

なお、残念ながらにこ先輩が一位ではなかった。

「ぐぬぬ……こいつら上手すぎるわ」

「やつぱり、カラオケは楽しい！」

「ちゃんと歌が上手になって良かつた〜」

「かちゃんも真姫ちゃんも凄い！ 真姫ちゃんなんて、もう少して満点だったにや！」

「あ、ありがとう凜ちゃん。でも、凜ちゃんの歌も凄く良かつたよ？」

「ま、まあ当然でしょ？ 誰が、sの作曲をしていると思ってるの？」

澄ました口調に反して、真姫の口許はにやけていた。

頻りに髪の毛をクルクルしており、満更でもない様子だ。

対して、花陽は頬を赤らめながらも、凜を褒めていた。

まあ花陽の場合、自分が褒められる事に慣れていないのだろう。

「こうなったら、次のプランに移るべきね。次の対決でここがリーダーに相応しい所を見せてやるわよ」

「……そんなにリーダーになりたいんですか」

「ねえ、朝陽ちゃんは歌わないの？」

「私？」

真剣な表情で考え込むにこ先輩を見ていると、おもむろに穂乃果がそう尋ねてきた。

こことり達もそういえばといった様子で、俺の方に顔を向ける。

「私も朝陽ちゃんの歌が聴きたいな」

「せっかくですし、歌ってみてはどうでしょうか？」

「うーん、まあいいけど」

渋々と海未からマイクを受け取りながらも、内心では非常に緊張していた。

そもそも、俺は歌が得意ではない。



せいぜいが音痴ではない程度であり、決して誇れるような物ではないのだ。

ただ、*μs* のボイストレーニングを自分でもこつそりと毎日していたので、その成果を確かめる意味と考えれば良いかな。

「朝陽先輩がんばれー！」

「お手並み拝見といこうかしら」

「メモの準備はできていますー！」

凜達からの声援……声援？ 花陽のは違う気がする。

ともかく、皆から見つめられながら、俺は入力した曲を歌いはじめた。

声が震えないように意識して、なおかつ音程も外さないように。

真姫に習った通りに声を張り、皆から見つめられる事に緊張しつつ、滑らかに音を紡いでいく。

「へえ」

面白げな面立ちでこちらを見つめる真姫に、思わず俺は音程を外しかけてしまう。

ボイストレーニングをしていた身からすれば、俺の中で彼女は師匠なのだ。

そんな人から審査されるのは、正直心臓が悪い。

改めて曲に集中していき、やがて曲は佳境に入る。

歌に感情が乗るように、穂乃果達に伝わるように。

マイクを握る手に力を込め、最後まで意識して歌う。そして、俺は無事に歌い終える事ができたのだった。

「ふう……」

どうにか曲を歌い終え、思わず安堵の息をつく。

「おー！ 朝陽ちゃんも上手だったよー」

「はい、朝陽らしくて良かったですよ」

「あ、点数が出たね。八十六点だって」

「九十点以上にはならなかったか」

それも当然だろう。

穂乃果達のような高得点を取れるはずがない。

むしろ、八十六点も取った事が素直に驚嘆に値する。

「歌う時は音程が下がるのね。まあまあじゃない？」

「かっこいい声だったにゃー！」

「朝陽先輩に合うアイドル曲は……」

瞳を光らせて調べている花陽は置いておいて。

凜達にも褒められ、なんだか恥ずかしい。

まさかここまでベタ褒めされるとは想定していなかったので、思わず頬が熱くなつていく。

「あ、ありがとう」

「ふふふつ、朝陽ちゃんが照れてる〜」

「て、照れてない!」

「そんなにムキになると余計怪しいよ?」

楽しみに微笑むことに、俺は言葉に詰まって目を逸らした。

確かにことりが告げた通り、予想外の展開に照れている。

正直、中途半端な点数で微妙な雰囲気になるのかと思っていたが。

俺の予想に反して、穂乃果達は笑顔で拍手してくれた。

個人的には大満足の結果だ。

「くっ……ここにきてダークホースね」

「いやいや、私の一番点数が低いんですけど」

「甘いわっ! あんたの場合、伸び代が多そうでお断できないのよ」

「は、はあ」

何やらにこ先輩が俺に対抗意識を燃やしている。

μ s の雑用係である俺を意識しても、特に意味がないと思うのだが。それより、ライバルにするのなら真姫や花陽ではないだろうか。

そんな事を考えていると、考え込む様子で俯いていたことりが顔を上げる。

「朝陽ちゃん」

「ん？ どうしたんだい、ことり？」

「一緒に歌ってみない？」

「えっ？」

もしかして、デュエットというやつだろうか。

複数の人数で同じ曲を歌うという行為。

カラオケ自体来た事があまりないので、デュエットをした記憶はない。

ことりとデュエット……なんだろう。少し緊張してしまう。

「おお！ ことりちゃんいい事を考えたね！」

「朝陽先輩達二人で歌うの？」

「何を歌おうつか？」

「あれ、私とことりのデュエットは決定事項？」

思わず問いかけた俺に、ことりはにっこりと微笑む。

「もちろん」

「ことり先輩！ 二人に合う曲はこれなんかどうでしょうかっ！」

「ありがとう、花陽ちゃん。……うん、じゃあこれを歌ってみよ？ 朝陽ちゃんも知ってたよね、この曲」

「ま、まあ知っているけど。それより、デュエットをするのは——」

「なら安心だね。えいっ」

「——ちよちよちよつと！」

抗議の声を上げるのだが、ことりは暖簾に腕押し。

俺を引っ張って皆の前に移動する。

期待の眼差しを送ってくる $\mu$ sを尻目に、彼女は隣で小さく呟く。

「本当は、私も朝陽ちゃんとステージに立ちたかった」

「……えっ?」

「でも、朝陽ちゃんはどうしても駄目な理由があるんでしょ？ だから、せめて一緒に歌う楽しみだけを感じたくて」

思わずことりに顔を向けると、彼女は寂しげに微笑んでいた。

だがそれも数瞬の事で、直ぐに柔らかい笑みを浮かべ、俺の腕に自身の腕を絡める。

「こ、これで高得点が出たら立ち直れないわ」

「皆にことり達の歌を見せつけるぞ〜！」

「次は穂乃果ともやろー、朝陽ちゃん！」

「凜もやりたい！」

「二人共、はしやぎすぎですよ」

「少しは落ち着いたらどう？」

「頑張ってください！」

僅かに頬を引き攣らせているにこ先輩に、ワクワクした雰囲気醸し出す穂乃果達。対して、海未と真姫は呆れた様子で注意を促す。

花陽は拳を握って俺達を応援しており、どうやら歌わないという選択肢は取れなくなつたらしい。

「そろそろ、始まるよ」

「……うん。ことり」

「朝陽ちゃん？」

「ありがとう」

そう告げると、ことりは驚いたように目を見開く。

これは俺の正直な気持ちだ。

μ, s の皆と歌ったり踊ったりはできないと思つていたが、こうして擬似的にことりと歌う事ができる。

憧れた人とデュエット。嬉しくない訳がない。

である以上、改めてことりにお礼の言葉を告げたのだ。

そんな俺の思いが伝わったのではないだろうが、ことりは嬉しそうな笑顔で頷く。

「——どういたしまして」

直後に曲が始まり、俺達は音色を響かせていく。

俺から腕を離して甘く歌詞を紡いでいることりに、俺は内心で深く感謝しながら歌に集中するのだった。

あれから、μ、sの皆と一回ずつデュエットをした。

まるでμ、sと一緒にライブをしているかのような気持ち。

恥ずかしがる花陽と歌い、俺をリードしてくれた真姫に感謝し、元気に楽しむ穂乃果と笑い合い……。

他にも海未や凜、にこ先輩とも一緒に歌った。

俺にとって今日の思い出は、きつと忘れられない宝物になっただろう。

……皆とステージに立てたら、きつとこれ以上の充実感が――

「次はこれよー！」

にこ先輩の声を聞いて、俺は意識を現実に戻した。

現在、俺達はカラオケ店を後にしてゲームセンターへと赴いている。

どうやら、にこ先輩の目の前にあるダンスゲームの得点でリーダーの座を決めるらしい。

彼女の話を見目目に聞いている海未達を尻目に、俺は花陽とクレインゲームをしていた。

「これで……あ、や、やりました！ 取れました朝陽先輩っ！」

「お、やったじゃないか。このクツションが欲しかったんだよね？」

「はいっ」

手に入れた景品を胸に抱え、花陽は本当に嬉しそうに微笑んだ。

俺達が挑戦していたクレインゲームは、ARISEの絵が描かれたクツションだ。

このゲームセンター限定品のようで、これを狙うために花陽と遊んでいた。

「おおー！ ことりちゃんうまいー！」

「えへへ。私だってやればできるんですっ」



穂乃果達も隣でクレーンゲームをしており、ことりは自慢げに取ったぬいぐるみを見せてきた。

ふんすつ、と可愛らしいその仕草はことりらしい。

にしても、ことりはぬいぐるみが好きだよな。普通の女子高生なら好きなのかもしれないが。意外と真姫もぬいぐるみが好きだったたりして。

暫くワイワイと皆で盛り上がっていると。

「あんた達早く来なさい！ 全く、緊張感がなさすぎるのよ……あら。花陽、それでもしかして」

「あ、はい。あそこのクレーンゲームで取った景品です」

「ああつ!? 私が持っていないクッションもあるじゃない!」

ガラスにへばりついたにこ先輩は、思わずといった様子で財布を取り出した。

流れるような手つきで硬貨を投入し、鋭い目でクレーンのアームを睨みつける。

「にこ先輩。勝負はどうするんですか?」

「先にやってて。にこはやらなければならぬ事ができたから。よし、後はあの輪っかに引つかかれば……あ!? どうしてそこで落ちるのよ! もう一回——」

「とりあえず、先に始めてようか」

「そうだね」

再び硬貨を入れるにこ先輩を捨て置き、俺達は海未達の元へ向かう。

「あれ、にこ先輩は？」

「先にやっててだつてき。それで、誰からやるんだい？」

「じゃあ凜からやってみるー」

「難易度はこの長つたらしい変なのだつて」

「凜ちゃん頑張つて！」

「任せるにやー！」

それから、凜達はダンスゲームに挑戦していく。

ノートを手には彼女達の記録をメモしていておると、隣に意気消沈したにこ先輩が現れる。

「おかえりなさい。どうしました？」

「……察しなさい。で、記録はどうなの？ ま、あんた達はやった事ないだろうし？ カ

ラオケでは遅れを取ったけど、今回は私の勝ちね！」

「おー！ 海未ちゃんもAランク。穂乃果とお揃いだね」

「中々難しかったですね」

「……うっそお」

ハンドタオルで汗を拭いている海未が出した記録を見て、にこ先輩は口許をひくつか

せていた。

残念だけど、にこ先輩の悪巧みは失敗だろう。まあ彼女は普通に実力があるのだから、こんな手を使わなくても良いと思うが。

「ちなみに、一位は凜のAAですね」

「あ、にこ先輩！ 凜じゃトリプルAを取れなかったんで、代わりに取ってください！」  
「穂乃果もにこ先輩の得点が楽しみです！ さつきやった事あるって言っていたし、穂乃果達より凄い点数を取れそうだよね！」

「頑張ってくださいっ！」

キラキラとした眼差しを送る凜に穂乃果に、花陽。

「ほ、穂乃果？ あまりハードルを上げるのはいけませんよ？」

「あはは……」

「ま、自業自得ね」

対して、海未達はにこ先輩の魂胆を見抜いていたのか、フォローをしたり苦笑いをしたりしている。

「どうするんです？ そもそも、にこ先輩はトリプルAを取った事あるんですか？」

「一度だけあるけど……」

「一回だけじゃ、トリプルAは無理そうですね。素直に穂乃果達にトリプルAは取れな

いと言った方がいいのでは？」

俺の問いに、にこ先輩は顎に手を添えて暫し悩む素振りを見せる。

やがて、彼女は咳払いを落として。

「コホン。後輩達に無様な姿は見せられないわ。だから、ぶつつけ本番でトリプルAを取ってやろうじゃない！」

「声が震えていますよ、にこ先輩」

「う、うるさいわね！」

しかし、このままだのにこ先輩がトリプルAを取れない可能性の方が高い。

トリプルAを取るには、一番高い難易度を殆ど完璧にやらなければならないのだ。

となると……よし。

「にこ先輩。もし、貴女がトリプルAを取る事ができたら、貴女が取り逃したクレーンゲームの商品を私が取ってあげます」

「え、本当!? 朝陽があの商品を取ってくれるの!？」

「はい。ですから、後輩達に格好良い姿を見せてくださいね?」

「よーっし、にこに任せなさい! ……今の内にクレーンゲームの所に行つてなさい。私も直ぐに追いつくから」

不敵な笑みを浮かべたにこ先輩は、重苦しい威圧感を漂わせて足を進めていく。

その変化を感じ取ったのか、穂乃果達は目を見開いて自然と道を開ける。  
やがて、にこ先輩は筐体の元へたどり着き。

「にこ先輩……？」

「あんた達に見せてあげるわ。アイドルとはなんなのかをね」

準備運動を始めたにこ先輩を見て、穂乃果達は不思議そうに首を傾げた。

まあ、気持ちはわかる。たかがダンスゲームに気合いを入れすぎだからな。

花陽だけは目を輝かせてにこ先輩を見ているが。

ともかく、あの様子ならトリプルAのスコアを叩きだすかもしれない。

「さて、にこ先輩のために一肌脱ぎますか」

思わず苦笑いを漏らしつつ、俺はクレインゲームの元へ向かうのだった。

## 第三十六話 小さな亀裂

「最後はこれよ」

俺が手に入れたクッションを抱えたにこ先輩は、口許をにやけさせながらそう告げた。

現在、俺達は秋葉原の駅前におり、どうやらこれからチラシ配りをするらしい。

なんでもリーダーとして必要なオーラがあるのなら、チラシ配りを素早く終わらせられるであろうとか。

にしても、先ほどからにこ先輩は随分と嬉しそうだ。

結局、あの時の宣言通りにトリプルAを取ったので、お小遣いを溶かして手に入れたクッションを渡したのだ。

……今月のお小遣いはどうするかなあ。

「またチラシ配りですか？」

「凄く嫌そうな顔をしているね、海未は」

「はい。正直、リーダーの座をかけた挑戦権は要らないので、もう辞退したいです。こ、こんな人が沢山いる所でチラシ配りなんてできるわけがありませんし」

「大丈夫だよ、海未ちゃん。この前のリベンジだと思つて。ファイトだよ！」

ニコニコとガッツポーズをした穂乃果を見て、海未はそれはもう盛大にため息をついた。

「わかつてます。今後大勢でライブをする時が来るかもしれませんが、ここで躓くわけにはいかないでしょう。……本当は、今すぐ家に帰りたいのですが」

「と、いう事で。朝陽、あれを出しなさい」

「はい、どうぞ」

あらかじめ持つてきておいた、俺とに先輩合作の $\mu$ sのチラシ。

デフォルメされた可愛らしい $\mu$ sの絵や、ホームページサイトに繋がるアドレスなど。わかりやすく $\mu$ sについてまとめたのだ。結構上手くできた自信がある一品である。

ともかく、俺にクッションを預けたに先輩は、そのチラシを穂乃果達に配りながら口を開く。

「いい？ 歌も下手、ダンスも駄目。でも目が離せない。そんなアイドルが中にはいるわ。何故目が離せないのか……それはずばり、オーラよ！ 見ていると応援したくなる不思議な魅力を持つアイドル。それを調べる事が今回の主旨よ」

「あ、なんかそれわかりますっ！ 不思議と応援したくなるんですね」

「わかってくれたのなら話は早いわ。私達の中で誰が一番オーラがあるか。このチラシ配りをする事でわかるはずだわ」

「わかるとは思えないんだけど」

バツサリと切る真姫の言葉を聞いて、ここ先輩はやれやれと肩を竦めた。

どこか腹立たしいその態度に、真姫は頬をひくつかせている。

「全く、わかってないわねえ。いい？ チラシを自然と受け取らせる。そんな事ができるのは、オーラがあるアイドルだけよ！」

「そういうものなの？」

「そういうものなのよ。とにかく、今から一時間でチラシをどれぐらい配れるかの競争ね。という事で、よーいスタート！」

ここ先輩の合図を皮切りに、μ'sの皆はバラバラにチラシ配りを始めた。

対して、俺はノートを手にその様子を眺める。

「お、お願いします……」

「あ、あの、これを、その」

海未と花陽は恥ずかしいのか、頬を赤らめながら苦戦していた。

上手く声を出せず、通行人に見てもらえない。しかしなんとか受け取ってもらえたら、ぱあっと顔を輝かせる。



そんなどこか可愛らしい二人の仕草を見て、通行人達が海未達の元へ集まっっていく。見ている限りだと、海未達に大きな問題はなさそうだな。

「よろしくお願いしまーす!」

「しまーす!」

穂乃果と凜は元気な掛け声で、通行人達にチラシを配っていた。

天真爛漫な笑顔で人を惹きつけ、予想以上のスピードで捌いていく。

穂乃果達なら大丈夫だと思っていたが、やはり俺の考えは間違っっていなかったか。

「お願いします……ふう」

「にっこにっこにー! 皆のアイドルのにっこに——ちよ、ちよと待ってくださいー!」

意外と真面目にチラシを配っている真姫。この中では無難なペースと言えるだろう。

対して、にこ先輩は例のポーズをしているせいか、通行人達が明らかに引いた様子で逃げていく。

……にこ先輩らしいというか、ある意味美味しい位置取りというか。

「ありがとうございま〜す」

そして、本命であることり。

流石ことりと言うべきだろう。その柔らかな雰囲気と愛らしい微笑みに、通行人達は花に群がる蜂のように引き寄せられていた。

さり気ない仕草で内容の説明をしていき、*μ* *s* の印象を植えつけた上でチラシを渡す。

恐らく、ことりから受け取った人達は *μ* *s* のファンになっただろう。主にことりの。

「それは例のアレをしていたから?」

「ふう……あ、朝陽ちゃん。うん、そうだよ。結構チラシ配りとかをしていたから、それで慣れちゃったというのものもあるかな」

「なるほど。……ことりのアレ、見てみたくなってきたよ。今度見にいつてもいい?」

「ええ!? それはちよつと恥ずかしいよお」

ことりは照れくさそうに頬を赤らめ、目を逸らした。

残念ながら、俺に見られるのは恥ずかしいらしい。ことりのメイド服姿や働いている様子を見てみたかったな。

まあ、いつかは見られるだろうし、その時まで楽しみにしておこう。

「おー、ことりちゃん全部なくなってる!」

「意外でした。ことりにそのような特技があったとは」

「あはは。気づいたらなくなっちゃってたんだ」

ことりのチラシが全て捌かれ、それを知った穂乃果達が感心した声を上げた。

真姫達も俺達の元へ駆け寄り、皆でこたりを褒めている。

賞賛の嵐に珍しくわかりやすく照れているこたりを尻目に、俺はチラシを手に持ったまま固まるにこ先輩に近づく。

「それで、にこ先輩はどうでしたか？」

「……朝陽。時代が変わったのね」

「いきなり何をのたまっているんですか？」

呆れた表情を向けた俺に、にこ先輩はやるせない様子で俯く。

堪えるように肩を震わせ、次に天を仰ぐ。そして寂しげに目を細めて。

「私がチラシ配りのバイトをしていた時と反応が違うの。だからきつと、今は昔のような配り方じゃ貰ってくれないのね。悲しいわ……こうして、また一つの時代が終わった」

「はい。にこ先輩の結果はチラシ五枚ですね。じゃあ、帰りましょうか」

「ちよつとお！ せつかくノスタルジックな雰囲気を出していたんだから、そこは暖かく見守りなさいよ！」

「みんなー。一旦学校に戻るよー」

「話を聞きなさいーい！」

背後から聴こえてくる抗議の声を無視して、俺は穂乃果達の元へ駆け寄るのだった。

「——さて。無事に全ての勝負が終わったわけだけど」

部屋に戻ってきた俺達。

ここに先輩が告げた通り、μ、sは三つの工程を終わらせた。

で、机に置かれたノートにその結果が書いてあるのだが……

「飛び抜けて優れている人がいないわね」

「ダンスの得点が低めの花陽は歌の点数が高いですし、歌の点数が低めのことりはチラシ配りが断トツで一位です」

「みんな同じぐらいなのかな？」

結局、首を傾げた穂乃果の言葉に要約されてしまう。

リーダーに相応しいほど優れた人はいないが、代わりに全員が高水準でまとまっている。まあ逆説的に考えると、μ、sの全員がリーダーに相応しいという事だろうな。

「にこ先輩も流石です！ 一番最後にμ sに入ったのに、もう皆と同じぐらいの点数になるなんて！」

「ま、まあ。にこは三年生だし？ これぐらいチョロいわよ」

「全然練習もしてなかったのに凄いにや！」

「うっ！」

無垢な笑顔の凜の言葉を聞いて、にこ先輩は辛そうに胸を抑えた。

凜の目線からすれば、にこ先輩は短時間で自分達と肩を並べている事になる。

しかし、にこ先輩の目線では独りだったとは言え、二年間を掛けて凜達と同じ技量しかない事になる。

改めてそれを突きつけられ、内心で傷ついたのでろう。しかも、小賢しい手を使っての同点数。

まあ正直、独学でここまで技術を伸ばした事が凄いとは思うが。独りだといずれ限界が訪れてしまうだろうし。

「それで、結局リーダーは誰になるの？」

「やっぱり上級生の方がリーダーの方が……」

「ま、ここまで拮抗するなら仕方ないわ。μ sの中で一番上級生の！ もっとも歳上のにこがリーダーになってあげても——」

「凜は海未先輩を推すよ！」

「私は誰でもいいわ。興味ないし」

「——どうしてそうなるのかしら……あんだ達ブレなさすぎよ」

頬を緩めたにこ先輩の言葉を遮り、凜は海未を推薦した。

また、真姫は退屈そうに頬杖をついていて、にこ先輩の言葉を無視している。

そんな彼女達の様子に、にこ先輩は目元をひくつかせてため息をつく。

「わ、私は無理ですって！ やはり、ここはことりがリーダーになりましょう！」

「私はリーダーに向いてないよお。穂乃果ちゃんがりリーダーでいいんじゃないかな？」

「あ、あのお。にこ先輩がりリーダーじゃ駄目なんですか？」

「ナイスよ花陽！ そう、やっぱりにこがりリーダーになるべき——」

「えー。にこ先輩より海未先輩がいいにや」

「——ねえ。私、泣いていい？」

涙目になるにこ先輩を含め、ワイワイとリーダー議論を交わしていく。s。

徐々に盛り上がっている中、先ほどから黙っていた穂乃果が不意に呟く。

「思うんだけど、リーダーはいなくてもいいんじゃないかな？」

あつけらかんとしたその言葉に、穂乃果以外の人は目を大きく見開いた。

特に花陽とにこ先輩はその動きが顕著で、口も半開きにして酷く驚愕した様子だ。

誰もが二の句を告げないようなので、代表して傍観者の立場の俺が穂乃果に尋ねる。「それはどういう意味なんだい?」

「だって、リーダーがいなくても皆は一緒でしょ? 歌の練習とかもリーダーを意識してたわけじゃないし」

「それは、そうですか」

「リーダーがいなくてグルーブなんて聞いた事ないわよ?」

戸惑い気味に言葉を滑らせる海未に、腕を組んで瞳に困惑の色を宿したにこ先輩。

他の面々も疑問等の感情を見せており、穂乃果の話を測れないでいるようだ。

にこ先輩の言う通り、リーダーがいなくてグルーブなんて聞いた事がない。

アイドルに限らずグルーブを組むなら、普通は誰かしら上に立つ者がいる。

リーダーと呼ばれるその人を中心として、その他のメンバーはまとまるのだ。

しかし、穂乃果はグルーブの核とも言えるリーダーはいなくても良いと言う。グルーブのまとまりがバラけてしまう可能性もあるのに。

それにリーダーがいなくてという事は、もう一つ重大な問題があり……

「リーダーがいなくて、誰がセンターになるの? センターって、普通リーダーがするものでしょ?」

「そうですっ! センターがないアイドルなんて、お茶碗に盛られていないご飯ぐらい

ありえないですっ!」

「そ、その例えはちよつとわからないかな」

「だったら、皆で歌うつてのはどうかな?」

『皆で歌う?』

異口同音で尋ねた $\mu$  sの面々を見回し、穂乃果は朗らかに笑う。

「うん。家でアイドルの動画を見ていて思ったんだ。皆がセンターになって順番に歌えたら素敵だなーって。皆が主役の歌を創れないかなって」

その言葉を聞いて、作詞担当の海未は顎に手を添えて思案する素振りを見せる。

また、作曲担当の真姫も髪を触りながら記憶を掘り返すように虚空を眺める。

「そう、ですね。可能か不可能かで言うなら、不可能ではないと思います。初めての試みなので、可能と断言はできませんが」

「私も考えてみたけど、そういう曲もなくはないわね。多分、できなくはないと思うわよ」

二人からの手応えを感じたのか、穂乃果は笑顔のままこつと視線を転じた。

「ダンスの方も大丈夫かな?」

「う〜ん……うん。今は七人いるし、できると思うよ。だよ、朝陽ちゃん?」

「そうだね。七人もいれば一人一人が主役の歌や振りつけも創れると思う」



「じゃあ決定だね！ 次の曲は皆がセンターだよ！」

既存の枠組みに捕われず、誰よりも自由に突き進む。誰もが思いつかないような考えを見せつけ、躓いてしまう人達を引っ張っていく。

こんな事ができるのは、穂乃果しかない。

だからこそ、皆は穂乃果という太陽に照らされ、暖かみに包まれる事で惹かれるのだろう。

実際、先ほどまで揉めていた皆は、どこか眩しそうに穂乃果を見つめているのだから。

「しよーがないわねえ。いい？ 私のパートはカッコよくしなさいよ？」

「いつも穂乃果は突拍子のない事を思いつきますね」

「だけど、それが穂乃果ちゃんらしいでしょ？」

「全く、変な事を考えるわね」

「皆がセンター……とつても素敵だと思えますっ」

「凄く楽しそうな曲になりそうだねにゃー」

漏らした眩きの内容はそれぞれ違ったが、全員の面立ちは同じで穏やかだった。

「よーっし。次の曲のコンセプトが決まった事だし、早速練習にいこー！」

穂乃果は拳を振り上げ、一足先に部室を退室していった。

残った俺達も席を立ち上がりながら、言葉を交えていく。

「でも、本当にリーダーはなくていいのかなあ？」

「それなら大丈夫ですよ」

「不本意だけど、彼女しかいないでしょ」

「ま、穂乃果から初めたグループだし、妥当と言えば妥当なのかもね」

部室を後にしていた俺達は、階段を登る。

途中で肩を竦めたにこ先輩がそう告げ、上から俺達を手招きしている穂乃果に目を向ける。

「早く早くー！」

屋上の扉の窓から降り注ぐ光。

穂乃果と一緒に埃が照らされ、彼女の笑顔を中心にキラキラと煌めく。

本来なら汚いはずのその輝きは、何故か幻想的に映った。

「朝陽ちゃん？」

「ん？ どうしたんだい？」

「ううん。なんか凄く楽しそうに笑ってたから」

ことりに言われて、自分が無意識に微笑んでいた事に気が付く。

どうやら、穂乃果の凄さを再認識している間に笑っていたらしい。

頬を緩めたまま、俺はことりから穂乃果に視線を転じる。

「やっぱり、穂乃果は凄くなって思ってたね」

「うん。穂乃果ちゃんは本当に凄い。私達を引っ張ってくれて、見ているだけで元気を貰えて」

「ほらほらー！ 早くおいでよー！」

急かされるように告げられ、俺とことりは思わず顔を見合わず。

数瞬して今度は笑みを零し合い、足早に階段を登っていく。

「……いつか、絵里もあんな風に笑ってくれるだろうか」

「朝陽ちゃん？」

「ん、なんでもない」

首を横に振った後、俺は最近笑わなくなった絵里を思い、内心でため息をつくのだった。

——これからのSomeday。

皆がセンターというコンセプトで創られた曲だ。

無事にPV撮影が終わり、現在俺は撮影に使った校舎の後片付けをしていた。

撮影直後の穂乃果達は疲れていると思ったので、理事長に頼んで貸切にした校舎の飾りつけは、俺一人で行うのかしようと考えたのだ。

「それにしても、良かったな」

ダンボール箱に飾りを詰めながら、今日のPVを思い出す。

皆が一人一人歌う場面があり、最後に集まって踊る。

服装も可愛らしく、終始にやけっぱなしだった。

生で見るμ'sのPVは、本当に最高だ。

そんな事を考えていると、不意に近くにあった扉が開く。

「あっ……」

「絵里？　そういうえば、ここは生徒会室だったっけ」

恐らく、ずっと中に籠っていたのだろう。

今回のPVでは生徒会室の中まで使わなかったのだから、それで気が付かなかったのか。

ともかく、脚立から降りて絵里に挨拶をしようとするのだが、何故か彼女の表情が強ばっていた。

「……………」

「μ、sのPV撮影だよ。一応、生徒の皆にも説明していたはずだけど」

「そう、だったわね」

「それより、大丈夫？ 顔色が悪いけど……」

心配になって駆け寄ると、絵里は顔を歪めた。そして俺から後ずさり、顔を背ける。

「え、絵里？」

「ごめんなさい。私はもう行くわね。さようなら」

「あつ……」

思わず手を伸ばすも、当然絵里には届かず。早口でそう告げた絵里は、足早にこの場を去っていった。

拒絶感が滲みでる唐突なその様子に、俺は痛みで胸を抑える。

今の絵里……一度も俺と目を合わせてくれなかった。

どうして、そんな態度を取ったのか。

いや、わかつている。今の絵里からは本当に余裕を感じられない。

それなのに、μ、sと一緒にいる俺を許せなかったのだろう。

自分はこんなに頑張っているのに、俺だけ楽しくPVなんて撮るなんて、と。

「ふう……ふう……いつかはわかっていた事だ」

過呼吸気味になる息を整え、自身に言い聞かせる。

絵里がμ sに加入するまで、対立するのは知っていた事だ。

だから、μ s側にいる俺も良い顔されないのもわかっていた。

……でも、やっぱり現実を突きつけられると辛い。

「大丈夫。きつと、μ sに入ってくれば絵里とも仲直りできるはず」  
零れそうになる涙を拭いつつ、俺は後片付けの再開をするのだった。

## 第三十七話 目指せ、赤点回避!

μ, s の P V を撮影した日から月日が流れ。

季節も移り変わり、生徒達も夏服を着るようになったある日の事。

部室でいつものように全員が揃うのを待っていた俺達。

思い思いに作業をしていると、唐突に扉が勢いよく開かれる。

自然とこの場にいる人達の視線が集まる中、入ってきた花陽は肩で大きく息をした後。

「大変! 大変なんですっ!」

「大変って何が?」

「ラ、ラ、ラ……」

「ラ?」

首を傾げた穂乃果を、花陽はクワツと開いた目で射抜く。

「ラブライブですよラブライブッ! ラブライブが開催されるんですっ!」

ああ、そういえば。そろそろラブライブの開催をμ, s が知る季節だったんだっけ。

穂乃果達μ, s にとって、この大会は非常に大事になるものになるだろう。

優勝すればもちろん、上位入賞でも音ノ木坂へと入学希望する人が激増するはず。

結果、音ノ木坂の廃校を阻止できるというわけだ。

つまり、この大会は $\mu$  s だけではなく、音ノ木坂の存続もかかった大事な存在なのだ。

「ラブライブ?」

「知らないんですか!? ラブライブとは簡単に言うとスクールアイドルの甲子園のようなもので——」

と、言いたい所なのだが。

現時点の $\mu$  sでは、ラブライブの優勝は夢のまた夢であろう。

出場できれば、上位入賞辺りまではいけるとは思っている。

しかし、そこまでだ。九人が揃っていない $\mu$  sでは、とてもではないがああA—R I S Eを下せない。

そう。希先輩と絵里の二人がいる $\mu$  sじゃなければ……

「——という事ですつ! はあ……まさに夢のイベントですう。いつチケットが発売するのかなあ」

「もしかして、花陽ちゃん見にくつもりなの?」

「当たり前ですつ! アイドル史に残る一大イベントなんですよ! 見逃せるわけない



じゃないですかっ!」

「あ、あはは……やっぱり、アイドルの話になると花陽ちゃんってキャラ変わるよね」  
「凜はこっちのかよちゃんも好きだけどにやー」

絵里……。

あれから、絵里と会うたびに気まずい空気が流れてしまう。

互いに目を合わせられず、ぎこちない仕草で会釈をする。

希先輩にも心配されてしまったが、これは仕方ない。

絵里の事にも半端で、μ's に対してもどこか煮え切らない態度で。

こんな中途半端な俺なのだ。絵里に嫌われてしまっても無理はない。

「えー? 穂乃果はてつきり、μ's も出場を目指して頑張る! みたいな事を言うの

かと思ってたんだけどな」

「ええっ!? そそそんな、私が出場するなんて恐れ多いです!」

「またキャラが変わってるわよ」

「凜はこのかよちゃんも大好きだにやー!」

それに、問題は絵里の事だけではない。

俺の記憶にある限り、そろそろテストの日が近づいていたはず。

知識の方では忘れてしまったが、普通に考えて赤点を取ると、μ's は出場停止を食

らってしまおうだろう。

今回の場合、穂乃果と凜にこそ先輩の三人。そして、ここ最近の成績が落ちている俺の四人が危ない。

……テストの事を、今まですっかりと記憶の彼方に飛ばしていた。

μ s や絵里の事にかかりつきりになっていたとはいえ、学生の本業である勉強を疎かにしてしまおうとは。

はあ……本当にどうしよう。

μ s そのものは順調であるが、俺の内心ではどんよりとした曇り空のようだ。

「ですが、スクールアイドルをしている以上、上を目指すのも悪くないではないでしょうか?」

「おお! 海未ちゃんが意外と乗り気!」

「ち、違いますよ! 私はまだ、廃校を阻止するためにラブライブに出場すれば良いと考えただけです」

「うんうん。ことりはちゃんとかわかってるよ? 海未ちゃんが可愛い服を着て踊りたいて事」

「全然わかっていないじゃないですか!? 今の発言からどうしてそのような発想に飛躍しているんですか!」

「全く……いい加減、海未先輩も慣れれば？ 何回もライブをしたんだし、これからだつてするんだから」

「あ、安心して。ちゃんと真姫ちゃんの分もとっても可愛くするからね？」

「ぐええ!？」

「あつ! ム、sの順位が上がってる!」

「えっ!?! どれどれ——」

……怖い。

もしかしたら、絵里がム、sに加入しても仲直りしてくれないかもしれない。

前のように雑談したり、休日に喫茶店へ寄ったり、笑顔で楽しみ合ったり。

また、俺に微笑んでくれなくなってしまうのだろうか。俺の記憶が戻った日の時のように、孤独を感じて独りになってしまふのだろうか。俺の記憶が戻った日の時のように、

僅かに震える身体を抱き締め、目を閉じて深呼吸していく。

大丈夫、大丈夫。誰も俺を置いていかない。見捨てない。独りにしない。俺が皆の力になつている間は、ちゃんと俺の事を……“雨宮朝陽”としてではなく、その奥の俺自身を——

「——朝陽ちゃん？」

「つ……な、なんだい？」

「何って、さつきから呼んでるのに朝陽ちゃんが返事をしなかったんでしょ？」

ふと気が付けば、ことりが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。

視線を巡らせると、他のメンバーも俺へと目を集めている。

咄嗟に笑みを張りつけ、なんでもない様子を装って立ち上がる。

「すまない。ちよつと、昨日のテレビを思い出していてね」

「あ、それってホラー特集の番組？ あれ怖かったよねー」

「そんなのがやってたんだ。知らなかったな。かよちゃんは？」

「私はここ先輩から借りたDVDを見ていたから」

よし。どうやら、皆の気を逸らす事に成功したらしい。

思い思いに言葉を交わしはじめた穂乃果達を尻目に、俺は扉の方へと向かう。

そんな俺の動きに目敏く気が付いたようで、背後からことりが声を掛けてくる。

「あれ、どこ行くの？」

「ちよつとお手洗いに。ことりはここ先輩にライブの事を説明しておいてね」

「わかったけど……本当に、朝陽ちゃん大丈夫？ さつきから顔色も悪いし、もしかして

具合でも悪いの？」

「平気さ。私の事は心配しなくても大丈夫。それより、ことり達はこれからの事を考え

なきゃね。じゃあ、後はよろしく」

「あ、朝陽ちゃん——」

一方的に告げると、さっさと部室を後にした。

瞬間、張りつけていた笑みが剥がれ落ち、思わず顔を歪ませる。

なんとかかことり達を誤魔化せはすだ。いつもの笑顔を作れたと思っっているし、あの瞬間ではことりも察しないだろう。

……こんな所で、余計な詮索をさせる訳にはいかない。

μ, sは絵里や廃校、そしてラブライブの事を考えているべきだ。

いつも通り、いつものように俺はμ, sを……絵里達の手伝いをする。

「そう。それでいい」

例え、絵里に嫌われていようと。これから、皆との仲が悪くなってしまうとしても。

俺がやるべき事は、常に変わらない。

μ, sの雑用を引き受け、廃校阻止の案をひねり出し、絵里達皆の未来が物語より悪くならないように足掻く。

そう考えると、なんとなく頭がスッキリしたような気がする。

無駄に悩まなくても良くなったというか、改めて目標を再認識できたというか。

「ふう……よし——」

頬を叩いて渴を入れた後、俺はトイレの方へ足を向けるのだった

「——あれ？」

トイレで所要を済ませた後。

部屋に戻った俺は、机の上で項垂れる穂乃果達の姿に、思わず首を傾げた。先ほどはラブライブに向け、随分と張り切っていた様子だったのだが。

「あ、おかえりなさい」

「遅かったけど、何かあったの？」

「あー、うん。ちよつとね。それより、穂乃果達は一体どうしたんだい？」  
「ああ、それですか」

表情に呆れの色を滲ませ、チラリと穂乃果達に目を向けた海未。

額に手を置き、苦笑いすることり達と一緒にため息を零して。

「朝陽がいない間に理事長室に行っただんですが」

「ラブライブの出場を認めてもらうためにね」

「生徒会長だと出場させてくれないかもって話になったんだ」

「それで、無事に出場の許可を得れそうな所まで行っただけです」

そこまで海未が告げた時、ガバリと顔を上げた穂乃果達が頭を抱える。

「勉強やりたくなあい!」

「テストなんて消えるにゃー!」

「学校滅びろ!」

表情を絶望一色に染めた三馬鹿を捨て置き、海未は疲れたように眉間を揉む。

「……つまり、次のテストで赤点を取らない事が出場の条件になったんです。で、この三人はテストに自信がないようで」

「ま、まあまあ。他の人は大丈夫そうだし、皆で穂乃果ちゃん達を教えよう? そうすれば、赤点回避もできるよ。ね、朝陽ちゃん?」

「……そ、そうだね」

フオローしようとしたのだろう。宥めるように水を向けることりだったが、サツと目を逸らした俺を見て、徐々に頬が引き攣っていく。

当然海未もその事に気が付き、まさかという表情を浮かべて。

「も、もしや。いえ、まさか朝陽に限って勉強を疎かにしているわけありませんよね?」

前回のテストではそれなりに上の順位でしたし」

「あ、あはは。当たり前じゃないか。ちやーんと予習復習はしているよ」  
「声、震えているわよ」

額から一筋の汗が伝う。

ジト目の真姫の言葉に、俺はぎこちない笑みを返す事しかできなかった。

確かに海未の言う通り、今までの俺はしっかりと高点数をキープしていた。

予習復習もしていたし、前世の記憶も相まって問題はなかったのだ。

しかし、*μ*、*s* 関連に時間を割いたり、いつも家で今後の展開に頭を悩ませたり。

最低限やるべき事以外は勉強に時間を絶やさなかつた結果、現在の俺は割と成績が落ちていると思う。

……いや、これも言い訳か。

勉強の時間を後回したのは、俺の意思。

である以上、成績が落ちたのも俺の責任となるべきだ。

「そんな……朝陽までが穂乃果達側に行つてしまふとは。どうしましょう。三人だけでも大変なのに、四人が増えてしまつたら誰かしらが赤点を取つてしまふかもしれません」

そんな事を考えている間に、海未は穂乃果達と一緒に頭を抱えていた。

暫くウンウンと唸り声を上げた後。



おもむろに顔を上げ、決意の表情を浮かべる。

「海未ちゃん?」

「私がなんとかしてみせます! これは、穂乃果の勉強嫌いを克服させられなかった私にも責任があります。ですから、皆の勉強を二十四時間私が見ます!」

「ええっ!?! なんて海未先輩が凜達の勉強を見るの!?!」

「そうよ。一年生なら、私と花陽が凜に勉強を教えるわよ?」

愕然とした声を上げた凜に、首を傾げた真姫。

ある意味当然な二人の言葉を聞いて、海未は何度か目を瞬かせてから頬を赤らめる。

「す、すみません。つい、気合いが入りすぎちゃいました!」

「よ、よかった。海未先輩に勉強を教えてもらわなくて。海未先輩が教えると鬼のようにな——」

「私が、なんですか?」

「——う、海未先輩って教えるのが鬼のように上手そうって言ったんです!」

突如として無表情に変わった海未に、凜は身体を震わせながらそう告げた。

目を向けられているのは凜ののだが、俺達の方まで異様な雰囲気伝わってくる。

現に、花陽は微妙に涙目になっているし。

暫く瞬き一つせずに凜を見つめていた海未は、やがて落ち込んだように肩を落とし

て。

「そんなに、私って怖そうですかね……」

「そんな事ないよ！ 海未ちゃんはとーっても可愛いから大丈夫！」

「そ、その。海未先輩はいつも私達に優しいから、怖くないと思いますっ」

「ことり……花陽……」

二人の言葉に、感激した様子で目を潤ませる海未。

傍から見れば感動的な光景なのだが、俺は素直に微笑ましいとは思えなかった。

その原因である、穂乃果へと目を向ける。

彼女は虚ろな目で自身の身体を抱き締めており、近寄るとブツブツと言葉が耳に入ってくる。

「——勉強怖い勉強怖い勉強怖い勉強怖い勉強怖い」

「い、一体海未は穂乃果にどんな勉強をしたのかな？」

「さあ？ 少なくとも、私は聞きたくないわね」

「やっぱり、海未先輩から勉強を教えてもらわなくて良かったにや」

しみじみといった様子で凜が頷いた瞬間、部室の扉が開かれた。

自然と全員の注目が集まり、開けた本人である希先輩が笑顔で手を振る。

「やっほー。お邪魔するよー」

「どうしたんですか、希先輩?」

「んーと、テスト勉強に皆が困ってると思ったんですよ。だから、ウチも手伝おうかと」

「それはありがたいんですが、迷惑じゃないでしょうか?」

「大丈夫。にこつちに教えるついでに、ウチもテスト勉強するから」

「まあ、せつかくだしお願いしたら? 私達じゃにこ先輩に教えられないだろうし、そも

そもにこ先輩も……うええ!」

にこ先輩の方に顔を向けた真姫が、素つ頓狂な声を上げた。

釣られて俺達もそちらに目を向けると、教科書を手にとって勉強しているにこ先輩がいたのだ。

先ほどまではテストに嘆いていたのに。一体どういう心境の変化だろうか。

揃って驚愕した表情を浮かべた俺達に、にこ先輩は顔を上げて不敵に微笑む。

「ふふん。私だつてやればできるのよ。だから、希の力なんて必要ないわ!」

「……にこつち。教科書が逆さまやん」

「うえつ!! ま、まあ? にこは教科書を逆さまに読むのが癖だから、これでいいの」

「……駄目そうですね。すみません、にこ先輩をお願いしても?」

「任せて!」

「ちよ、ちよつと! だから私一人でもなんとかなるつて——」

抗議の声を上げるにこそ先輩を見て、希先輩は手をワキワキさせながら呟きを一つ。

「うん、ワシワシしよっか」

「——思ってたんだけど！　どーしても希がにこと勉強したいって言うから、特別に一緒に勉強してあげるわ」

「顔色が真っ青ですよ、にこそ先輩」

「う、うるさいわね！」

とりあえず、にこそ先輩の事は希先輩に任せても良さそうだ。

穂乃果は海未とことりが、凜は真姫と花陽が面倒を見るだろう。

つまり、これで  $\mu$  s のテスト対策は万全。

……俺も、しっかりと勉強をしなければ。

自業自得とはいええ、テスト勉強をする事になった自身の迂闊さのため息を零しつつ。

涙目で逃げようとして海未に捕まった穂乃果を尻目に、俺も鞆から勉強道具を取り出すのだった。

## 第三十八話 広がる心の距離

あれから、海未の鬼指導のお蔭で瞬く間に学力を上げる穂乃果達——なんて事はなく、案の定テスト勉強は苦戦の日々だった。

穂乃果は眠気が頻繁に訪れ、凜は嘘をついて逃げようとする。

唯一にこ先輩は、最初にやられたワシワシのせいか、真面目に勉強に励んでいたが。

「ほら、穂乃果。ここが間違っていますよ」

「海未ちゃん……穂乃果、もう疲れたよ。眠ってもいいよね？」

「駄目です」

「海未ちゃんのいけずー！ 鬼ー！ 悪魔ー！」

バンバンと机を叩く穂乃果を見て、海未はそれはもう綺麗な笑みを浮かべた。

「ええ、ええ。私は鬼で悪魔で良心の欠片もない非道な人間です」

「う、海未ちゃん？ 穂乃果はそこまで言っていないよーな」

「ですから、私は血も涙もない選択をしますね。さあ、早く腕を動かさない。目を教科

書に向けなさい。どんどん脳を酷使しなさい！」

「ひえっ……海未ちゃんの目が怖い！」

怯えた表情で身体を震わせた穂乃果は、海未の言われるまま勉強を再開した。対して、ことりは俺の隣でペンを走らせている。

「うーん？」

「それはこの公式を使うんだよ」

「あ、本当だ。ありがとう、朝陽ちゃん」

「どういたしまして」

「……それにしても、朝陽は理解が早いですね。もう遅れた分を取り返したのではないですか？」

「まあ、ここ最近家で勉強しているしね」

感心したような海未に、俺は肩を竦めた。

このままではまずいと思い、栄養ドリンクを片手にずっとテスト勉強をしていたのだ。

最低限の睡眠時間を確保しているとはいえ、一日中勉強していたからか、少しばかり身体が怠い。

しかし、この程度は問題ない。μ、sの足を引っ張る訳にはいかないので、できるだけ早急に勉強内容を理解しなければならぬのだ。

結果、テスト当日まで無理なく勉強をすれば問題ない所まで追いついた。

「この分なら、朝陽は大丈夫そうですね」

「うん。だから、海未は穂乃果を頼んだよ」

「ええっ!? それはおーぼーだよ朝陽ちゃん! 穂乃果一人じゃ海未ちゃんの扱きに耐えられないってっ!」

「大丈夫です、穂乃果。ちゃんと気合いを入れて頑張りますから!」

「それは大丈夫って言わないよ! ほ、ほら。穂乃果より凜ちゃんにも教えた方がいいって」

凜も巻き込もうとしたのだろう。顔色を明るくして告げた穂乃果だったが。

当の本人は決して彼女と目を合わせず、花陽達に教えを乞っていた。

「真姫ちゃん、ここ教えて」

「凜ちゃん無視しないで! 穂乃果と一緒にこっちで勉強しよ?」

「り、凜ちゃん? 穂乃果先輩に呼ばれているよ?」

「あれは敵だにや。絶対に反応しちゃいけないの。わかった、かよちゃん?」

「今、こっち見たでしょ! 穂乃果を可哀想な目で見たでしょ!」

「——穂乃果?」

指をブンブン振るっていた穂乃果は、海未に肩を叩かれて固まる。

油の切れたロボットののような動きで、満面の笑みを浮かべている彼女に顔を向け。

瞳に諦観の色を宿して、肩を落とす。

「はい、大人しくやります」

「よろしい」

なんていうか、どここのコント？

いやまあ、穂乃果にとっては真剣な事だったのだろうが。傍から見れば、笑えるというかなんというか。

実際、今のやり取りを見ていた真姫は呆れた表情を浮かべているし。

内心で苦笑いしながら、頭では別の事を考えていく。

テスト勉強については、おおよそ問題はないだろう。

穂乃果達もなんだかんだ言っただけで学力が上がっているし、ラブライブの出場停止なんて事態は起こらないはず。

……問題は、絵里。

元々、 $\mu$ 、sのPVが終わったら直ぐにメンバーに勧誘するつもりだった。

わざわざ廃校ギリギリまで待つ必要がないし、こういうのは早いに越したことはないから。

しかし、あの時の出来事。

絵里に拒絶された日から、俺達の間で会話がなくなっていたのだ。



どうにかして話しかけたいのに、絵里は逃げるように俺から離れ。

希先輩からも心配されたが、こればかりはどうしようもない。

独りで重圧と戦っている絵里に対して、俺はμ sと仲良くしている。

どう考えても、俺に腹が立つだろう。

なんで私ばかり、どうして貴女は楽しそうなのって。

でも、もう時間がない。

μ sのクオリティを上げるためには、少しでも廃校阻止の確率を高めるためには。

テストが終わった直後辺りで、絵里達に加入して貰うのが望ましいだろう。

……今でも話しかけるのが怖い。また拒絶されてしまうのが恐ろしい。

震えそうになる身体を叱咤し、深呼吸をしていく。

俺の感情より、μ sの事情。結局、他の廃校阻止の案が思いつかなかった以上、やはり絵里には直ぐにでもμ sに入ってもらいたい。

そうと決まれば、即行動。今から絵里に頼みに行こう。

「あれ、朝陽ちゃん？ いきなり立ってどうしたの？」

「ちよつとお手洗いに」

「私も、これから部活動があるので。ことり、穂乃果がサボらないように見張っておいて

ください」

「わ、わかつてるよお」

部室を出た俺は海未と別れ、絵里の教室へと向かうのだった。

希先輩が言っていた通り、彼女はここで勉強をしていた。

誰もいない教室で、一人。真剣な表情で腕を動かしている。

暫し声を掛けるか悩んだが、頭を振って近寄っていく。

「絵里」

「つ……朝陽。何か用かしら？」

振り返った絵里は、僅かに息を呑んだ後。冷静な顔つきで、俺に促す。

いつものように笑顔を向けてくれない事に、思わず手が震えそうになる。

拳を強く握ってそれを抑え、できるだけ自然な笑みを浮かべて。

「実は、絵里に頼みがあつて来たんだ」

「私に？」

「うん、絵里に」

「……そう」

眩きを漏らし、目を伏せた絵里。

対して、俺は場に漂う嫌な雰囲気を不安に感じていた。

彼女との間には、以前までの暖かな空気がない。あるのは気まずさのみ。

喉はカラカラに渴き、大きく波打つ鼓動の音が耳を駆け抜ける。

ゆつくりと息を吐いてから、逃げそうになる足に力を入れて口を開く。

「あの、さ。無事にテストが終わった後、絵里には希先輩と一緒に、sへと入ってほし

いんだ」

「私、が？」

「そう。絵里が」

「……どうして？」

「私が入ってほしいと思ったから」

端的に返すと、絵里の瞳が僅かに揺れる。

唇を噛み締め、握っているペンからは嫌な音が響く。

だがそれも数瞬の事で、直後には何色も映さない空虚な瞳へと変わった。

「……………また、あの子のためなのね」

「えっ?」

「なんでもないわ。それで、μ s だったかしら。悪いけど、私は入るつもりないわ。ただでさえ時間がないというのに、スクールアイドルをしている暇なんてないの」

「で、でも! 絵里が入ってくれば、μ s が九人になって更に有名になるんだ! 彼女達なら、廃校だって阻止できるはずだよ!」

「何故、そんな根拠のない事が言えるのかしら? スクールアイドルが廃校を阻止する? いくらなんでも非現実的よ」

強く断言する絵里の表情は非常に冷たく、とても知り合いに向けるものではなかった。

ゴクリと唾を飲み込み、思わず身体を震え上がらせてしまう。

……怖い。今まで向けられた事のない表情が、凄く怖い。

やはり、絵里には余裕がなくなっている。

少し前までの彼女ならば、ここまでμ s を強く否定していなかった。

しかし、現在は心からμ s を……いや、俺に敵愾心を持っている。

きつと、廃校が決まるまでの時間が近づき、焦っているのだろう。

——私がなんとかしなければ。私以外に誰が廃校を阻止するんだ。μ s のように

遊ぶ暇なんてない。生徒会長である私が、ここが好きだと思っている私個人が、祖母の母校の音ノ木坂を守らなければ。

と、考えているのだろう。

前に俺が言った時、確かに絵里は自分の意思で廃校を止めたいと返してくれた。でも、今はその気持ちのせいで、絵里の心の焦燥に拍車をかけている。

自覚したからこそ、余計に責任や重圧を強く感じてしまう悪循環。

「絵里達が入れば、必ず廃校が阻止される！ 今だって、μ、sの評価がどんどん上がっていつてるんだ！」

「だから、私が入れと？ 馬鹿馬鹿しい。確かに朝陽の言う通り、今のμ、sは有名になっただけでいつているんでしょね」

「ならー！」

「でも、音ノ木坂の入学希望者は増えているの？ 廃校が阻止できそうな確かな実績を残せているの？」

「そ、それは……」

絵里の言葉に、俺は咄嗟に返事をする事ができなかつた。

μ、sが世間に認められている。それは間違いない。前にグッズ関係についての問い合わせが来た事がある。

そして、理事長と一緒に相談した結果、近い内に秋葉原のグッズショップに売られる事になったのだ。

着実に実績は積んでいる。しかし、音ノ木坂の廃校阻止までには行けていない。

もう少し、あと一步が足りないのだ。ネットの反応を探っていると、どうしても中学生を入学希望に踏み切らせる事ができていない。

だからこそ、絵里達がμsに加入すれば、そんな人達が音ノ木坂に来てくれる。そう俺は確信している。

ただ、実際に絵里の言う通りに現段階では、グッズが売れそうなスクールアイドルではない。

……絵里の言葉を反論できる実績はなかった。

「その様子じゃあ、期待できそうないわね」

「違う！ 確かに、今は入学希望者が来ていない。理事長にもそう聞かされたよ。でも、世間でμsはかなり注目されているんだ！ あと一押し、もう一つ何かがあれば廃校を阻止できる。そう、私は考えているよ」

「だから、それは確実に言える事なの？」

「言える！」

「っ！」

息を呑む絵里へと、強い眼差しを送る。

今までμ、sの側にいた俺だけが、音ノ木坂の事をいつも調べていた俺だからこそその断言。

μ、sに何か一つの……絵里達の加入というきっかけがあれば、必ず入学希望者は殺到するはずだ。

μ、sはそれだけの事はしてきたから。皆はそれほどの軌跡を描いてきたから。暫くジツと見つめていると、絵里は表情を歪ませる。

「……もう、時間が無い。恐らく、近い内に廃校までのカウントダウンが知らされると思う。だから、その前に少しでも早く絵里達に加入してもらって、μ、sを輝かせたいんだ！」

「……………いい」

「お願いだ。私達μ、sには、どうしても絵里の力が必要——」

「うるさいッ！」

「——えっ？」

キツと鋭く睨みつけてきた絵里は、机を強く叩きつけた。

思わず目を見開く俺を尻目に、彼女は唇を噛み締めて言い放つ。

「いつもμ、sμ、sμ、sμ、sって、なんなのよ！ 貴女にとって大事なのはμ、sで、私

はその付属品なわけ!？」

「い、いやそんな事は」

「そうじゃない! 貴女は何をするにしても、sを優先して、ちつとも私の事を見てないじゃない!」

「っ!」

「私だつて最初は期待したわよ! 色眼鏡なしで見たら彼女達は凄く頑張つてたから。でも、それじゃあ遅いの! 彼女達が世間に認められる時には、もう手遅れなのよ!」

「廃校になつちやうの! だったら、私が! 生徒会長の私が他の方法を考えるしかないじゃないっ! 彼女達が失敗してもいいように、私が誰よりも頑張らなきゃいけないのよッ!」

肩を大きく上下させて息を乱している絵里。

呼吸を整えた後、手早く荷物を纏めて立ち上がり、扉へと向かう。

「え、絵里……」

「ごめんなさい、少し取り乱したわ。……さつきも言つたけど、貴女達のグループに入る気はないから」

背を向けたままそう呟くと、絵里は教室を後にした。

呆然とその姿を見送っていた俺は、やがて自然と崩れ落ちる。



「絵里、泣いてた」

隣を横切る時、彼女の瞳は潤んでいた。今にも決壊しそうだった。

俺のせいだ。俺が、sばかり鼻負していたから、絵里の事を疎かにしたから。

彼女の気持ちに、押し殺していた感情に、見てほしかった本当の想いに気が付かなかった。

だからあの時も拒絶されて、今のように途中から名前でも呼んでくれなく——  
「うっ！」

咄嗟にポケットから取り出した袋に、こみ上げてきた不快感をぶちまける。

大量の胃液が吐きだされ、辺りに鼻を刺激する臭いが漂う。

暫くえすいた後、ポケットのハンドタオルで口を拭く。

「は、はは……本当に滑稽だな、俺」

喉はひりつく痛みに襲われ、視界は涙で滲み。

意味もなく乾いた笑いを零す事しかできない。

たかが絵里に拒絶された程度で、この体たらく。どれだけ彼女に依存していたのだろうか。

わかりやすい自身の変化に、思わず自嘲の笑みを浮かべてしまう。

「やっぱり、俺は余計な事をするべきじゃなかった」

もう、大人しくしていよう。

穂乃果達 $\mu$  s に、絵里の親友である希先輩がなんとかしてくれる。

そう、いつものように。今までのように。彼女達が、絵里も救ってくれるはずだ。

何より、もう俺は絵里を勧誘する権利はないだろう。

だって、あんなに嫌われてしまったのだから。

「うあ……………うう……………」

身体を丸め、静かに嗚咽の声を漏らす。

もう少し、後少しだけこの痛みを涙と一緒に洗い流そう。

大丈夫。まだ、やれる。“雨宮朝陽”として、しっかりと演技切れる。

皆には心配をかけられない。だから、この場で表情を取り繕わなければ。

「……………たすけて」

その呟きは、絵里へ向けられたものだったのか。それとも、自身へ向けられたものだったのか。

自分でもわからないまま、暫し泣き続けるのだった。

## 第三十九話 挫折と勇氣

あれから、なんとか気持ち落ち着かせた後。

常備していた目薬や口臭防止の薬を使い、腫れた目等の偽装をした。

お蔭で誰も俺の変化に気が付く事なく、無事に部室へと戻る事に成功。

無難に勉強会も終わり、その日を過ぎせたのだ。

以降も皆と部室で勉強をする日々だったのだが――

「はあ……」

誰もいない教室で、一人ため息を零す。

澄み渡る青空を恨めしく思いながら、俺は勉強会をサボっていた。

μ、sには用事で先に帰ると告げていたので、俺がここにいるとは思わないだろう。

まあ、ここなら誰かに見つかったても問題ないという事もあるが。

ともかく、わざわざ教室に残っている理由は、なんて事はない。ただ、何かをする気が起きなかったというだけ。

絵里に拒絶された日から、俺は全ての事柄に集中できていないでいた。

……燃え尽き症候群というのが、今の俺に一番近い表現だろうか。

何もかもがどうでもいいと思ってしまう。

今まで精力的に動いていただけに、あの言葉は己の心に深く突き刺さった。

『——ちつとも私の事を見てないじゃない！』

全く以て、絵里の言う通り。

良かれと思つてしていた事だったが、それがいけなかったのだろう。

物語やμ、sとしてでしか見ておらず、絵里本人の事を蔑ろにしていた。

色々と考えていた内容も、全てはμ、sのため、物語のため、廃校阻止のため。

もちろん、絵里達を手伝いたいと思つた気持ちは強い。胸を張つて断言できる。

しかし、全部が純粋な気持ちだったかと言えば、自分でもよくわからない。ただ、実

際は絵里の言葉通り、不愉快に感じさせてしまったのだろう。

で、この有様。泣かせまいと誓つた彼女を、よりもよつて俺自身が泣かせてしまつ

た。

「結局、余計な事をしただけだったんだろうな」

俺のしていた事は無駄だった。何をしてても空回り。むしろ、関わらない方が皆にとつ

て良かったかもしれない。

行き場のない感情がグルグルと回り、被害妄想のような想いが際限なく広がって行く。

頭ではわかっている。

俺程度の存在が、物語に多大な影響を及ぼす。そんな事あるはずがない。

いや、悪い方面には大きい影響を及ぼしてしまっただろう。

ことりを追い詰めたり、絵里を泣かせてしまったり。これらの問題は、俺がいなければ起こりえなかったものだ。

俺がいなければ、ことりのは物語通り少し揉めただけだろうし、絵里だってここまで責任を感じさせなかっただろう。

もし今の俺の心を読んだ人がいたら、自意識過剰だと笑うかもしれない。

ただ、俺はどうしても杞憂だと思ふ事ができなかつた。

悪循環……と、言うんだろうな。

理性とは違い、止められない感情。

昔から臆病だとは思っていたが、まさかここまで自分が情けなかつたとは。

呆れを通り越して、我ながら笑えるのが始末に負えない。

「どうすれば良かったんだろうな……」

窓に映る自身の瞳が、暗く澱んでいた。

口元は皮肉に歪んでおり、表情からは諦観の色が漂っている。

そんな姿を見ても、俺は特別取り繕おうとは考えなかった。

思う事は、ただ一つ。

絵里に嫌われた、それだけ。それ以上でもそれ以下でもない事実。

今までだって、俺が何かをした所で物語より良い結果にはならなかった。

つまり、俺の行動でマイナスになる事はあっても、プラスになる事はないのだ。

その結論に至った瞬間、俺はようやく悟った。

「俺は何もしなくていい。全部、 $\mu$ 、 $s$ に任せておけば良い」

確かめるように眩きを落とし、頬杖をつけてポーツとする。

ファーストライブの時は穂乃果達自分が自分で立ち直ったし、一年生が加入する時も穂乃

果達が手を差し伸べた。

にこ先輩の時だって、穂乃果達 $\mu$ 、 $s$ の踊りがあったから、彼女の心が揺り動かされ

た。

つまり、俺の有無関係なく、結果は変わらない。

だからこそ、これからも $\mu$ 、 $s$ が全てなんとかしてくれる。

絵里を救ってくれて、希先輩も $\mu$ 、 $s$ に加入してくれて、廃校阻止もして……。

きつと、ことりの留学関係も上手く纏まるだろう。だって、 $\mu$ 、 $s$ は今までもそう

やって乗り越えてきたんだから。

「後は、sに任せて、俺は……ん？」

いっその事、思い切つて転校でもしてしまふか。と、思つた時、扉が開かれて誰かが教室に入ってくる。

音のした方向へ目を向けると、なんと希先輩がこちらに歩んできていた。

「やつぱり、ここにいた」

「カードのお告げですか？」

「ふふつ、そうや。実は、朝陽ちゃんに聞きたい事が——」

恐らく、俺の表情に気が付いたのだろう。

笑顔で近づいてきた希先輩は、思わずといった様子で目を見開いていた。

困惑気味に眉を寄せ、俺の前の席に座る。

「——朝陽ちゃん。一体、何があつたん？」

「別に、どうもないですけど」

「そんなわかりやすい誤魔化しが通じると思つてるん？」

「じゃあ、何かあつたんじゃないですかね」

「朝陽、ちゃん？」

目も合わせず投げやりに返せば、息を呑む気配が伝わる。

相変わらず憎々しいほどに綺麗な青空を眺め、平坦な口調で口を開く。

「それで、なんの用ですか？」

「……朝陽ちゃん。絵里ちと何があつたん？ 最近の朝陽ちゃん達、変や」

「そうですね。あつたと言えはありましたし、なかつたと言えはなかつたと思いますよ」  
「真面目に答えて！」

バンツと机を叩き、怒気を孕んだ声を荒らげる希先輩。

思わず肩を震わせて目を合わせば、眉尻を吊り上げた彼女の表情が視界に入った。

深いため息を一つ。表情に自嘲の笑みを張りつけ、俺は肩を竦める。

「まあ、絵里に嫌われたって事ですよ」

「絵里ちに？」

「ええ。自分がしてきた事が全部無駄で、なのに絵里を傷つけ。今までの足掻きも意味がなく、むしろ余計に悪化をさせ。より良い未来のための行動が全て無意味で、逆に不幸な結末を呼んでしまう」

「な、何を言ってるん……？」

どこか怯えるように瞳を揺らす希先輩を尻目に、俺は立ち上がって窓を開け放つ。  
蒼天に輝く太陽へと手を伸ばし、自身の無力さに拳を握り締める。

「希先輩。イカロスの翼って神話を知っていますか？」



「えっ?」

「自分も詳しくないんですけど。ロウで創った翼を生やしたイカロスが、太陽へと近づくんです。だけど、ロウが溶けてしまつて、翼がなくなつたイカロスは墜落してしまふんです」

「それがどうしたん?」

「いえ。ただ、今の自分にピッタリな話だと思ひまして」

翼を手に入れて調子に乗り、届かないはずの太陽へと目指す。

無謀にも手を伸ばすが、翼が溶けて逆に太陽から離れてしまふ。

結果、深い深い海の底へと沈み込む。

背後から漂う戸惑い気味な希先輩の様子に、俺は苦笑いしつつ口を開く。

「馬鹿ですよ。ね。わかりきつてゐるのに、わかつていたはずなのに、届かない輝きに手を伸ばすなんて。遠くから見ていれば何も起こらなかつたのに、無謀にも近づこうとするから、逆に輝きが色褪せる」

そこで言葉を区切り、希先輩に顔を向ける。

「希先輩。絵里の事をお願いします」

「えっ?」

「今の絵里に必要なのは、希先輩ですから」

微笑んだ俺を見て、希先輩は酷く驚愕した表情を浮かべた。

一度お辞儀してから踵を返し、ゆっくりと扉へと向かっていく。

しかし、途中でガタンと勢いよく椅子が倒れる音が響き、背後から希先輩に呼び止められてしまう。

「ちよ、ちよつと待つて?! さつきから朝陽ちゃんの言つてる事がわかんないんや!

絵里ちを任せるつてどういう事!」

「どういうも何も、言葉の通りですよ。親友の希先輩が絵里を支えてくれれば、全部解決するんです」

「そうじゃなくて! さつきの絵里ちに嫌われた事とか、どうして朝陽ちゃんがそんな顔をしているとか、色々と聞きたい事があるんや!」

「私には話す事はもうありませんよ」

「朝陽ちゃん!」

「さようなら、希先輩」

無視して扉に手をかけると、不意に場の雰囲気に変化する。

先ほどまで必死な声色だった希先輩は、どこか蔑むような口振りで。

「——逃げるん?」

ピタッと手が止まり、僅かに肩を震わせた。

数瞬してから、俺は同じ姿勢のまま疑問の声を上げる。

「……………どういう意味ですか？」

「言葉の通りや。朝陽ちゃんが何を言っているのか、今でもよくわかってない。でも、今の朝陽ちゃんが逃げてるって事だけはわかるんよ」

「逃げてる……………」

「だって、そうやん？ 要は、絵里ちと喧嘩したから会うのが怖いってだけや。仲直りできるか不安だから、ウチに丸投げして逃げようとしている」

思わず唇を噛み締め、口元から血を垂らす。

違うと咄嗟に返事をしたかったが、何故か希先輩に言い返す事ができなかった。

俺の無言を肯定と受け取ったのか、彼女は挑発するような口調で言葉を募る。

「朝陽ちゃんが考えている事だって、絵里ちから逃げるための言い訳や。そうやって悲劇のヒロインのように振舞って、自分は悪くないって思い込んでるだけ」

「……………これ」

「自分を正当化して、わざと自己嫌悪して、勝手に諦めて。だから、嫌われたって決めつけて」

「……………まれ」

「あれのせい、これのせいって考えて。そうして仕方ないっていう理由を作って」

「……黙れ」

「本当はわかかってるんやろ？ それらしい言葉で自分を誤魔化して、μ、sや絵里ちらら逃げてる——」

「黙れええええええッ！」

素早く振り向き、希先輩を睨みつけた。

心の底から絞り出すように声を張り上げ、唾を飛ばしながら頭を掻き巻く。

「うるさいうるさいうるさいうるさいっ！ 俺は逃げてなんかねえ！ この選択は正しいんだよっ！ 俺がいる事で悪影響が出るんなら、こうして全部他人に任せた方がいいだろうが！」

「それが逃げてるんや！」

「違う！ あんたは知らないだろうけどな！ 俺が介入したせいで余計に悪くなってるんだよ！ ことりを悲しませてしまったし、絵里を泣かせてしまったし！ 俺がどう頑張ってもより良くできないくせに、悪い方面だけは変わっていく！」

怒鳴り散らす、希先輩は強い眼差しで見据えているまま。

その表情に苛立ちが募り、俺は歯軋りをして更に鋭く睥睨。

「いつもいつもいつもいつも！ 考えて悩んで苦悩して足掻いて！ そうやって常に綱渡りの状態でやって来たんだよ！ でもな！ 俺は間違えた！ 誓ったはずなのに、絵

里を傷つけちゃったんだよッ！ 失敗したんだよッ！

「だから、絵里ちに会わないの？ また、絵里ちを傷つけるのが怖いから？ そのせいで自分が傷つくのが嫌だから？」

「っ!？」

思わず息を呑み、言葉に詰まった。

そんな俺の様子を見て、希先輩は淡々と言葉を紡ぐ。

「二度の失敗をグズグズと引きずって。また失敗するのが怖いから、耳を塞いで心を閉ざす。もう、傷つきたくない。絵里ちに拒絶されたくない。だから、自分から拒絶する。そうやって、朝陽ちゃんは目を背けているんや」

「ち、ちがっ……俺は」

「勇氣を持つんや!」

「っ!」

目を見開いた俺に、希先輩は力強く言い放つ。

「目を逸らさないで！ 逃げようとしなくて！ もう一度、絵里ちと向き合ってっ!」

「……これ以上、辛い事は沢山なんだよ！ ああ、そうだよ！ 俺は自分が傷つくのが怖くて逃げたんだよ！ 絵里に拒絶されて、心が折れて、諦めたんだよ!」

「嘘！ 朝陽ちゃんはまだ、心が折れてない!」

「なんでそんな事がわかるんだよ！」

「だって朝陽ちゃんの目に、絵里ちと仲直りしたいって書いてあるから！」

そう告げた希先輩の瞳は、確信の色を含んでいた。

対して、俺は呆然として崩れ落ち、俯く。

「まだ……まだ、俺は絵里に未練があるのか？」

あれだけ傷つけたのに。取り返しのつかない事をしたのに。

互いのために離れようとしたのに、いまだに諦め切れていないのか？

「絵里ちだって、後悔しているはずや。朝陽ちゃんを突き放すような事をして」

「……」

「だから、朝陽ちゃんが謝れば、絵里ちもきつと許してくれる」

「……もう一度、絵里は俺に笑ってくれるのか？」

「うん。絵里ちなら、間違いなく」

「……絵里は、俺を必要としてくれるのか？ “雨宮朝陽”としてじゃなくて、俺自身

を」

「……？ よくわからないけど、絵里ちと朝陽ちゃんは友達やん？ だったら、必要とか

じゃないと思うんよ。一緒にいたいかどうかじゃない？」

「——」

あつげらんかと告げた希先輩。

その言葉を聞いた俺は、いつの間にか無意識に涙を流していく。鼻を噉つて何度も目を擦るが、とめどなく雫が溢れて止まらない。

「あ、朝陽ちゃん!？」

慌てた足取りで駆け寄る希先輩の足音に、滲む視界を上げる。

辛うじて彼女が膝を着いている事がわかり、何かで顔を拭かれていく。

「大丈夫、朝陽ちゃん?」

「……希先輩。俺、怖かったんです。また、絵里に拒絶されないか、泣かせないか。そんな俺を見て、皆が俺を見捨てないかって」

「大丈夫。ウチはずっと朝陽ちゃんの味方だから。……きつと、朝陽ちゃんは色々辛かったんやね。独りで悩んで苦しんで、だけど誰にも相談できないで。でも、支える事だけならウチにもできる。だから、悲しい事や辛い事があつたら、ウチになんでも言つて? 少しでも、朝陽ちゃんの心を楽にしてあげたいから」

抱き締められ、ゆっくりと背中をさすられる。

慈愛の籠つた声色で、慈しむように微笑む希先輩。

そんな聖母の如き雰囲気、柔らかく包み込む抱擁に。

もう、俺は己の感情を抑える事ができなかつた。

彼女に縋りつき、あらん限りの力で号泣する。

「——うああああああん！」

制服が汚れるのも気にしない素振りで、希先輩は優しい手つきで頭を撫でていく。

教室内に響き渡る、一人の泣き声。

暫しの間、俺は希先輩の胸で赤子のように泣き続けるのだった。



## 第四十話 小さな勇氣は一步から

「——落ち着いた？」

希先輩の胸の中で、みつともなく泣き喚いた後。

柔らかな笑みを浮かべている希先輩が、俺の涙を拭いながらそう告げた。

その言葉に頷き、ゆっくりりと離れる。

しかし途中で、先ほどまでの自分の行動を思い返し、思わず赤面してしまう。

「あ、あの。ごめんなさい。制服も汚しちゃいましたし」

「ううん、気にしないで。……それにしても、朝陽ちゃん」

「はい？」

「どうしてさつきは男の子みたいな喋り方だったん？」

「……あつ」

やっってしまった。

気が抜けていたのか、取り繕う余裕すらなかったのか。

いつもの言葉遣いではなく、俺本来の口調で叫んでしまったのだ。

……どうしよう。今更気のせいと言える空気ではないし、かと言って上手い言い訳が

思いついている訳でもない。

「どうして?」

「あー、まあ、あれです。あれは内なる人格が飛び出したという感じですが、はい」  
「朝陽ちゃん、嘘は駄目や。正直に言わないと、ワシワシするよ?」

「それだけはご勘弁を!」

あの目に、あの手つき。希先輩の言葉は本気だろう。

不気味な笑顔でにじり寄ってくる彼女に、俺は尻餅を着いて後ずさる。が、あえなく背中が壁にぶつかり、退路は閉ざされた。

……仕方ない、か。

ここまで醜い姿を見せてしまったし、俺の口調ぐらい今更だろうな。

ため息を一つ。片膝を立てて腕を乗せ、額を当てる。

「朝陽ちゃん?」

「希先輩には話します。誤魔化しようもないでしょうし。……実は、私」  
「待った、朝陽ちゃん。せつかくだから、さっきの喋り方でお願ひ」

「どうしてですか?」

「うーん。その方が、本当の朝陽ちゃんらしいって感じだからかな?」

「……本当の俺らしい、か。わかったよ。希先輩の言う通りにする」

「ありがとう、朝陽ちゃん。じゃあ、横を失礼して」

隣に座った希先輩の気配を感じて、俺は苦笑いを零した。

気を取り直して一息つき、脳内で伝える事を纏めながら口を開く。

「何から話せばいいか。とりあえず、男口調の理由からだろ。まあ、理由は簡単だよ。その口調なのが一番楽だからってだけだから」

「えーつと。つまり、朝陽ちゃんは男勝りって事？」

「そうじゃなくて……」

「うん？」

これを言ったら、気味悪がられそうで怖い。

「だけど、希先輩が俺のためにあそこまでしてくれたのに、誤魔化そうなんて薄情な事は考えられなかった。」

目を瞑って深呼吸を一つ、二つ、三つ。

逃げようとする感情を捨て去り、自分に立ち向かう勇氣を奮い立たせていく。

臆病な己に負けるな、気をしっかり持って。

心で覚悟を決め、目を開けて顔を上げ、希先輩の顔を真っ直ぐ見つめる。

震える声を抑えつつ、俺はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「俺……実は、男の意識があるんだ。それも、かなり大きな」

「えっ?」

「だから、女の子を見てドキドキする事もあるし、偶に男子トイレに間違つて入りそうな時も……つて、これはどうでもいいか。とにかく、俺は男意識の方が強いから、素もこんな喋り方になつてゐるつてわけ」

流石に予想外だつたのだろう。希先輩は目を見開いて呆然としており、俺の言葉に戸惑つてゐる様子だ。

無理もない。誰だつて突然こんな事を言われれば、理解が追いつかないに決まつてゐる。

そして、理解すればどう思うのかも――

「あれ? それつて、朝陽ちゃんはウチ達を厭らしい目で見てるつて事?」

「そ、そうなるのか?」

「ほー。朝陽ちゃんは意外とムツツリだつたんやね。もしかして、体育の着替えとかコツソリ盗み見ていたりしてゐるん?」

「その時はトイレに籠つて着替えてゐるから……つて、違ふだろっ!」

「うん?」

思はず立ち上がった、隣の希先輩を見下ろす。

理解できない表情を浮かべて、身振り手振りを交えて必死に伝えていく。

「男だぞ?!」 女の身体に男の意識があるんだぞ?! しかも、俺は意識だけじゃなくて前世が男だつて記憶まであるんだぞ?! 明らかに、異質じゃないか!」

「へー、記憶まであるんや。あ、それつて生まれ変わらつて事やん」

一生懸命話すが、希先輩は感心したような面立ちになるのみ。

何故、彼女はそんな余裕なのだろうか。

普通ならば、こんな事を聞いても信じないか、あるいは拒絶すると思うのだが。

理解できない現状に頭を抱えていると、希先輩は穏やかな口調で。

「確かに、ウチもびつくりした。朝陽ちゃんにそんな秘密があつたなんて思わなかつたから」

「だつたらー!」

「でも、それだけやん? 朝陽ちゃんにどんな秘密があろうと、朝陽ちゃんは朝陽ちゃんであらうと思ふんよ」

「っ!」

「ウチが知つている朝陽ちゃんはね。誰よりも臆病だけど、それでも誰よりも皆の事を考えている子。皆が笑つていられるように人一倍頑張る、とっても優しい人。朝陽ちゃんが生まれ変わったのも、男の子の意識があるのも関係ない。それ等も全部ひつくるめて、ウチが大好きな朝陽ちゃんだから」

慈愛の微笑みでそう告げた希先輩。

対して、俺はまさかの全肯定に、力が抜けて壁に身体を寄りかからせた。

乾いた笑い声を漏らしながら、ズルズルと腰を下ろしていく。

「は、はは……なんだよそれ。今まで悩んでいた俺が馬鹿馬鹿しいじゃねーか」

「ウチだけじゃないと思うんよ。きつと、絵里ち達も同じ事を言うはずや」

「いや、流石にこんな荒唐無稽な話を信じるのは、スピリチュアルな希先輩しかないだろう」

「そんな事ないと思うけど……」

横目で希先輩を一瞥した後、頭を壁に着けて窓の外を見上げる。

夕日に変わっている太陽に、俺は目を細めて静かに口を開く。

「話を戻すけど。二つの記憶がある俺は、精神が不安定だったんだ。そんな時、穂乃果達と絵里に救われた。穂乃果達には生きる活力を、絵里には新たな目標を貰った。……でも、失敗した。俺が不甲斐ないばかりに、絵里を悲しませるような事をしてしまった」

表情を暗くした俺は、そつと目を伏せた。

希先輩のお蔭で勇気を持てたとはいえ、今更絵里にどの面下げて会えばいいのだろうか。

恐らく、今度からは本格的に避けられるだろうし。

……絵里を拉致して、無理矢理話を聞いてくれる状況に持つていくとか？

いや、流石にそれはないな。それに、話を聞いてくれたとしても、どうすれば絵里が笑ってくれるのかわからない。

廃校阻止が確実なら、絵里も責任感から解放されると思うのだが。

しかし、さつきは自暴自棄でどうせ物語は変わらないと言ったが、変わる可能性も充分ある。

それこそ、俺のせいで絵里が $\mu$  sに加入してくれなくなり、結果として $\mu$  sが廃校阻止できないという可能性。

……もう、俺一人の力ではどうにもできない。

となると、必要なのは協力者。俺が信頼できて、こんな話を信じてくれる都合の良い存在——

「朝陽ちゃん？」

「……いたな」

「うん？ 何が？」

不思議そうに首を傾げる希先輩を見て、俺は深くため息を漏らした。

本当は、一人で解決したかったのだが。そんなプライドなんか捨て置け。

目を瞑って伝える内容を取捨選択。何度も反芻させた後、頬を叩いて気合い注入。直後には瞳を開けた俺は、希先輩に向き直って居住まいを正す。

何故か頬を僅かに赤らめた彼女へと、正座をして頭を下げて頼む。

「希先輩、お願いします。もう、俺一人の力ではどうにもできません。だから、助けてください！」

「へっ? ……ちよ、ちよつと待った朝陽ちゃん!? なんでいきなり土下座をするん!」

「音ノ木坂を……*ts* sを……絵里を助けてください。どうか、絵里を救ってください  
!」

「わかったから! ウチにできる事ならなんでもするから! 朝陽ちゃんは早く頭を上げて!」

悲鳴の如き声を上げる希先輩を尻目に、俺は自身の無力さに唇を噛み締めた。

血が滴るほど拳を強く握り、何もできない悔しさから視界が滲む。

希先輩の良心に訴える形でしか頼めない、己の矮小さに苛立ちながら。

もう一度額を地面に押しつけてから、ゆっくりと顔を上げて目元を拭う。

「あ、ありがとうございます……!」

「それで、いきなりどうしたん? 絵里ちと仲直りするために、何かウチに手伝って欲しいって事?」



「そうじゃなくて。……そう、ですね。まずは俺の体質から話します」

「体質？ というより、朝陽ちゃんまた敬語になってる」

「こちらが頼み込む立場ですから」

そう告げると、希先輩はそっぽを向いた。

「じゃあ、朝陽ちゃんのお願いは聞かない」

「ええ!? なんてですか?」

「だって、せっかく朝陽ちゃんの素が見れたのに、また他人行儀に感じちゃうよ。だから、朝陽ちゃんが敬語を止めるまで話は聞かないって決めた」

こゝ、この頑固者……。

頭を抱えて返答に困るが、希先輩は相変わらず顔を背けたまま。

暫し悩んでいった結果、このままだと話が進まないと思ひ。

「……あー、もう！ わかったよ！ これでいいんだろ！ これなら満足か！」  
ややくそ気味に叫べば、途端に満面の笑みを浮かべた希先輩が頷く。

「それでいいんよ」

「なんか疲れたわ……それで、本題に入るぞ?」

「うん。たしか、朝陽ちゃんの話だったよね?」

「ああ。まあ、端的に言うとな俺は予知夢が見られる。それも、かなり限定的な」

「予知夢……?」

オウム返しに尋ねてきた希先輩に頷き、俺は虚空を眺めて説明していく。

「見られる範囲は、この一年間。……もう、察しがつくと思うが。音ノ木坂の廃校が知らされる日から、 $\mu$  sが廃校を阻止するまで。そして、その後の軌跡を夢の中で知る事ができるんだ」

「そ、それってもしかして、この後の未来も朝陽ちゃんは知っているって事?」

「ああ、そうだ」

正座を崩して胡座をかき、肘を立てて両手を組み、額に乗せる。

愕然とした声を上げた希先輩に、俺は悟られないように息をつく。

まさか、この世界が二次元の物語だったとは言えない。

だから予知夢という形で説明したが、とりあえず信じてくれたようだ。

「待って。つまり、朝陽ちゃんが介入とか言っていたのは?」

「……その予知夢の中には、俺は存在していなかった。出てきたのは穂乃果達 $\mu$  sに、絵里と希先輩の九人。そこに、雨宮朝陽という人物は存在しない。だから、俺は希先輩に介入という言葉を使っただ」

「朝陽ちゃん……」

声色に心配の色を滲ませる希先輩。

恐らく、俺の事を気にかけてくれているのだろう。自分の事を追い詰めていないかと。

しかし、今はその事が本題ではない。

意図的に希先輩の変化に気が付かない振りをしつつ。

「予知夢の中で、 $\mu$  s は廃校を阻止してくれた。それも、絵里と希先輩が加入する事によつて」

「ウチらが？」

「オープンキャンパス。希先輩なら知っているよな？ その時に絵里達が加入した九人の $\mu$  s がライブをした結果、ひとまず廃校が見送られる事になったんだ」

「……その関係で、絵里ちと喧嘩したん？」

鋭いその指摘に、俺は思わず苦笑いをした。

希先輩の方に顔を向けて頷き、自嘲の笑みを浮かべる。

「ああ、そうだな。いつも $\mu$  s の事ばかり見て、私を見てない。私は $\mu$  s の付属品なのかって言われたよ」

「ええと……つまり、絵里ちは $\mu$  s ばかり構ってるから拗ねたつて事やね」

「はっ？」

目を丸くした俺に呆れた表情を向けた希先輩は、子供に言い聞かせるような口調で口

を開く。

「だから、あれや。朝陽ちゃんばつかり $\mu$  sと楽しそうにしてるから、絵里ちは羨ましがっているんよ」

「そ、そうなのか？」

「多分、絵里ちも $\mu$  sに入りたいけど、素直に言うのは恥ずかしい。それと、 $\mu$  sに朝陽ちゃんを盗られて頼みたくないってのもあるかも？」

「と、盗られたって。そんな子供じゃないだろ、絵里は」

「……朝陽ちゃんって、意外と鈍感なんやね」

「はあ？」

思わず素つ頓狂な声を上げたが、そんな俺はおかしくないだろう。

何故、絵里と喧嘩した話から俺が鈍感という話に変わってしまったのか。意味がわからない。

そんな俺の表情が表れていたのか。呆れた表情のまま、希先輩はもう深いため息をつく。

「結局、どっちも子供だったって事や」

「え、俺も子供なのか？」

「うん。朝陽ちゃんって、今まで絵里ちと喧嘩した事ないよね？」

「ま、まあないけど」

「やっぱり。だから、こんなに拗れてしまったんよ」

「……俺にもわかるように説明してくれないか?」

「簡単に言おうと、絵里ちは朝陽ちゃんと一緒にいれなくて寂しい。朝陽ちゃんは初めて絵里ちと喧嘩したからどうすれば良いのかわからない。わかった?」

「うん、全然わからん」

眉を寄せて困惑の表情を落とせば、希先輩が処置なしと言わんばかりに肩を竦めた。

正直、その仕草は非常に傷つくのだが。

「まあ、それはいいんよ。とにかく、絵里ちは朝陽ちゃんを嫌ってないって事!」

「いや、だってあの時泣かしちゃったし」

「もー、朝陽ちゃんはグズグズしすぎ! 朝陽ちゃんは男の子の意識があるんでしょ?

だったら、もつとドツシリと構えるんや!」

「そうは言ってもな……」

煮え切らない態度の俺を見て、希先輩は悪い笑みを浮かべて手をワキワキと動かす。

「とりあえず、ウチが二人の仲を取り持つから。朝陽ちゃんはずつと絵里ちと一緒に過

ごせば問題なし! それとも、ワシワシされて無理矢理言う事を聞く?」

「わ、わかった! 希先輩の言う通りにするからその手つきはやめてくれ!」

「うん、わかればいいんや」

満足そうに頷く希先輩を尻目に、俺はひっそりと胸を撫で下ろした。

危なかった……下手すれば、希先輩のワシワシの餌食になっていたな。

でもまあ、彼女のお蔭でようやく気持ちの踏ん切りが付き、後はどうやって絵里と仲直りするかだろう。

「それで、具体的にはどうすればいいんだ？俺は希先輩のサポートに回ればいいんだよな？」

「うん？ さっきも言ったやん。朝陽ちゃんが絵里ちと一緒にいれば解決するって」

「はあ？ だからさ、それだと絵里が困るだろ？ お互いに気まずい思いもするだろうし」

「大丈夫！ ウチに良い考えがあるから、その通りにしてくれば全部解決や！」

自信ありげに胸を張った希先輩だったが、やはりどうしても懐疑的になってしまふ。

もちろん、絵里とは仲直りしたい。しかし、今大事なのは、sの廃校阻止なのだが……

「あれ？ いつの間にか論点がズレている気が」

「まずは、朝陽ちゃんが生徒会のお手伝いに来る所から始めようか——」

頭に疑問符を浮かべる俺を尻目に、希先輩は顎に手を添えて自身の計画を話すのだっ

た。

## 第四十一話 絵里と水族館デート

希先輩と計画を練ってから、数日後。

現在、俺は駅前広場で希先輩と絵里の二人を待っていた。

椅子に座りながら、頻りに携帯で時間を確認する。

「緊張するな……」

希先輩の作戦によると、俺を入れた三人でぶらぶらと遊びに行く。

その際、絵里と俺の仲を希先輩が取り持ち、流れで仲直りさせる。

と、というような大雑把な内容だ。

正直、こんなので絵里と仲直りできると思えないのだが。

しかも、俺達はまだテスト期間中。

普通に絵里は断るだろう。誘う事に失敗したら希先輩から連絡が来ると聞かされて  
いるが……まあ、気長に待っていよう。

鞆から取り出した単語帳で時間を潰す。

パラパラとページを捲っていくが、やはりと言うべきか。

内容が全く頭に入ってこず、意味もなく文字の羅列を眺めるしかない。



「はあ……」

ため息を漏らして単語帳を仕舞い、天を仰ぐ。

今日は雲が多めだが晴れているので、充分にお出かけ日和だろう。

何も問題が起こっていなかったら、きっと俺もこの天気を素直に喜べただろうに。いや、今からネガティブな考えをしてどうするんだ。

俺がするべきなのは、絵里に謝って許して貰う事。

そして、また絵里と笑顔を交わし合うのを目指す事。

拳を握って気合いを入れていると、遠くから見覚えのある金髪が目に入った。鞆を持って立ち上がり、そちらの方へと駆け寄っていく。

「絵里！」

「っ……」

「今日はわざわざ来てくれてありがとう。テスト期間中にすまない」

「……別に、私もちょうど気分転換したいと思っていた所だから」

「そ、そうか」

目を合わせず告げる絵里に、俺は僅かに痛む胸に手を添えた。

数瞬目を瞑って呼吸を整え、絵里と共に椅子の方へと向かう。

並んで腰を下ろし、俯き気味な彼女に声を掛ける。

「待ち合わせまでまだ時間があるけど、早めに来てくれたね」

「……誰かを待たせるのは好きじゃないからよ。そういう貴女こそ、私より早かったじゃない」

「私も同じような感じさ」

「そう……」

「うん……」

会話が続き、どちらともなく顔を背けた。

元々目が合っていないが、これで余計に互いの表情がわからなくなる。

視線を彷徨わせながら、俺は絵里になんと言うべきか戸惑っていた。

まさか、ここまで気まずく感じるとは。

会ったら直ぐに謝ろうと考えていたのだが、ここに来て自身の臆病さが顔を出す。

たった一言。ごめんなさいという言葉が果てしなく遠い。

グルグルと思考が駆け巡り、急速に喉が渴いていく。

我ながら酷すぎるだろ。

初っ端からこんな空気になるとか、花陽じゃなくても誰か助けると言いたい。

早く来てくれないかな、希先輩……

「きよ、今日は晴れてよかったね」

「そうね。雨よりよほどマシだわ」

やはり、会話が続かない。

チラリと横目で絵里の様子を窺えば、何故か目が合った。

直ぐに目を逸らされたが、彼女の方も気まづく感じているようだ。

まあ、互いの思いが共通しても打開策がないのだが。

どうしようかと内心で頭を抱えていると、ポケットに入っていた携帯が震えはじめる。

絵里の方も携帯を手にとっており、どうやら同時に受信されたらしい。

画面を見てみると、希先輩からのチャットのように。

「ごめんなさい。急用ができたので、二人で遊んでください。後でしっかりと感想を聞くから、途中で逃げたらどうなるか……わかるよね？」

「はっ?」

思わず声を発してしまった俺は、何度も目を擦ってチャットを確認する。

しかし、現実是非情であり、ここに希先輩は来ない。

絵里の方に視線を転じると、彼女も目を見開いて驚愕した表情だ。

まさか、ここに来て希先輩の裏切り!?

……恐らく、二人になって仲直りしろって事だろうな。

こうして退路を封じて、さっさと絵里と仲直りしろ、と。気持ちにはわかるけど、希先輩がいないと心細すぎるんだが。

「……どうするの？」

絵里の問いかけで我に返り、どうするか思考を巡らせていく。

乗るか、引くか。どちらにしても、今日を逃したら絵里と二人になる時間が取れるかわからないだろう。次からは、警戒して希先輩の誘いに乗らない可能性があるのだから。

……いや、最初から選択肢は決まっていた。

希先輩の気遣いを無駄にするべきではない。後は、俺の勇気一つ。

「私達二人で、遊ばない？」

唾を飲み込み、恐る恐る絵里へと提案した。

すると、彼女は目を泳がせながら、ギョツと膝に揃えた手を握る。

俯き気味で口許をモゴモゴさせた後、頷いて小さな声で。

「……構わないわ」

「ありがとう。じゃあ、早速行きたいんだけど、いいかな？」

「ええ」

俺達は立ち上がり、ゆっくりと足を動かしはじめた。

二人の距離は空き、間にはどことなく暗い空気が流れる。

会話もろくに続かず、とても遊びに来ているとは思えない。

とりあえず、第一関門は突破か。

これで絵里に帰られでもしたら、立ち直れなかつただろうな。

次は、絵里に謝って遊びを楽しむ事なのだが、その謝罪のハードルがめちやくちや高い。  
い。

『いい、朝陽ちゃん？ 絵里ちがどんな顔をしていても、心の中では凄く喜んでるはずや。だから、いくら拒絶されても諦めないでね？』

と、希先輩が言っていたが。

現在の雰囲気からでは、その言葉を素直に信じる事ができない。

だけど、このままでと希先輩の好意を無駄にする事になってしまう。

際限なく巡る思考の渦。メトロノームのように正と負の感情が交互に顔を出す。

できるなら感情を爆発させて叫び、奇声を発して意味もなく駆け回りたい。

絵里と会えて嬉しい。気まずくて悲しい。一緒に出掛けられて最高。早く謝罪したいのに勇気が出なくて悔しい——

「ああもうっ！」

「ちよ、ちよっとどうしたのよっ！」

抑えきれずに頭を抱えると、唐突な叫びに驚いたのか、絵里は肩を震わせた。

怪訝げな眼差しを送られるが、意に介せず堂々巡りの思考をリセットしていく。

無駄に考えているのが馬鹿馬鹿しい。遅かれ早かれ絵里との間には決着をつけなければならぬし、そもそもせつかく絵里と遊びにきたのだから、思う存分羽を伸ばして遊ばなければ損だ。

とりあえず、遊ぶ。謝罪その他諸々は今日の帰りまでに考える！

無理矢理自分の思考を打ち切った後、絵里の手を取って駆けだす。

「早く行くうー！」

「あっ……」

背後から聞こえる絵里の呟きを無視して、俺は今日中に仲直りできる事を祈るのだ。た。

俺達に向かった先は、希先輩に勧められた水族館。

受付で購入したチケットを使い、入場する。

「おお……」

視界に広がる光景に、思わず俺は感嘆の息を漏らした。絵里も同様に目を見開いて驚いている様子だ。

僅かに暗い証明に照らされている、色とりどりの水槽。どうやらここは小魚を展示しているようで、様々な種類の魚が泳いでいた。

普段ではお目にかかれないモノを見る事ができ、俺はワクワクする気持ちが抑えきれない。

そんな思いが表情に表れていたのか、絵里がこちらを一瞥した後、手近な水槽へ近づく。

「……せっかくだし、一つ一つ見ていきましょ」

「えっ?」

「別に、私も見たいと思っただけだから」

言い訳するようにそう返したが、絵里は俺に気を遣ってくれたのだろう。あまりに俺が目を輝かせていたから、無視して先に進むのが可哀想という感じで。

絵里の気遣いを申し訳なく思う反面、自分の事を見てくれて嬉しくもある。

「ありがとう、絵里」

感謝を示した俺は、絵里の隣に並んで水槽をのぞき込む。

泳いでいる魚の色合いが綺麗で、どうやら海外で人気のあるペット用の種類らしい。説明文を読んで納得していると、不意に絵里の方から視線を感じた。

「っ……っ」

「うん？」

「な、なんでもないわ」

目を向けたと同時に顔を背けられたので、絵里の表情は窺えなかった。

しかし、微かに上擦る声音から、何やら俺に含む所があるらしく、それが絵里との距離を感じて悲しく思ってしまう。

微妙な空気になってしまったが、努めて考えないようにしながら、俺は絵里と共に水槽を見回っていく。

こう思うのは不謹慎なのだろうけど、絵里と二人で見回るのは楽しい。

魚の説明文を見て話したり、可愛い魚の感想を言ったりと……まあ、俺しか喋っていないんだが。

会話できないのは寂しいけど、それでも絵里といるだけで俺は満足だ。

ただ、絵里の方はそう思っていないのだろうか。

「よし。次のエリアに行こうか」



「そうね」

「次のエリアは……これかな」

「どれ？」

入場する時に取っておいたパンフレットを開くと、絵里が横からのぞき込んできた。

思わず硬直した俺を見て、絵里は不思議そうに首を傾げた後、ハツと勢いよく後ずさって身体ごとそっぽを向く。

「い、行く場所は貴女に任せるわ！ とりあえず早く行きましょう」

「あ、ちよつと待って！」

一方的にそう告げた絵里は、呼び止める俺の声を無視して歩きはじめてしまった。

慌てて早足の絵里を追いかけながら、俺は今の一連の行動に疑問が溢れてしまう。

先ほどの絵里の対応は、少し前までの気安いものだった。

直ぐにぎこちない雰囲気に戻ったが、あれは一体どういう事だろうか。

まさか、絵里の方が気にしていない訳がないだろうし、そもそも今の絵里が俺と一緒にいる事自体奇跡なのだから。

……俺は、どういう対応を取るのが適切だったんだ？

驚いて固まらないで、友達のように笑顔を向ければ良かったのか？

わからない……わからないよ。どうするのが最善なのか、どんな声を掛ければ絵里が

喜んでくれるのか、今の俺には何も理解できない。

情けない事はわかっているけど、やっぱり希先輩に助けてほしい――

「わっ!」

「なに?」

「あ、いや。なんか来たみたい。ごめん、ちょっと見てみるね」

内心の思いを押し殺して絵里に追いついた時、おもむろにポケットに入れていた携帯が震えだした。

絵里に許可を貰って画面を見ると、噂をすればと言うべきか、どうやら希先輩からのチャットのようだ。

「誰から?」

「希先輩からみたい……へっ!」

思わず目を大きく見開き、画面に映るチャットを凝視する。

瞬きしたり目を擦ったりしても、書いてある内容は当然変わらない。

いや、まさかそんな訳が……あれ、でも実際は希先輩はここにいないし、だからと言ってこの内容は流石になんと言うか。

「希はなんて?」

「うえ!? あ、えっと。楽しんでるかだって」

「……怪しいわね。何か隠しているんじゃないかしら？」

「そんな事ないよ！」

「声の上擦っているわよ。ちよつとそれ、見せて貰えないかしら？」

ジト目の絵里に迫られ、俺はタジタジになりながら目を逸らす。

これを絵里に教えるのは駄目だと書かれているのだが、急にそれらしい言い訳が思いつくはずもなく、ここままでは絵里の手に俺の携帯が渡つてしまう。

しかし、直前に今度は絵里の携帯がメロディーを奏でる。

「け、携帯が鳴っているよ？ ……あれ、今の曲つて」

「もう、せつかく悪事を暴けそうだったのに——」

どこか聞き覚えのある音色に首を傾げる俺を尻目に、絵里はため息をついて携帯を取り出して画面を見た。

瞬間、絵里の頬が赤らみ、挙動不審気味に口許をマゴマゴさせていく。

「絵里？」

「どうして、希は余計な事をするのよ。貴女に言われなくなつて……」

「おーい、絵里？」

「はっ！ その、なんでもないわなんでも。気にしないで、いいわね？」

「う、うん。わかつた」

ずいっと顔を突きだす絵里から妙な迫力を感じた俺は、何度も頷いてこれ以上の詮索をしないと約束した。

身体を離して満足そうにしている絵里を尻目に、俺はなんとか窮地を脱せた事に胸を撫で下ろし、さり気ない動作で背後に目を向ける。

すると、野球帽を被った一人の女性が、にこやかに手を振ってきた。

遠目でもわかる立派な胸部を見て、俺は先ほどの内容が嘘ではないと理解してしま  
う。

「本当にいたよ……」

先ほどの希先輩のチャットには、今後ろに自分がいるという内容が書かれていたの  
だ。

絵里に内緒にしろと言うから、なんとかバレないように誤魔化したのだが、正直希先  
輩と三人でいた方が良かったのでは。

チラリと背後を盗み見ると、俺の考えでも読み取ったのか、希先輩は腕をバツテン  
マークにして拒否してくる。

ついで、ニツコリと笑って手をワキワキさせた事から、どうやら絵里に話すとワシワ  
シの刑に処するらしい。

身震いして大きく頷いた俺を見て、何故かドヤ顔で胸を張る希先輩。

……俺には彼女の思考が全く理解できないのだが。

「と、とりあえず！ 希のためにも早く行きましよう！」

「希先輩のため？」

「あつ、なんでもないわ！ それより、次のエリアが楽しみねー」

明らかな棒読みで先に進む絵里に、俺は首を傾げて希先輩の方を見つめた。

暫し顎に手を添えて考え込む素振りを見せていた彼女は、やがて携帯を取り出して何やら操作していく。

すると、俺の携帯が再び震え、同時に希先輩がちよいちよいと指で示す。

「絵里ちは気にしないで。それより朝陽ちゃんは、さつさと絵里ちと仲直りしよ！ ウ

チがサポートするから！」

思わず携帯から顔を上げると、真剣な表情で頷く希先輩の姿が目に入る。

俺のためにここまでしてくれて嬉しい反面、我ながら情けなくて泣きそうだ。

だけど、希先輩にここまでお膳立てされた以上、もはや俺に逃げるという選択肢は消え失せた。

頬を叩いて気合いを入れ直し、親指を立てて希先輩に向ければ、悪どい表情をした彼女もグッドポーズを返してくる。

いや、その顔は見ていて不安になってしまうのだが。

ともかく、希先輩に優しく背中を押された俺は、彼女のサポートを受けて絵里と仲直りするのを、改めて深く決意するのだった。

「よし、頑張るぞ！」

「ちよつと、何しているのよ？」

「あ、ごめん！ 今行く！」

「……幸先が不安や」

## 第四十二話 和解

『いい、朝陽ちゃん？ 絵里ちと水族館に行く時、ウチが考えた言葉や行動をして欲しいんや』

『なんで？ 希先輩も一緒にいるんだから、そんな事をする必要はないだろ？』

『念のため、という感じかな。とりあえず、絵里ちマイスターであるウチに任せれば、朝陽ちゃんはちゃーんと絵里ちと仲直りできるから、ウチに全部任せて！』

『う、胡散臭え……』

『んん？ 音ノ木坂一のピユアであるウチが胡散臭いつて？ おかしいな。そんなはずがないんだけど、朝陽ちゃんには話を聞く必要があるね』

『ちよ、ちよつと待て!!? その嫌らしい顔はなんだよ!!? 手をワキワキさせながらこつち来んな——』

「——うっ。寒気が」

「何か言ったかしら?」

「う、ううん。なんでもないさ」

希先輩の言葉を思い出した際、思わずその後の出来事も脳裏に描いてしまった。身震いしながら首を横に振った俺は、内心で微妙な表情を浮かべる。

あの手つきに表情……希先輩は悪魔の生まれ変わりだろうな。

いや、対象を昇天させる意味では、天使だったかもしれない。

詮無きことを考えていた瞬間、冷水をぶちまけられたような悪寒が走り、咄嗟に勢よく背筋を伸ばして姿勢を正す。

恐る恐る背後を窺えば、イイ笑顔を浮かべた希先輩が、ジツと俺に熱い視線を送っていた。

「ひっ！」

「ちよつと、どうしたの？ 後ろに何かあった？」

「い、いや。どうやら私の気のせいだったみたい」

アハハと乾いた笑いを響かせながら、俺は不審そうな目つきの絵里を誤魔化した。

何故、この距離から俺の考えている内容がわかるんだ……あ、希先輩はスピリチュアルな方でしたね。

もう余計な事は考えないので、どうか怒りをお収めくださいませ。

と、内心で祈っていると、希先輩は呆れた様子で肩を竦めた。



いや、だからなんで俺の考えている事が……もう、この下りはいいか。

ともかく、あれから俺達は水族館内を廻り、現在はペンギンを見ている所だ。

腹ばいで滑るペンギンや、ヨチヨチ歩きで動いている子ペンギンなど、非常に可愛らしい姿に思わず癒される。

絵里も俺と同じような感想を抱いたのか、どこかうっとりとした表情で嘆息していた。

「はあ……可愛いわねえ」

「うん、全くだ」

二人して水槽にかじりついてペンギンを眺めていると、不意に俺の携帯が震えはじめる。

少し嫌な予感を覚えてチラリと背後を盗み見れば、何故か希先輩がガッツポーズを向けてきた。

ため息をついて画面を開き、希先輩からのチャットに目を通していく。

【今こそウチが伝授した言葉を言うんや！】

と言った文面に、キラキラとした瞳で手を組むキャラクターのスタンプがあった。

いや、俺にそんな期待されても困るのだが。

しかし、自称絵里マイスターである希先輩の言葉が正しいなら、教えてもらった内容

を告げれば、絵里と仲直りができるらしい。

……正直、凄く恥ずかしい言葉だけど、希先輩を信じて言ってみよう。

深呼吸して頬の熱さを抑えた俺は、隣でペンギンに心を奪われている絵里へと声を掛ける。

「え、絵里！」

「……え、なに？」

「その……あの……」

「い、言いたい事があるなら、はつきり言ったらどうかしら？」

僅かに目を逸らして告げる絵里の言葉を聞き、ようやく俺は腹に力を込めて覚悟を決めた。

今できる限りの爽やかな笑みを浮かべ、一步踏み込んで絵里の顔をのぞき込み、震えそうになる声を鎮めて口を開く。

「ペ、ペンギンより絵里の方がきやわいいよ！」

「……へ？」

「……ごめん、今のは聞かなかった事にして」

素っ頓狂な声を上げて目を点にする絵里。

対して、大事な所で舌を噛んでしまった俺は、ある意味冷静になって内心で力の限り

絶叫した。

——やっぱり意味がわからないセリフじゃねーかよお！

薄々希先輩に騙されているんじゃないかと考えていたのだが、改めて酷すぎる言葉のチヨイスではないか。

こういうのは男性が女性に言うべき言葉のほずであり、女性から言われても全く嬉しくもなんともないというか、そもそもペンギンより可愛いとか頭が沸いてる内容では……。

グルグルと思考が巡り、頭から蒸気を吹きだしているような錯覚に陥る。

今の俺を傍から見れば、顔色を真っ赤にして涙目だろう。

視界の端で笑いを堪えている希先輩の姿が映っているし、どこからどう考えても俺は失敗したと理解できる。

絵里から後ずさって振り返り、今の顔を見られないように鞆に入れてあるタオルで隠す。

暫く身体を震わせて自己嫌悪に駆られていると、背後から絵里が戸惑い気味に声を掛けてくる。

「そ、その。今のってどういう意味？」

「……ペンギンも可愛いけど、ペンギンを見て目をキラキラさせている絵里の方が可愛

かつたつて言いたかつただけ」

「へ、へえ。私がペンギンより可愛い……そう、そっか」

タオルに顔を押しつけたままぐもつた声で返事をすれば、なんだか絵里が意味深な  
眩きを漏らして独りごちた。

俺達の間にごこか変な空気が流れ、微妙な沈黙に包まれていく。

うああ……言うタイミングを間違えたというか、明らかにこれは希先輩の冗談か何か  
だったのだろう。

でなければ、希先輩が俺達で遊ぶためにそう言ったか……いや、希先輩に限ってそんな  
事をするはずがないよな。

そもそも、これを言われた時点で色々気づけよ、俺。なんで言った後からヤバイセ  
リフだと気づいてしまったんだ。

とりあえず、言ってしまったものは仕方がない。今考えるべきなのは、この気まずい  
空気をどうにかする事だろう。

洗剤の香りを肺にいっぱい流し込んだ俺は、タオルを仕舞って絵里の方に振り向く。

ビクリと肩を震わせた彼女の手を取り、何気ない様子を装って歩きだす。

「よし、次のエリアに行こう！」

「……そう、ね。わかつたわ」

俺の提案に絵里が肯定すると、なんと控えめに手を握り返してきた。

思わず絵里に目を向けたが、絵里は顔を背けているので、どんな表情を浮かべているのかわからない。

しかし、微かに耳が赤らんでいる事から、そう悪い顔をしていないのだろう。

これは、成功したと言っているのだろうか。俺の滑稽な失敗を見て、絵里の緊張が解れたとか、そういう事なのだろうか。

……まあ、その辺はどうでもいいんだ。

俺が今思っているのは、絵里との距離が少し縮まったという事なのだから。

自然と嬉しさが溢れる笑みを浮かべながら、俺は絵里を引いて次のエリアに進むのだった。

それから、俺達は様々な魚を見て回った。

深海魚のコーナーで絵里と一緒に面白い魚を見たり、触れ合いコーナーではジャンケ

ンをしてどちらがナマコを触るか決めたり、二人で楽しいイルカショーを見て感動したり。

文字通り満喫したと言った具合に、俺達は水族館を謳歌したのだ。

しかし、時は残酷に近づいていき、そろそろこの遊びが終わる時間となった。

現在、俺は絵里に待ってもらって、自分はお手洗いに赴いている。

トイレを済ませて手を洗っていた俺は、ふと鏡に移る自分の表情を見て、思わず頬を綻ばせた。

「ははっ。それだけ楽しかったって事か」

満面の笑みを浮かべている自身の姿に、益々笑顔が深まっていく。

確かに、今日の絵里との遊びは人生で五本の指に入るほど楽しかった。よほど俺が絵里の事を親しく思っていたのか、何をしても景色が輝いて見えていたのだ。

心中で渦巻く優しい思いに、目を瞑ると蘇る絵里との思い出。

……やっぱり、俺はもう一度絵里と仲直りしたい。

ストンと胸に落ちた感情。そう考える事が当たり前かのように、俺は目を開けて決意を瞳に灯す。

今の俺なら、勇気を持って絵里と向かい合える気がした。

頬を叩いて気合を入れた後、絵里が待っている方へ歩いていく。

「ん？ あれは、希先輩？」

絵里が座っている椅子に近寄ると、何故か隣に希先輩がいた。

どうやら二人は会話をしているようで、ここからだと内容が聞こえない。

声を掛けるかどうか悩んでいた時、俺の携帯が震える。

どうやら希先輩からの着信で、首を傾げながら通話ボタンを押す。

『——そうなんですか。この水族館が好きでいつもいると』

『ええ。私はここに居る魚達に癒されに来るんですよ』

『確かに、可愛い魚とか多いですもんね』

え、誰だこの人……いや、会話しているのが希先輩と絵里だというのはわかる。

わかるけど、希先輩にしてはやけに声のトーンが低いような。

もしかして、希先輩は変声でもしているのだろうか。絵里に変装がバレないようにする

ために。

そう考えれば絵里との会話もどこかよそよそしいし、初対面と言われると納得できる

ような距離感だ。

しかし、何故希先輩が絵里に近づくようなリスクを犯したのか、このまま俺は声を掛

けても良いのだろうか、と対応に困るような場面になっている。

微妙な表情を浮かべて二の足を踏んでいる間にも、両者の会話は続いていく。

『ちなみに、気に入った魚とかいましたか?』

『えっ? そうですね……私は魚よりペンギンの方が気に入りました』

『ほほう、ペンギンですか。私もあの子達によく癒されるんですよ。特にどの辺が気に入りましたか?』

希先輩がそう尋ねると、絵里は言葉に詰まったように沈黙した。

近くの椅子に腰かけながら、俺はどこか胡散臭い希先輩の口調に、思わず苦笑いをし  
てしまう。

ただえさえ、野球帽を深く被ってバレないようにしているからって、そんな怪しい人  
物の口調にする意味がわからない。

しかし、少なくとも今の絵里とはそれなりに仲良く話し合っている。

……希先輩の話術、恐るべし。

そんな風に考えている間に、どうやら絵里の方で結論が出たようで、希先輩の質問に  
ゆつくりと答えていく。

『ペンギンが可愛いのは本当ですけど……私が気に入った理由は、友達と一緒に見たか  
らです』

「っー」

『友達?』



『はい、大切な友達』

絵里の口から出た友達という言葉に、動揺で息を乱した俺。

対して、希先輩は興味深げな声音で合いの手を打つ。

『大切、ですか。それにしても、随分と顔が暗いですけど?』

『……友達に、酷い事を言ってしまったんです。友達は何一つ悪くないのに、好き勝手言っちゃったんです』

『ふうむ、なるほど。それで、その友達と会うのが気まずいんですね?』

『……はい。本当は、もう一人の友達と一緒に行く予定だったんですけど、その人が気を遣って私達の二人きりに』

『そ、そうなんだー』

いきなり棒読みになると非常に怪しいですよ、希先輩。

普段はポーカーフェイスが上手なのだが、今のは大根役者さながらの酷さだ。

変装している事に、良心の呵責にでも見舞われたのか、希先輩はそっぽを向いて口笛を吹いている。

しかし、明らかに怪しい希先輩の様子に、絵里は気が付いていないようだ。

声色を暗くした絵里が、ポツポツと独白していく。

『気を遣われても、朝陽とまともに目を合わせられない。声を掛けようとしても、どうし

でも怖くて話せない。たった一言、ごめんなさいって謝るだけなのに、私はそれを言う勇氣すら持てない……』

『うーん。そんなに難しい事かな?』

『えっ?』

『だって、貴女はその友達に謝りたいんですよね? 一緒にここに来た友達に』

『え、ええ。そうですけど』

『だったら、話は早いじゃないですか。貴女の心の赴くままに、その友達に謝罪しましう』

『ええっ!?!』

困惑気味な声を上げる絵里を尻目に、希先輩は席を立つ。

『では、私はこの辺で失礼させてもらいますね』

『ちよっ——』

通話でも切つたのだろう。絵里の言葉が途中で途切れた。

思いがけない所で絵里の本音を耳にし、動こうにも動けないでいると、いつの間にかすぐ側に希先輩が現れる。

「さて、朝陽ちゃん。ウチができるのはここまでや」

「希先輩……」

「大丈夫。朝陽ちゃんは絵里ちと仲直りできるはずだから」

にっこりと微笑む希先輩。

柔らかく細められたその目を見て、俺は真剣な表情で頷く。

立ち上がって気合を入れ、改めて感謝を示すために頭を下げる。

「本当に、ありがとうございます」

「いいんよ。ウチがしたかっただけだからね。……頑張つて」

「はいっ!」

優しく背中を押した希先輩に促されるまま、俺は絵里の方へと向かう。

椅子に座ったままの彼女はソワソワと落ち着きがない様子で、頻りに周囲を見回して

いる。

やがて、絵里は近寄ってくる俺を見つけ、目を泳がせながら口を開く。

「お、遅かったわね」

「ちよつと場所が混んでいてね、すまない」

「う、ううん! 混んでいたなら仕方ないわよ」

隣に腰掛けた俺から目を逸らし、意味もなく大袈裟に頷いている絵里。

明らかに動揺しているとわかるその様子に、俺も釣られて心臓の鼓動が速まってくる。

落ち着け、落ち着くんのだ。ここまで希先輩にお膳立てされたのだから、今この場で絵里と仲直りするべきだ。

こんな気まずい空気のまま別れるのは、絶対にあつてはならない。

再び、絵里と笑い合うために、また一緒に遊びに行くために。

深呼吸して気持ちを整えた後、俺は目を伏せている絵里に声を掛ける。

「絵里。実は、聞いて欲しい事があるんだ」

「……私も、あるわ」

「先に、私の話を聞いてもらってもいいかな？」

俺の問いかけには答えず、絵里は無言で頷く。

断られなかった事に内心で安堵しながら、脳内で言葉を纏めて紡ぐ。

「まずは、一緒に遊んでくれてありがとう。今日は凄く楽しかった」

「私も、楽しかったわ」

「そう言ってもらえて良かったよ。それで、改めて言いたい事があるんだ」

「……なに？」

端的に問い返す絵里に、俺は立ち上がって頭を深く下げる。

「ごめんなさい！」

「え？」

絵里が呆然とした声を上げるも、意に介せず気持ちちを込めて告げる。

「あの時、絵里が言った言葉。全部、正しかった。私はずっと、sの事ばかりしか考えていなくて、絵里をしつかりと見ていなかった」

後悔で視界が滲むが、今は絵里に全てを伝える事が先だ。

涙声にならないように気をつけながら、言葉を繋いでいく。

「絵里と一緒にいる時も、どこか、sあり気で考えていたと思う。μ、sを中心に考えていたから、絵里に対して酷い事をしてしまった」

「ち、ちがっ」

「そのせいで、絵里を泣かせてしまった。私が不甲斐ないばかりに、大切な友人の絵里を傷つけてしまった。いくら謝っても許されないのはわかっているけど、それでもちやんと謝りたい。本当に、すまない」

頭を下げたまま、絵里の返答を待つ。

今の絵里は、一体どのような表情を浮かべているだろうか。

怒り、落胆、失望、軽蔑……いずれにしても、良い感情は抱いていないはずだ。

これで絵里との仲が終わったとしても、俺は甘んじてその結論を受け入れる。

それが、泣かせまいと決めた絵里を泣かせた、俺への罰だから。

裁かれる罪人の気持ちで待っていると、立ち上がる絵里の気配がした。

緩やかな足取りで俺の前に立ち、何かを堪える様子で話す。

「……顔を上げて」

その声に従い、ゆっくりと顔を上げる。

俺の視界に映るのは、今にも決壊しそうに涙を湛え、唇を一文字に結んでいる絵里の表情だった。

想像だにしない顔に思わず啞然とした俺を尻目に、絵里は何度も首を横に振りながら言葉を落としていく。

「違う……違うのよ。朝陽はなんにも悪くないの。悪いのは、全部私なの」

「だって、絵里が言った事は正しくて」

「正しくなんてないわ!」

鋭く否定の声を上げた絵里は、ハラハラと大粒の雫を滴らす。

一步踏み込んで俺の襟を掴み、嗚咽混じりの声で言葉を紡ぐ。

「あの時の私は……ううん。その前からずっと、私はイライラしていたの。廃校の事で一杯一杯になって、心に余裕がなかった。だから、朝陽に八つ当たりしちゃったの」

「八つ当たり?」

オウム返しに尋ねた俺に頷いた後、絵里は瞳に自嘲の色を宿す。

「朝陽があの子達とPV撮影した日があったじゃない? それで、楽しそうに後片付け

をしていた朝陽を見た時、凄く腹が立った。どうして、貴女は笑顔なの。なんで、廃校まで時間がないのにそんなに明るいのって。そう思っちゃった私は、あの時の朝陽をまともに見られなかった。このままだと酷い事を言いそうだったから」

「絵里……」

まさか、絵里がそんな事を考えていたとは。

予想外の展開に二の句を告げない俺だったが、絵里は気にする様子を見せずに想いを吐露していく。

「その後も、近づいてくる廃校までの期限に、全く思いつかない良いアイデア。……気が付けば、どんどん自分がわからなくなっていくって、もう目の前が真っ暗になったわ。だけど、朝陽は楽しそうにμ sとずっと一緒にいた。私が悩んでいるのに、朝陽はμ sばかりで……嫉妬をしたの。私から朝陽を奪ったμ sに」

「えっ?」

目を丸くした俺を、疲れた様子で見つめた絵里。

暗い笑みを浮かべて肩を落とし、俯き気味に言葉を滑らせる。

「私は生徒会長として必死に頑張っているのに、同じように廃校阻止を目指しているμ sは、いつも笑顔。そんな彼女達が羨ましかった。お気楽な彼女達が妬ましかった。そこに朝陽も一緒にいるのが悲しかった。そして、朝陽が私から離れた事が一番辛かつ

た」

「ちよ、ちよつと待つて！ 私が離れたつてどういう事？」

慌てて問い返せば、絵里は俺から離れて目を伏せる。

「言葉通りの意味よ。朝陽は私から離れて、 $\mu$  sの方に行ったじゃない」

「た、確かに私は $\mu$  sを優先していたと思う。だけど、絵里には希先輩という親友がいるじゃないか。私がいなくても変わらないうらう」

当たり前前の事を言つたつもりだったのだが、絵里にとつては違うようだ。

大きく首を横に振るつた絵里は、想いを込めるように鋭い言葉を放つ。

「変わるわ！ 朝陽の言う通り、希は私の親友よ。大切な友達……でも、朝陽は私にとつて親友だけじゃない。朝陽は私の特別な人なの」

「とく、べつ？」

困惑の表情を向けた俺に頷き、絵里は胸元にそつと手を添えて微笑む。

「前にも言つたと思うけど、私に初めてできた友達が朝陽なの。辛くて悲しくて独りだった私に希望をくれたのが、朝陽なのよ。……きつと、朝陽にとつては大した意味がなかつたんでしょね。でも、お蔭で私は救われた。あの日、朝陽が孤独だった私を遊びに誘つてくれたから、こうして今を笑う事ができているの」

嬉しそうな絵里に、俺は自分でもよくわからないまま反射的に否定しようと口を開



く。

「……そんな事はない。絵里に私が声を掛けなくても、絵里には希先輩という大切な親友ができたはずだよ！ だから、私が特別な事はないと思うし、私がいなくても結果は変わらなかつた」

言い聞かせるように告げるも、絵里は穏やかな表情で微笑を湛えるのみ。

「かもしれない。朝陽がいなくても、私は笑えたかもしれない。希に助けられていたかもしれない。だけど、それは仮定の話。今ここにいる私は、朝陽に救われた。他でもない朝陽のお蔭で……心から、朝陽と出会えて良かったと思っっているわ」

「俺の、お蔭？ 出会えて、良かった？」

俺が絵里を救った……？

いや、俺がいなくても結果は変わらなかつたはずだ。変わるはずがない。

むしろ、半端に関わつたから今のような事態に陥っている訳で。俺がいなければ、希先輩が絵里を救っていたはずで。

だから、俺は希先輩のポジションを奪つた……そう、他人の居場所を盗んだ奴なんだ。絵里の言葉は、物語を知らないからこそ言える内容。

物語の事を知れば、絵里だって俺に感謝なんてしない——

「実は、朝陽に打算があつた事はわかつていたわ」

「えっ……?」

「自己満足か、同情かわからなかったけど。あの時の朝陽は、善意だけで私に手を差し伸べていなかったでしょ?」

「それ、は」

今振り返れば、様々な醜い感情があつた事は否定できない。

同じような孤独を抱えている事に親近感を覚えたし、憧れのキャラクターと知り合いになれるという下心もあつたのだろう。

絵里からすれば、勝手に境遇を重ねられて迷惑だっただろうが。

思わず言葉を濁らせる俺を見て、絵里は優しい面立ちで首を横に振る。

「ううん、いいの。あの時の朝陽がどんな考えだったのか、私には関係ないわ。だって、私が救われたのは事実だから。……改めて、言うわね。私と出会ってくれて、ありがとう」

柔らかく微笑んだ絵里に、俺は返事をする事ができなかつた。

潤っている蒼い瞳の中には、絶大な感謝の念しか満ちていない。

俺が考えている内容など関係ないと言わんばかりに。物語云々関係なく、俺の行動で救われたと示すように。

そんな笑顔を向けられたからか、心の底から様々な想いが溢れていく。

俺がした事は無駄ではないと褒めてくれた気がして。俺の行動が物語に良い結果を生んだと教えてくれた気がして。俺の自己満足が報われた気がして――

「う、うう……!」

「ちよ、ちよつとどうしたの!? いきなり泣いて」

「ありがとう……ありがとう……!」

とめどなく流れる涙が止まらず、嗚咽を漏らしながら何度も感謝する。

慌てた様子でアタフタする絵里を尻目に、俺はこの暖かい気持ちに身を任せるのだつた。

## 第四十三話 希の秘策

「——もう、大丈夫？」

「うん、ありがとう」

あれから、一頻り泣いた後。

ひとまず落ち着こうと、俺達は並んで腰を下ろしていた。

辺りには先ほどは違って、どこか心地よい雰囲気漂っている。

「それで、どうしていきなり泣いたの？」

「絵里に私も救われたって事さ」

「そ、そうなの？」

「うん、そうなんだ」

よくわからないが、俺が言った内容が嬉しかったのだろう。

俺から目を逸らした絵里の口許は、僅かに綻んでいた。

改めて頷けば、彼女は僅かに頬を赤らめて咳払いを落とす。

「ま、まあいいわ。話を戻すけど、*μ* *s*に嫉妬した私は身勝手な思いを抱いたの。そして、そんな彼女達と一緒にいる朝陽にもね」

「でも、あれは私に原因があったから絵里は悪くないよ。むしろ、当然の反応だと思う」

当たり前前の事を言ったのだが、絵里の表情は芳しくない。

緩やかに顔を伏せながら、言い聞かせるように口を開く。

「違うわ。あの時のは、私が勝手に朝陽を目の敵にしただけなの」

「いや、私が絵里を蔑ろにしていたから仕方ないんだって!」

思わず声音を鋭くした俺に、絵里の方も眉尻を上げて言葉を返す。

「さつきから違うって言うてるでしょ。もう、朝陽の頑固者!」

「そつちこそ! 絵里のわからず屋!」

「わからず屋ってなによ! 朝陽に酷い事をしたのは私なの!」

「だから、それは何度も言うように私に問題があったって言うてるじゃん!」

絵里と言いつ合っていると、不意に彼女の胸元に伸びる手に気が付く。

思わず目を丸くした俺を見て、絵里も同じような表情を浮かべる。

瞬間、俺達の耳朶じだを打つ悪魔が笑う如き染しげな声色。

「——喧嘩両成敗や」

「ひゃあつ!?!」

「きやあつ!?!」

胸を掴まれる感触を覚えた俺は、咄嗟に前方へ向かって宙返り。

しかし、思ったより動揺していたのか、途中で手が滑って頭を床にぶつけてしまう。「いたあ!？」

視界に散らばる星屑に、頭に走る鋭い痛み。

頭を抑えながらしやがみ込み、涙目で緩々と頭を上げる。

滲む視界に映ったのは、赤面して身体を抑えている絵里と、バツが悪そうに両手を合わせている希先輩だった。

というより、帽子を取って良かったのだろうか。希先輩の変装が解けて絵里にバレてしまうけど。

「ごめんね、朝陽ちゃん。まさか、こんな事になるとは思わなかったんよ」

「の、の、希!? どうしてこんな時にワシワシするのよ! ていうか、なんで貴女がここにいるの!？」

「ほ、本当だよ……しかも、私達二人同時とは」

「フフフ。ワシワシは日々進化しているんや。今のウチなら二人同時など容易い」  
ど、どうでもいい。

不気味な笑みで手をいやらしく動かしている希先輩に、絵里は心底軽蔑した眼差しを送っている。

「希。今の貴女、正直薄気味悪いわ」

「え、絵里ちも随分と言うようになったやん。……それにしても」  
「な、なんですか？」

頬を引き攣らせた後、希先輩は俺に目を向けた。

思わず後ずさる俺を見て、彼女はニヤアっと口許を歪める。

「いやいや。朝陽ちゃんも可愛らしい声を出すんだなって」

「なっ!？」

「何言ってるのよ。朝陽だって女の子なんだし、当たり前じゃない」

不思議そうに首を傾げる絵里だが、希先輩が言いたい事は違うのだ。

つまり、男の意識がある俺が女の子の悲鳴を出した、という事を指摘しているのだから。

「これからは希先輩に色々と弄られるんだろうな……今から気が重い。

「うう……」

「あはは、ごめんごめん。ちよつと意地悪しすぎたね」

「本当ですよ、全く」

近寄ってきた希先輩に悪態をつくつと、耳元で囁かれる。

「でも、絵里ちに言わなくていいん？ 今なら勢いで言えると思うんよ」

「……すみません。まだ、言えませんが」

「そっか……」

小さく首を横に振る俺を見て、希先輩は残念そうに眩きを漏らした。

絵里に俺の事を言おうかどうかは迷っていたが、流星に前世云々は信じて貰えないだろう。

正直、希先輩ならもしかしたらという気持ちがあつたのも否定しない。

しかし、絵里は真面目な性格だ。普通に考えて気が狂つたとも思われるだろう。それに、絵里はオカルト関係が苦手だし。

……いまだに、俺は絵里に打ち明ける事ができなかった。

「ねえ、なにコソコソ話しているの?」

「朝陽ちゃんにワシワシされた感想を聞いただけだよ? もっとやって欲しいなんて、朝陽ちゃんもワシワシの魅力にハマったん?」

「そんな事言っていないでしょうが! 変に捏造するのはやめてください!」

希先輩のせいで、こちらはペースを乱されっぱなしだ。いつの間にか、この辺りの雰囲気が明るくなっているし。

まあ、これが希先輩なりの気遣いだというのはわかっているが。

感謝半分呆れ半分のため息をついた後、悪びれもしない希先輩に声を掛ける。

「で、いつからここにいたんですか?」



「えーっと、朝陽ちゃんか絵里ちと水族館に入った時から？」

「ほとんど最初からじゃない！ ……あれ？ という事は、希はずっと私達をつけていたって事？ どうして、希は用事で行けなくなつたって言つてたのに。じゃあ、あの話は嘘で希が私達を騙していた？」

頭を抱えて独り言を漏らしている絵里を尻目に、希先輩は砂糖を飲んだような表情で。

「二人が付き合いたてのカップルみたいな雰囲気を出していて、見ていたウチは胸焼けしそつたつたんよ。チラチラお互いに目を合わしたり、よそよそしく会話したり」

「は、はあつ!? カップルとか、そんな雰囲気じゃなかつただろー！」

腕をさする希先輩の言葉に、思わず俺は声を荒らげてしまう。

あの時の空気をどう読めば、そのような馬鹿な考えに飛躍するのだ。

現に絵里も呆れた表情で……呆れた表情ではなく、何故か頬を赤らめていた。

「ま、全く。希は何を言っているのよ。私達はただの友達よ？ それに、女の子同士なんだからカップルのわけがないじゃない」

「……本音は？」

「朝陽が男の子だつたらなつてちよつと思つただけど……あつ」

思わずといった様子で口を抑える絵里。

しかし、吐きだされた言葉は俺の耳に伝わってしまった。

胡乱げな眼差しを送ると、絵里はついつと目を逸らす。

冗談、だよな？ 流石に、俺を恋愛対象に見るわけないよな？

うん、俺の自意識過剰だろう。いくら女同士の恋愛があるとはいえ、まさか絵里がそのような感情を抱くはずがないだろうし。

腕を組んで頷く俺に、何故か希先輩は白い目を向けてくる。

「朝陽ちゃんって、やっぱり鈍感やね」

「失礼だなー！」

「まあ、今は朝陽ちゃんの考えであっていると思うけど、気が付けば……なんて事もあるんよ？」

「そ、そういえば！ どうして、朝陽はいつもと喋り方が違うの？」

「あつ」

希先輩に意識を向けていたからか、絵里の前で男口調を使ってしまった。

気が抜けすぎだろ……どうしよう。とりあえず、今はなんとか誤魔化す事にしよう。

「これは、前にテレビで見た時に気に入ったから真似してみたんだ」

「……本当の事は教えてくれないのかしら？」

「うっ」

「なんだか希と仲良くなったような気がするし、私にはその理由を教えてくださいませんか？」  
捨てられた子犬のような瞳で見つめられた俺は、助けを求めて希先輩の方に目を向ける。

すると、彼女は顎に手を添えて悩む素振りを見せた後。

「絵里ち。悪いんだけど、今日泊まりにいつてもいい？」

「え？ まあ、亜里沙も喜ぶと思うから構わないけど」

「ありがとう！ じゃあ、朝陽ちゃん。ウチらも準備をしようか？」

「へっ？ どういう事ですか？」

「どういう事も何も、ウチと朝陽ちゃんの二人が絵里ちの家にお邪魔するんよ？」

「……なんでですか？」

疑問の声を上げた俺に、希先輩は楽しげな笑みを向けるのだった。

「——もちろん、絵里ちと朝陽ちゃんの仲直りパーティーや！」

絵里との水族館デートをした日の夕方。

結局、あれよあれよという間に希先輩に丸め込められ、俺も絵里の家に泊まる事になつてしまった。

迷惑ではないかと再三確認したのだが、当の絵里本人は満更でもない様子だった。

「全く、希先輩は何を考えているのか」

いまだに少しぎこちないとはいえ、絵里とは概ね仲が修復されたはず。

結果的に希先輩の言葉が正しかった以上、この泊まりにも何かしら意味があるのだろう。

微妙に納得いかない思いを抱きながら、俺は絵里宅のインターホンを鳴らす。

暫くすると玄関が開き、中からひよっこりと亜里沙が現れる。

「こんにちは、朝陽さん！ お姉ちゃんから話は聞いています」

「こんにちは、亜里沙。突然で申し訳ない」

「全然平気ですよ。どうぞ、中へ入ってください」

「お邪魔します」

亜里沙に案内されて、俺はリビングへと入った。

室内には絵里がおり、何やら忙しそうに準備をしている。

しかし、直ぐに俺が来た事に気が付いたようで。

「いらつしやい、朝陽。ちよつとその辺に座って待っててちょうだい」

「あ、うん」

大人しく椅子に座って絵里を眺める。

真剣な表情の彼女は、頻りにテーブルの上にあるホットプレートを動かしていた。

どうやら、自分が納得がいく場所に置けないらしい。

一体、絵里は何がしたいのだろうか。いや、夕御飯の準備をしているのはわかるのだ

が、そんな細かい所を気にしても仕方ないと思う。

うーん……ホットプレートに、野菜が置かれたお皿。そして、希先輩がメイン食材を

用意すると言っていたな。

やっぱり、夕御飯は焼肉という事だろうか。

まあ、希先輩は焼肉が好きだし、自ずと察せられるけど。

そんな風に考えている間に、絵里の納得のいく配置ができたようだ。

満足そうに頷いた後、絵里は亜里沙と共に手前の席に腰を下ろす。

「さて、これであとは希が来るのを待つだけね」

「焼肉楽しみだよね、お姉ちゃん！」

「そうね。希に野菜を用意しとけって言われたけど、焼肉って一体どんな料理なのかし

ら。朝陽はどんな食べ物か知ってる？」

「えっ？」

もしかして、絵里って焼肉を食べた事がない？

いやいや、流石に焼肉ぐらいならどういいう料理か知っている……知っているよな？

え、嘘。本当に焼肉を知らないの？

密かに愕然としている俺を尻目に、絵里と亜里沙はキヤツキヤと話していく。

「きつと、焼肉という名前からお肉を焼く料理よ！」

「ハラシヨー！　じゃあ、このお野菜は何に使うんだろう？」

「うーん、そうねえ。多分、お肉で野菜を包むんじゃないかしら？　そうすれば、お肉と

野菜の両方を摂取できて、栄養バランスもいいし」

「お姉ちゃん！　焼肉って凄い料理なんだね！」

「そうね。希も中々センスのある料理を選んだじゃない」

感心した素振りを見せる絵里と亜里沙に対し、俺は酷く微妙な表情を浮かべてしまった。

いやまあ、絵里達の予想で和んだのは事実なんだけど。どこかポンコツ具合が漂っている感じが、なんとか涙を誘う。

思わず目頭を押さえていると、この家のチャイムが鳴り響く。

「希が来たようね。迎えに行つてくるわ」

「行つてらっしゃい」

席を立つた絵里を見送つていた俺は、嬉しそうに笑う亜里沙に声を掛けられる。

「朝陽さん。ありがとうございます」

「ん？ いきなりどうしたんだい？」

突然の言葉に首を傾げた俺を見て、亜里沙は絵里が出ていった扉に目を向けて口を開く。

「今日のお姉ちゃん、凄く嬉しそうだったから。きっと、朝陽さんのおかげなんだろうなあって思ったんです」

「いや、私は特に何もしていないよ」

「そんな事ないです！ 最近のお姉ちゃん、いつも難しい顔をしたり、悲しい顔をしたりしていたんです。だから、今日みたいにお姉ちゃんが嬉しい顔をしたのは、朝陽さんのおかげです！」

「……むしろ、お礼を言いたいのは私の方だよ」

「えっ？」

目を瞬かせる亜里沙が何か言おうとしていたが、部屋に絵里と希先輩が戻ってきた事により、その言葉は声にならなかつた。

希先輩はニヤリと口角を上げ、手に持つ袋をテーブルの上に置く。

「今日のお肉は美味しいやつや！」

「希、早く焼肉というものを食べましょう！」

「まあまあ、絵里ち。ここはウチに任せて絵里ちは座ってて」

「むう……わかったわよ」

渋々といった様子で絵里が座るのを見た後、希先輩はキラリと瞳を光らせる。

「じゃあ、さっそく焼肉パーティーをするよ！」

この言葉がきっかけで、仁義なき戦いが始まってしまふのだった。



## 第四十四話 感謝の想いを込めて

そのまま肉を巡って争いが勃発するかに思えたが、希先輩の取り成しによつて平和な焼肉パーティーとなった。

初めての焼肉に大喜びの亜里沙や、焼き加減を間違えて涙目になる絵里。他にも肉奉行と化した希先輩に、野菜も焼きすぎて苦そうにしていた絵里など。

概ね楽しく夕御飯は終わるのだった。

そして現在、俺は絵里の部屋で寝る準備をしていた。

後片付けや風呂も済ませており、後はもう眠るだけというわけだ。

にしても、まさか俺が絵里の部屋で一緒に寝る事になるとは思わなかったな。

てつきり希先輩とリビングで寝ると思っていたのだが、いつの間にかこのような配置になっていたのだ。

なお、希先輩は亜里沙と親睦を深めるために一緒に寝るのだとか。

「こっちの準備は終わったよ」

「私の方も用意はできたわ」

借りたお客様用の布団を敷き終わった俺は、絵里と向かい合つて座り込む。

ベッドに腰かけている絵里から目を逸らし、この少々気まずい空気にため息が零れそうになる。

夕御飯を食べている時は、希先輩や亜里沙のお蔭でそこまで変な空気にならなかった。

しかし、今のよう二人っきりの現状、やはりまだぎこちなくなってしまう。

それでも、つい最近までの剣呑な雰囲気と比べて雲泥の差なのだが。

……まあ、気まずく感じられる余裕ができたと思えば、むしろ俺としては少し嬉しい思いも湧き上がるんだけど。

思わず笑みを漏らしていると、困惑気味な絵里に声を掛けられる。

「なんで笑ってるの?」

「ん、いや。ただの思い出し笑いのようなものだよ」

「そう?」

視線を戻せば、小首を傾げている絵里の姿が目に入った。

いつもと違って髪を下ろしており、艶やかな黄金色の髪が煌めいている。

正直、今の絵里は俺の好みドストライクな出で立ちなので、初対面だったらキョドつてまともに目を合わせられなかつただろうな。

まあ、今は女だからそんな意識もほとんどないし、そもそも大事な友達をそういう風

には見られない。

……憧れとしてだったら、恐らくベストスリーに入るだろうけど。

と、こんな事を考えても意味がないだろう。

意識を切り替えた後、俺は笑顔で今日の出来事を振り返っていく。

「焼肉、美味しかったね」

「ええ、こんな料理があつたなんてね。驚いたわ」

「絵里も肉や野菜を焼くのを楽しんでたし……大体焦がしていたけど」

笑みにかからかい混じりの色を含ませてそう告げれば、絵里が頬を赤らめて目線を斜め上に逸らす。

「あ、あれは仕方なかったのよ！ 初めてだったんだもん」

「それにしてもねえ。『お肉はいっぱい焼けば美味しくなるに違いないわ！』って、普段料理をしている絵里ならダメだってわかると思うけど？」

わざとらしく声真似をして尋ねると、口をへの字にしてそっぽを向く絵里。

声音に羞恥の感情を混ぜこみながら、彼女はそわそわとした様子で指を立てて回していく。

「そ、それはね？ お肉を焼くのが楽しかったというか、焼ける音をずっと聞いていたかったというか、朝陽とご飯を食べられてテンションが上がったというか……」

「へっ?」

最後、俺に関しての事を言っていないかったか?

思わず素つ頓狂な声を発した俺を、絵里はキツと可愛らしく睨んで口を尖らせる。

「だから、朝陽と仲直りできて凄く嬉しかったのよ! それで、今日は朝陽をずっと見ていたかったの! もう、全部言わせないでよ……」

頬に桜を散らした絵里は、両手で顔を覆って恥ずかしそうに縮こまってしまった。

対して、俺は突然の不意打ちに全身が熱くなつていく。

「ご、ご飯中にも絵里に見られている気がしていたが、つまり俺と一緒に嬉しかったという事か?」

それで、肉を焼くのに集中しきれなくなり、結果として焦げてしまったと。

どうしよう。凄く恥ずかしい。俺も同じような事を考えていただけに、絵里の言葉は非常に共感できて羞恥心がマシマシだ。

……ああ、だから希先輩が砂糖を飲み込んだ表情を浮かべていたのか。

やたら俺や絵里の方を見てもどかしそうにしていたけど、つまり俺達の雰囲気は初々しい友達のやり取りにでも見えたのだろう。

友達に、だよな。まさか、絵里とカップルに見えたなんて事はないよな。

うん、そうに違いない。女の子同士なのにカップルなんてありえないし。

……希先輩がブラックコーヒーを飲みたそうな表情をしていたのは、きつと俺の勘違いだ。

呼吸を整えて感情の波を抑えた俺は、微動だにしない絵里に言葉を返す。

「私も、絵里と同じような事を考えていたよ」

「えっ?」

「その、やつと仲直りできたから、絵里と焼肉するのが嬉しかったし、こうして二人つきりて話せて今も顔がニヤけそうになるし」

「そう……そっか。朝陽も私と同じ気持ちだったんだ……」

頬を搔いてしどろもどろに告げた俺を見て、絵里は小さく頷いて頬を綻ばせた。

胸の前で組んだ指を忙しく絡ませているその様子は、どこか花陽に似た愛らしさで可愛らしい。

しかも、それが普段はクールビューティータイ的な雰囲気を漂わせている絵里がしているので、自然と心臓を高鳴らせて直視できなくなってしまう。

さり気なく目を逸らしながら、俺は不自然にならないように話題の転換を試みる。

「亜里沙も焼肉を楽しんでくれたみたいだし、今日の希先輩の提案は大成功だったよね」「そうね、流石希だわ。……あ、そうそう。どうして、水族館に希がいたのかしら? たしか、あの時はなんだか有耶無耶にされたような気がするのだけだ」

顎に指を添えて首を傾けている絵里。

上手く話を逸らせたようだが、代わりに希先輩の行動に引っかけたらし  
い。

確かに、希先輩は素直に尾行していた事を白状していたけど、ノリと勢いで話を強引  
に終わらせていたよな。

俺としては、どちらかと言えば希先輩サイドについていたので、絵里の問いに答える  
口は持ち合わせてないのだが。

いやまあ、別に本当の事を言っても大きな問題はないけど。

「まあ、そこは希先輩だから」

「……希ならなんでもできちやいそうよね」

「カードが告げるんや！　ってね」

「ふふっ、確かに言いそうだわ」

指にカードを挟む仕事をしてドヤ顔を向ければ、絵里も笑みを落として頷く。

希先輩という言葉だけで誤魔化せたな。

流石希先輩と褒めれば良いのか、適当に纏められて不憫に思えば良いのか。

少なくとも、希先輩はスピリチュアルガールとしてのポジションを順調に築いてい  
る。

本人に言ったら、不服そうに眉を上げてワシワシしてきそうだけど。ウチはどこかのネコ型ロボットのようになんでもはできない、と。

まあ、俺の事を受け入れている時点で、その度量の深さは窺えるのだが。改めて、希先輩には感謝の念しか湧かない。

きつと、他の人なら希先輩のように俺の言葉を信じてくれなかっただろう。いや、穂乃果辺りならケロッと信じそうだ。

海未や真姫など真面目なタイプなら、そう簡単にいかなかっただろうけど。

……いつか。いつの日か、俺の全てを皆に言える時は来るのだろうか。心から信頼できて、なおかつ自身に勇気が持てて、皆と向き合う時が。

「朝陽?」

「ん、どうしたの?」

「……ううん。なんでもないわ」

黙って俺を見つめていたが、やがて絵里は頭を振って微笑んだ。

不思議に思っただけで首を捻っていると、彼女はベッドから降りて手前に座る。

自然と距離が近くなり、絵里の方からふわりとした甘い香りが漂う。

「い、いきなりどうしたんだい?」

「ん」。もう少し近くで朝陽を見たかったからよ。ダメかしら?」

「ダメじゃないけど……」

色々と心臓に悪い。

手を伸ばせば簡単に届く距離にいるし、真っ直ぐ見つめてくる絵里の蒼目に吸い込まれそうになる。

こうして間近で見ると、やはり絵里は凄く綺麗だよな。

肌はすべすべで弾力がありそうで、しっとりとした赤ん坊のような肌触りを容易に想像できそうだ。

顔立ちは恐ろしく精巧に整っており、思わず感嘆の息が漏れそうになる。

……やばい。意識したから絵里の顔をまともに見られない。

熱くなった顔を背けると、絵里の方から不思議そうな声が耳に入ってくる。

「どうしたの、朝陽?」

「な、なんでもないよ!」

声を上擦らせた俺の言葉を聞き、絵里は瞳に好奇心を宿して身を乗りだす。

「そんなわかりやすい嘘が通用すると思ってるの? いいから、私に教えなさい」

「いやいや! 本当になんでもないから!」

「ますます怪しいわね……えいつ」

「へっ?」



ニヤリと口角を上げた絵里は、俺を押しして横たわらせた。

意識の合間を縫われたため、あっさりとは仰向けに倒れ込んでしまった俺。

呆然とした俺の腹に乗り、絵里は両手をワキワキさせながら口を開く。

「ふふふつ。素直に教えないと希直伝のワシワシMAXをするわよ?」

「や、やめてー! 本当にそれだけはやめて! 希先輩のはシャレになってないから!」

「じゃあ、どうして私から目を逸らしたのか白状しなさい」

どこか楽しげに笑っている絵里からは、Sっ気が見え隠れしている。

久しぶりの俺との交流だからか、絵里にとってこれはじやれ合いの範疇らしい。

しかし、それは絵里の中の話であり、俺にとっては非常にまずい展開だ。

具体的に言うと、さっきまで意識しないと思っていた人を意識してしまい、そんな人に乗られているという状況。

俺でなくても取り乱してしまうと思いたい。

正直、こうやって現状を冷静に分析しているように見えるが、実際には一周回って悟りの境地にたどり着いたというか。

体勢から色々と見えてしまうような気がした俺は、慌てて顔を横に向けて口を開く。

「黙秘権を行使します」

「ダメよ。ここ最近の出来事で、朝陽も希みたいにくすぐりするのが好きってわかった

わ。前から私に色々と隠していたんでしょ？」

「そんな事は……」

ない、と否定する事はできなかった。

実際、隠れてμsと絵里の間を行ったり来たりしていたから、こうして絵里と喧嘩をしてしまう事態になっていたのだ。

まあ、希先輩のように上手く立ち回る事ができなかった違いはあるけど。

口籠る俺を見て、絵里は俺の顔の両脇に手をつき、ゆっくりと顔を近づけていく。

天井の照明に照らされ、絵里の顔全体に影が差す。

さらりと煌めく金髪が垂れ、俺の頬にかかる。

髪と同様に輝くサファイア色の瞳に決意を灯し、絵里は酷く真面目な表情で告げる。

「水族館で希と話した時。いつもと口調が違ったわよね」

「それはあの時に言ったように——」

「嘘」

「——っ！」

短く言葉を切り捨て、俺の左頬に優しく手を添えて顔を自身に向けさせる絵里。

横目で見ていた視線ががち合い、俺は無言を言わせない迫力に息を呑む。

絵里は本気だ。本気で俺から全ての秘密を聞こうとしている。丸裸にして隠し事を

暴いてやる、という想いが瞳から溢れだしている。

「希は何か知っているみたいだけど、それは私には決して言えない内容なの?」

「……」

「私はどんな事でも、朝陽を拒絶したりしないわ。だから、教えて」

強い口調で告げる絵里の表情とは裏腹に、頬に添えられた手は僅かに震えていた。

恐らく、直接接触られていたから気が付けたのだろう。

今までのただの親友とは違い、更に一步踏み込んだ特別な関係。

今の絵里からは、正真正銘壮絶な決意が垣間見えていた。

……だけど、それでも。絵里に本当の事を言っていないのだろうか。

絵里が生半可な覚悟で聞いたわけではないと理解している。

しかし、どうしても本当の事を知った絵里の対応が怖い。

顔を抑えられて目を逸らせなかったが、そんな俺の気持ちも伝わったのだろう。

数瞬唇を噛み締めた後、絵里はほとんど密着するほどに顔を寄せ、睨んでいると言わ

んばかりに鋭い眼光で俺と目を合わす。

「もう一度言うわ、朝陽。貴女が抱えている悩みを全部教えなさい」

「……どうして?」

「決めたのよ。もう、迷わないって。貴女と喧嘩して、私は凄く辛かった。だから、今度

はお互いに全てをさらけ出して、心から友達と思えるような関係になりたいの。……二度と、後悔したくないのよ」

微かに涙を湛えながらも、絵里は泣かない。

最後に告げられた言葉に、思わず俺は目を大きく見開いて驚愕を露にする。

そこに込められた想いの大きさを察したから、絵里の気持ちが痛いほど伝わったから。

完全に絵里の覚悟に呑まれた俺は、震える声で呆然と呟く。

「本当に……知りたいの？」

「ええ」

「どうして？」

「朝陽が大切な親友だからよ」

「知らなかった方が良かったと思うかもしれない」

「それはありえない。だって、朝陽の事をもっと知られたんだから」

打てば響くように、即座に帰ってくる絵里の返答。

徐々に視界が滲む中、俺は込み上がる想いに身をゆだねていく。

希先輩の時もそうだったが、絵里の場合とは違う。

俺にとっても、絵里は特別な人なのだ。

だからこそ、そんな彼女に求められるのは、耐えきれないほどの幸福感に包まれてしまおう。

……俺の負けだな。

これ以上誤魔化すのは、絵里にとっての最大限の侮辱だ。

もう、意地を張って心に蓋をするのはやめよう。

少なくとも、絵里と希先輩の前では俺らしくしよう。

それが、ここまでの意志を見せてくれた二人の覚悟への返事になるのだから。

ふっと全身から力を抜いた俺を見て、絵里は俺が折れたと理解したらしい。

喜色に孕んだ様子で指を使い、俺の頬に垂れる涙を拭っていく。

「教えてくれるのね？」

「流石にここまでされればね。だから、もうどいていいよ」

「どかないわ。朝陽が逃げるかもしれないもの」

「……はあ、もう勝手にして」

両手を挙げて降参の意を示した後、俺はできるだけ平坦に自身の秘密を明かしていく。

自分に男の意識がある事。ある程度今後の未来を知っている事。希先輩にそれらがバレてしまった事。元々、他の人に教えるつもりはなかった等々……。

真剣な表情で話を聞いている絵里を尻目に、俺は胸中に過ぎる恐怖と戦っていた。

絵里に拒絶されないか、気持ち悪がられないか、頭の病気を疑われないか、と。

特に、ある程度期待していた希先輩と違い、絵里はそういう事に耐性がない。

だから、下手すれば今日はこのまま家を追い出される可能性すらある。

考えてしまうネガティブな思考に、俺は泣きそうになるのを抑えながら、一通りの事を話し終えた。

一息ついて目を伏せていると、両頬に手を添えられる。

「絵里？」

「話してくれてありがとう」

「え、それだけ？　なんかこう、もっと言う事がないの？　キモイんだよとか」

目を丸くして尋ねるが、絵里は穏やかに目を細めて首を振った。

「まさか、私が朝陽にそんな酷い事を言うわけじゃないじゃない」

「な、なんで！」

「いまだに現実感がないってのもあるけど……一番は」

絵里はそこで言葉を区切ると、ふわりと柔らかく微笑む。

「どんな秘密があっても、朝陽は朝陽でしょ？」

「――」

まさ、か……まさかまさかまさか。希先輩と同じ事を言うなんて！

確かに、希先輩は絵里達も同じような言葉を返すとは言っていたけど。

いまだに信じられない。絵里が俺を肯定してくれた事を。

文字通り頭が真つ白になっていると、絵里は堪えるように目を伏せて。

「朝陽はそんな辛い悩みを抱えていたのね。気づいてあげられなくてごめんなさい」

「そんな！ 絵里は悪くない！」

「ううん。私がつと朝陽の事をわかってあげられれば」

「はえ？」

そう告げた絵里は、俺を優しく抱きしめた。

暖かな彼女の体温と混ざり合い、微睡みに包まれているような錯覚に陥る。

まともに反応もできないでいる俺の頭をゆっくりと撫でながら、絵里は慈愛に満ちた

声色で話す。

「朝陽は私と会った時から……ううん、それよりずっと前から一人で頑張ってたのね」

「やめっ……やめて」

「朝陽は未来を知っている事が嫌みただから、あえて言うわ。未来を知ってくれて、あ

りがとう。貴女が未来を知っていたから、こうして私は大切な友達ができたのよ」

「ち、違う！ 私……俺がいなくても希先輩がいたから！」

何度も激しく否定するのだが、絵里は俺の意見を聞き入れようとしなない。

「私と知り合ってくれて、ありがとう。私に秘密を打ち明けてくれて、ありがとう。孤独だった私に声を掛けてくれて、ありがとう」

「う、あ……」

「――産まれてきてくれて、ありがとう」

最後に囁かれた言葉に、もう俺は溢れる感情を抑えきれなくなった。

声なき泣き声を上げながら、絵里にみつともなくしがみつく。

今まで、常に心の奥底で渦巻いていた気持ち。

この世界の異物だといつまでも考えてしまい、理性では違うと理解していても、決して収まる事のないヘドロのような呪い<sup>思</sup>。

だけど、絵里に肯定されたように思えて、貴女もこの世界の住人だと許してくれた気がして。

ようやく、自身と向き合えるようになれて。

「ううあ……」

涙を流す俺の頭を、黙って撫でてくれる絵里。

その気遣いがありがたく思いながら、俺は場違いにも最近によく泣くな、と頭の冷静な部分が考えてしまう。



絵里と喧嘩して慟哭しそうになり、希先輩に諭されて嗚咽を漏らし、絵里と仲直りできて喜びの涙を流し、そして絵里に肯定されて嬉しさのあまり号泣する。

一生分の涙を使い果たした気すらする。涙腺が緩くなっているのだろうか。

「ごめん、もう少しこのまま……」

「ええ、いいわよ。気が済むまで泣いてちょうだい」

「……ありがとう」

無理に落ち着かせようと思いを飛ばしていたのだが、やはり暫く涙が止まりそうになり。  
い。

改めて絵里に感謝しつつ、俺はこの暖かな感覚に浸っていくのだった。

## 第四十五話 小さな兆し

「——おはよー」

教室の扉を開けて挨拶をすると、机に座っていた穂乃果が顔を上げる。

「あ、朝陽ちゃん。おはよう！ 今日もいい天気だね」

「そうだね。今日は絶好のお散歩日和だろうね」

「うんうん。流石、朝陽ちゃんはわかってるう。だから、穂乃果も今日の放課後はお外を歩こうかなって思ってるんだよね！」

えへへと笑って頭を掻く穂乃果を見て、側にいた海未は眉尻を上げて口を開く。

「何を言っているのですか、穂乃果は。テスト勉強をしなきゃいけませんのに、そんな油を売っている暇なんてありません！」

「おはよう、海未。それで、穂乃果の調子はどうなの？」

「おはようございませす。見ての通りです」

海未の視線の先を追えば、穂乃果の机の上にとっさりと参考書が積まれていた。

しかも、付箋などが沢山貼りついており、この短期間でよほど使い込まれたと窺える。

まあ、穂乃果が参考書を弄ったというよりは、海未が説明するために使ったんだと思

うけど。

穂乃果も大変だっただろうに。苦手な勉強をここまでやらされて。

「うう……朝陽ちゃんの同情した目が染みるよお」

「これも赤点を回避するためです。さ、穂乃果。もうひと踏ん張りですよ！」

「な、なんか海未ちゃんの方がノリノリになってない……？」

大いに怖いという穂乃果はさておき。

先ほどから、俺は非常に気になっている事があるのだ。

その疑問を解消するべく、穴が開くほど俺を凝視してくることに声を掛ける。

「どうしたんだい、ことり？」

「……」

「ことり？」

穂乃果達も気になったのか、不思議そうな面立ちで俺達に注目していた。

六つの視線が注がれる中、不意にことりはほっぺたを大きく膨らませていく。

「……………むう〜」

「いきなりどうしたの、ことりちゃん？」

「そうですよ。朝陽がどうかしたんですか？」

問いを投げかける二人を尻目に、瞳に批難の色を含ませることり。

唐突な展開に思わず首を捻っていると、彼女はどこか確信した口調で言う。

「朝陽ちゃん。良いことがあったでしょ?」

「えっ?」

「今の朝陽ちゃん、前より明るい雰囲気とするもん。大きな荷物を置いたというか、何かから解放されたみたいない感じだよ」

それって、絵里達との出来事を言っているのだろうか。

確かに、昨日絵里の家に泊まった時、仲直りしたり色々と話せて充実していたが。

まさか、ことりの口からその事がでるとは思わなかったな。いや、ことりの勘か何かで俺の変化を読み取ったのだろう。

昔から一緒に幼馴染だから、俺は彼女がそういう細やかな所に気が付くのは知っているし。

ことりの言葉を聞き、穂乃果達も俺の顔をまじまじと見つめだす。

「うーん。たしかに、なんとなく変わったような?」

「言われてみれば、そんな気がしなくもないですね。何か良い事でもあったんですか?」

「まあ、あつたと言えばあつたよ」

昨日、泣いた後は絵里と様々な事を話し合ったのだ。

俺の意識に関しては、絵里が気持ち悪がって引かなくて良かったよ。未来について

も、今後は希先輩と会議をして具体的な方針を決める事となつてゐるし。

まあ、絵里は未来の内容を聞かないようにするつもりのようなのだが。なんでも、そんな不確定な未知より、目の前の既知を一步一步踏みしめていきたいとか。

絵里らしい真面目な返答に、思わず眩しきで目を細めたのも記憶に新しい。

ともかく、そんな感じで絵里とは更に仲良くなれた気がして、俺としても久しぶりに心から笑えた夜になつたのだ。

だからだろう。

ことり達が見てくる中で、口許を緩ませて頬を搔いたのは。

そんな俺の様子をばつちりと見たことりは、益々頬を膨らませて眉根を寄せる。

「ううー!」

「本当にどうしたんですか、ことり?」

「さつきから変だよ?」

訝しげな海未達の疑問に、首を横に振つて答えることり。

「わかんない、わかんないの。でも、今の朝陽ちゃんを見ていると、なんだか胸が苦しくなつてくるの」

ギョツと胸元に手を添え、ことりは悲しさからか目を伏せた。

……これは、ひよつとしなくても、俺の秘密に関して勘づいている?

自分達が除け者にされたような感覚を抱いたから、辛くて胸を抑えているのか？

元々、ことりは俺の知っている中で、かなり勘が鋭い友達だ。だから、μsの中で一番初めに俺の秘密を察するのも彼女だと思っていた。

しかし、それにしたっていくらなんでも早すぎる。中庭で話した時ぐらいだ。ことりにバレそうなミスを犯したのは。

いや、これは俺の不注意というより、ことりの慧眼を讃えるべきだろう。俺の予想以上に、他人の機敏を察するに長けていたという事なのだから。

……ことり達にも、本当は全て伝えるべきなのだろう。

絵里達と同じぐらい大事な友達なんだから、片方だけに肩入れするのはおかしい。

だけど、話すのはまだ先だ。少なくとも、廃校が阻止できて、ことりの留学問題に一段落ついてからだ。

今話して、ことり達に未来の不安を抱えてほしくない。きつと、俺が教えたなら洗いざらい未来の内容を聞きだしてくるだろうから。

小さく息を吐いて気持ちを切り替え、上目で見つめてくることりに言葉を返す。

「それは、ことり勘違いだと——」

続く言葉は、縋るようなことりの眼差しに止められた。

……駄目だ。ここで誤魔化すのは、ことり達にとっての最大限の侮辱だ。

俺のために心を砕いてくれたのだ。せめて、答えられる範囲だけでも誠実にしよう。固唾を呑んで見守る三人へと、俺は申し訳ない表情を向ける。

「——いや、すまない。私は、ことり達に秘密にしている事がある」  
「秘密？」

「どんな秘密ですか？」

「今は言えない」

否定した俺を見て、ことりは諦めた様子で笑う。

「やつぱり、私達の知らない所で朝陽ちゃんが救われたんだね」

「救われた？」

「そう、だね。私は確かに救われた」

「ねえ、さつきからなんの話をしてるの？」

話についていけないのだろう。

穂乃果と海未は頭にクエスチョンマークを浮かべており、頻りに首を捻っている。

やはり、ことりが特別鋭すぎるだけか。俺のポーカーフェイスのお蔭で、穂乃果達には小さな違和感しか覚えさせていないようだし。

密かに確認していると、おとがいに指を添えたことりが微笑む。

憂いを帯びているが、それ以上に硬い決意を秘めた綺麗な瞳を細めながら、瑞々しい

唇を開いて告げる。

「誰かに言ったって事は、いつかは私達にも教えてくれるんだよね？」

「うん。必ず、ことり達にも話す。そう決めたから」

「……そっか」

小さく呟いたことりは、くるりと回って穂乃果達の方を向いた。

腰の後ろで両手を組み、左に傾けた身体と一緒にグレーの髪を揺らす。

ふわりとことりの香りが漂い、辺りが優しい雰囲気にも包まれる。

「じゃあ、朝陽ちゃんが話してくれるまで待つてるね。それが、今のことりにできる事だから」

「……ありがとう」

「ぶーぶー！ どーして穂乃果達を置いてきぼりにするのー！ 穂乃果達にもわかるよ

うに教えてよー！」

「うーん、それより穂乃果ちゃんはテスト勉強をした方がいいんじゃないかなあ？」

「うえ!? なんて言っちゃうのお。せつかく誤魔化せたと思ったのに」

もう勉強やだあ、と項垂れた穂乃果。

そんな彼女の様子を見て、海未が大きなため息を零した後、俺の方に近づいて耳元で囁きかけてくる。



「朝陽。今日の放課後、時間ありますか？」

「ん、あるけど。μ μ s に関しての相談事？」

「そう、ですね。μ μ s についてです」

若干、歯切れが悪い返事だったが。

海未は俺の言葉に頷き、改めて穂乃果に勉強を教えはじめた。

一体、海未は俺にどんな用事があるのだろうか。そんなに悪い話だとは思えないが、念のため心の準備をしておいた方がいいか。

内心で首を傾げつつ、俺も穂乃果の勉強を手伝うのだった。

放課後、俺は海未に屋上へと連れていかれた。

人気のない場所に向かう途中で、何やら三人ほどの悲鳴が聞こえた気がしたが、まあ俺の空耳だろうな。

「それで、こんな所まで来て話したい内容って？」

背中を向けている海未に尋ねると、彼女は振り返って俺の顔を真っ直ぐと見つめる。微かに緊張を滲ませた表情を浮かべ、どこか聞くのを迷う口振りで言う。

「朝陽は、生徒会長と仲が良いんですか？」

「……いきなり、どうしたんだい？」

「否定しないんですか。やっぱり、朝陽は生徒会長と親しい間柄なんですね」

断定口調で言い切られた俺は、観念して両手を挙げる。

「まあ、隠していた事でもないし。そうだよ。私は生徒会長……絵里とは友達だ」

俺が素直に認めたからか、海未の顔が少し柔らかくなった。

風に靡くさらさらとした青髪を抑えながら、目の前の幼馴染は視線を青空に向ける。

「私は少し前、生徒会長の妹に会いました」

「亜里沙に？」

「ええ。その時に朝陽の事を聞いたので、貴女が生徒会長と仲が良いと知りました」

「なるほど……でも、本題はそれじゃないんでしょ？」

亜里沙に会ったという話は、海未にとって本題ではないのだろう。

天を仰ぐ彼女の横顔に浮かぶ、儂い色。吹けば飛びそうな花卉の如く弱々しく、しかしそれ以上に艶のある不思議な表情を見せていた。

思わずドキリとした俺を尻目に、海未は迷子の子供のように首を振る。

「朝陽。今まで私達がしていた踊りは、なんだったんでしょか」

「えっ?」

少し乱れた髪を撫でつつ、緩やかに紡ぐ海未の言葉は止まらない。

「成長している実感はあります。このままでも、μ、sはどんどん魅力的になっていくでしょう。今まではそれで満足していました。現状に甘んじていました。ですが、それではいけなかつたんです」

「海未?」

ここで初めて、海未は俺の顔を見る。

ふつと息を漏らし、自嘲げな笑みを落とす。

「私、見てしまったんです。本当に人を虜にする踊りというのを」

「……もしかして、絵里のバレエかな?」

「やはり、知っていましたか」

「まあ、昔に見せてもらったからね」

確かに、絵里のダンスは凄まじいものだった。

息をするのも忘れて心から魅入り、思わず感動で涙を流しそうになったほどだ。

改めて、人の踊りはここまですべて心揺り動かすんだって実感したな。

あれほどの感動を覚えたのは、初めて真姫の伴奏を聴いた時と、μ、sのファースト

ライブの時だけだろう。

……μ sのメンバーが皆凄すぎて、凡人の俺には眩しい。

「あのダンスを見た時、私は思ってしまったんです。今のままでいいのか、μ sの実力はこの程度なのかって」

「海未の気持ちはわかったけど、それと私が呼ばれた事の関連性がわからないんだけど？」

ある意味突然な俺の問いかけに、こちらへと近寄る事で応える海未。

目の前で足を止めると、真剣な眼差しで俺の目を射抜く。

「そこで、朝陽にはお願ひがあります。生徒会長に私達の練習を見てもらえるよう、協力してくれませんか？」

……なるほど、読めてきたぞ。

となると、今後する予定の考えからして答えるべき返事は――

「それをするに関して、海未には協力して欲しい事があるんだ」

「私に、ですか？」

「うん。廃校を阻止するためには、とつても大事な事」

俺の声に含まれた真剣さを感じ取ったのだろう。

目を丸くしていた海未の表情が引き締まり、ゆつくりとした動作で頷く。

「私にできる事ならなんでもします。ですから、朝陽の考えを聞かせてくれませんか？」  
「ありがとう。じゃあまずは——」

絵里、希先輩。

必ず、貴女達を笑顔にさせてみせるから。心から笑えるようにしてみせるから。  
だから、もう少しだけ待っていて。

密かに決意を固めつつ、俺は海未に己の考えを明かしていくのだった。

## 第四十六話 廃校へのカウントダウン

「——じゃーんー！」

満面の笑みで穂乃果が取り出したのは、赤点を免れた数学の答案用紙。

改めて、無事にラブライブ出場できる事を実感したのだろう。

部室内にいた皆が喜色に孕んだ表情を浮かべ、思い思いに心境を吐露していく。

「おめでとう、穂乃果！」

「凄いよ、穂乃果ちゃん！」

「これで凜達は練習ができるにやー！」

「たかがテストだけで大袈裟ねー、まったく」

「そういうにこ先輩も、かなりヤバかったんだけど？」

「あはは……」

姦しく騒ぎはじめた<sup>ら</sup>、sの面々を見て、海未は手を叩く事で視線を集める。

「喜ぶのはまだ早いです。これから、理事長にラブライブ出場の許可を貰わなければいけないんですから」

「そうそう。勝って兜の緒を締めよ……むしろ、ここからが本番だからね？」

海未の隣でそう告げれば、穂乃果達は表情を引き締めた。

「うん。このラブライブで、廃校を阻止してみせる！ だから、早く理事長のところに行くよー！」

拳を握って退室した穂乃果に続き、μ'sの面々は部屋を後にしていく。最後に俺が扉を閉め、待っていた海未と並んで穂乃果達を追いかける。

「……大丈夫でしょうか」

明るい雰囲気の間を見て、不安げな言葉を落とした海未。

言外に含まれた意味を感じた俺は、窓から覗く太陽を見ながら口を開く。

「なるようになるさ。そのために海未をこちら側に引き込んだんだし」

「まったく、朝陽も人が悪いですね」

「否定はしないよ」

口調の割に、海未の顔は綻んでいた。

目を優しく下げ、ここにはいない誰かに思いを馳せるように笑う。

「みんな、頑固者です」

「その筆頭が海未だからねえ」

「そ、そんな事はありませんよ！ 私はただ、少々羞恥心が他人より強いだけで」

「ふふつ、そういう事しておくよ」

「朝陽！」

海未の声を無視して、俺は勢いよく扉を開けて中に入る穂乃果に続く。

室内には、先ほど入室した穂乃果の他にも絵里と理事長がいる。

困った様子で眉尻を下げる理事長に、厳しい表情を浮かべている絵里。

……ついに、ここまで来たか。

「廃校ってどういう事ですかっ！」

「穂乃果、落ち着いて」

「っ……朝陽ちゃん」

いきり立つ穂乃果の肩に手を置き、俺はこちらに顔を向ける絵里に頷く。

対する彼女も小さな頷きを返し、手を組んで肘をつく理事長に声を掛ける。

「二週間後のオープンキャンパス。その時に良い結果を出せれば、廃校は見送られます

よね？」

「ええ。廃校になるかは、オープンキャンパスに来てくれた方々のアンケート結果次第です」

「ま、まだ決まったわけじゃないんだ。良かったあ」

胸を撫で下ろす穂乃果の顔を、絵里はじっと見つめていた。

口を何度か開閉させた後、首を振って理事長に頭を下げる。



「お願いします。オープンキャンパスの内容を生徒会に決めさせてください」

「絢瀬さん……あなた」

絵里の変化に気が付いたのだろう。

目を見開いて驚きを露わにしていた理事長は、ふうと息を吐きだして微笑む。

「許可します。どうか、音ノ木坂をお願いします」

「……はいっ!」

決意に満ちた面立ちで返事をし、絵里は踵を返して扉へ向かう。

途中で、自分達の様子を静観していた穂乃果とのすれ違いざま、様々な感情が乗せられた言葉が囁く。

「見せてちょうだい、貴女達の輝きを」

「えっ?」

穂乃果が慌てたように振り返るが、既に絵里はこの場を去っていた。

まあ、いきなり意味深な事を言われたら戸惑うよな。

しかも、絵里はμ'sと仲が良かったわけでもないし。

「穂乃果、私達も行こう」

「あ、うん……失礼しました」

「失礼しました」

「――」  
退室する間際、理事長が何か呟いた気がしたのだが。気のせいだろうか？

廊下に出た俺達の元を集まるムスメンメンバーに、部室へと向かいながら話の結果を伝える。

一旦、皆で席について落ち着き、改めて今後の方針を話し合う。

「さて、私達に残された時間は二週間となったわけだけど」

「オーブンキャンパスかあ……」

「まあ、いつも通りライブをするだけじゃない？」

髪の毛を巻いて呟く真姫の言葉を聞き、凜は大きく頷いて追隨。

「そうだよ。凜達がライブをして音ノ木坂の良い所を教えれば、きっと廃校も阻止されるはずだよ！」

「そうねー。みーんなのアイドル、にこがいれば廃校なんかにはならないにこつ」

「あ、そういうのはいらないよ」

「ちよつと、凜！いきなり真顔になってどういう事よ！」

「えー、だつてえ」

そのままじゃれ合いを始めた二人は置いておいて。

真剣な表情で考え込む皆を尻目に、俺は海未に目を向けて頷く。

無事に込められた意味を察したようで、彼女はどこか緊張を滲ませた声音で告げる。

「皆さん。廃校阻止を目指すにあたって、私から提案があるのですが」

「んー、どうしたの海未ちゃん？」

全員の視線が集まったのを確認した海未は、ふうと息を吐いてから、

「生徒会長さんに私達<sup>μ</sup>、sの指導をしてもらいたいです」

『生徒会長に……？』

恐らく、この場の全員の脳裏には同じような内容が過ぎただろう。

堅物で<sup>μ</sup>、sに良い感情を持っていなさそうな、一人の少女の姿が。

自然と海未に訝しげな眼差しが送られ、代表してにこ先輩が問いかける。

「なんであいつの名前が出るわけ？」

「それについては私から説明しよう」

「朝陽ちゃんか？」

疑問の声を上げたことりに頷き、俺は顎に手を当てながら口を開く。

「私は生徒会長……絵里とは友達で、絵里が昔にバレエをしていたと知っているんだ。だから、海未は絵里からダンスを教わろうとしたんだよ」

海未の話に説得力を持たせようとしたのだが、逆に真姫に疑問の種を植えつけてしまったらしい。

眉尻を跳ね上げた彼女は、腕を組んで鋭い眼光で俺を見つめる。

「ちよつと待ちなさい。この際、貴女が生徒会長と仲が良かった事についてはどうでもいいわ。だけど、どうして海未先輩までバレエの事を知っているの？」

「それに関しては、海未から直接聞いた方が早いかな？」

そう返して海未にバトンタッチすると、彼女は真姫に目をやって。

「はい。私はつい最近、生徒会長と話す機会に恵まれました。その時に、生徒会長のダンスとダンスに関しての気持ちについて聞いたんです」

「ふうん……ま、私達に内緒で行動していた事には納得いかないけど、とりあえず理解はしておくわ」

背もたれに寄りかかり、俺から視線を外した真姫。

ほつ、なんとかなったようだ。特に緊張する場面でもないのだが、気が強い真姫に詰問されると心臓に悪い。

海未も同じ気持ちだったのか、表情がやや強ばっていたし。

俺達が密かに安堵している中、ことりは先ほどから黙ったまま思案にふけており、やがて何かを察したと言わんばかりに目を見開く。

「そっか……」

「ことり？」

首を傾げる海未を意に介さず、無言で俺の顔を見つめることり。

様々な色に染められたその瞳の内、寂しげな感情だけは色濃く滲んでいた。目を合わせていたのは、数瞬ほどだろう。

ことりの方から目を逸らし、海未に向かつてにこりと微笑む。

「なんでもないよ、海未ちゃん。それで、生徒会長さんに習うって事でいいのかな？」

「はい、そうです。絵里先輩から学ぶ事ができれば、μ sは更に良くなると思うんですが」

「私は反対よ」

食い気味に否定の声を上げたのは、真姫だ。

そっぽを向いて虚空を眺めながら、彼女の口からそう考えた理由が話されていく。

「付き合いが浅いから正確にはわからないけど、あの人って私達μ sをよく思っていないでしょ。だから、あの人がその頼みを受けてくれる確率は低いし、そもそも受け入れてくれたとしても潰されかねないわ」

「おぉー！ 真姫ちゃんが凛達を心配してくれてる！」

「なっ!?」 ち、違うわよ！ 私はまだ、最悪の展開を考えようとしただけで！」

嬉しそうな笑顔の凛から逃げるためか、真姫は顔を反対方向に逸らした。

しかし、優しげに目を細めた花陽と視線ががち合う。

「ふふつ。真姫ちゃん、ありがとう」

「づええ！」

どこか和やかな雰囲気だ。漂いはじめた一年生組を尻目に、眉間に皺を寄せているにこそ先輩が首を横に振る。

「私も反対。わざわざ敵を呼ぶ必要なんてないわ。あいつらはあいつらで、私達は私達で廃校阻止の案を考えればいいんだから」

「いえ、それでは駄目です」

「駄目な理由は？」

「ここ先輩が端的に尋ね返せば、海未はどこか悔しそうに唇を噛み締める。

「絵里先輩の踊りを見てから、私達々 s の踊りが物足りなく感じてしまうんです」  
海未の言葉がよほど意外だったのだろう。

「ここ先輩は唇の片側を吊り上げ、ひくりと頬を痙攣させて眼差しを鋭くする。

「……本気で言っているわけ？」

「はい」

「冗談で言っていたとしたら、怒るわよ」

「いえ、本気です。私は、今の々 s から絵里先輩ほどの感動を抱けません」

きつぱりと断言した海未を見て、ここ先輩は背もたれに深く寄りかかった。

天井を仰いで大きなため息を一つ。腕を組みながら、海未へと声を掛ける。

「はあ……私達のダンスをよく見ているあんたがそこまで言うなら、そうなんでしょうね」

「私達に足りないもの。それを絵里先輩が知っていると思うんです。今のμ、sに必要なものを」

「あいつが持つているものねえ。厳しい規律とかなんじゃないの?」

「こ先輩の言葉はあながち間違っていないかもしれないな。」

真面目な絵里がリーダーだとしたら、μ、sはもつとガチガチしていただろうし。

いや、ポンコツグループとして名を馳せていた可能性もあるか?

……それはそれで、ありかも?

なんて一人で馬鹿な事を考えていると、花陽がおずおずといった様子で手を挙げる。

「私は海未先輩の話に賛成です」

「はあ!」 花陽、私の話を聞いてた?」

ガタリと身体を揺らした真姫。

愕然とした声を上げた彼女に、花陽は頷いてきゅつと胸元に両手を乗せる。

「うん。正直、生徒会長とはあんまり話した事がないから怖いよ。でも、私も廃校を阻止したいし、なによりμ、sがもつと輝けるなら、生徒会長に怖がついていられないと思う」

「かよちゃん……」

恐らく、今までの花陽なら怯えて反対していただろう。

しかし、 $\mu$ 、 $s$ に加入して成長したからか、今の彼女からは確固とした決意が滲みで  
ていた。

幼馴染の変化を目にした凛は、嬉しさと寂しさが半々に入り混じる顔で笑う。

そして、ここにも一人。今までよりも一步踏み込んだ意見を述べる少女がいた。

「私も、賛成かな」

「ことり先輩まで!？」

目を睜る真姫を一瞥した後、ことりは頬に指を添えて眉尻を下げる。

「これは勘なんだけど、生徒会長は信用できると思うんだ。だから、生徒会長からダンスを教わるのが廃校阻止の一番の近道だと思うよ?」

「に、ここ先輩は? さっきまで反対してたわよね?」

説得は無理だと諦めたのか、真姫は話の矛先をここ先輩に変えた。

天井を見上げたまま微動だにしていなかったにこそ先輩だったが、やがて顔を下ろすと目を瞑って深々とため息を漏らす。

直後に瞳を開けた彼女の口許には、不敵な笑みが浮かんでいた。

「上等じゃない。海未にそこまで言わせる実力、このにこそがしっかりと見てあげるわ」



「まさか……」

「悪いわね。私の中では、sが一番なのに、可愛い後輩に感動できないなんて言われたんだから、あいつから技を盗んでその言葉を撤回させたいのよ」

これで、賛成が海未に花陽にことり、そしてにこ先輩の四人だ。  
凜は花陽よりに傾いており、俺は言うに及ばず。

つまり、残りは反対派の真姫と――

「穂乃果はどうなんだい？」

俯いたまま沈黙を保っていた穂乃果。

自然と場の視線が彼女の元を集い、告げられるであろう言葉を待つ。

俺の促しがきつかけだったのか、ようやく穂乃果は顔を上げ、強い輝きに満ちる瞳を真姫に向ける。

「真姫ちゃん」

「つ……なに？」

「真姫ちゃんの気持ちもわかるよ。絵里先輩、私達に何か含むものがあるみたいだし」

「なら――」

「でもね」

真姫の言葉を遮り、穂乃果は穏やかに笑う。

「それはきつと、絵里先輩が素直になれないからだと思うんだ」  
「素直になれない？」

「うん。真姫ちゃんと一緒に、本当の思いを心に押し殺してる」  
「なっ!？」

「朝陽ちゃんは、そんな絵里先輩が心配でこんな事を考えたんだよね？」  
「え？」

不意に水を向けられ、俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。  
皆が疑問符を頭に浮かべられる中、穂乃果は真っ直ぐとこちらを見つめて。

「わかるよ。朝陽ちゃんが絵里先輩を大切に思っている事ぐらい」

「い、いや、なんでそう思ったの？」

「うーん、なんとなく？」

疑問符をつけて尋ねられても困るんだが。

ともかく、穂乃果なりに俺の心境を察していたという事なのだろう。

言葉を返せない俺を見て、穂乃果はぱつと表情に花を咲かせて皆を見回す。

「とりあえず、絵里先輩に頼むだけ頼んでみようよ。きつとその方が良いと思うんだ」  
「……………はあ。これじゃあ、いつまでも意固地になってる私が馬鹿みたいじゃない」

「真姫ちゃんっ！」

喜色の声を上げた穂乃果に、真姫は諦めた素振りでは肩を竦めた。

「わかっているわよ。むしろ、見方を変えればこれはチャンスだわ。あの人に私達を認めさせて、大々的に $\mu$  sを宣伝させるためのね」

「なーんだ。真姫ちゃんも色々と考えてたんだ」

「からかわないでよっ！」

再びじゃれ合いを始めた真姫達だったが、それも直ぐに収まる事となる。

「よーし！ 皆が賛成してくれた事だし、さっそく生徒会長のところへ行こー！」

満面の笑みで告げた穂乃果の掛け声により、 $\mu$  sの皆は慌ただしく部屋を後にしていった。

部室内に残ったのは、出遅れた形となった俺と海未。

「さて、私達もそろそろ行こうか。そっちの方の状況はどんな感じ？」

「そうですね……六割がたは完成したと思いますよ」

「え、もう六割？」

驚いて目を丸くすると、海未は苦笑いして頷く。

「はい。正直、想定以上に順調ですね」

「まあ、順調に越したことはないでしょ。じゃあ、私達もツンデレお姫様を迎えにいきますか」

おどけた仕草で立ち上がり、海未を連れて退室。

穂乃果達が向かったであろう生徒会長に足を向けつつ、俺は今後の計画を脳内で何度も反芻していく。

外堀は埋められたし、後は穂乃果達の気持ちと結果を待つのみか。

問題はないと思う……思うけど、やはりどうしても不安が募ってしまう。

そんな俺の内心が顔に表れていたのか、隣で歩く海未がクスリと微笑む。

「大丈夫ですよ、朝陽。私も、今回の計画は成功すると確信できましたから」

「そっか。海未のお墨付きなら、大丈夫そうだね」

「ええ、任せてください」

「……なんだか、さつきと逆転しちゃった」

不安になっている人と、それを吹き飛ばしてくれる人の立場が。

海未も思い至つたのだろう。パチパチと目を瞬いてから、瑞々しい唇に弧を描いて。

「ふふっ、そうですね。私達二人とも、なんだかんだ言つて心配だったという事ですか」

「まあ、お互いのお蔭でその心配事は消えたけど」

「確かに、私の不安は朝陽が消してくれました。それに、これはなるべくしてなったとわかりましたし」

「うん？」

絹のような青髪を揺らし、海未はどこか遠くを見るような眼差しで呟く。

「欠けたパズルのピースが埋まるような、なくした半身を取り戻したような。……いいえ、ようやく噛み合ったと言うのでしょうか。恐らく、遅かれ早かれ起きていた事なのでしよう」

「さつきから随分と抽象的だけど、どうしたんだい？」

言っている意味がほとんど理解できない。一体、海未は何を言いたいのだろうか。思わず首を捻って尋ねる俺を見て、海未は小さく手を振って口を開く。

「いえ、独り言です。とりあえず、早く穂乃果達の元に追いつきましょう」

そう告げた海未が足を速めるので、慌てて俺も追隨する。

さつきの意味深な言葉が気になるけど、海未に誤魔化されちゃったしまあいつか。まずは、目の前の事に集中しなければ。

気合を入れ直した俺は、海未と共に穂乃果達を追いかけるのだった。

## 第四十七話 絵里の実力

「貴女達にダンスの指導を？ ええ、いいわよ」

「ええっ!？」

生徒会室にいた絵里に頼んだ穂乃果へと、返つてきた内容はそれだった。

あっさりと了承されるとは思わなかつたのだろう。

大袈裟に仰け反つた穂乃果を見て、絵里は目を伏せて言葉を続ける。

「元々、ちようどいいと思つていたところだしね」

「ちようどいい？」

「こちらの話よ。希、後は任せてもいいかしら？」

「もちろん。絵里ちに渡された資料と一緒に、ウチ達生徒会でも考えてみるね」

「ありがとう。という事で、早速貴女達の指導をするわよ」

「え、え？」

置いてきぼり感を食らつた穂乃果の手を引き、絵里はμ sの面々を連れて生徒会室を出ていった。

最後に俺も退室する間際、希先輩に目配せをして軽く頭を下げる。

「負担をかけてしまつて申し訳ないです」

「いいんですよ。ウチと朝陽ちゃんの仲間さん？ それに、今のウチ達は一心同体。だから、絵里を任せました」

「任されました。……といつても、今の絵里なら大丈夫だと思うけど」

笑顔でそう告げれば、希先輩も笑みを浮かべて頷く。

「確かに、今の絵里ちは強い。まあ、念のためや」

「わかつてますつて。じゃあ、私も行きますので」

「頑張つてな」

手を振る希先輩に見送られ、俺は屋上へ向かう。

既に、sのメンバーは着替えており、絵里も動きやすい格好になっていた。

「あ、朝陽ちゃん。どこ行つてたの？」

「ちよつとね。それで、もう練習は始まったのかな？」

「これからだよ。でも、なんで生徒会長まで着替えてるんですか？」

不思議そうな面立ちの穂乃果だったが、他の人も同じような思いを抱いていたのだろう。

訝しげな眼差しを絵里に送っている。

対して、絵里は腰に手を当てて穂乃果達を見回す。

「私の事はいいのよ。それより、まずはストレッチをしてちょうだい」  
有無を言わせないその迫力に呑まれたのか、穂乃果達は言われた通りにストレッチを始めた。

全員が身体を伸ばしているのを見て、絵里は意外そうに眉尻を上げる。

「へえ。基礎を疎かにして歌やダンスばかり練習していたと思っていたけど、そういうわけじゃないのね」

「皆には怪我をして欲しくないからね」

俺が、sの練習を考えるにあたって、一番重視したのは身体の柔らかさだ。

海未と何度も話し合いを重ねた結果、どんな時でも力を入れてストレッチをやる結論になった。

穂乃果や凜等は少し納得がいかない様子だったが、根気よく柔軟体操の大切さを教えた事で、どうにか理解をしてくれたので良かったよ。

そんな経緯を絵里に伝えると、考え込むように顎に指を添えて。

「なるほどね。貴女らしいと言えば貴女らしいのかしら」

「そうかな？」

「ええ。過剰なほど臆病な朝陽らしいわ」

「うぐっ！」



にっこりと微笑んだ絵里の目は、どこかからかいの色が宿っていた。

俺の事情を話しただけに、こうした部分で彼女は本当の気持ちを探するのだろう。

物語の通りに進めよう、あるいはそれ以上の結果になるようにしていた俺の心境を。

思わず胸を抑えて後ずさる俺に、絵里は呆れた表情を向ける。

「はいはい。お遊び半分演技はその辺にしておきなさい」

「絵里先輩」、ストレッツチ終わりました」

「じゃあ、次は私の指示通りに行動してね」

それから、穂乃果達は絵里の言う通りに練習をしていった。

やはり、ダンスに関して素人の俺達とは違い、絵里の指導は的確で厳しい。

誰もが汗を流して辛そうな様子だし、花陽に至っては少しふらふらしている。

しかし、本当に辛い内容のはずなのだろうが、誰一人として音を上上げる事だけはしな

かった。

炎天下に晒されてじわじわと体力を奪われる中、一心不乱に絵里を見つめて練習をす

る。

μ、sとして頑張っているのが楽しいという想いと、必ず廃校を阻止してやるという

気概が全身から迸っていた。

当然、絵里がその事に気が付かないはずがなく、どこか複雑そうな顔で呟く。

「私の目が曇っていたのかしらね……」

「絵里？」

ノートにメモしながら声を掛けるが、絵里は首を振って答えなかった。

全員の集中力が切れそうな所を見計らい、水を飲んで休憩と告げた後、彼女は海未を呼ぶ。

「どうしました？」

「あれが今の貴女達の全力？」

「そうですね。いつもより気合いは入っていると思いますが、実力としては大まかに変わらないです」

「そう。……そうね、次は一度、貴女達のダンスを見せてもらおうかしら」

絵里がそう告げた瞬間、座って水分補給をしていたに先輩が勢いよく立ち上がる。

「とうとう来たわね！ 今からあんたのど肝を抜いてやるんだか——」

と、勢い込んだは言いものの。そんな急に動けば転んでしまう。

案の定、にこ先輩は足をよろめかせてすてーんと尻餅をつく。

「——うう……お尻が痛いわ」

お尻をさすっているにこ先輩を見て、なんとも言えない面立ちになる絵里。

「今の流れを見ているだけで不安になるんだけど」

「だ、大丈夫！　ここ先輩はやる時はやるから！」

拳を掲げて声を上げる穂乃果だったが、それはつまり普段はやらないという事だろうか。

いや、ここ先輩は常に後輩達の面倒を見ているし、いざという時は頼りになるけど。

しかし、日常でのボケ担当と言えればいいか、お約束的なポジションと言えればいいか、やるべき時以外は頼りがいがあるかと言えば……どうだろうな。

映画で出てくる事件が起きると急に頼もしく見える役、それに近い立ち位置じゃないかと思っている。

と、俺の感想はさておき。

当然、ここ先輩本人にも穂乃果の発言は聞こえており、ポツリと呟きを落とす。

「それ、フオローになってないわよ」

「ま、まあ休憩も終わりましたし、生徒会長にダンスを見せましょう！」

「……そうね」

微妙な表情を浮かべたにこそ先輩を筆頭に、μ'sの面々はそれぞれが位置を揃える。

すると、キヨロキヨロと辺りを見回している花陽が、何かを察した素振り目を見丸くした。

「どうしたの、かよちゃん？」

「う、ううん。なんでもないよ」

「ほら、時間もないんだし早く見せてちょうだい」

「よし、みんな行くよ!」

絵里に促され、現在練習中のダンスを披露していく穂乃果達。

初めの頃と比べても、雲泥の差で技術が上達しているとわかるだろう。

しかし、絵里は真剣な眼差しを崩さないまま。目を凝らして注意深く、μ'sの一挙手一投足を観察していた。

やがてダンスが終わり、七人の少女は一様に息を乱して窺う顔色で絵里を見つめる。

「ど、どうでしたか?」

穂乃果の声で絵里は我に返ったのか、瞼を閉じて小さなため息を漏らす。

そして、見ていられないと言わんばかりに首を横に振った。

「駄目ね。全然なつてないわ」

「なつ、それはどういう事よ!」

片目を開けて声を荒らげるにこ先輩を一瞥した後、絵里は人差し指を立てて言う。

「確かに、短期間でここまで成長したのは凄いと思うわ。でも、これじゃあオープンキヤンパスにとてものでは無いけど見せられない」

「そんな……」

「納得いく理由があるんでしょかね？」

悲しげに俯く花陽に、視線を鋭くして絵里を睨む真姫。

凜も納得がいつていない顔をしており、μ s の面々から剣呑な空気が流れだす。

対して、絵里は立てていた指を下ろし、次いで素早い動きで腕を広げた。

一連の動作に、品が宿る。指の先まで計算尽くされた優雅さ。ただ腕を振ったとは思えず、場の全員が絵里の動き一つに吞まれてしまう。

「今の動きを見てどう思った？」

「えっ……？」

「何か感じなかったかしら？」

「ええと。凄く綺麗でした」

戸惑い気味に答えることりに、絵里は頷いて説明を続ける。

「いい？ 貴女達のダンスには、緊張感というものが足りてないわ」

『緊張感？』

「そう、神経一本に至るまで意識が向いていないの。今の貴女達のダンスなんて、糸で吊られたマリオネットさながらのカクカクした動きでしかないわ」

絵里が強い口調で断言すると、思い当たる節でもあるのか、穂乃果達は各々が考え込んでいる様子を見せた。

「言われてみれば、そうかも」

「うん。振り付けや歌ばつかに意識が向いていた気がする」

「ダンスという物はね、指先一つで観客を魅せる芸術なのよ。足の位置が数センチズレるだけで、観客の心を震わせる事ができなくなるわ」

流石はバレエをしていた経験だろうか。

絵里の言葉一つ一つには重みがあり、誰もが神妙そうな顔立ちで頷いていた。

対する俺も、絵里の話を聞いて頭を殴られたような気持ちになる。

今まで基礎練や振り付けを重視していたが、絵里の言うような所まで目を光らせていなかった。

ただ踊るだけで穂乃果達は魅了していたし、歌うだけで観客を感動させていたのだ。

やはり、素人の練習メニューではそこまで気が回らなかったか。

絵里ならではのアプローチであり、それは彼女でしか気が付かなかったもの。

改めて、絵里にダンスの指導を頼んで良かった。

「ぐぬぬ。言い返せないわ」

「……まあ、ここまで言われっぱなしじゃあいい気分じゃないわよね」

口をへの字にしているにこ先輩を見て、柔軟体操を始めた絵里。

「生徒会長？」

「貴女達が納得できるように、私がダンスの実演をするわ。園田さん、頼めるかしら？」  
「あ、はい。わかりました。ワンツ、ワンツ——」

頷いて一步前に出た海未が、手拍子を響かせていく。

その小気味よい音に呼応して、絵里は軽やかな動きでダンスを披露。

ポニーテールの金髪を靡かせ、毛先一本まで計算している踊りで、目を見開くμ、s  
の面々に見せつける。

蒼天で遍く日輪と共に、屋上を即席のダンスホールへと変貌させていく。

くるりと回ると、絵里の全身から珠の汗が飛ぶ。

呆気にとられる俺達へと微笑みかけ、彼女は流麗な仕草で腕を振るう。

絵里の周囲は汗で光り、キラキラと輝いていた。

たたとステップを刻めば、全身を駆使して俺達を幻想へと誘う。

金の妖精が舞う度に、この場に香り立つ旋風が巻き上がる。

「すいっ……」

漏れた眩きは誰のものだっただろうか。

しかし、そんな些細な事は誰も気にしない。

今の俺達は、ただひたすら絵里に心を驚掴みにされていたのだから。

まだ太陽が顔を覗かせているはずなのだが、絵里の周りだけ薄暗く見え、それに反比

例して彼女だけが色濃く光を発している。

まるで、照明が降りた舞台の中央で、スポットライトに照らされているかのように。心から魅入っている中、絵里のダンスが変化する。

バレエを彷彿させる綺麗な動きから、どこか見覚えのある心が熱くなる踊りへと。

「それって、START：DASH!!……?」

はっと驚愕した声を上げた穂乃果に、絵里は微笑んで穂乃果の振り付けを再現。

あの時はスクールアイドルを始めて間もなかったとはいえ、それでも穂乃果との差は歴然だ。

それは、単純な技術というものではない。

指先まで気を遣っているからこそわかる、観客を虜にするダンス。

穂乃果達のダンスは、魂の輝きのようなもので俺達を感動させた。

しかし、今の絵里のダンスは仕草一つで皆の心を震わせる。

どちらが良いかとは言えない。あえて言うならば、どちらも魅了されるだろう。

やがて、最後のポーズを取って絵里は止まり、軽く息を吐いてから不敵に笑う。

「貴女達には最低これぐらいできて貰わなきゃ、私はオーブンキャンパスでのライブを許可するつもりはないわ」

『……』



返事をしない、sを見て、彼女はどこか落胆した様子で眉尻を下げる。

「怖気づいたの？ だとしたら、期待外れと言わざるを得ないんだけど」

「す……」

「す？」

絵里がオウム返しに尋ねた瞬間、穂乃果の表情が爆発したかのように彩られた。

「すごいすごいすごい！ 絵里先輩凄すぎます！」

「ふえ？」

勢い込んで駆け寄り、絵里の手を握ってぶんぶんと振る穂乃果。

対して、絵里は突然の事に驚いているらしい。

素つ頓狂な声を上げ、なすがままだ。

直後には、ことり達も彼女の元集い、各々が感動したと話していく。

「上手いのは知っていましたが、生で見ると格段に違いますね」

「本当ね。正直、海未が褒めてたのもわかるわ」

「カッコよかったにゃー！」

「その、私も感動しました！」

「え、えーと？」

戸惑う素振りでお口お口する絵里を見て、少し離れた場所にいた真姫がため息を漏ら

す。

「つまり、貴女のダンスに魅せられたって事よ」

「そうだよ！ 絵里先輩、これからも私達を指導してください！」

『お願いします！』

進んで頭を下げた穂乃果に続き、皆も絵里に頼み込んだ。

尊敬の念が籠ったその態度に、絵里は僅かに頬を緩めて口を開く。

「当たり前よ。これからもビシバシ指導するから、覚悟しておいてよ。」

『はいっ！』

それから、更に気合いが入ったμ、sは、絵里の教えを進んで学んでいった。

改めて、絵里を信頼できると確信したからだろうか。

先ほどより、技術の呑み込むスピードが増している。

とりあえず、第一関門は突破かな。

絵里とμ、sの邂逅。そして、互いに尊敬し合えると認識する。

μ、sは言わずもがなだし、絵里の方もある程度は認めたらう。

よって、俺が次にするべき行動は、希先輩と保険をかけておくことだ。

といつても、そんな大それた作戦でもない。

絵里の気持ち次第で、この作戦の合否はほとんど決まるのだから。

まあ、予想以上に上手くいきそうであつたが。

頭を振つて気持ちを切り替えた俺は、μ sに囲まれて少し嬉しそうな絵里の元に近づくのだった。

## 第四十八話 下手の考え休むに似たり

「希先輩、調子はどうですか？」

生徒会室を訪ねた俺は、書類とにらめっこしている希先輩に声を掛けた。

その言葉に彼女は顔を上げ、柔らかい笑みを浮かべて頷く。

「今の所は大丈夫。特に大きな問題は起きていないし、後はオープンキャンパスを待つだけや」

「おお！ そうですか。なんとかいけそうで良かったです。ところで、他の人達は？」  
辺りを見回してみても、室内に居るのは希先輩だけ。

不思議に思つて尋ねると、希先輩は目線を上げて顎に指を添える。

「えーつと、絵里ちが書いた提案を検討するために奔走しているから、かな？」

「ほー、絵里がですか。ちなみに、どんな？」

「亜里沙ちゃんと話し合つたらしいんやけど、制服の事とかスクールアイドルの事とかやね」

「へー、意外」

まさか、あの絵里がそんな女の子らしい提案を持つてくるとは。

いや、絵里が可愛かったり、今どきの女子っぽい感覚を持っているのは知っている。しかし、オープンキャンパスの時では、てつきり歴史についてとか堅苦しい内容を作ると思っていたのだ。

感心した声を上げた俺を見て、希先輩も苦笑いを漏らす。

「最初は朝陽ちゃんが思ってた通りだったみたいやね。だけど、亜里沙ちゃんにダメだしされまくったから」

「ああ、なるほど。泣きそうな顔で亜里沙の提案を受け入れた絵里の顔が浮かびますね」  
「ふふつ、違うない」

二人で笑みを交わし合った後、真面目な顔に戻して本題に入る。

「希先輩の方はどうですか？」

「んー、まずまずって所かな？」

「運動神経いいですもんね、希先輩は」

「海未ちゃんのお蔭でもあるんやけどね」

確かに、ダンス指導に関しては絵里に遅れをとるかもしれないが、それまでの実績を含めれば海未に任せても安心できるだろう。

実際、希先輩の様子から順調のようだし。

「とりあえず、これで、sに加入しても即戦力になりそうですね」

「あはは、期待を裏切らないように頑張っちゃうよー」

「応援していますよ。……それにしても、絵里に黙ってていいんですか？」

素直にバラせば、絵里的にも嬉しいと思うんだけど。

そう思つて問いかけると、希先輩は悪戯つ子のように頬を吊り上げる。

「だつて、絵里ちの驚いた顔がみたいやん？」

「……相変わらずですね」

「うーん、褒めてもワシワシしか出せないんよ」

「いやいや、いらないうすから！」

そんな物は求めていない。

第一、俺には男の意識があるつて知つているんだから、希先輩がワシワシするのは色々と駄目だと思う。

純粋な同性同士の楽しいじゃれ合い、つてわけでもないんだし。

思わず後ずさる俺に、希先輩は肩を竦めて楽しげな眼差しを送る。

「それで、朝陽ちゃんのわるだくみはどうなん？」

「人聞きが悪いですね。皆が笑顔になれる素敵な作戦と言つてほしいです」

ため息をついて苦言を申しした後、俺は生徒会室の扉に手をかける。

「もう帰るん？」

「ええ。これから海未との打ち合わせがあるんで」

「そっか。じゃあ、最後に一ついい？」

「どうしたんですか？」

振り向いて首を傾げる俺を見て、いやらしい顔つきで両手を動かす希先輩。

「前にも言ったよね。ウチの前では他人行儀の言葉遣いをしないでっつて」

「……あつ」

「お仕置きやね」

語尾に音符でも生やすように告げた後、希先輩はゆっくりと立ち上がった。

確かに、男の意識があるから云々の話はしたけど。したけども、まさかこのタイミン

グで掘り返すなんて。

いやいや、ちよつと待って。今ここでお仕置きするの!?

慌てて逃げようとドアノブを動かすのだが、焦っているからかガチャガチャと詰まり、上手く扉を開けられない。

暫く四苦八苦していると、右肩に優しく手を置かれる。

頬を引き攣らせてその方向に目を向ければ、満面の笑みを浮かべたワシワシガールと視線がかち合う。

「手加減して欲しいかなー、なんて？」

「それは無理な相談やね。という訳で、早速行ってみよう！」  
「みぎやー!？」

結局、希先輩が満足するまで、俺はむちやくちやワシワシされてしまうのだった。

「うう……酷い目にあつた」

「その、ご愁傷様です」

命からがら部屋に戻ってきた俺は、机の上に突つ伏していた。

頭上から労るような海未の声が降り注ぎ、それにヒラヒラと手を振る事で応える。

「この体勢で申し訳ないんだけど、報告を聞いてもいいかな？」

「はい、構いません。といつても、後は穂乃果達が絵里先輩をμ sに入れようと決める  
だけですが」

「こつちも、絵里がμ sに入りたいと思うだけの段階に来たよ」

顔を合わせた時に話した限り、漠然とμ sに羨望を向けていた絵里は、更にその想



いを強くしていた。

スクールアイドルは皆素人、という考えを捨てさせ、改めて自分もあの人達と一緒に輝きたいと思わせる。

そんな流れにしようとしていたのだが、上手くいきそうで良かった。

海未と考えた作戦。

簡単に言うと、絵里と穂乃果達 $\mu$ 、sの橋渡しだ。

ある程度素直になれたとはいえ、今までの気持ちから絵里が $\mu$ 、sに入りたいと言えるわけがない。

また、 $\mu$ 、sサイドも絵里の事をよく思っていない可能性があり、結果として $\mu$ 、sが九人にならないかもしれないなかった。

だから、俺は絵里のダンスを見た海未を引き込み、こうして上手く互いが尊重し合えるように取り計らったのだ。

絵里本人はこの作戦は概要しか知らず、代わりに希先輩が把握している。

特に、彼女の場合は海未からオーペンキャンパスに向けてダンスレッスンを受けており、心構えなら誰よりもできているだろう。

「一応、絵里先輩にはオーペンキャンパス用の振り付けを教えておきましたが」

「薄々察してるんじゃないかな。絵里も $\mu$ 、sに入れようとしているって」

実際、昨日の電話では振り付けの練習をしているって聞いたし。

どうやら、予想以上に絵里は、s 加入に前向きなようだ。表面上は、s に入りたい風を装っているが。

だから、口では色々と言いつつも、いつ誘われてもいいように練習しているのだろう。考えている内に身体が落ち着き、起き上がって海未と目を合わす。

「もう大丈夫なのですか？」

「ん、なんとかね。本当、希先輩のワシワシには困ったもんだよ」

「そうですね、本当に」

嫌に切実に同意してくる海未に、俺は不思議に満ちた面持ちを向ける。

「あれ？ 海未って、希先輩にワシワシされた事があつたっけ？」

そう尋ねると、口許には苦虫を噛み潰したような色を、しかし瞳には虚無感を含ませるといふ器用な表情を覗かせた海未。

「ええ、ええ。希先輩とはダンスの振り付けの時に少し……後輩との親睦を深めるためとかのたまに、私のむ、胸を……胸を……！」

「もういい、いいんだ海未！」

虚ろな目でやじろべえの如く頭を揺らす海未を見て、俺はいたたまれない思いで目頭を押さえた。

お前もやられたか、海未よ。希先輩のワシワシは、正直言って悪癖のレベルだと思う。いやまあ、あれが希先輩なりのコミュニケーションだとはわかってはいるが。

それでも、やられる方の身からすれば、色々辛いものがあるんです。

暫く希先輩被害者の会を開いていると、部室の扉が開いてにこ先輩と花陽が現れる。

「邪魔するわよ」

「えっと、こんにちは」

「どうしたんですか、二人とも？ 屋上で練習していたのでは？」

練習着姿の海未が告げた通り、俺達は作戦会議するために屋上を抜けだしていたのだ。

他のμ、sの面々は、絵里に指導されているはずなのだが。

首を傾げている海未を見て、にこ先輩は腰に手を当てて俺にジト目を向ける。

「今回の首謀者はあんたでしょ？」

「しゅ、首謀者？」

いきなり黒幕にされた俺とは一体。

思わず困惑していると、隣にいた花陽が海未に声を掛ける。

「海未先輩。絵里先輩をμ、sに誘うつもりですよね？」

「……どうして、そう思うんですか？」

「問い返しは肯定と受け取るわよ」

そう告げると、にこ先輩はどっかりと椅子に座り込む。

どうやら、俺達から詳しい話を聞くまで、屋上に戻るつもりはないらしい。

花陽もおおずおおずといった様子で腰を下ろし、自然と二人から注目される事になる。

「それで、絵里についてだっけ？」

「バレるようなミスは犯していないつもりだったんですが」

不思議そうに首を捻る海未を尻目に、頬杖をついたにこ先輩が花陽に目を向けた。

「それに気づいたのは花陽よ」

「あ、はい。その、オープンキャンパス用のダンスを練習している時、ふと思ったんです。

私達のダンスの立ち位置が、九人用だって」

「改めて、花陽から話を聞いた私も納得したわ。ダンスをする本人視点だと気づきにく

かったけど、一步引いた観客視点だと私達の並び方に歪さが見えるからね」

言われてみれば、なるほどと大いに頷ける回答だ。

確かに、海未はあらかじめ九人用の振り付けにしていたので、いつかはμ'sの面々

も察するとは思っていた。

しかし、まさか練習を始めてこんな早く勘づくとは。流星はアイドルに詳しい花陽と

いったところか。

内心で感心しながら、俺は海未と目を合わせて首を縦に振る。

「花陽の推測通りだよ。私達は、絵里が $\mu$  sに加入して欲しいと思ってる」

「ふうん。それで、話の流れからもう一人は希って感じかしらね」

「ご明察です、にこ先輩」

「こんなの少し考えれば誰でもわかる事よ」

鼻を鳴らしてため息を漏らしたにこ先輩は、流し目で俺を捉えて言葉を繋ぐ。

「で？」

「で、とは？」

「決まってるでしょ。あいつらについてよ、あいつらについて。素直に $\mu$  sに入っ

てくれるとは思えないんだけど」

「……にこ先輩は、絵里達 $\mu$  sの一員になるのに賛成ですか？」

俺の問いかけを聞き、彼女はどこか悔やむ様子で下唇を噛んだ。

「賛成よ。あいつがいれば $\mu$  sを更に良くしてくれるでしょうし、ダンスの知識を見

てもあいつ以上に相応しい人はいないわ」

「なら、どうしてそんな悔しそうなんですか？」

言葉とは裏腹に、にこ先輩の表情は明るくないのだが。

海未達も気になっているのか、自然と全員で彼女が話すのを待つ。

沈黙が室内を支配した後、にこ先輩は自嘲が含まれた笑みを浮かべる。

「二年前。二年前に、あいつと一緒にスクールアイドルができていたら、もしかしたら未来が変わったのかもって思っちゃっただけよ。まったく、いつまでも過去を振り切れないなんて情けないわ」

にこ先輩……。

恐らく、彼女が言っているのは、前のスクールアイドルについてだろう。

夢と希望に溢れていた日々と、仲間達が去っていった悲しみ。

俺は当時を見ていないので、気安く言葉を返す事ができない。

「その、にこ先輩……」

「花陽……?」

二の句を告げないと、瞳に力を入れた花陽が声を上げた。

指を絡めてモジモジしながらも、確固たる決意を滲ませて口を開く。

「私は当時のにこ先輩の気持ちかわかるなんて言えません。でも、今のにこ先輩が楽しそうだって事は言えます。だから、昔より今を見てください。今、絵里先輩と一緒にスクールアイドルをやりますよ!」

その思いの吐露をぶつけられ、目を丸くして驚きを露わにしたにこ先輩。

確かに、花陽の言う通りだろう。

少なくとも、現在ののにこ先輩はスクールアイドルとして輝いている以上、過去のIFなんて考えるだけ無駄な内容だ。

今考えるべき事は、絵里達がμ sに入った後の未来なのだから。

にこ先輩も同じ結論に至ったのか、頼杖を解くと肩を震わせていく。

「そう、ね。前の事を考えているなんて、私らしくなかったわ。よし、そうと決まったら話は簡単。さつさと、あいつらをμ sに加入させるわよ！」

「はいっ！」

と、喜ぶのはいいんだけど。

まずは、穂乃果達に賛同を得てからではないと、絵里達に話を通せない。

「あの。とりあえず、絵里先輩の加入には花陽も賛成という事でいいんですよ？」  
手を上げて尋ねてくる海未に、にこ先輩はボンと手を打って。

「あ、そうそう。その事なんだけど。もう穂乃果達全員には言っておいたから」

「は、え？」

「あー、もう察しが悪いわねえ。だから、あいつ……絵里のμ s加入に関しては、既に手を打っているから。後は絵里達本人に伝えるだけ」

いつの間にも!?

互いを刺激しないよう、俺達は慎重に作戦を遂行していたのだが。

気が付けば、にこ先輩が上手く纏めてくれていた。

……なんというか、俺の立つ瀬がないな。

いやまあ、時間短縮という意味では、助かったのは間違いないんだけど。微妙な心境を抱いていると、目を点にした海未が花陽の方に顔を動かす。

「つまり、私達の動きは無駄だった……?」

「そ、そんな事はないと思います。海未先輩が絵里先輩に合わせてくれたから、こうしてスムーズに穂乃果先輩達にも話せたんですし」

「……まあ、そういう事にしておきます」

「そもそも、なんでこんな回りくどい真似をしているわけ? 誘いたいなら、さっさと誘

えばいいじゃない」

眉根を寄せたにこ先輩は、そう告げると立ち上がった。

全員の視線が集まる中、特に気にする素振りも見せないまま、彼女は部屋のドアノブに手をかけて顔だけ振り向く。

「にこ先輩?」

「面倒だから、もう私がさっさとあいつに言っておくわ」

「へ!?!」

「じゃあ、あんた達も後で来なさいよー」



突然の言葉に動けないでいる俺達を尻目に、にこ先輩はヒラヒラと手を振って去ってしまった。

なんか、にこ先輩がにこ先輩たる所以を垣間見た気がするな。

ウジウジとする俺と比べ、即断即決で頼りになるところとか……つて！

「私達も追いかけてよう！」

「あ、そうです！ 待ってください、にこ先輩！」

「ま、待ってくださいー！」

慌てて腰を上げた俺達も、にこ先輩を追って屋上に向かうのだった。

## 第四十九話 集いし九人の少女達

「ここ先輩を追いかけて屋上の扉を開くと、こちらを待ち構える彼女の姿があった。腕を組みながらつま先で地面を叩き、*ム* *s*を指導している絵里に目を向ける。

「ほら。さっさと言いなさいよ」

その言葉を聞き、俺は止める間もなく彼女がここに来た理由を察した。

「……ハメましたね？」

「ハメてなんかないわ。ただ、あんた達の回りくどいやり方が気に食わなかっただけ」  
「ここ先輩が平然と嘯くが、つまり俺達の背を押ししてくれたのだろう。」

悩む暇があるのなら、行動に移せと。

……ここまでお膳立てされたんだし、それに答えなきやいけないよな。

「貴女達、お花は摘み終わったの？ だったら、早く練習を再開しなさい。ただでさえ時間がないんだから」

「絵里、実は聞いてほしい事があるんだ」

「海未に目配せをした後、俺は一步踏み込んで絵里に声を掛けた。

忙しなく*ム* *s*に指示を出していた彼女は、その言葉に俺と目を合わせて首を傾げ

る。

「何かしら？ 要件は手短かにしてね」

「単刀直入に言うよ。オーペンキャンパスの時、絵里も一緒に踊ってほしい」

「……へえ」

眉尻を僅かに上げ、感心した声を発した絵里。

少し視線を鋭くしながら、俺の顔を見つめて腕を組む。

場の空気の変化を感じ取ったのか、穂乃果達は自然と緊張感に帯びた顔つきになる。

「いきなりどうしたの、朝陽ちゃん？」

「そうね。まさか、朝陽の口からまたその言葉が出るなんて」

「最初は断られたけど、もう一度言わせてもらう。絵里もダsに入ってくれ」

そう告げて穂乃果に視線を転じると、どうやら彼女も俺の意図を察したらしい。

何か声を上げようとした真姫の口を押さえ、満面の笑みを浮かべて頷く。

「穂乃果も賛成！ みんなもそう思うよね？」

「うんうん。やっぱり、絵里先輩と一緒にオーペンキャンパスで踊りたいよねっ。凜

ちゃんもそう思うでしょ？」

「にやっ！」

いち早く追隨したことりの促しに、凜はビクリと肩を震わせた。

キヨロキヨロと辺りを見回した後、コクコクと無言で首を振って肯定を示す。警戒している猫のような仕草をした凜を見て、穂乃果達は笑みを深めて俺達から離れた場所に向かう。

……なんか、微妙に俺が想像していた返しと違うんだけど。

まあ、いい。とりあえず、μ、sの皆からも賛成を貰えたんだし。

一息ついて気持ちを切り替え、穂乃果達の言葉に動揺を露わにしている絵里に告げる。

「穂乃果達が言った通り、μ、sは絵里を必要としている」

「そうみたいね。でも、前にも言ったでしょう。私はスクールアイドルをするつもりはないわ。確かに、オープンキャンパスに向けて彼女達に協力する事には納得した。けれど、それとこれとは話が別」

口調では冷たく突き放しているが、絵里の瞳には辛い気持ちが渦巻いていた。

「どうやら、μ、sに入りたい思いとは裏腹に、自分には資格がないと考えているらしい。」

もう後悔しないって、そういう事かよ……！

俺は勘違いをしていた。てつきり、絵里もμ、sに入ってくれれば、当たり前のように決めつけていたのだが、実際は違った。

今までの行動に責任を持つため、憧れていたスクールアイドルを諦めるという決意。俺と喧嘩したからか、一時期μ、sを認めていなかったからか。

このまま、絵里はμ、sの影になろうとしている節がある。

やはり、俺の存在がバタフライエフェクトを起こしているな。

恐らく、このままなし崩しの形を目指していたら、絵里はμ、sに加入していかっただろう。

にこ先輩がこの状況を作っていないければ、取り返しのつかない段階まで進んでいた可能性すらある。

……でも、今なら間に合う。

絵里の間違った決意を変えるために、俺がその心を溶きほぐしてやる！

改めて身体に喝を入れた後、俺は靴音を鳴らしながら絵里の元に近づく。

「な、なに？」

微かに後ずさる絵里に構わず、至近距離で指を突きつけて断言。

「絵里。今の君は、凄くカッコ悪い」

「か、かっ？」

「つい最近の私を見ているようで、正直腹が立って仕方がない」

今の絵里からは、俺と同じ臭いを感じるのだ。

勝手に諦観して自己完結をして、一人で何もかも抱え込んで自滅する。

誰もそんな事を言っていないのに、どうせ無理だと諦めてしまう。

俺は、絵里にそんな覚悟を持たせようとしていたわけではない。

ただ、絵里達には笑ってほしかっただけ。こんな辛そうな顔をさせるためではないのだ。

……ああ、ブーメランが突き刺さる。

今なら、希先輩が怒った気持ちほど痛いほど理解できるな。

大切な友達が、理由も話さずにこんな辛い表情を見せているのだ。

心配で心配で堪らなくなってしまう。

「いきなりなによ。私がカッコ悪いって」

ムツとした表情を浮かべた絵里に、俺は呆れて肩を竦める行動を返す。

「言葉の通りさ。絵里が馬鹿な考えをしているから、それを教えたまてだよ」

「ば、馬鹿ですって?」

「ああ、馬鹿中の馬鹿。大馬鹿だよ」

「……ねえ、私をからかっているのかしら?」

剣呑な目つきで、拳を掲げた絵里。

よほど腹に据えかねているのか、ヒクヒクと頬が痙攣している。

対して、俺は絵里の両肩に手を置き、憂いを秘めたスカイブルーの瞳をのぞき込む。

「からかってなんていない。本当の気持ちを押し殺している絵里がムカつくだけだ」

「っ！」

「本心では、絵里も $\mu$  s に入りたいてって思っているんだろう？」

「それ、は……」

言葉尻をすぼめると、絵里は俺から逃げないように目を伏せた。

やはり、心の中ではちゃんとした結論に至っているようだ。

こんな事を俺が言うのもお門違いだが、これだけは言わせてもらおう。

「絵里。穂乃果達の方を見てみる」

「え？」

「絵里に敵意を持っているか？　むしろ、絵里も $\mu$  s に入ってくれるかって期待していないか？」

俺の背後に視線を移した絵里は、目を大きく見開いた。

しかし、直ぐに唇を噛み締めると、弱々しく首を横に振る。

「ダメよ。これは、私なりのけじめなの。素直に応援できなかつた、彼女達に対しての贖罪」

「そんなものはゴミ箱にでも捨てておけ！　俺が欲しい言葉は、絵里、あんたの本音だけ

だ！」

自然と口調に地が出るが、気にせずじつと絵里の言葉を待つ。

暫くすると、顔を上げた絵里が、眦を吊り上げて歯を見せつける。

「そんな事、言われなくても朝陽なら察しているんでしょ！」

「もちろん、わかつているよ」

「じゃあなんで聞いてくるの！」

「絵里の口から聞きたいから。絵里の本心から漏れた言葉が知りたいから」

「つ……ええ、わかつたわよ！　そこまで言うなら全部言つてあげるわよッ！」

そのまま、表情を怒らせた絵里が己の感情を解き放とうとする。

しかし、俺が指を立てて話を中断させた事により、燻る想いを中途半端に呑み込む。

「本当は、俺も聞きたい。だけど、ここからは俺が聞くべきではない」

俺より遥かに絵里を心配して、それ以上に心を砕いてくれた親友。

彼女こそ、絵里の気持ちを聞くのに相応しいはずだ。

啞然と固まる絵里を尻目に、振り返った俺は歩いてこちらに近寄る希先輩とすれ違

う。

「後は、任せたよ」

「うん。絵里ちと、話をつけてくる」



いつものおちやらけた雰囲気はなりを潜め、瞳に強い輝きを秘める希先輩。ようやく、二人が本音をぶつかり合える。

この時のために、俺はない知恵を振り絞ったと言つても過言ではない。

絵里達は互いにモヤモヤを持つていたから、一度腰を据えて話し合う時間を作り、心に燻つていた物をさらけ出させようと計画した。

しかし、絵里は頑固だし、希先輩も自分の感情は隠したがる。

だからこそ、絵里の気持ちを昂らせ、勢いで全てぶちまけさせようと考えたのだ。

屋上の入口に近寄ると、μ、sの皆が俺の事を待つていた。

色々と聞きたそうな表情を浮かべる面々に、俺は扉を指差して口を開く。

「申し訳ないけど、絵里達は二人つきりにさせてくれないかな？　話なら部室でするか  
ら」

「……はあ、わかったわよ」

ため息をついた真姫が頷き、大人しく俺の言葉に従ってくれた。

続々と屋上を後にしていく中、絵里達を一瞥して上手くいく事を祈る。

俺にできる事は、もうない。

後は希先輩達の問題であり、同時にμ、sに關しても彼女に任せるしかないだろう。

……信じているよ、二人とも。

最後で人任せな自分に呆れながら、俺も屋上を去るのだった。

「——それで、一体どういう事なの？」

部屋に着いて、開口一番。

強い口調で尋ねてきたのは、真姫だ。

機嫌悪そうに指で机を叩いており、自ずと彼女の内心が察せられるだろう。

対して、俺はある確信を持って、ここ先輩の方に顔を向ける。

「さっきの言葉、嘘ですね？」

「……まさか」

俺の疑問を理解したのか、眩きを漏らした海未。

素早い動きで俺の視線を追うと、注目を浴びたにこそ先輩が肩を竦める。

「そうよ。私は穂乃果達に話を通してなんかないわ」

「花陽も一枚噛んでいたという事ですか？」

「えっと、ごめんなさい」

ペコリと頭を下げる花陽を見て、凜は小首を傾げて真姫に声を掛ける。

「真姫ちゃん。どういう事にや？」

「それを聞かされたために、こうして部室に来ただけどつ」

「わかったから、そんなに睨みつけてこないでつて」

「ふんっ」

どうやら、自分の知らない所で話が進んでいるのが気に食わないようだ。

腕を組んでそっぽを向く真姫からは、不機嫌な雰囲気しか感じられない。

とりあえず、あんまりもつたいぶるのも意味がないし、この辺でみんなに俺達の話

聞いてもらおう事にしよう。

「えっと。簡単に言うと、μ sのメンバーに絵里を誘いたかったつて話」

「皆さんも理解している通り、絵里先輩のダンス技術は凄まじいです。ですから、私達と共にスクールアイドルをしてくれるのなら、心強いと考えたんです」

「まあ、穂乃果達は察してくれたようだけど」

笑顔で水を向ければ、頼りになる我が幼馴染達も笑みを浮かべて頷く。

「うん。ちょうど穂乃果も、絵里先輩と一緒にスクールアイドルをやりたいと思つてたんだ」

「朝陽ちゃんはわかりやすいから、きつと生徒会長を誘いたいんだろうなあって」  
そんなに、俺ってわかりやすい？

特に意識していたつもりはなかったが、ことりの言う通り単純なのだろうか。  
首を捻っている俺を尻目に、真姫が顔を戻して眼光を鋭くする。

「貴女達の言い分はわかったわ。でも、私は納得できない」

「それは、絵里を入れる事に反対って意味？」

その問いには首を横に振り、どこかやり切れない表情で口を開く。

「私が納得できないのは、どうして私達に相談してくれなかったのかって事よ。海未先輩だけは知っていたみたいだけど、私達は初耳だわ。私達じゃあ信用できなかったの？」

「違う！ 決して、そういう意味で真姫達に話さなかったわけじゃない」

確かに、そう言われても仕方がない対応だ。海未だけに話して、真姫達には何も相談しないなんて。

こちらにも色々と考えがあつたが、そんなの彼女達からすれば、体のいい言い訳ではない。

だけど、それでも。真姫達を信用していない、という事だけは言つて欲しくなかつた。  
慌てて言葉を募る俺を見て、真姫はため息をついて目を瞑る。

「……ごめんなさい。少し、意地悪な質問だったわね。いきなり生徒会長を、sに誘う提案をしたら、私達が反対すると考えたのよね？」

「朝陽を責めないでください。私も納得した上で、真姫達には秘密にしたんですから」「いや、海未は悪くない。今回の計画を考えたのは、私だ。だから、真姫達の言いたい事は全部私が受け止める」

きつぱりと告げると、真姫は静かに立ち上がった。

全身から漂う重苦しい雰囲気、場の全員が声も上げられない中、注目されている彼女は席にいる俺の元まで近づく。

……これは、頬でもぶたれるのかな？

当たり前だろう。真姫でもなく、怒っても仕方がない扱いをしたのだから。

行動で信用していないと示しているのだ。むしろ、これぐらいは甘んじて受け入れなければ。

目を逸らさずに見つめていると、真姫はキツと鋭く瞳を細めた後。

「あつ」

「今回は、これでキャラにしてあげるわ」

思わず額を押さえた俺を見て、彼女はデコピンをした手を下ろして微笑む。

すると、事の次第を見守っていた穂乃果達が、各々に緊張を解いたような様子を見せ

る。

「良かったあ。てつきり、真姫ちゃんが朝陽ちゃんを叩くのかと思ったよ」

「凜は真姫ちゃんがそんな事をしないって信じてたけどねー」

「まったく、アイドルに喧嘩はご法度なんだからね？」

思ったよりも和やかな雰囲気、俺は海未と目を合わす。

やがて、どちらともなく苦笑いを零し、改めて真姫達に深い謝意と感謝を抱く。

「で、これから私達はどうするつもりなの？」

「その事に関しては、希先輩の連絡待ちなんだけど……つと、噂をすれば」

ポケットにある携帯が震えたので、取り出して画面に目を通す。

案の定、希先輩からの連絡であり、どうやら絵里とは話がついたらしい。

「その様子から、次は私達の番？」

「です。今から、屋上に来てほしいとか。という事で、行きましょうか」

俺の言葉を皮切りに、皆は腰を上げて部室を退室。

先頭で屋上に向かう途中、ここからが正念場だと決意を固める。

希先輩との話がどうなったかわからないが、改めて三度絵里をμ sに誘う。

これが、ラストチャンス。もしも、今回もμ s勧誘に失敗したら、絵里がスクール

アイドルになる日は訪れない。

いや、失敗なんて考えるな。

必ず、絵里を *μ* s に入れる。それだけを考える。前だけを向いている。浅く息を吸って意識を整えた後、目の前の屋上への扉を開ける。

「待ってたよ、朝陽ちゃん」

涼やかな風が俺達を迎え、暖かな日差しの元で希先輩達が佇む。

しかし、直ぐに雲が太陽を隠し、屋上全体に影が差す。

ゆつくりと近寄っていくと、彼女達は赤くなつた目でこちらを見つめる。

「希から、全部話は聞いたわ」

「そっか。お互い、言いたい事は言えた？」

「ええ。だからかしら。今は、凄くスッキリとした気分なの」

今まで見た事のない穏やかさで、微笑む絵里。

全ての事柄に解放されたように、どこか清々しさが宿る笑顔だ。

対して、希先輩はいつもの大人な笑みとは違い、少女然として無垢に笑っている。

良かった。

二人の話は、上手くいったみたいだ。

心のどこかで心配していたが、やはり俺の杞憂だったか。

希先輩達の間には、太くて硬い絆があるのだから、むしろ俺の考えこそ失礼だろう。

と、喜ぶのはまだ早い。

自然と綻んでいた口許を引き締めた俺は、振り返って穂乃果達に身体を向ける。

「ここまで勝手な行動をして今更だけど、穂乃果達にはしっかりと聞いてなかったね」  
「うん」

「改めて、聞きます。絵里達を、sに誘うという提案、どう思う？」

俺の言葉を聞き、穂乃果達は互いの顔を見回す。

だがそれも数瞬の事で、揃って表情に花を咲かせると頷く。

「もちろん、賛成だよー」

「ありがとう。……という事だ、絵里」

向き直ってそう告げれば、目を細めて天を仰いだ絵里。

煌めく金髪を靡かせながら、ポツリポツリと心情を吐露していく。

「雲は自由よね」

「えっ？」

「何物にも囚われず、自由気ままに青空を漂う存在。立場も、思いも、責任なんて物とは無縁で、こうして見ていると羨ましいわ」

絵里はそこで言葉を区切り、口許に緩やかな弧を描く。

「でも、どうしてかしらね。最近まであんなに焦がれていたのに、今ではそんな事は思え



ないわ」

「……仮に、雲になったとしてもつまらないと思います」

「穂乃果？」

並んでいた穂乃果が前に踏み出し、目を丸くした絵里に告げる。

「だって、地上はこんなに楽しいんですよ。朝陽ちゃん達と遊んだり、絵里先輩と一緒にダンスの練習をしたり、スクールアイドルとしてがむしやらに走ったり。むしろ、私は雲じゃなくて良かったって思います。きっと、笑顔でいる人達に嫉妬をしちゃうから」

「……………ふ、ふふっ」

「へ？」

真面目な面持ちで告げる穂乃果を見て、絵里は俯いて肩を震わせた。

素っ頓狂な声を上げる彼女を構わず、ただただ面白いと言わんばかりに小さな笑い声を響かせる。

やがて、顔を上げて目尻に滲む雫を拭った後、絵里は穂乃果を眩しそうに見ながら口を開く。

「そうね。確かに、高坂さんの言う通りだわ。すぐ側には、こんな沢山の幸せに満ち溢れているもの。雲になったら絶対に味わえないわ」

「はいっ！ だから、絵里先輩。私達と一緒に、幸せになりましょう！」

手を差し伸ばした穂乃果。

風が吹いて雲が流れ、天から陽光が彼女へと降り注ぐ。

まるで、一つの絵画のように。穂乃果だけが色濃く輝き、その存在感を増大させる。今、この場の主役は穂乃果と、彼女に舞台へと引き上げられた絵里のみ。

自然の全てがそう決め、俺達をただの観客に変えさせたのだ。

伸ばされた穂乃果の手を一瞥した絵里は、目を瞑って大きく深呼吸していく。

「高坂さん。こんな私でも、貴女は誘ってくれるのね」

「もちろんですー！」

間髪入れずに返した穂乃果に、目を開けた彼女は子供のように破顔。

しかし、直後には表情を引き締め、ゆっくりとした動作で頭を下げる。

「ごめんなさい。今まで、貴女達に酷い事をしたわ」

「……えつと？ 酷い事って、なんですか？」

「えつと？」

穂乃果はこちらに振り返り、小首を傾げて尋ねてくる。

「穂乃果達、絵里先輩に何かされたっけ？」

「えーっと、最初にスクールアイドルを作ろうとして反対されたとか？」

「ファーストライブの時に、厳しい目で見られた事ですか？」

「穂乃果達に現実を見せようと、ファーストライブの映像を流した事？」

皆で考えてみるが、思ったより絵里に対して含むものがない結論に至った。

絵里個人の気持ちは別として、実際に俺達の邪魔するような事はしていない。

つまり、*μ* *s* からすれば、特に謝られるような内容はなかったのだ。

「と、いう事なんだけど」

「それでも、貴女達を素直に応援できなかったのは事実だわ。だから、謝らせて。本当に、ごめんなさい」

「あ、頭を上げてください。私達は大丈夫ですからー」

必死な穂乃果の声が届いたのか、頭を上げてくれた絵里。

濟まなそうな表情を浮かべながら、胸元に手を添えてキュツと拳を握り込む。

「それで、謝った直後に言うのは心苦しいんだけど……」

「絵里先輩？」

「絵里ち、頑張つて」

希先輩の声援を身に受けた絵里は、彷徨わせていた視線に力を入れた。

順々に *μ* *s* のメンバーを見回していき、穂乃果で目を止めて言葉を紡ぐ。

「お願いします。私も、貴女達と一緒に踊らせてー！」

心の奥底に秘められていた、魂の想い。

ずっと押し殺していたそれを、ようやく絵里は口にする事ができた。

その気持ちや聞く事ができた感動で、今にも泣きそうになってしまう。

思わず目頭を押さえている俺を尻目に、穂乃果は目を見開いてから微笑む。

「(いち)ち(い)そ、よろしくお願ひします！」

喜色の声を上げた穂乃果の言葉を聞いた絵里は、感極まった様子で瞳に涙を湛え、桜色の唇を笑みの形に変える。

「——ありがとう」

この瞬間、μ sのメンバーは八人となった。

加わった八人目は、責任感が強くて独りで戦っていた少女。

しかし、もう彼女は大丈夫だろう。何故なら、もう独りで戦う必要がないからだ。

そして、ここにもう一人。九人目となる優しい少女がいる——

「希先輩」

俺の言葉を聞き、彼女は悪戯小僧の如き笑う。

指を立てて全員注目を集め、楽しげに身体を揺らしながら口を開く。

「さて、ここで問題です。絵里ちが加入したスクールアイドルグループ、μ s。この名に込められた意味とはなんでしょう？」

「μ sとは、九人の女神という意味でしたが……まさか！」

と、何故か海未は俺の方に振り返った。

いやいやいや。俺がμ sとか鳥漕がましいにもほどがあるから！

慌てて首を横に振り、両手を希先輩へと差し向ける。

「こつちこつち。見るべきはこつちだから」

「……コホン。朝陽ちゃんに聞しては、カードで別の事を告げていたんや」

「え、そうなんですか？ ちなみに、どんな意味ですか？」

「ふふつ。それは、内緒」

口許に指を添え、柔らかに微笑んだ希先輩。

しかし、直ぐに真面目な面立ちになると、穂乃果を見つめる。

「μ sは九人の女神。だけど、絵里ちが加入しても八人ではない。これが、どうい

意味か——」

「あー、もう！ じれったいわね！」

「——に、にこつち？」

希先輩をジト目で睨んだ後、にこ先輩はツカツカと靴を踏み鳴らして歩きだす。

そのまま困惑気味に眉を寄せる彼女に、指を突きつけて言い放つ。

「絵里が素直になつたんだから、あんたも本音を言いなさいよ！ わざわざわかりにくい言い方でにこ達を惑わさないで、一言μ sに入りたいて言うだけで済む話でしょ

！」

「貴女だけには言われたくないと思うけど？」

「そこっ、黙ってなさい！」

しれつと告げた真姫は、目を逸らして髪の毛をクルクル。

「ここ先輩のお蔭と言うべきか、それともここ先輩のせいと言うべきか。

ともかく、辺りに漂う空気が弛緩し、希先輩はふつと笑んで肩を落とす。

「……そうやね。あれだけ絵里ちに言ったのに、これじゃあ説得力がないやん」

目元を優しげに細めた希先輩は、黙って見守っていた穂乃果に言う。

「穂乃果ちゃん。ウチも、君達と一緒にスクールアイドルをやりたい。だから、μ Sに

入れてください」

一息で告げ終えると、希先輩はキュツと怯えるように目を瞑る。

対する穂乃果はゆっくりと彼女に近寄り、忙しなげに動く手を取る。

そして、魅力的な太陽の如く満面の笑みを浮かべていく。

「これから、一緒にスクールアイドルで輝きましよう！」

「——うん、うん！」

穂乃果の笑顔に釣られ、目を開けた希先輩も幼く笑った。

静かに静観していた絵里達も駆け寄り、彼女を中心に笑みが満ち溢れる。

「おめでとう、絵里、希先輩」

μ s が、九人になった。

ここから、この瞬間から始まるのだ。

彼女達の伝説が、人々を魅了して止まないスクールアイドルグループが。そして、彼女達の青春が。

「まだ、だ。まだ、廃校阻止はできていない。だから、泣かないぞ」

こみ上げる熱い物を抑えた俺は、気を引き締めて絵里達の元に駆け寄るのだった。

「——皆さん。今日は音ノ木坂学院に来てくれてありがとうございます！」

『ありがとうございます！』

マイクを持った穂乃果が頭を下げると、続いてμ s のメンバーも追随。

舞台の上にいる九人の少女からは、離れた場所にいる俺でもわかるほど、輝いていた。今日でオープンキャンパスの日になり、穂乃果達はライブをする前に挨拶をしてい

る。

隣には亜里沙と雪穂がいて、彼女達の姿を嬉しそうに見つめていた。

「朝陽さん！ お姉ちゃんがちゃんと挨拶してますね！」

「ハラシヨー！ お姉ちゃん綺麗！」

「興奮してるのはわかったから、落ち着いて」

「あ、すみません！」

俺の注意で我に返ったのか、雪穂達は揃って頬を赤らめた。

まあ、雪穂達の気持ちもよくわかる。なにせ、穂乃果達があんなに可愛いんだから。

単純な容姿や衣装の可愛らしさもあるだろうが、それ以上にその在り方で俺達を魅せていた。

現に、この場にいる見学者達も、まるで魅入られたように微動だにしていない。

「私達は、スクールアイドルグループのμ'sと言います。今日で初めて、μ'sは九人で踊る事になります。……μ'sがこのメンバーになるまで、色んな事がありました。挫けそうになった事は何度もあります。でも、そんな時にはいつも私達を支えてくれた仲間がいました！」

そこで言葉を区切ると、穂乃果は俺の方に目を向けた。

思わず目を見開く俺に微笑みかけながら、彼女は言葉を繋ぐ。



「彼女とは一緒に踊る事はできませんが、それでも私達の心はいつも一つです。……私は、この音ノ木坂が大好きです！ 皆さんにも、この学校の良さが伝わるよう、精一杯ライブをしたいと思います！」

マイクをスタツフに返した穂乃果は、ダンスの立ち位置についた。

自然と場は静まり、微かに吹く風の音が嫌に大きく響く。

一度深呼吸した後、穂乃果はマイクがなくなるとも不思議とよく通る声で。

「これは、μ'sが九人になった最初にできた曲です。それでは、聴いてください——」

—— 僕らのL I V E 君とのL I F E

「お姉ちゃん、楽しそう」

ふと、亜里沙の声で意識が帰還した。

狭まっていた視野が広がる錯覚を感じ、俺は思わず止めていた呼吸を再開。

視界の先では、穂乃果達が踊っている。

誰もが笑顔でダンスを披露しており、見ていると胸が締め付けられていく。

感動の幅が振り切れると、こんな切ない思いを抱けるんだな。

涙を流すとか、呆然とするとか、そんなチャチな気持ちではない。

初恋にも似たような勢いで心を焦がし、失恋と同じように哀愁の思いを感じる。

「あつ……」

踊っている絵里と、視線が合った気がする。

ウインクを零した彼女は、確かに俺にこう語りかけていた。

スクールアイドルになれて良かった、と。

……ズルいなあ。

どうして、絵里は俺の弱い所を的確に突いてくるのか。

鼻を嚙りながら、俺は天を仰ぐ。

澄み渡る青空は酷く綺麗で、視界を横切る飛行機雲が彩っている。

いつもと変わらない景色。だけど、俺には普段とは違う物に見えた。

「ごめん、ちよつと外すね」

そう告げて雪穂達から離れ、観客がいない場所でライブを鑑賞する。

もう、我慢できそうになかった。

今まで、目指していた夢の先。絵里達から笑い、μ'sが九人揃うその日。

俺が前世の記憶を取り戻してから、見たくて見たくて堪らなかった。

きつと、その場面を見られたら感動できると思えたから。実際、心が震えすぎて穂乃果達のライブを直視できない。

「よ、よかったあ……よかったよお」

思わずしやがみ込み、ゴシゴシと何度も目元を拭う。

しかし、とめどなく流れる涙は収まらず、それでも滲む視界でμ、sの勇姿を見届ける。

穂乃果が楽しげに笑い、ことりも柔らかく微笑むと、海未は凜とした笑みを浮かべた。凜が元氣よく踊り、花陽は愛らしいポーズを披露し、そして真姫は綺麗な歌声を奏でる。

にこ先輩はその姿で観客を虜にし、絵里はキレのあるダンスを見せつけ、次いで聖母の如き雰囲気皆の心を撫でる希先輩。

「本当に、凄い」

ポツリと眩きを漏らした俺は、くしゃくしゃに歪んだ顔で笑んだ。

恐らく、今の俺は泣き笑いのような、酷く不気味な表情をしているだろう。

それでも、これ以上に良い感情表現はなかった。

「どうか、μ、sがいつまでも笑っていられますように」

九人が揃ったμ、s。

今回のライブで、彼女達は加速度的に有名になっていくだろう。

しかし、俺のやる事は変わらない。

全ては、物語をより良くするため。

ここで、本当は一段落したい気持ちだが、時間は俺達を待つてくれない。

まだ、大きな問題を解決していかないのだから。

すなわち、ことりの留学問題……

「俺にできる事はないかもしれないけど、可能な限り足掻いてやる」

もう、絵里の時のように逃げたりはしない。

希先輩に教えられたから。絵里に諭されたから。μ sの皆に示されたから。

……まあ、今は穂乃果達のライブを素直に楽しもう。

気持ち切り替えた俺は、束の間の幸福に浸っていくのだった。